

平成 28 年度

博士論文(指導教授 高橋 弥守彦)

# 中国語と日本語の受身文の対照研究

- 中国語教育のため -

大東文化大学大学院

外国語学研究科 中国言語文化学専攻

博士課程後期課程

(学籍番号 14231102)

劉 爾瑟



# 目次

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 序章.....                         | 1  |
| 0.1 研究背景と目的.....                | 1  |
| 0.2 先行研究.....                   | 3  |
| 0.2.1 現代中国語の受動表現に関する先行研究.....   | 3  |
| 0.2.2 現代日本語の受身表現に関する先行研究.....   | 10 |
| 0.2.3 先行研究の問題点.....             | 17 |
| 参考文献.....                       | 18 |
| <br>                            |    |
| 第一章 両言語の受身表現の分類.....            | 20 |
| 第1節 中国語の受動表現の分類.....            | 20 |
| 1.1.1 はじめに.....                 | 20 |
| 1.1.2 従来分類.....                 | 21 |
| 1.1.3 本稿における分類.....             | 29 |
| 1.1.4 おわりに.....                 | 36 |
| 第2節 日本語の受身表現の分類.....            | 37 |
| 1.2.1 はじめに.....                 | 37 |
| 1.2.2 従来分類.....                 | 37 |
| 1.2.3 本稿における分類.....             | 40 |
| 1.2.4 おわりに.....                 | 50 |
| 言語資料.....                       | 51 |
| 参考文献.....                       | 51 |
| <br>                            |    |
| 第二章 中国語の“被字句”の構文的特徴.....        | 53 |
| 第1節 “被字句”の受け手主語について.....        | 54 |
| 2.1.1 はじめに.....                 | 54 |
| 2.1.2 “被字句”における受け手主語の分類の再考..... | 55 |
| 2.1.3 受け手の省略.....               | 59 |
| 2.1.4 受け手主語の特徴の再考.....          | 59 |

|  |            |
|--|------------|
| 2.1.5 おわりに.....                        | 64         |
| <b>第2節 “被字句”における仕手について.....</b>        | <b>66</b>  |
| 2.2.1 はじめに.....                        | 66         |
| 2.2.2 “被字句”における仕手の分類.....              | 67         |
| 2.2.3 仕手の省略.....                       | 73         |
| 2.2.4 おわりに.....                        | 75         |
| <b>言語資料.....</b>                       | <b>77</b>  |
| <b>参考文献.....</b>                       | <b>77</b>  |
| <br>                                   |            |
| <b>第三章 日本語の受身文の構文的特徴.....</b>          | <b>79</b>  |
| <b>第1節 日本語の受身文の受け手主語について.....</b>      | <b>81</b>  |
| 3.1.1 はじめに.....                        | 81         |
| 3.1.2 日本語の受身文における受け手主語.....            | 82         |
| 3.1.3 受け手の省略.....                      | 86         |
| 3.1.4 受け手主語の特徴の再考.....                 | 87         |
| 3.1.5 おわりに.....                        | 90         |
| <b>第2節 日本語の受身文における仕手について.....</b>      | <b>92</b>  |
| 3.2.1 はじめに.....                        | 92         |
| 3.2.2 受身文における仕手の分類.....                | 93         |
| 3.2.3 仕手の省略.....                       | 98         |
| 3.2.4 受身文における仕手の特徴.....                | 99         |
| 3.2.5 おわりに.....                        | 102        |
| <b>言語資料.....</b>                       | <b>103</b> |
| <b>参考文献.....</b>                       | <b>103</b> |
| <br>                                   |            |
| <b>第四章 動詞から見る両言語の受身文の成立条件に関して.....</b> | <b>105</b> |
| <b>第1節 中国語の“被字句”に用いられる動詞について.....</b>  | <b>105</b> |
| 4.1.1 はじめに.....                        | 105        |
| 4.1.2 中国語の動詞の分類.....                   | 105        |
| 4.1.3 “被字句”の動詞となれない動詞.....             | 108        |
| 4.1.4 “被字句”の成立条件.....                  | 112        |
| 4.1.5 おわりに.....                        | 114        |

|   |     |
|---|-----|
| 第2節 日本語の受身文に用いられる動詞について.....  | 115 |
| 4.2.1 はじめに.....   | 115 |
| 4.2.2 受身文の分類.....   | 116 |
| 4.2.3 受身文における動詞.....  | 118 |
| 4.2.4 受身文の成立条件.....   | 122 |
| 4.2.5 おわりに.....   | 128 |
| 言語資料.....   | 130 |
| 参考文献.....   | 130 |
| <br>  |     |
| 第五章 中日対照から見る中国語の“被字句”の学習難点.....                                     | 132 |
| 第1節 “被字句”における構造助詞“的”を用いる受け手主語の再考.....                               | 134 |
| 5.1.1 はじめに.....   | 134 |
| 5.1.2 “被字句”の受け手主語.....  | 135 |
| 5.1.3 構造助詞“的”を用いる受け手主語.....   | 137 |
| 5.1.4 おわりに.....   | 145 |
| 第2節 中国語の所有物受身文と持ち主受身文.....  | 146 |
| 5.2.1 はじめに.....   | 146 |
| 5.2.2 日中両言語のヴォイス表現.....   | 147 |
| 5.2.3 中国語の受動表現において、NP <sub>2</sub> とNP <sub>3</sub> が所有関係を表す場合..... | 149 |
| 5.2.4 所有物受身文と持ち主受身文の互換条件.....                                       | 151 |
| 5.2.5 所有物受身文と持ち主受身文の使い分けについて.....                                   | 153 |
| 5.2.6 おわりに.....   | 155 |
| 第3節 “被…給…”式における“給”の再考.....  | 157 |
| 5.3.1 はじめに.....   | 157 |
| 5.3.2 “被字句”における“給”の有無.....  | 158 |
| 5.3.3 “被…給…”における“給”の方向性について.....                                    | 161 |
| 5.3.4 おわりに.....   | 165 |
| 言語資料.....   | 167 |
| 参考文献.....   | 167 |
| <br>  |     |
| 終章.....   | 169 |
| 6.1 結論.....   | 169 |

|                |     |
|----------------|-----|
| 6.2 今後の課題..... | 172 |
| 参考文献.....      | 173 |

# 序章

## 0.1 研究背景と目的

中国人の日本語学習者にせよ、日本人の中国語学習者にせよ、受身表現は最も習得しにくい文法表現の一つであろう。中国語と比べ、日本語は受身表現が発達し、日常生活の中で頻繁に用いられ。それに対し、中国語において受動表現の使用率が相対的に低く、日常生活の中では能動的な表現が好まれるというイメージを与えている。<sup>1)</sup>そして、日本語には動詞の形としてのヴォイスがあるが、中国語には単語レベルで動詞の形としてのヴォイスがないので、中日両言語の比較対照を行う場合、見比べにくいという問題もある。幸い日本語においては「レル・ラレル」を用いる文法上の受身文があり、中国語には“被”のような受動マーカ―を用いる有標の受動表現（いわゆる“被字句”）がある。これらは一般的に文として認められているので、このテクニカルタームを共通の舞台として、中日両言語における受身表現について検討することができる。

本稿は中日両言語における受身表現の全貌を明らかにすることに基づき、中日対照の視点から母語である中国語における“被字句”を再認識することを試みる。まず、中国語の“被字句”において、「私」や「当方」だけではなく、全体的なものや部分的なもの、ほとんどの人物や無情物が主語の位置に立つことができる。つまり、“被字句”の受け手主語についての制限はかなりゆるいと言ってもよいであろう。そして、日本語の持ち主受身文と対応する“被字句”では、主語は「ダレ ノ ナニ」という構造をとるのが自然で明確な表現であると思われる。例えば、以下の例（1）と例（2）などが挙げられる。中国語の受身文における受け手主語について、日本語ほど制限されていないと思われる。

(1) 我的手被小猫抓了。(作例)

私は手を猫に引っ搔かれた。(筆者訳)

(2) 我的钱包在公共汽车上被小偷偷走了。(作例)

私はバスで泥棒に財布を取られた。(筆者訳)

(3) 小偷偷了他的钱包。(作例)

スリは彼の財布をすった。(筆者訳)

(4) 他的钱包被小偷偷了。(作例)

1) 北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス』に収録されている小説から「レル・ラレル」をキーワードとして収集した日本語の直接対象の受身文は 2491 例である。そのかなの約 40% は中国語の「能動文」に訳されているので、中国語は日本語ほど受身文の使用率が高くないと言えるであろう。

彼の財布はスリにすられた。(筆者訳)

(5) 他被小偷偷了钱包。(作例)

彼はスリに財布をすられた。(筆者訳)

また、例(3)は能動文で、例(4)と(5)はそれと対応できる“被字句”である。例(3)～(5)は、同じ出来事を表しているが、視点の当て方によって、異なる構造で表すことができる。例(3)の構文構造をまとめると、「NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>」となり、例(4)は「NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP」で、例(5)は「NP<sub>2</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>3</sub>」とまとめられる。そのなかで、意味から見ればNP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>は所有関係である。つまり、NP<sub>2</sub>は持ち主で、NP<sub>3</sub>はNP<sub>2</sub>の所有物である。本稿では、例(4)のような“被字句”を「所有物受身文」と名付け、例(5)のような“被字句”を「持ち主受身文」と名付け、両者の互換関係を解明する。

さらに、日本語において、「赤ちゃんに泣かれた」「雨に降られた」のように、「泣く」「降る」などの自動詞によって作られる受身文がある。このような文は、主語がはた迷惑を蒙るという意味を表わせるので、先行研究では「利害の受身」「はた迷惑の受身」「第三者の受身」などと呼ばれている。このような自動詞による受身文は中国語、英語や韓国語などの他言語には、まれに見られない表現形式であるため、日本語特有の表現であるとよく言われている。しかし、中国語においては、他動詞を用いて「はた迷惑」を表す“被字句”が存在している。以下の例文を見てみよう。

(6) 门被张三锁上了。(作例)

ドアは張三によって鍵をかけられた。(筆者訳)

(7) 门被张三给锁上了。(顔力涛 2008 : 536)

ドアは張三によって鍵をかけられた。/私は張三にドアの鍵をかけられた。  
(筆者訳)

(8) 门被张三给它锁上了。(顔力涛 2008 : 536)

ドアは張三によって鍵をかけられた。(筆者訳)

(9) 门被张三给我锁上了。(顔力涛 2008 : 536)

私は張三にドアの鍵をかけられた。(筆者訳)

例(6)と例(7)は一見ほぼ同じ構造を取っているが、例(7)のほうがより複雑である。なぜかという、例(7)における“给”のあとに客語を入れることができるからである。“给”のあとに“它”を入れると、例(8)となり、“我”を入れたら、例(9)となる。例(9)の場合は単に「ドアは張三によって鍵をかけられた」という客観事実を陳述するだけでなく、「ドアは鍵をかけられた」という出来事によって第三者の“我”が「部屋の中に入ることができなくなった」という被害を蒙ったという意味合いが生じているのである。本稿では、例(7)と例(9)このような“被字句”についても検討しようとする。



## 0.2 先行研究

### 0.2.1 現代中国語の受動表現に関する先行研究

#### 0.2.1.1 吕叔湘（1980：67-68、1982：37-40）

《现代汉语八百词》（吕叔湘 1980）では、“被”について以下のように述べている。  
[介词] 用于被动句，引进动作的施动者。前面的主语是动作的受动者。动词后面多有表示完成或结果的词语，或者动词本身包含此类成分。

例如：芦花被微风吹起/我被一阵雷声惊醒/小张被大家批评了一顿

a) “被…”后用单个动词，限于少数双音节，“被”前要有助动词或表时间的词语。

例如：这句话可能被人误解/你的建议已经被领导采纳/这一点必将被历史证明

b) 动词后面还可以带宾语，但限于以下几种：宾语是主语的一部分或属于主语（例如：小鸡被黄鼠狼叼去了一只。）；宾语是主语受动作支配而达到的结果（例如：他被大家选为小组长。）；主语指处所（例如：树梢被斜阳涂上一层金色。）；动词和宾语组成固定的动宾短语（例如：这话被你打了折扣了吧？）。

c) 被…所+动。用了“所”，动词不能再带其他成分。双音节动词前“所”可省（例如：被歌声[所]吸引）。单音节动词前“所”字不能省，并有较浓的文言色彩（例如：被风雪所阻）。

d) 被…把+动。“把”字后的名词或是属于主语，或是复指主语。

例如：牲口被套绳把腿绊住了/这调皮鬼被我把他赶走了

[助词] 用在动词前，表示被动的动作，但不点名施动者。不能跟“所、给、把”等词合用。

例如：大坝被冲垮了/这支军队被称为“铁军”

a) 跟少数单音节动词构成固定词语，多指不利的事。

例如：被迫/被捕/被杀/被囚/被窃

b) “被+动”跟少数名词结合，构成名词。

例如：被除数/被害人/被选举权/被剥削者/被压迫民族

《中国文法要略》（吕叔湘 1982）によると、“被字句”は施事より受事が先にくる特殊な文型である。“被字句”の成分を分析すると、以下の構造となる。

止词——（被）起词——动词

現代の文法専門用語に書き換えれば、“客事——（被）主事——动词”となるであろう。そして、吕叔湘（1982）では文言における受動文が使われる場合を、以下の3つにまとめた。

I 起词很泛，不是一个特定的人和物，不宜占据句首的重要位置。例如：见侮于世 受制于人。有些根本把起词略去的，当然更是由于这个理由。

II 随顺上下文的句法；如“见擒”一例，倘若改为“欲谒上，恐上擒之”，就

不及原句“欲谒上，恐见擒”一贯而下的通畅。

III 简短的指称词（如“吾”）以放在句首为宜，如“多子苦我”“大方之家笑我”都不如原句“吾为多子苦”及“吾常见笑于大方之家”稳定。

以上挙げられたルールは現代中国語における“被动句”に適用できる部分もあるので、本稿の参考とする。

#### 0.2.1.2 朱德熙（1982：178-179）

朱德熙では、“‘被’字的作用在于引出施事，‘叫、让、给’也有相同的作用（例如：杯子被/叫/让/给/他打破了）；‘被’和‘给’后头有时不带宾语，这往往是因为动作的施事不可知或者不必说出来（例如：衣服全给淋湿了），‘叫’和‘让’不带宾语的时候很少；‘被、叫、让’的宾语指动作的施事，动作的受事往往在句子的主语位置上出现，有的时候动词后头另有受事宾语，主语不是直接的受事（例如：他叫人家抓住了把柄）；‘被、叫、让’还可以跟‘给’字配合起来用（例如：杯子被他给打破了）”と指摘している。

#### 0.2.1.3 王力（1943：87-92）

王力（1943）では、中国語の“被动式”について以下のように分析している。

叙述句有主动式和被动式的分别。（一）谓语所叙述的行为系出自主语者，叫做主动式，如“他打了你”。（二）谓语所叙述的行为系施于主语者，叫被动式，例如“你被他打了”。咱们平常说话，在叙述行为的时候，总是用主动式居多，被动式只是一种特殊形式。

这两种句子非但意义不完全相同，其作用也不完全相同。当我说“他打了你”的时候，我的目的在说“他”，当我说“你被他打了”的时候，我的目的在说“你”。有时候，是上下文的关系使咱们择定主动式和被动式。……被动式所叙述，若对主语而言是不如意或不企望的事，如受祸，受欺骗，受损害，或引起不利的结果等等。但是现代欧化的文章里，就不依照着一种习惯了。……被动式和处置式的形式虽不同，而其所叙行为的性质却大致相同。譬如一件事在主事者一方面看来是一种处置，在受事者一方面看来往往就是一种不如意或不企望的事。因此，多数被动式是可以改为处置式的，被动句若要转成主动句，也变为处置式较为适宜。

被动式和处置式可以同时并用，就是把处置式纳入被动式里。在这情形下，处置式的目的语所表示的事物，须是被动式主语的附属品（例如：宝玉……被袭人将手推开）。这样，被动句的主语并不是直接的受事者，只是间接的受事者。……把处置式纳入被动式之后，意义上须受处置式通则的限制，同时又须受被动式通则的限制。

被动式所叙行为的性质既和处置式所叙者大致相同，所以它们在结构形式上也大致相同：

（一）恰像处置式“把”字后面不能用否定语一样，被动式“被”字后面

也不能用否定语。

(二) 恰像处置式只限于处置性的事情一样，被动式也只限于不如意的事情。因此，许多主动句都不能随便改为被动。

被动式的结构式：主位加助动词加关系位加叙述词。主位所代表的乃是受事者，关系位所代表的才是真正的主事者。

没有“被”字的被动句，在形式上看不出它和主动式的分别，只有在意义上看得出来。依中国语的习惯，凡有下列两种情形之一者，不用“被”字，同时也不用关系位：

(一) 主事者无说出的必要，或说不出主事者为何人，则不用关系位，同时也不用“被”字。例如：五儿吓得哭哭啼啼。

(二) 主语为无生之物，无所谓不如意或不企望的事，则“被”字必不能用，关系位也因此用不着了。例如：偷来的锣鼓儿打不得。但在人类看来是不如意的事，而主事者又有说出的必要，则又可以用普通的被动式了。例如：我的手表被贼偷去了。

被动式的正常结构式“被”字后面有一个关系位的。如果没有关系位，已经不算正常的被动式了；如果再不用“被”字，只用和“被”字意义相近的字，如“挨”“受”之类，就更不能认为被动式了。例如：人家不得贵婿反挨打。

#### 0.2.1.4 『現代中国語文法総覧（下）』（1991：642-649）

『総覧』によると、述語動詞の前に介詞“被”が用いられる文、あるいは“被”から成る介詞フレーズが状語として用いられる文を“被”構文（“被”字句）と呼ぶ。

“被”構文では主語は述語動詞の受け手であり、介詞“被”の客語は仕手である。

中国語では受動の意味は意味上の受動文でもって表わされることが多い。そこで、主語が受け手主語（受事主語）であって仕手ではあり得ない。あるいは仕手と誤解されることはあり得ない場合は、普通“被”構文を用いずに意味上の受動文を用いる。

現在のところ、“被”構文は主語からみて不愉快あるいは被害的な事柄を表すのに用いられるのがほとんどである。この他、受け手主語が人を表す名詞で、しかも文脈から仕手と受け手の関係が明確にならない場合は、“被”構文を用いることによりその関係をはっきりさせ、多義に解釈されないようにしなければならないと説明している。

さらに、『総覧』では“被”構文のいくつかの文型を挙げている。

I 介詞“被”の後に客語のあるもの。この文型では介詞“被”は仕手を導入する働きをする。“被”の客語は総称的な“人”であってもよい。この場合、通常仕手は特定する必要がないかまたは特定することのできないものである。

(10) 敌人进了地道，没走几步，就被民兵消灭了。（『総覧』：644）

敵は地下道に入って何歩も行かないうちに民兵によって殲滅させられた。

(『総覧』：644)

Ⅱ “被”の後に客語がなく、述語動詞が直接後に続くもの。この文型では“被”はただ受身を表す働きをするだけである。

(11) 突然，办公室的门“哐当”一声被撞开了。(『総覧』：644)

突然、事務室のドアがバターンと音がして開けられた。(『総覧』：644)

Ⅲ “被(为)……所……”。書き言葉でこの形が用いられるが、これは古典中国語の“为……所……”というパターンに由来するものである。この文型では、介詞“被”の後に必ず客語が必要であり、また述語動詞は二音節のものが多く、後には他の成分がないのが普通である。

(12) 我被这情景所激动，也和大家一起引亢高歌。(『総覧』：644)

私はこの光景に感激し、自分も皆と一緒に声高らかに歌った。(『総覧』：644)

Ⅳ “被……给……”。“被”は“给”と共に用いて“被……给……”というパターンを構成することができる。ここでの“给”は構造助詞であって、実質的な意味を表さず、あってもなくてもよいものであるが、“给”を用いるとより口語的になる。

(13) 孩子被你给惯得越来越不听话了。(『総覧』：645)

子供はお前が甘やかすからますます言うことを聞かなくなってきた。(同上)

Ⅴ 介詞“被”はまた介詞“把”と共に用いることもできる。“被”とその客語が前に置かれ、“把”とその目的語は後に置かれる。“把”の客語は主語を同格指示(“复指”)するものかまたは主語の一部である。

(14) 那个孩子被人把他打了一顿。(『総覧』：645)

その子供は人に殴られた。(『総覧』：645)

(15) 他被人把眼睛给蒙上了。(『総覧』：645)

彼は誰かに目隠しされた。(『総覧』：645)

最後に、“被”構文の構造上の特徴について次のように説明している。

一、“被”構文の述語は単純な一つの動詞だけではだめであり、その前か後に何かが必要である。

二、時間を表す状語や、受け手の様態を描写する状語、否定を表す副詞、接続の働きをする副詞は介詞“被”の前に置く。その他の状語は普通介詞“被”の客語の後に置く。

三、“被”構文の述語になれない動詞には“是”“有”“在”“当”“像”“属于”“得”“起”“接近”“离开”“依靠”“产生”などがある。

#### 0.2.1.5 邢福义(1993:319-321)

《现代汉语》(邢福义1993)では、“被”について以下のように述べている。

“把”字的宾语在意念上是后面动词的受事，“被”字的宾语在意念上则是后面动词的施事。换句话说，“被”字的作用是把一件事的主动者介绍出来。有时“被”字后面不带宾语，直接放在主要动词之前，这是“被”字的作用只是表明动作的被动性。……介词“叫”“让”“给”跟“被”字的作用大体相同，在口语里，这三个词用得比“被”字多。由“被”“叫”“让”组成的介词结构之后可以再用一个“给”字。

在现代汉语里，“被”字用得远不如“把”字频繁，这有两个原因：第一，汉语表示被动意义的句子不一定用“被”字，例如“眼镜打破了”。甚至施事在句子里出现的时候，也不一定非用“被”字不可，例如“眼镜儿我打破了”“眼镜儿是我打破的”。第二，从历史上来看，“被”字句所表示的事情对于受事者是不如意或不企望的。近来逐渐突破了这种限制，但传统的用例仍有影响。

#### 0.2.1.6 『現代中国語総説』（2004：364-366）

『総説』における“被”についての説明は上掲の《現代汉语》（邢福义 1993）とほぼ同様である。

“把”の客語は後ろに来る動詞の受動者にあたるが、“被”の客語は動作主を示す。すなわち、“被”の働きはその行為の主動者を導くことにある。“被”の後に動作主を置かず、直接“被”が動詞と結ばれることもある。この時、“被”の働きは単に受身の動作であることを示すのみである。前置詞“叫”、“让”、“给”は“被”の働きと大差はないが、話し言葉ではむしろこれらを使用することが多い。“被”“叫”“让”は“给”と組み合わせて用いることもできる。

現代中国語では、“被”構文は“把”構文ほど頻繁には使用されない。その理由は二つある。まず、中国語の受身表現は必ずしも“被”を用いなければならないというものではないからである。また動作主が文中に現れる時でも、絶対に“被”を用いなければならないというわけではない。第二に、歴史的に見て“被”で表される受動文は受動者にとって不如意な出来事や望ましくない出来事を表すものであった。ただし現在の中国語ではこのような意味上の制限も薄まりつつある。

#### 0.2.1.7 鲁宝元（2005：157-159）

鲁宝元（2005）では、中国語の受動表現について以下のように説明している。

汉语有标志被动表达的主要句型有：

##### ①直接整体受动

指受动者直接接受施动者发出的动作，整体上受到损害或得到什么好处。

句型 1：名词（受动者）+被/让/叫+名词（施动者）+（给）+动词（施动者所发出的动作）+其他成分

①-1 受动者为有生命的人或动物，施动者也是有生命的人或动物。

(16) 孩子被爸爸打了一顿。（子どもは父に殴られた。）（鲁宝元 2005：157）

(17) 受伤的人被司机送进了医院。(負傷した人は運転手によって病院に運び込まれた。)(鲁宝元 2005 : 157)

①-2 受动者为无生命事物, 施动者为有生命的人或动物。

(18) 墙壁被孩子们涂得乱七八糟。(壁は子供たちにめちゃくちゃに塗りたくられた。)(鲁宝元 2005 : 157)

(19) 他的提案被上级采用了。(彼は上司に提案を採用された。)(鲁宝元 2005 : 157)

①-3 受动者为无生命的事物, 施动者为无生命的事物。

(20) 好好的一幅画被墨水弄脏了。(せっかくのいい絵がインクで汚されてしまった。)(鲁宝元 2005 : 157)

(21) 夜空被五彩缤纷的焰火照得光彩夺目。(夜空は色とりどりのきらびやかな花火で輝いている。)(鲁宝元 2005 : 157)

## ②直接部分受动

指受动者的一部分、所有物或相关事物直接接受施动者发出的动作, 从而使受动者的整体受到损害或得到好处。

受动者为有生命句型 2a: 名词(受动者)+被+名词(施动者)+(把)名词(受损害或受益的局部)+动词(施动者所发出的动作)

句型 2b: 名词(受动者)+的+名词(受损害或受益的局部)+被+名词(施动者)+动词(施动者所发出的动作)

②-1 受动者为有生命的人或动物, 施动者也是有生命的人或动物。

(22) 他在公共汽车上被小偷把钱包偷走了。(彼は泥棒に財布を盗まれた。)(鲁宝元 2005 : 157)

(23) 我在电车上被旁边的人把脚踩了。(わたしは電車の中で隣の人に足を踏まれた。)(鲁宝元 2005 : 157)

②-2 受动者为有生命的人或动物, 施动者为无生命事物。

(24) 那孩子被开水把脚烫了。/那孩子的脚被开水烫了。(子どもはお湯で足にやけどを負いました。)(鲁宝元 2005 : 158)

(25) 他划船被水把衣服打湿了。/他的衣服划船时被水打湿了。(彼はボートをこいでいて、着ているものが水で濡れてしまった。)(鲁宝元 2005 : 158)

②-3 受动者为无生命的事物, 施动者为有生命的人或动物。

(26) 花坛被人把刚种下的花挖走了。/花坛刚种下的花被人挖走了。(植えたばかりの花壇の花は誰かに掘り起こされてしまいました。)(鲁宝元 2005 : 158)

(27) 教室被学生把玻璃打碎了。/教室的玻璃被学生打碎了。(教室のガラスは生徒に壊された。)(鲁宝元 2005 : 158)

②-4 受动者为无生命的事物, 施动者也是无生命的事物。

(28) 大树被台风把树枝吹断了。/大树的树枝被台风吹断了。(大木は台風で枝を折られた。)(鲁宝元 2005 : 158)

(29) 港口被潮水把防护堤冲毁了。/港口的防护堤被潮水冲毁了。(港は高浪に防波堤を突き破られて壊れてしまった。)(鲁宝元 2005 : 158)

### ③间接影响受动

指受动者间接受到施动者所发出动作的影响, 受到损害。

句型 3: 名词(受动者)+被+名词(施动者)+动词(施动者所发出的动作)+其他成分

(30) 他被女朋友哭得心烦意乱。(彼は彼女に泣かれていらいらして心が乱れている。)(鲁宝元 2005 : 159)

(31) 昨天晚上我被邻居吵得没睡好觉。(昨晚わたしは隣人に騒がれて、ぐっすり眠れませんでした。)(鲁宝元 2005 : 159)

汉语被字句的主要特点:

a 主语受动者不局限于“我”或“我方”, 也不局限于时时有生命的事物。可以是任何人或任何事物, 整体或部分, 直接或间接, 受害或者受益, 受害多于受益。

b 施动者不局限于有生命的事物。可以是任何人或事物, 包括第一人称。

c 施动者如果不是特定的可以省略。

d 汉语的直接部分受动往往把整体作为受动部分的定语来表达, 这样更自然明确。

e 汉语间接影响被动句使用很少, 一般要有表示影响结果的补语, 否则难以成立。

f 受动的主语必须是有定的。

g 没有施动者的句子可以用“被”, 不能用“叫”“让”, 有施动者既可以用“被”, 也可以用“叫”“让”。

h 表示受动时间的副词、表示否定的副词必须放在“被”字前面。表示受动者的状态的词语有时可放在被字前面, 有时也可放在被字的后面。

(32) 敌人已经被我们消灭了。(敵はすでに我々に全滅させられた。)(鲁宝元 2005 : 159)

(33) 我没被车撞着。(私は車にはねられなかった。)(鲁宝元 2005 : 159)

(34) 阿 Q 胡里胡涂地被人杀了头。(阿 Q はわけが分からないままに首を刎ねられた。)(鲁宝元 2005 : 159)

(35) 对方的无理要求被我方断然拒绝。(相手の無理な要求は私たちによってきっぱり拒絶された。)(鲁宝元 2005 : 159)

#### 0.2.1.8 高橋弥守彦 (2013 : 2-4)

高橋弥守彦 (2013) によれば、中国語の受身表現は、一般に以下に挙げる“被字句”、意味上の受身表現、語彙上の受身表現の3類に大別できる。そして、受動文の意味構造は「受け手主体+仕手客体の影響を受ける出来事」とまとめている。

#### I “被字句”の構文構造

##### ① 名詞1+“被”+名詞2+ (“所”+) 動詞

- (36) 他被那个漂亮的姑娘(所)吸引, 第一次见面, 就爱上了她。(高橋弥守彦 2013: 4)

彼はあのきれいな若い女の子の魅力に引きつけられ、初めてあつてすぐ彼女を好きになった。(高橋弥守彦訳)

##### ② 名詞1+“被”+(名詞2+) 動詞+“为/做/作/成”+名詞性語句

- (37) 黄河被中国人叫做“母亲河”。(高橋弥守彦 2012B: 1)

黄河は中国人から「母なる大河」と言われている。(高橋弥守彦訳)

##### ③ 名詞1+“被”+(名詞2+) 動詞+その他

- (38) 她的钱包被那个男的偷走了。(高橋弥守彦 2013: 4)

彼女の財布はあの男に盗まれた。(高橋弥守彦訳)

##### ④ 名詞1+“被”+名詞2+“给”+(名詞3+) 動詞+その他

- (39) 他被这本人物传记给吸引住了。(高橋弥守彦 2012B: 2)

彼はこの伝記物語にひどく夢中になった。(高橋弥守彦訳)

#### II 「意味上の受身表現」の構文構造: 名詞1+(名詞2+) 動詞+その他

- (40) 公园建成了, 树木也栽培起来了。(白晓红・赵卫 2007:151)

公園が作られ、木も植えられました。(高橋弥守彦訳)

- (41) 信(我)写好了。(白晓红・赵卫 2007:151)

手紙は書きました。(高橋弥守彦訳)

#### III 「語彙上の受身表現」の構文構造: 名詞1+“遭/受(到)…”+名詞2+“的”+動詞

- (42) 今天我受到了老师的表扬。(白晓红・赵卫 2007:152)

今日、先生から褒められた。(高橋弥守彦訳)

- (43) 她常常挨老板的骂。(白晓红・赵卫 p. 152)

彼女はよく店主から注意される。(高橋弥守彦訳)

## 0.2.2 現代日本語の受身表現に関する先行研究

### 0.2.2.1 山田孝雄 (1908: 380)

山田孝雄 (1908) は受身形における「レル・ラレル」を複語尾とし、受身文を「状態性」を表すと認め、次のように述べている。



国語に於いては受身の文に二種の状態あり。位置は文主が有情物なる時この場合には文主が其の実際の主に直接に影響を蒙る場合にも、又間接に其れが影響を受ける場合にも即所謂他動詞なる時も所謂自動詞たる時も共に受身の文をなしうるなり。そして非情物も擬人せられたる者は直にこの種の受身の文の主体となりうるなり。この種の文の主体は直接にも間接にも其の影響を受けることを自ら意識せるものと吾人が認めるものに限る。次は純然たる状態にして所謂他動詞に対する補充語たるものが、作用の影響を受けることを傍観者の地位より観察して傍観者の思想として之をあらわす場合なり。さる時は文主は非情物似ても受身の文は構成せらるなり。

#### 0.2.2.2 松下大三郎 (1930 : 170-171)

松下大三郎 (1930) は「レル」「ラレル」が被動の動助辞で、又尊称の動助辞であるとし、被動表現をまず「実質被動」と「形式被動」に分け、さらにいかに[表 0-1]のように下位分類を行った。

[表 0-1]

|      |  |
|------|--|
| 実質被動 | 1. 単純被動 旗が立てられた。<br>被動の主は非人格。 被動の客は非人格で客語が無い。  |
|      | 2. 利害被動 子どもが犬に吠えられた。<br>被動の主は人格。 客は非人格。  |
| 形式被動 | 3. 可能被動 此の本が私に読める。<br>此の子が (此の子に) 立てる。<br>被動の主は非人格。 客 (可能の主) は人格。<br>客は大主にもなる。               |
|      | 4. 価値被動 此の酒が中々飲めるよ。<br>被動の主 (価値の主) は非人格。<br>被動の客は一般人で客語はない。                                  |
|      | 5. 自然被動 拙い字がかけた。 私が泣ける。<br>被動の主は非人格 (*自動ならば主語はない)。<br>被動の客 (自然作用の主) は特定人で客語は無い。<br>客は大主にもなる。 |

[表 0-1]の「実質被動」はいわゆる受身文のことであるのに対し、「形式被動」にはいわゆる可能表現(可能被動・価値被動)と自発表現(自然被動)が含まれている。そして、松下大三郎(1930)は「実質被動」と名付けた受身表現を、意味的側面から「単純被動」と「利害被動」に分け、それぞれを次のように説明している。

単純の被動：利害を被る意味その他特殊の意味の無い被動である。日本語固有の言

い方ではない。

利害の被動：被動の主を一人格として取扱い、其れが或るものの動作によって利害を被る意を表わす被動である。

- ① 動作を自己へ被る：子供が犬に噛まれる。
- ② 動作を自己の所有物へ被る：武士が敵に刀を落とされる。
- ③ 所有物の動作によって利害を被る：亭主が女房に死なれる。
- ④ 他物の動作によって利害を被る：他人に成功される。

#### 0.2.2.3 三上章（1972：101-127）

三上章(1972)は日本語の受身文を大きく二つ分け、「まともな受身」と「はた迷惑の受身」と名付けた。はた迷惑の受身は、「正面から被害を蒙るのではなく、はたにいる者が迷惑するという気持ち」を表すもので、いわゆる間接受身文である。それに対し、まどもの受身は「動詞の意味次第で恩恵にも迷惑にもなり、真中で平気なことも起こるが、その迷惑にしても、はた迷惑ではなく、正面からの被害である」ということである。これはいわゆる直接受身文である。三上章(1972)の分類は、「直接受身文」「間接受身文」という受身文の二分法の発端と見て差し支えないであろう。そして、「まともな受身」の動詞の語彙的意味から生じた迷惑の意味と「はた迷惑の受身」の派生した迷惑の意味との区別が必要であることに言及したことも新たな見解であると言える。また、三上章(1972)には、「受身の成否」を動詞分類の基準にし、受身形にならない動詞を「所動詞」、受身形を作るものを「能動詞」とし、「能動詞」には「まともな受身」を作る他動詞と、「泣く」「来る」など「はた迷惑の受身」しか作らない自動詞が含まれているという指摘も見られる。この動詞分類の発想は、のちの生成文法理論にも引き継がれ、いわゆる「非対格動詞」と「非能格動詞」はそれぞれ「所動詞」と「能動詞」に相当するものであると思われる。

#### 0.2.2.4 鈴木康之（1977：76-80）・高橋弥守彦（2011：5-6）

鈴木康之(1977)では、現代日本語の動詞の受動態を以下のように分類している。現代日本語の動詞の受動態には、直接対象の受身(直接的な受身)・相手の受身(間接的な受身)・持ち主の受身・第三者の受身という四種の用法が見られる。

高橋弥守彦(2011)も鈴木康之（1977）の説に従い、その四類の受身を以下のように紹介している。

##### ①直接対象の受身

直接対象の受身とは、能動態の文で直接対象となっている「ヲ格のひと名詞」を主体とする文であり、両者の関係は以下のようなになるであろう。

(44) 次郎が三郎を殴った。→三郎が次郎に殴られた。

(45) 花子がネコを可愛がった。→ネコが花子に可愛がられた。

##### ②相手の受身

相手の受身とは、能動態の文で相手を意味する「二格のひと名詞」を主体とする文であり、両者の関係は以下のようになるであろう。

(46) イヌが花子に嘔みついた。→花子がイヌに嘔みつかれた。

(47) 太郎が次郎に助言を与えた。→次郎が太郎に（から）助言を与えられた。

### ③持ち主の受身

持ち主の受身とは、能動態の文で「ヲ格のもの名詞」で示される持ち主を主体とする文であり、両者の関係は以下のようになるであろう。

(48) 太郎が次郎の自転車を壊した。→次郎が太郎に自転車を壊された。

(49) 花子は三郎の絵を褒めた。→三郎は花子に（から）絵を褒められた。

### ④第三者の受身

第三者の受身とは、能動態の文で文中に現れていない迷惑を受ける第三者を主体とする文であり、両者の関係は以下のようになるであろう。

(50) 雨が降った。→兄は雨に降られた。

(51) 花子が死んだ。→両親は花子に死なれた。

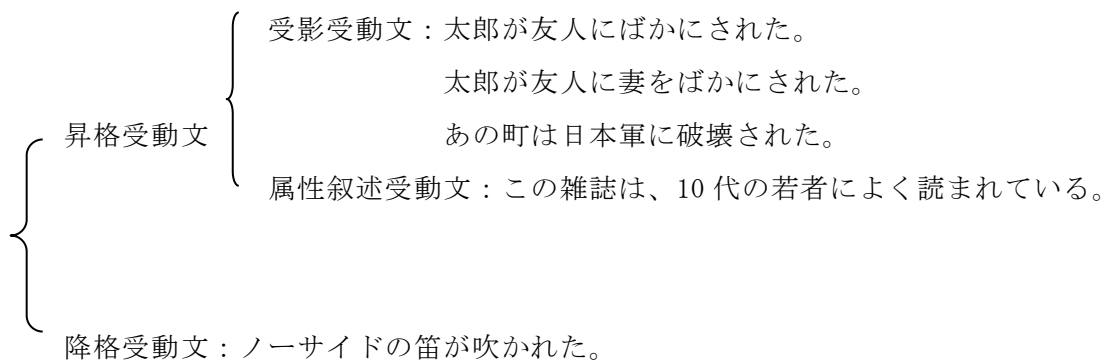
#### 0.2.2.5 久野暉（1983：56-58）

久野暉（1983）は日本語には意味上、「中立受身文」と「被害受身文」の二種類の受身文があるとし、後者の受身文は表されている行為によって、主語の指示対象が被害・迷惑を蒙ったという意味合いが強いが、前者には、そのような意味合いがないと述べている。構文的側面からみると、「中立受身文」は対応する能動文を持っているのに対し、「被害受身文」は対応する能動文を持たず、その代わりに、主語を取り除いた部分に対応する能動文があるとしている。

#### 0.2.2.6 益岡隆志（1987：178-186）

益岡隆志（1987）は、受動文を統語的側面から「昇格受動文」と「降格受動文」に分け、昇格受動文をさらに意味的側面から「受影受動文」と「属性叙述受動文」に分類した。昇格受動文とは、対応する能動文のガ格以外の名詞句がガ格に昇格し、ガ格がそれに伴い降格し、格助詞「に」を持って表現する受動文のことである。一方、降格受動文は、対応する能動文のガ格（動作主を担う名詞句）が降格し、動作主を背景化することを動機とする受動文であり、動作主を表さないのがほとんどであるが、動作主を明示するには「ニヨッテ」が用いられることになる。益岡隆志（1987）の分類をそれぞれの例文とともに次の[図 0-1]のように示す。

[図 0-1] 日本語の受身文の分類



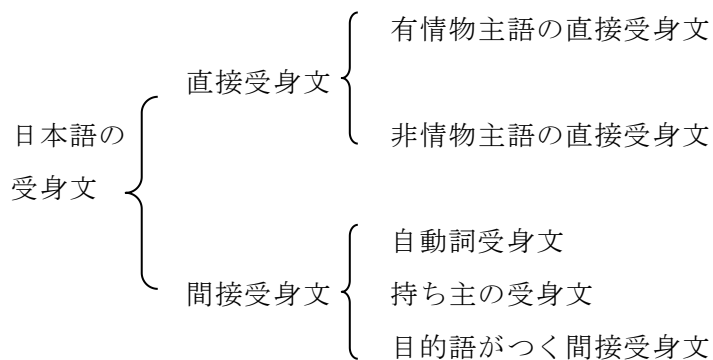
0.2.2.7 葉菁 (2003 : 265-266)

葉菁 (2003) では、1994年に発行された日本語教材『新編日語』での日本語受身文の分類法を改善し、以下のように分類している。

- ① 影響の受け方により、「直接受身文」と「間接受身文」に分けられる。
- ② 「直接受身文」は、さらに主語の性質により、二種類に分けられる。主語が人である場合は、「主語が人である直接受身文」に当たり、本稿では「有情物主語の直接受身文」と呼ぶ。主語が事や物である場合は、「主語が事あるいは物である直接受身文」に当たり、本稿では「無情物主語の直接受身文」と呼ぶ。
  - (52) 周総理は今も中国人民に尊敬されている。/周总理至今还未中国人民所尊敬。(有情物の直接受身文) (葉菁 2003 : 265)
  - (53) 歴史は繰り返される。/历史将重演。(無情物の直接受身文) (葉菁 2003 : 265)
- ③ 「間接受身文」は、述語動詞の種類により分けられる。述語動詞が自動詞であれば、「自動詞受身文」になる。述語動詞が他動詞である場合は、さらに動詞の目的語が主語の身体の一部(「頭」、「足」など)や主語に属するもの(「作品」など)であるかにより分けられる。目的語が主語の身体の一部や主語に属するものであれば、「持ち主の受身文」になり、でなければ「目的語がつく間接受身文」になる。
  - (54) 彼は奥さんに逃げられて、すっかり元気をなくしてしまった。/他老婆跑了，他非常沮丧。(自動詞受身文) (葉菁 2003 : 265)
  - (55) 私は財布をすりにすられた。/我被小偷偷了钱包。/我的钱包被小偷偷了。(持ち主受身文) (葉菁 2003 : 265)
  - (56) 私は隣に二階を建てられた。/? ? (「??」は、適切な表現が存在しない文。)(目的語がつく間接受身文) (葉菁 2003 : 265)

以上の分類の結果をまとめれば、次の[図 0-2]になる。

[図 0-2] 日本語の受身文の分類



#### 0.2.2.8 鲁宝元 (2005 : 155-157)

鲁宝元 (2005) では、日本語の受身について以下のように説明している。

“被动”指甲方（人或事物）受乙方（人或事物）发出的动作所支配，从而产生某种结果、变化等现象。日语和汉语都有关于被动的表达。日语称之为「受身表現」。……日语有标志被动表达是指主要动词后使用助动词「れる/られる」的「受身表現」，例如：「主人は飼い犬に噛まれた。」（主人被自己养的狗咬了。）日语里也有不使用助动词「れる/られる」的「受身表現」，例如：「動物園から逃げたライオンが捕まった。」（从动物园逃出的狮子被抓住了。）

日语有标志被动表达的主要句型有：

##### ①直接整体受动

指受动者直接接受施动者发出的动作，整体上受到损害或得到什么好处。

句型 1: 名词は/が + 名词に + 动词未然形 + れる/られる + 其他成分。

- (57) わたしは幼い時いたずらをしてよく父にしかられた。（我小时候因为淘气经常被爸爸训斥。）（鲁宝元 2005 : 155）
- (58) 私は試験の成績が良かったので先生に褒められた。（我因为考试成绩好被老师表扬了。）（鲁宝元 2005 : 155）

##### ②直接部分受动

指受动者的一部分、所有物或相关事物直接接受施动者发出的动作，从而使受动者的整体受到损害或得到好处。

句型 2: 名词は/が + 名词に + 名词を + 动词未然形 + れる/られる。

- (59) 私は犬に手を噛まれた。（我被狗把手咬了。）（鲁宝元 2005 : 155）
- (60) わたしは先生に作文をほめられて、うれしかったです。（我造句被老师表扬，觉得很高兴。）（鲁宝元 2005 : 155）

##### ③间接影响受动

指受动者间接受到施动者所发出动作的影响，受到损害。

句型 3: 名词は/が + 名词に + 动词未然形 + れる/られる + 其他成分。

- (61) 子供は親に死なれて、かわいそうだ。（孩子死了父母真可怜。）（鲁宝元

2005 : 155)

- (62) 会議の間、隣の人にタバコを吸われて、気分が悪くなった。(开会的时候，旁边的人抽烟，我觉得身体不舒服。)(鲁宝元 2005 : 155)

④突出叙述对象和叙述的客观性

指把叙述对象作为受动者放在前面，叙述的动词使用被动态，但是句子本身并没有施动和受动的意思。

句型 4: 名词は/が+动词未然形+れる/られる。

- (63) この雑誌は若い人たちによく読まれています。(这个杂志为年青人所爱读。)(鲁宝元 2005 : 155)

- (64) 試験は 3 月 15 日に行われます。合格者の名前は新聞に発表されます。(考试于 3 月 15 日举行，合格者的名字由报纸刊登。)(鲁宝元 2005 : 155)

⑤委婉断定

叙述的对象是某种事实，为了表示对事实的判断不是主观的、武断的，动词使用被动态，这样语气显得委婉，但是句子本身不表示施动和受动的意思。

句型 5: ……と言われる/と考えられる/と思われる

- (65) 東京のアパート代は高いと言われている。(东京的房租据说是最贵的。)(鲁宝元 2005 : 155)

- (66) つまり地球上のすべての生物は太陽のエネルギーによって支えられていると考えられる。(可以这样认为，地球上的一切生物都是靠太阳能维持着生存。)(鲁宝元 2005 : 155)

日语有标志被动表达的主要特点有：

a 主语受动者多为“我”或心理上为我方的人。整体或部分，直接或间接，受害或受益，受害多于受益。

b 在突出叙述对象的客观性和委婉断定句子中主语受动者可以是无生命的事物或事实、道理。

c 施动者是有生命的人或动物，无生命的事物一般不能作为施动者。

d 第一人称一般不能作施动者。日语使用被动句的动因是：说话人的主观感受或与说话人心理距离接近者的感受。施事者为第一人称不能强调这方面的感受。

- (67) ? 太郎はわたしに殴られた。(太郎被我打了。)(不自然)(鲁宝元 2005 : 156)

- (68) ? これらの条件が備わらないと敵は我々に打倒されない。(这些条件如果不具备，敌人就不会被我们打倒。)(不自然)(鲁宝元 2005 : 156)

e 施动者如果不是特定的可以省略

### 0.2.3 先行研究の問題点

中国語の受動表現に関する先行研究における問題点は以下の三つである。

まず、受動表現の定義および分類に関していまだに定説がない。各研究者はそれぞれの分類基準により、中国語の受動表現を分けて分析を行っている。これは日本人の中国語学習者にとって、中国語の受身表現の全貌を把握するのにきわめて不便である。

次に、最も典型的な受動表現として親しまれる“被字句”に関する研究は非常に多くあるが、“被字句”の受け手主語と仕手について地道な調査をする学者はやや少ない。“被字句”の構文的特徴を解明するために、受け手主語と仕手について更なる緻密な考察が必要と思われる。

さらに、一般的に“被字句”の成立を左右するのは動詞であると言われるが、どのような動詞が“被字句”を作れるか、どのような動詞は“被字句”の動詞となれないのか。“被字句”が成立できるか否かは動詞にどのように関わっているのであろうか。

日本語の受身表現に関する先行研究における問題点も三つある。

まず、日本語の受身表現の分類に関して中国語と同様、定説が見られない。

次に、日本語の受身文における受け手主語と仕手に関して分類調査を行う研究者は非常に少ない。

さらに、助動詞「レル・ラレル」を用いて受身義を表すのは最も典型的な受身文であるが、動詞自身に受身義が含まれる場合、「レル・ラレル」を用いずに受身を表現できる。このような表現は受身文として認識されていないようである。

本稿は、先行研究における様々な問題点を解明するために行なわれる。

## 参考文献

- 山田孝雄（1908） 『日本文法論』 宝文館
- 松下大三郎（1930） 『標準日本口語法』 中文館書店
- 王力（1943-1944） 《中国现代语法》 商务印书馆
- 三上章（1972） 『続・現代語法序説』 くろしお出版
- 鈴木康之（1977） 『日本語文法の基礎』 三省堂
- 呂叔湘（1980） 《现代汉语八百词》 商务印书馆
- 朱德熙（1982） 《语法讲义》 商务印书馆
- 呂叔湘（1982） 《中国文法要略》 商务印书馆
- 久野暉（1983） 『新日本文法研究』 大修館書店
- 湯廷池（1985） 〈国語语法与功用解释〉 《汉语词法句法论集》 台湾学生书局
- 刘月华 潘文娛等著 相原茂監訳、片山博美 守屋宏則 平井和之訳（1991） 『現代中国語文法総覧』 くろしお出版
- 邢福义（1993） 《现代汉语》 高等教育出版社
- 益岡隆志（2000） 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 葉菁（2003） 「日中受動文の対照研究—『新編日語』における文法説明への提案」  
『早稲田大学日本語教育研究』
- 刘振泉（2003） 《日语语法新编》 北京大学出版社
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004） 『現代中国語総説』 三省堂
- 陆俭明（2004） 〈有关被动句的几个问题〉 《汉语学报》2004年第2期
- 梁鴻雁（2004） 《HSK 应试语法》 北京大学出版社
- 魯宝元（2005） 〈日汉被动表达的对比与汉语“被动句”的教学〉 《日汉语言对比研究  
与对日汉语教学》 华语教学出版社
- 中島悦子（2007） 『中日対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・  
自発—』 おうふう
- 林青樺（2009） 『現代日本語におけるヴォイスの所相—事象のあり方と関わりから  
—』 くろしお出版
- 高橋弥守彦（2011） 「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語について」 中  
日対照言語学会ヴォイス特集号
- 鈴木康之（2011） 『現代日本語の連語論』 日本語文法研究会
- 李祿兴、張玲、張娟（2011） 《汉语语法百項讲練》 北京語言大學出版社
- 高橋弥守彦（2012A） 「“被字句”の受け手と仕手について」 中日対照言語学会月  
例会 2012. 4. 21
- 高橋弥守彦（2012B） 「中国語受身表現の体系について」 大東文化大学中国言語文



化学専攻主催国際シンポジウムでの研究発表 2012. 7. 22

高橋弥守彦（2013） 「日中両言語における受身のむすびつき」 国際連語論学会設立大会での研究発表 2013. 2. 9

# 第一章 両言語の受身表現の分類

## 第1節 中国語の受動表現の分類

### 1.1.1 はじめに

20世紀40年代、《中国現代語法》（王力1943）で初めて“被动式”という概念が取り上げられ、それ以来、現代中国語の受動表現に関する研究が盛んになってきた。受動表現に関する多くの問題は解決されたり整理されたりしたものの、いまだに議論されている問題点がいくつか残っている。

まず、中国語の受動表現に対する名称は、研究者のあいだには統一してない。例えば、王力（1943）、呂叔湘（1944）、蕭斧（1956）、劉世儒（1956）、梁东汉（1960）などでは受動表現を“被动式”と名付け、宋玉柱（1989）、陳昌來（2000）、陸儉明（2004）などでは“被动句”と呼んでいる。そのほか、張志公（1953）では“被动式句”と呼び、倪寶元・張宗正（1986）などでは“受事主語句”という言い方をしている。高橋弥守彦（2011）では「受身表現」という名称を使っている。また、“被字句”は中国語における最も典型的な受動表現なので、中国語の受動表現を狭義的に“被字句”や“被”構文と称する研究者もいる。

次に、受動表現の範疇と分類に関しても様々な学説が見られる。本稿では王力（1943）、呂叔湘（1944）、呂叔湘・朱德熙（1951）、張志公（1953）、梁东汉（1960）、王力（1985）、劉叔新（1987）、呂叔湘（1996）、王灿龙（1998）、邵敬敏（2003）、張兴旺（2003）、鄭媛（2005）、李臨定（2011）、高橋弥守彦（2013）、乔莎莎（2015）などを参考し、意味から受動表現を考察した結果、「受け手主体＋仕手客体の影響を受ける出来事」という受動的意味を含む文を“被动表现”（「受動表現」）と呼ぶこととする。そして、受動マーカ－の有無により、中国語の受身表現を“有标记被动表现”（「有標の受動表現」）と“无标记被动表现”（「無標の受動表現」）という二種類に大きく分け、さらに受動マーカ－の品詞によって下位分類をする。受動表現の文構造をまとめると、以下の[表 1-1]のように整理できる。

[表 1-1] 中国語の受身表現

I 有標の受動表現：受動マーカ－を用いて受身義を表す受動表現

① 介詞標記の受動表現（いわゆる“被字句”）

①-1 単一標記の受動表現の構文構造：

名詞 1 + “被”<sup>1)</sup> + (名詞 2 +) 動詞 + その他

1) “被”のほか、話し言葉でよく受動マーカ－として用いる介詞がいくつかある。主に“让”“叫”

①-2 複数標記の受動表現の構文構造：

a 名詞 1+ “被” + 名詞 2+ “所” + 動詞

b 名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+ “为/做/作/成” + 名詞性語句

c 名詞 1+ “被” + 名詞 2+ “给/把” + (名詞 3+) 動詞+その他

②動詞標記の受動表現の構文構造：

名詞 1+ “遭/受(了/到)”<sup>2)</sup>+名詞 2+ (“的/所”+) 動詞

II 無標の受動表現：受動マーカ―を用いずに受身義を含む受動表現

①絶対無標の受動表現の構文構造：

名詞 1+ (名詞 2+) 動詞+その他

②相対無標の受動表現の構文構造：

名詞 1+ (“被”+) (名詞 2+) 動詞+その他

「有標の受動表現」における「介詞標記の受動表現」は、一般的に言う“被字句”を指している。それに対し、「動詞標記の受動表現」は、“遭/受”類動詞を用いて受身義を表す受動表現であり、「語彙上の受身表現」とも呼ばれている。さらに、「無標の受動表現」は受動マーカ―“被”などを用いずに、意味上で受身義が含まれる文のことを指し、“意念被动句”か“受事主语句”あるいは「意味上の受身表現」とも呼ばれる。本稿では「名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+その他」を「介詞標記の受動表現」（便宜上、以下では“被字句”と呼ぶ）の基本構造とする。

本稿では、多くの先行研究や文法書を参考にしたが、張兴旺（2003）と高橋弥守彦（2013）の説明や例文が最も参考になれるうえに、それぞれの分類方法も中国語の受動表現の言語事実 に即している ので、張兴旺（2003）と高橋弥守彦（2013）の説に倣い、中国語の受動表現を再分類した同時に、構文構造を再検討したのである。

### 1.1.2 従来の分類

60年代末から、中国言語学の研究急速には発展し始めた。70年代に入ると、受動表現に関する研究成果は著しく増え、受動表現の研究が盛んになった。70年代の末から80年代まで、“被字句”に焦点を当てる研究が多々行なわれてきた。80年代以来、構造主義と機能研究という二つの理論がお互いに競い合い、補い合いつつ、そこから受動表現の研究もさらに広がり、受動表現の定義など基本的な概念もだんだん形作られた。90年代以降、受動表現をめぐる研究はますます深い段階へ進んでいった。

#### 1.1.2.1 60年代以前の研究

王力（1943:87-92）では、叙述文の視点から受動表現を“凡叙述词所表示的行为为

“教”“给”である。

2) “遭/受”類動詞：“遇”“挨”“蒙”“承”“经”“得”“承蒙”“蒙受”“承受”“遭受”“遭遇”など。

主位所遭受者，叫做被动式”と述べている。つまり、主語が受ける何らかの影響は述語である動詞が表す行為によるものであるなら、その文は受動式と看做す。さらに、王力（1943）では受動表現の構文構造を“主位+助动词+关系位+叙述词”（「受け手+助動詞+主事+叙述詞」）とまとめ、意味上では不如意を表し、特に主語にとって起こってほしくないことを表すと主張している。そして、受動表現を“被字句”・“为字句”・“被”と“为”の脱落した受動表現の三種類に分けている。最後に、受動表現の基本構造と意味特徴のほか、能動文・受動文・処置文の変換問題についても検討している。そして、“老虎受了狐狸的骗。”（「虎はキツネに騙された。」）のような文は受動表現ではなく、受身義を表す能動文であるとしている。

呂叔湘（1944:37-40）では、“被动式”という呼び方を援用し、受動表現の構文構造を“止词——(被)起词——动词”（「止詞——（被）起詞——動詞」）にまとめている。そのなかに、動詞の仕手を表す“起词”や動詞の受け手を表す“止词”、また、動詞の状態説明を補充する“补词”や受け手の状態を説明する“受词”なども存在する。さらに、呂叔湘（1944）では、“被”は文中で非常に重要な役割を担い、話し言葉では“被”の代わりに“於（于）、叫、让”などの助動詞が用いられるのが一般的であると述べている。

呂叔湘・朱德熙（1951: 81-85）では、受動表現を“完全的被动句”（「完全なる受動文」）と“简化的被动句”（「簡化の受動文」）の二種類に分けている。“完全的被动句”とは、文頭に受け手成分があるだけではなく、“被”の後に仕手成分も付く文ということである。例えば、“但是我们确信：一切困难都将被全国人民的英勇奋斗所战胜。”（「すべての困難は全国民の英雄な戦いによって克服されると我々は信じている。」）という文では、受け手（一切困難）と仕手（全国人民的英勇奋斗）が両方現れ、受動マーカである“被”は“所”と組み合わせて受身義を表す。もし文中に受け手成分のみ現れ、仕手成分は見られないなら、このような文は簡化受動表現と看做す。例えば、“儿童们被组织起来了。”（「子供たちは集められている。」）という文では、仕手成分が省略されている。最後に、“国货也提倡的长久了。”（「国産のものも長く宣伝されてきた。」）という文のように、“被”が省略できる文も存在すると指摘している。

张志公（1953:196-201）では、《位置的变化——变式句》という章で受動表現を説明している。まず、中国語の叙述文は“常式句”（「常式文」）と“变式句”（「変式文」）に分け、“变式句”は受動表現を指すとしている。さらに、“变式句”における仕手と受け手の位置及び役割について、受動者は主語の位置に立ち、“被”“让”“叫”は動作主を導き出して動詞を修飾すると論じている。そして、“被”“让”“叫”などの受動マーカを用いずに、仕手と受け手とのあいだの受動関係を表明できる“自然表明的被动句”（「自然表明の受動文」）という概念を取り上げているほか、“挨、

受、遭”など受身義が含まれる動詞で作られる文も受動表現に分類している。

この時期は主に受動表現の範疇、定義、分類及び各文成分についての研究が行なわれていた。受動表現に対する認識がまだ統一していないが、受動マーカの重要性に気付く学者は少なくなかった。そこで、“被”の品詞、仕手と受け手の位置、それに「無標の受動表現」における受け手の特徴など、様々な問題が検討されてきた。この段階では、すでに問題視された受動マーカの判定や分類に関する議論が続いている。例えば、“挨”、“授予”など、受身義を表す動詞も受動マーカとして扱う学者も出てきている。

#### 1.1.2.2 60年代から90年代までの研究

梁东汉(1960:63-78)では、意味上ではなく形式上から受動表現の判定をすべきではないかと主張している。形式上のマーカと看做す“被”“叫”“让”などが用いられなければ、受動表現であることを認められなく、受動表現は必ずしも不如意や起こってほしくないことを表わすのに限らないと指摘している。

朱德熙(1982:178-179)では、“被”“叫”“让”は介詞と認識し、受動マーカである“被”の品詞を強調している。そして、“被”の役割は動作の仕手を導くことであり、受け手は一般的に主語の位置に置かれ、仕手を省略する場合もあると述べ、“‘被’和‘给’后头有时不带宾语，‘叫’和‘让’不带宾语的时候很少。”と言っている。朱德熙(1982)は“叫”“让”の後に客語が付かない場合は“被”よりかなり少ないと述べているが、筆者が実際に調べたところ、“叫”“让”の後に客語が付かない文は一例もなかったということが分かった。

傅雨贤(1986:1-7)によれば、中国語の受動表現は①“有形式标志的被动句”(「形式的な標記がある受動文」と②“没有形式标志的被动句”(「形式的な標記がない受動文」という二種類に分けられるという。①類の形式的な標記は“被”、“叫”、“让”、“给”などの介詞を指している。構文構造は、“N+被(N)+V”か“V+被(NP)+VP”にまとめられる。②においては、主に“衣服洗过了。”(「服は洗った。」「他受了批评。」(「彼はお説教を受けた。」)のような文である。さらに、傅雨贤(1986)は“遭/受”類動詞を用いる動詞述語文も受動表現の範疇に入れている。

李临定(1986:205-224)では“被字句”の分類や意味特徴、それに文中の状況語について詳しく分析している。文法成分の位置により、“被字句”の文型を以下の19種類に分けている。さらに、語用的に見れば、“被字句”は必ずしも不如意を表現するわけではないと指摘している。

#### [表 1-2] “被字句”の文型

<1> 名受+被+[名施]+动

- <2> 名受+被+名施+所+动
- <3> 名受+被+名施+给+动
- <4> 名受+被+[名施]+动+名受 (1)
- <5> 名受+被+[名施]+动+名受 (2)
- <6> 名受+被+[名施]+动+名数
- <7> 名受+被+[名施]+动・介+名处
- <8> 名受+被+[名施]+动・趋+名处
- <9> 名受+被+[名施]+动<sub>1</sub>+动<sub>2</sub>
- <10> 名受+被+名施+动<sub>1</sub>+动<sub>2</sub>
- <11> 名受+动<sub>1</sub>+被+名施+动<sub>2</sub>
- <12> 名受+[被+名施]+动<sub>1</sub>+[' ]+[被+名施]+动<sub>2</sub>
- <13> 名+被+名施+动<sub>1</sub>+动<sub>2</sub>
- <14> 名施+动<sub>1</sub>+名受+被+名施+动<sub>2</sub>
- <15> 名施+被+名+动
- <16> 名处+被+[名施]+动+名受
- <17> 被+名施+动+[名受]
- <18> 名受+被+名施+把+名受+动
- <19> 把+名受+被+名施+动

刘叔新(1987:210-222)では、初めて“意念受动句”(「意念受動文」という言い方を取り上げた。文中では主語が動詞の前に置かれ、動詞によって影響されるので、意味上では受身義を表す。しかし、文法上で決まった表現形式がないので、受動表現に入れるべきではないと主張している。そして、仕手の有無および後に来る介詞により、受動表現は“強式句”(「強式文」)、“弱式句”(「弱式文」)と“准強式句”(「準強式文」)に分けられると述べている。

### 1.1.2.3 90年代以降の研究

20世紀90年代以後、言語類型論や認知言語学など海外の文法理論が導入され、語用の視点から受動表現の特徴を分析する学者が増えてきたゆえ、受動表現に対する研究視野が一気に広がっていた。例えば、受動表現の分類、受動表現における各文成分の関係、中国語と外国語における受動表現の比較対照、受動表現とほかの文式との変換、認知言語学の視点から受動表現の構文構造に対する分析、対外漢語教育の視点から受動表現についての研究、言語地理学の視点から受動表現式への探求、受動表現の語用機能分析、受動表現の更替に関する通時的研究などである。

赵清永(1993:98-103)は、“受”“遭”など「蒙る」意味を表わす動詞を述語として用いる文も受動表現に属していると主張している。

吕叔湘（1996:67-68）では、受動表現の構文構造を以下の[表 1-3]に示すようにまとめている。

[表 1-3] 中国語の受動表現の構文構造の分類（吕叔湘 1996）

|   | 主語               | 状況語         | “被” [+名<br>詞(仕手)] | 状況語            | 動詞               | 客語<br>(受け<br>手) | 客語(数<br>詞) | 助詞及<br>びその<br>他 |
|---|------------------|-------------|-------------------|----------------|------------------|-----------------|------------|-----------------|
| A | 衣服<br>他<br>她     | 全<br><br>成天 | 被露水<br>被石头<br>被家务 |                | 浸透<br>砸破了<br>捆住了 | 脚<br>手脚         |            | 了               |
| B | 旧城<br>原计划<br>庄稼  | 已经          | 被<br>被<br>被       | 彻底             | 改造<br>推迟了<br>淹了  |                 | 三年<br>一大片  | 了               |
| C | 信<br>公共设施<br>这种书 |             |                   | 已经<br>一定<br>照例 | 发<br>要爱护<br>卖得   |                 |            | 了<br><br>很快     |

受動表現の主語は受け手を表し、特定でなければならない。そして、受動表現には裸動詞は用いにくく、複合動詞や動詞連語のほうが用いられやすいと述べている。

王灿龙（1998: 15-19）では、“被”のない受動表現を“无标记被动句”（「無標の受動文」）と名付け、“无标记被动句”で用いられる動詞の特徴について“单音节、及物、表活体动作”（「单音节・及物・有情物の動作を表す」）とまとめている。

刘月华等（2001:753-761）によると、述語動詞の前に受身義を表す介詞“被”あるいは“被”で構成する介詞連語を状況語として用いる文はすべて“被字句”と認識できる。“被字句”の主語は述語動詞の受け手であり、介詞“被”の客語は仕手である。文中の状況語は受身義を含む介詞“叫”、“让”、“给”で構成する文も“被字句”に属すと指摘している。さらに、刘月华等（2001）では“被字句”の分類として以下の四種類を挙げている。

[表 1-4] “被字句”の分類（刘月华 2001）

- ① 介詞“被”の後に客語がある文
- ② “被”の後に客語がない文
- ③ “被……所……”式
- ④ “被……给……”式

邵敬敏(2003:227-229)では、受動表現を広義の受動表現と狭義の受動表現に分けている。広義的な受動表現には、“被字句”・“被……所……、为……所……”構文・“叫、让、给”構文および無標の受動表現などが含まれている。後の三類はすべて“被字句”の変化形式と看做せる。それに対し、狭義の受動表現は“被”構文と“叫、让、给”構文の二種類だけである。話し言葉と書き言葉では、その二種類の受動表現に使い分けがあるとされている。

张兴旺(2003:9-14)によると、中国語の受動表現を分類する第一の基準は受身義を表す受動標記の有無である。それにより、中国語の受動表現をまず“标志型被动句”(「標記型の受動文」)と“无标志被动句”(「無標の受動文」)という二種類に大別できる。そして、受動標記の品詞によって“标志型被动句”をさらに“介标型被动句(PMPS)”(「介詞型標記の受動文」)と“动标型被动句(VMPS)”(「動詞型標記の受動文」)に下位分類できる。また、受動マーカ―が複数であるか否かにより、“介詞型被动句”をさらに“单介标被动句(PMPS<sub>1</sub>)”(「単一介詞型標記の受動文」)と“双介标被动句(PMPS<sub>2</sub>)”(二重介詞型標記の受動文)に分けられるように、“动标型被动句”も“单动标被动句(VMPS<sub>1</sub>)”(「単一動詞型標記の受動文」)と“双动标被动句(VMPS<sub>2</sub>)”(「二重動詞型標記の受動文」)に下位分類できる。最後に、文中に受動マーカ―を入れられるか否かにより、“无标志被动句”を“绝对无标志被动句”(「絶対無標の受動文」)と“相对无标志被动句”(相對無標の受動文)に分けることができる。

郑媛(2005:3-21)では、中国語の受動表現に対して“被动句”“被字句”“被字式”“受事主语句”などの名称は全部不適當と指摘し、その理由を三つ挙げている。その一、“被动式”は特殊な構文構造の一部の特徴によって名付けられる文式なので、受動関係だけを表現する単文の場合は“被动句”と呼んでもかまわないが、複文の場合はやや複雑になる。例えば、“一出城，他就听到绿野的召唤，用不着去望它，也会被它的魅力迷住。”(「町を出たとたん、彼の耳に野原の呼び声が届いた。見なくても、野原の魅力にとられる。」)においては、受動関係を表すのは“(他)也会被它的魅力迷住”という節だけなので、複文全体を“被动句”と呼ぶのは難しいと思われる。その二、受動マーカ―として使える介詞は“被”のほか、“教(交)”“叫”“让”“给”などが見られる。もし“被字句”と“被字式”という呼び方をすれば、受動マーカ―は“被”だけであると誤解される恐れがある。その三、主語が動作の受け手である文はすべて“受事主语句”と呼んでもよい。しかし、すべての“受事主语句”を受動表現と看做すことはできない。受動表現は“受事主语句”に属しているだけである。よって、“被动式”が最も合理的な名称であると主張している。

高橋弥守彦(2013:)によれば、中国語の受身表現は、一般に以下の表 1-5 に挙げられる“被字句”、意味上の受身表現、語彙上の受身表現の 3 種類に大別できる。“被



字句”には、原則として受身義の標記である“被/让/叫/给”のうち、いずれか一つが使われている。一般に“被字句”は下記の4類に分けられ、その基本構造は「I-③」<sup>3)</sup>とされているが、高橋弥守彦(2013)では基本構造は現在使われている“被字句”の中で最も古い構造と言われている「I-①」とし、ほかの3類は派生構造とする。さらに、受動表現の意味構造は「受け手主体+仕手客体の影響を受ける出来事」とまとめている。

[表 1-5] 中国語受身表現の構文構造

I “被字句”の構文構造：

- ① 名詞 1+ “被” + 名詞 2+ (“所” +) 動詞
- ② 名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+ “为/做/作/成” + 名詞性語句
- ③ 名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+その他
- ④ 名詞 1+ “被” + 名詞 2+ “给” + (名詞 3+) 動詞+その他

II 「意味上の受身表現」の構文構造：

名詞 1+ (名詞 2+) 動詞+その他

III 「語彙上の受身表現」の構文構造：

名詞 1+ “遭/受(到)…” + 名詞 2+ “的” + 動詞

1.1.2.4 本稿の考え

以上の様々な学説を整理すると、学界の主流である受動表現の分類基準は、受動マーカ―の有無であることが分かる。受動マーカ―のない“意念被动式”あるいは“受事主语句”とも呼ばれる「無標の受動表現」を現代中国語の受動表現として認めるべきか否かは、最も議論が集まる問題点と言ってもよいであろう。

本稿は上述した先行研究を踏まえ、「無標の受動表現」も“被字句”と同じように受動表現に入れるべきではないかと主張する。そして、意味構造に注目し、「受け手主体+仕手客体の影響を受ける出来事」という構造をとる文を“被动表现”(「受動表現」)と呼ぶことにする。しかし、学界では文法構造の条件と意味構造の条件が両方満たされなければ、文法表現が成り立たないという指摘がある。

確かに文法構造に基づいて文法表現を判定すれば、受身表現であるか否かは一目瞭然かもしれないが、言葉の世界は現実の世界を反映するものなので、人間の意志を伝えることが文法表現の最も重要な役割である。この観点を支持するのであれば、表面的な文法構造より深層的な意味構造を重視すべきではないであろうか。さらに、中国語において、単語レベルでのヴォイス表現は見られないが、文レベルで能動態・受動

3) 梁鴻雁(2004: 219)では「I-③」を“被字句”の基本構造としている。高橋弥守彦(2013)の分類は、梁鴻雁(2004)に倣うが、基本構造の認定や分類などの面において異なる点も若干ある。

態・使役態などのヴォイス表現は考察できる。ただ単語レベルで受動マーカ―の有無によって受動表現を判断するのではなく、文レベルで検討しなければならないと思われる。したがって、文中に受動マーカ―が現れるか否かにはかかわらず、受け手が主語の位置に立つ、さらに「受け手主体+仕手客体の影響を受ける出来事」という意味構造を含む文であれば、受動表現と看做してもよいのではないであろうか。そして、受動マーカ―の現れない中国語の受動表現を“受事主语句”（「受け手主語文」）と呼ぶ研究者もいる。ここから「無標の受動表現」と“受事主语句”との相違点について検討する。

中国語の受動表現は“受事主语句”と同様に、受け手が主語の位置に立つので、すべての受動表現は“受事主语句”と看做せる。しかし、すべての“受事主语句”は受動表現という逆な言い方はできない。以下の例文を見てみよう。

- (1) 只要有钱，什么样的事情也办得成。（张平：十面埋伏）

金さえあれば、どんなことでもできる。（筆者訳）

- (2) 话说回来，我得想着点我的那位，她可是怠慢不得。（祝庆英：简爱中文译本）

そういえば、あいつを思いやっけてやらなくちゃ、あいつのことはなおざりにできないからな。（筆者訳）

- (3) 解放初期不光写旧小说的作家生活困难，国画家们日子也不好过。（邓友梅：记忆中的老舍先生）

解放初期、古い小説を書く作家だけではなく、水墨画の画家たちも苦しい日々を送っていた。（筆者訳）

- (4) 单国强说，古画很容易损坏，新馆采用了防火、防盗、防地震多项保护措施。（人民日报 1995 年）

古い絵は非常に破損しやすいので、新館は防災・防犯・防震など多重の保護措置を採ると单国强さんが言った。（筆者訳）

- (5) 亲姐弟之间，什么话都可以说。（老舍：正红旗下）

血の繋がっている兄弟だから、どんなことでも話せるんだ。（筆者訳）

以上の例文はいずれも“受事主语句”ではあるが、受動表現ではない。なぜかという、述語部分はだいたい“动词+不/得”、“好/难/容易+动词”、“能愿动词+动词”などの構造でできていて、強い判断や推量の意味合いが含まれているので、これらの文では、述語動詞と主語とのあいだに“动宾构造”（「動賓構造」）が存在する可能性はあるが、文全体の意味的焦点は主語が受ける影響でもなく、その影響による変化でもないからである。話し手が主語の位置に立つ人物や事柄に対し、ある判断や推量をするからこそ話し手が文を通じて表現したいことである。よって、例(1)から例(5)までのような“受事主语句”は受動表現と比べると、文の表す意味的特徴に大きな違

いが見られる。

ほとんどの受動表現は已然の出来事を表すと考えられる。つまり、ほとんどの受動表現はすでに発生した出来事に対する叙述文である。もし文中の動作や行為がまだ行われていないか、あるいはまだ完成されていないなら、副詞や能願動詞を用いない限り。“被”などの受動マーカ―を用いることができないと思われる。したがって、例(6)から例(8)までのような未然の“受事主语句”も受動表現とは認められない。

(6) 大量建筑问题需要解决。(人民日报 1993 年 1 月份)

たくさんの建築問題は解決待ちである。(筆者訳)

(7) 现行的干部制度要进行改革。(北京大学中国语言学研究中心语料库)

現在の幹部体制は改革する必要がある。(筆者訳)

(8) 那么其它的治疗效果也需要分析。(北京大学中国语言学研究中心语料库)

じゃあ、ほかの治療効果に対しても分析が必要ですね。(筆者訳)

このような文における述語は一般的に“需要”など二音節の動詞が担当している。動詞自体には具体的な意味がない。出来事を如何に処理するかを説明し、動詞のあとに付く客語がその処理方法を表明する。動作や行為はまだ行なわれていないか、あるいは進行中の状態にあるので、受動関係が成立しない。

さらに、“受事主语句”において日常生活に対する説明文や変わらない真理に関する叙述文が多々見られる。このような文における動作や行為には已然と未然という概念が存在しないため、受動表現とはなれない。例えば、例(9)と例(10)のような文である。

(9) 张师傅我认识。(郑媛 2005:7)

張先生のことは私が知っている。(筆者訳)

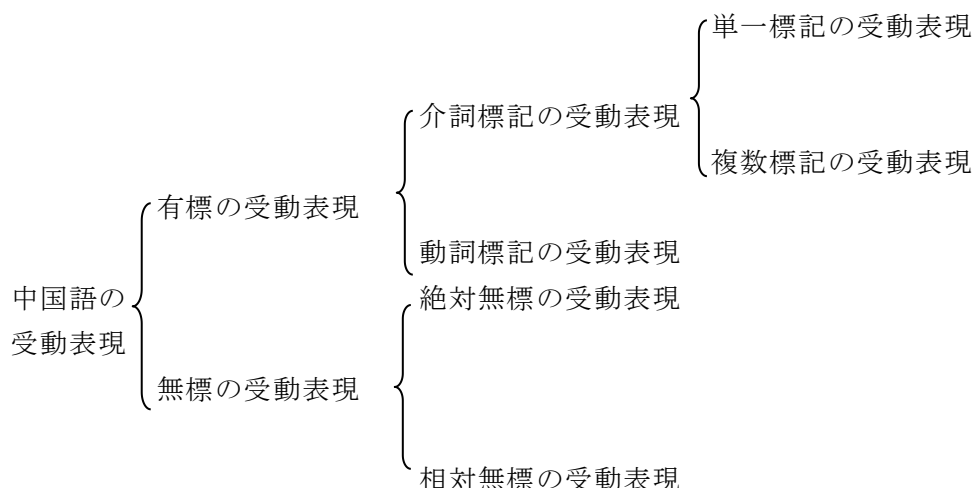
(10) 只有经济发展了, 综合国力才能增强, 人民生活水平才能提高。(人民日报 1998 年)

経済が発展しなければ、総合的な国力が強くなり、国民の生活水準が上がらないだろう。(筆者訳)

### 1.1.3 本稿における分類

本稿では、受動マーカ―の有無により、中国語の受身表現を“有标记被动句”(「有標の受動表現」)と“无标记被动句”(「無標の受動表現」)の二種類に大きく分け、さらに受動マーカ―の品詞によって下位分類をする。受動表現の構文構造をまとめると、以下の[図 1-1]のように整理できる。

[図 1-1]



### 1. 1. 3. 1 有標の受動表現

有標の受動表現とは、受動マーカ―を用いて受身義を表す文である。最も基本的な構文構造をまとめると、「受け手主体＋受動マーカ―＋仕手客体の影響を受ける出来事」となるであろう。そして、「標記」というのは、受動マーカ―としてよく使われる介詞“被”“让”“叫”“教”“给”および受身義を含む“遭/受”類動詞のことを指す。本稿では、受動マーカ―の品詞によって有標の受動表現を「介詞標記の受動表現」と「動詞標記の受動表現」に分けている。

#### 1. 1. 3. 1. 1 介詞標記の受動表現

これは介詞“被”“让”“叫”“教”“给”などが受動マーカ―の役割を果たし、受身義を表す受動表現である。原則として“被”“让”“叫”“教”“给”のうち、いずれかが使われる。ただし、構造助詞である“所”や介詞である“给”“把”、それに動詞である“为”“做”“作”“成”と組み合わせて受動表現を構成する場合もある。したがって、介詞標記の受動表現はさらに「単一標記の受動表現」と「複数標記の受動表現」の二種類に下位分類できる。

##### ① 単一標記の受動表現

基本的な構文構造は「名詞 1＋“被”＋（名詞 2＋）動詞＋その他」となり、具体的な例文は以下のとおりである。

(11) 他被人打死了，对不？（廉声：月色狰狞）

彼は殴り殺されたでしょ。（筆者訳）

(12) 想带就带走吧，厨子的规矩是厨子的规矩，反正你又不是厨子，我是让老邓坑苦了，你哪是什么厨子！（苏童：两个厨子）

持って行きたいなら持って行け！板前の決まりは板前だけの決まりだから！どうせあんたなんか板前でもなんでもなし、わしは鄭さんにまんまと騙されたな。お前は板前ではないからな！（筆者訳）

(13) “没有硬翘毛了” 郝师傅为难地摊开双手，“都叫孩子们抢去了。那玩艺儿当蘸水笔挺好使的，不是还能省几毛钱吗？”（中杰英：猎杀天鹅）

「堅めの羽はもうないの。」郝さんが困りそうに空っぽの両手を広げ、「全部子供たちに奪われたんだ。あれは筆として使えるから、お金の節約になるんじゃないか。」と言った。（筆者訳）

(14) 哼，这要教<sup>4)</sup>祖父知道了，老人要不把胡子都吓掉了才怪！（老舍：四世同堂）

ふん、これがおじいさんに知られたら大変だよ。ひげが抜けるほど驚かされるはずだよ！（筆者訳）

(15) 但是，堂叔只蹲了十个月就给放出来了。（何顿：鲁提辖的刀）

しかし、たった十ヶ月で叔父は釈放された。（筆者訳）

#### ① 複数標記の受動表現

基本的な構文構造は、a「名詞 1+“被”+名詞 2+“所”+動詞」、b「名詞 1+“被”+（名詞 2+）動詞+“为/做/作/成”+名詞性語句」、c「名詞 1+“被”+名詞 2+“给/把”+（名詞 3+）動詞+その他」であり、例文は以下のとおりである。

(16) 小柯的母亲是个神经质的女人，她经常趁儿子熟睡之际偷偷捋顺他凌乱的头发，小柯有时被母亲所惊醒，他对母亲的这个习惯很反感。（苏童：灰呢绒鸭舌帽）

柯さんの母親は神経質な女で、自分の息子が熟睡しているうちに柯さんの髪の毛をわざと乱すことがある。柯さんはたまに母親に起こされて、母親のこういう癖をととても嫌がっている。（筆者訳）

(17) 土改那一年，夏家被划为恶霸地主。（孙方友：牛黄・旗袍）

土地改革のとき、夏家は悪辣地主とされた。（筆者訳）

(18) 不说话的人不仅没有权力，而且会被人看做不存在，因为人们不会知道你。

（余华：命中注定）

声を出さない人には権力がないし、存在すら他人に認められない。だって、そんな人は知られるはずがないからだ。（筆者訳）

(19) 小杨接过话说绿色环保区如今被叫作夏娃和亚当的乐园。（何继青：一段旅程）

現在、緑色環境保護区はアダムとイブの楽園と呼ばれているって楊さんが続いて説明した。（筆者訳）

(20) 作家还说到李照相的身世，说他是盐都才子，1961年考入四川大学，一年后

因反动言论被打成现行反革命，发配到凉山自治州。（杨早：李照相）

4) 《现代汉语八百词》によれば、介詞としての“教”は“叫”と同じ、動作の仕手を標記して受動表現を表せる。よく話し言葉で用いられる。

あの作家は李照相の身の上話についても話した。李は塩都の秀才で、1961年四川大学に入学した。一年後、反動発言をしたせいで反革命現行犯として処分され、涼山自治州へ飛ばされた。（筆者訳）

(21) 同时，他又怕自己的村子也教敌人给屠了。（老舍：四世同堂）

同時に彼は自分の村も敵に殺されるのが心配になった。（筆者訳）

(22) 队长再喊也没用，被他们把胳膊扭到后面，弯着身体押走了。（余华：活着）  
隊長がどんなに叫んでも無駄だった。あいつらに腕を背中に捻られ、押されながら連れて行かれた。（筆者訳）

#### 1.1.3.1.2 動詞標記の受動表現

基本的な構文構造は「名詞 1+“遭/受（了/到）”+名詞 2+（“的/所”+）動詞」となる。“遭/受”類動詞では“遭”“受”以外、“遇”“挨”“蒙”“承”“经”“得”“承蒙”“蒙受”“承受”“遭受”“遭遇”などが挙げられる。例文は以下のとおりである。

(23) 荪甫的家乡遭了匪祸，很受些损失，因此他心情不好，在有些事情上，近于躁急。（茅盾：子夜）

荪甫の故郷は強盗にやられて大きな被害を出したから、気持ちが落ち込んで、落ち着けないんだ。（筆者訳）

(24) 他受到了上级的斥责。（马识途：专车轶闻）

彼は上司に叱られた。（筆者訳）

(25) 那四个人都感觉到现在是那“风暴”的中心直向他们扫过来了，说不定要挨一顿没来由的斥骂。（同上）

「嵐」の中心がやってくることに四人全員が気が付いた。下手したら理由もなく怒鳴られるかもしれない。（筆者訳）

#### 1.1.3.1.3 介詞標記の受動表現と動詞標記の受動表現の比較

まず、介詞標記の受動表現における主語の受ける影響は述語動詞がもたらすものである。それに対し、動詞標記の受動表現における主語の受ける影響は、述語動詞のあとに付く客語によるものである。そして、動詞標記の受動文での述語動詞は、受身義を含む“遭/受”類動詞である。このような動詞標記は一般的な受動マーカー“被”“让”“叫”などと異なり、意味上で主語と客語とのあいだに存在する受動関係を表す役割を果たす。ここでは以下の例文を見てみよう。

(26) 他们使的力量越来越猛，我的脸、肩头都被踢红了。（王朔：动物凶猛）

彼らの蹴る力がどんどん強くなって、私の顔も肩もひどく蹴られて赤くなった。（筆者訳）

(27) 咱们自己没本事，孩子也跟着受欺负。（刘震云：一地鸡毛）

俺らが役立たずだから、子供たちも俺らと一緒にいじめられるんだ。（筆

者訳)

(28) 陈老七是站在最前，已经挨了几棍子。(茅盾：林家铺子)

陳老七は一番前に立っていたので、もう何回も棒で殴られた。(筆者訳)

例(26)は介詞標記の受動表現であり、例(27)(28)は動詞標記の受動表現である。例(26)では、主語である“我的脸、肩头”に働きかけるのは述語動詞“踢”である。例(27)の主語“孩子”は、受動マーカ―“受”に続く動詞“欺负”によって働きかけられる。例(28)における主語“陈老七”は、受動マーカ―“挨”のあとに付く客語である“棍子”に関わる動作(例えば“用棍子打”)によって影響される。すなわち、介詞標記の受動表現における主語は述語動詞によって影響を受け、動詞標記の受動表現における主語は述語動詞に付く動詞あるいは名詞に関連する動作によって影響される。

次に、介詞標記の受動表現がそれと対応する能動表現(“把字句”、主述文など)に変換される際、述語動詞は換える必要がないが、動詞標記の受動表現を能動表現に書き換えると、文成分を補充し、述語動詞も換えなければならない。

(29) 记者被派出所所长扣了起来。(杨崇德：疯宴)

記者は派出所の所長に取り押さえられた。(筆者訳)

(29) ’派出所所长把记者扣了起来。

派出所の所長が記者を取り押さえた。(筆者訳)

(30) 九爷被这件事逗得大为开心，就叫人去传聂小轩。(邓友梅：烟壶)

九爺はこのことで大喜びになって、聶小軒を呼んで来いと命令した。(筆者訳)

(30) ’这件事逗得九爷大为开心，就叫人去传聂小轩。

このことで九爺が大喜びになって、聶小軒を呼んで来いと命令した。(筆者訳)

以上の例文を見れば分かるが、介詞標記の受動表現である例(29)と(30)を能動表現に書き換える場合、それぞれの述語動詞“扣”と“逗”はそのまま使える。ただし、例(31)と(32)のような文はそうではない。

(31) 你受了老张的骗！(老舍：老张的哲学)

君は張さんに騙されたんだ！(筆者訳)

(31) ’老张骗了你！

張さんは君を騙したんだ！(筆者訳)

(32) 你要不是挨了你爹一顿打，你能混成这副人样么！(郑万隆：古道)

あんたはね、父親に殴られなかったなら、今のようになれるもんか！(筆者訳)

(32) ’你要不是你爹打了你一顿，你能混成这副人样么！

あんたはね、父親があんたを殴らなければ、今のようになれるもんか！

(筆者訳)

以上の例文を考察すれば、受動表現を能動表現に変えるとき述語動詞は全部換わることが分かる。例(31)の述語である“騙”は例(31)における述語“受”の客語である。例(32)も同様である。

### 1.1.3.2 無標の受動表現

無標の受動表現とは、受動マーカを用いずに受身義を表す文であり、基本的な構文構造をまとめると、「名詞1+(名詞2+)動詞+その他」となる。

#### 1.1.3.2.1 絶対無標の受動表現

受動マーカを用いずに受身義が表され、なお文中に受動マーカの出現が容認されない文は、本稿では「絶対無標の受動表現」と名づける。

(33) 飯吃完了。(作例)

ご飯は食べ終わった。(筆者訳)

(34) 新房里的花烛燃起来了，一闪一闪的，照着一张兴奋的脸。(刘庆邦：不定嫁给谁)

新婚夫婦の部屋では、火が点けられている赤い蠟燭がひらひらと点り、彼の興奮した顔を照らした。(筆者訳)

(35) 而豆芽菜的请战书，早在前几天就写好了。(池莉：怀念声名狼藉的日子)

だが、もやしは数日も前に戦闘参加届を書いていた。(筆者訳)

例(33)では、“飯”は自らなくなることができなく、誰かがご飯を食べ終わるほかない。しかし、“吃”の前にどの受動マーカでも付けることは許されない。例(34)における“花烛”も自動的に火が点くわけではなく、誰かが火を点けるのである。しかし、“燃”の前にも受動マーカは付けられない。例(35)では、“请战书”は“豆芽菜”によって書かれたものであるが、“写”の前に“被”などの介詞受動マーカを入れられない。このような文において、受け手主語と述語動詞はよく組み合わせて現れるので、自然に受身義が表現できると思われる。

张敏(1998:152)では、“若某事物可同与其对立的一对或一组属性建立关联，而其中又有一个属性最频繁地与此事物相系，并在与此事物相关的认知模式中被看作是此事物的缺省属性或原型属性，这一关联就是自然关联或无标记的关联，其他属性与此事物的关联则是有标记的关联。”と述べている。要するに、もし主語と述語動詞はよく頻繁に組み合わせて使われるとしたら、そのあいだに強い関連性が存在すると見られる。よって、例(33)の“上课”は単語と看做せ、例(34)の“燃花烛”、例(35)の“写请战书”はいずれも連語と看做せ、その関連性を表す文法標記を明記する必要がないという。

また、受動表現はよく出来事を叙述する際に用いられる。受け手主語は述語動詞が



表す行為によって影響を受け、ある結果になるか、あるいは受け手は外からの力で変化を起こし、ある状態になることを強調するのが、受動表現の語用的意味である。文中において、描写・説明・判断を表す表現は受動表現より目立てば、受身義が弱くなり、“被”などの受動マーカ―を入れにくくなる。以下の例文を見てみよう。

(36) 但是，她最忌讳人家说她的东西买贵了。（老舍：正红旗下）

でも、彼女が一番嫌いなのは、ほかの人に買い物に無駄遣いをしたと指摘されることだ。（筆者訳）

(37) 想起买豆腐，小林突然又想起今天那一斤变馊的豆腐，现在仍在门厅里扔着，没有处理。（刘震云：一地鸡毛）

豆腐を買うと言ったら、今日買った腐っている豆腐がまだ玄関に置いてあったことを林さんは急に思い出した。（筆者訳）

(38) 信写完了。（作例）

手紙は書き終わった。（筆者訳）

例(36)における下線部はただ買い物にお金がかかりすぎることを説明し、買ったものに対する影響が見られない。例(37)では、豆腐の状態を描写しているだけなので、受身義も非常に弱まっている。例(38)における“信”は“写”という動作の結果であり、“写”という行為によって造られるものなので、“信”と“写”のあいだに存在しているのは受動関係ではなく、依存関係である。

#### 1.1.3.2.2 相対無標の受動表現

文中に“被”のような受動マーカ―を補充して「介詞標記の受動表現」になれる文は、本稿では「相対無標の受動表現」と呼ぶ。

(39) 这是一所普通的学校，小可（被/给）安排在院办公室。（陈瑶：小可）

ここは普通の学校で、可さんは学院の事務所で働けるようになった。（筆者訳）

(40) 我家电视和你家电视还不是一样？要掐就都（给）掐了，我也没看全。（迟子健：鸭如花）

うちのテレビはおまえちのとどこが違う？電気を切りたいなら勝手にしろ。どうせうちも最後まで見てないんだから。（筆者訳）

以上の例文はいずれも介詞受動標記を補充できる文である。例(39)では、述語動詞である“安排”の前に“被”“给”のような受動マーカ―が入れられる。例(40)において、述語動詞の“掐”の前に“给”を補充してもよい。受動マーカ―が補充されたら、二文とも介詞標記の受動表現になる。このような文は、受動マーカ―を省略できる受動表現である。

#### 1.1.4 おわりに

本稿では、まず現代中国語の受動表現に関する先行研究に基づき、意味構造を中心に「受け手主体+仕手客体の影響を受ける出来事」という構造をとる文を“被动表現”（「受動表現」）と呼ぶ。次に、中国語の受動表現の分類について再考した。受動マーカ―の有無によって中国語の受動表現を「有標の受動表現」と「無標の受動表現」の二種類に大別した。さらに、受動マーカ―の品詞により、「有標の受動表現」を「介詞標記の受動表現」と「動詞標記の受動表現」に分け、受動マーカ―の数量によって「介詞標記の受動表現」を「単一標記の受動表現」と「複数標記の受動表現」に下位分類すると同時に、文中に受動マーカ―を補充できるか否かにより、「無標の受動表現」を「絶対無標の受動表現」と「相対無標の受動表現」とにさらに分けた。結果として、現代中国語の受動表現を五種類（図 1-1）に再分類した。そのなかで、介詞標記の受動表現いわゆる“被字句”は最も典型的な受動表現であり、日本語の受身文と同レベルで対照研究ができるゆえ、本稿において主に介詞標記の受動表現をめぐって研究を行う。便宜上、以下の論述ではすべて“被字句”と呼ぶ。

## 第2節 日本語の受身表現の分類

### 1.2.1 はじめに

現代日本語の受身文に関する先行研究は数多くあるゆえ、受身文の分類についてもいくつかの視点から様々な議論がなされている。代表的なものには、対応する能動文のどの格が主語になるかによる「直接対象の受身」「相手の受身」「持ち主の受身」「第三者の受身」の四分類（鈴木重幸 1972・鈴木康之 1977）、主語が被害・迷惑を被る意味合いの有無による「中立受身文」と「被害受身文」の二分類（久野暉 1983）、叙述の類型から「受影受動文」「降格受動文」「属性叙述受動文」の三分類（益岡隆志 1991）、動作主からの影響が直接か否かによる「直接受身文」「間接受身文」の二分類（山田孝雄 1908・三上章 1972・葉菁 2003）などが挙げられる。また、中島悦子（2007）では体系的な分類をしていないが、日本語の受身を「直接受身」「間接受身」「自動詞の受身」「語彙的受身」に分けて論じている。

今まで、ほとんどの学者が「標識のある文法上の受身文」を対象に受身文の研究を行ってきたが、日本語において受身義を表す文法的手段は、助動詞「レル・ラレル」を用いる典型的な受身文だけとは限らないと、一部の専門家から言われている。その根拠となる以下の例文を見てみよう。

(41) 息子が父親から影響を受けた。（中島悦子 2007：100）

儿子受到了父亲的影响。（筆者訳）

(42) 動物園から逃げたライオンが捕まった。（魯宝元 2005：57）

从动物园跑出来的狮子被抓住了。（筆者訳）

例（41）と（42）のいずれも助動詞「レル・ラレル」を用いずに受身義を表現している。「受ける」や「捕まる」のような動詞は、単語自身に受身を含意されている受動的動詞ということである。木村新次郎（1983）は例（41）のような述語形式を「迂言的受身」と呼び、例（42）のような動詞を杉本武（1991）では「受動詞」と呼び、それぞれ考察を行っている。中島悦子（2007）では、このような受身を含意する動詞を使う受身表現を語彙的受身と呼び、受身の一つに含めて論じている。本稿では主に鈴木康之（1977）・中島悦子（2007）などの研究を参考し、受身文の再分類を試みる。さらに、事例の分析を踏まえ、いまだに学界の通説として認められていない「語彙的受身」（本稿では「語彙上の受身」と呼ぶ）について検討する。

### 1.2.2 従来の分類

これまでの研究者は受身文の分類について様々な説を挙げている。

松下大三郎（1930：170-171）は「レル」「ラレル」が被動の動助辞で、また尊称の

動助辞であるとし、被動表現をまず「実質被動」と「形式被動」に分けている。「実質被動」はいわゆる受身文のことであるのに対し、「形式被動」にはいわゆる可能表現（可能被動・価値被動）と自発表現（自然被動）が含まれている。そして、松下大三郎（1930）は「実質被動」と名付けた受身表現を、意味的側面から「単純被動」と「利害被動」に分け、それぞれを次のように説明している。

単純の被動：利害を被る意味その他特殊の意味の無い被動である。日本語固有の言い方ではない。

利害の被動：被動の主を一人格として取扱い、其れが或るものの動作によって利害を被る意を表わす被動である。

三上章（1972 :101-127）は日本語の受身文を大きく二つ分け、「まともな受身」と「はた迷惑の受身」と名付けた。はた迷惑の受身は、「正面から被害を蒙るのではなく、はたにいる者が迷惑するという気持ち」を表すもので、いわゆる間接受身文である。それに対し、まともな受身は「動詞の意味次第で恩恵にも迷惑にもなり、真中で平気なことも起こるが、その迷惑にしても、はた迷惑ではなく、正面からの被害である」ということである。これはいわゆる直接受身文である。そして、「まともな受身」の動詞の語彙的意味から生じた迷惑の意味と「はた迷惑の受身」の派生した迷惑の意味との区別が必要であることに言及したことも新たな見解であると言える。また、三上章（1972）には、「受身の成否」を動詞分類の基準にし、受身形にならない動詞を「所動詞」、受身形を作るものを「能動詞」とし、「能動詞」には「まともな受身」を作る他動詞と、「泣く」「来る」など「はた迷惑の受身」しか作らない自動詞が含まれているという指摘も見られる。この動詞分類の発想は、のちの生成文法理論にも引き継がれ、いわゆる「非対格動詞」と「非能格動詞」はそれぞれ「所動詞」と「能動詞」に相当するものであると思われる。

鈴木康之（1977 :76-80）では、現代日本語の動詞の受動態を以下のように分類している。現代日本語の動詞の受動態には、直接対象の受身（直接的な受身）・相手の受身（間接的な受身）・持ち主の受身・第三者の受身という四種の用法が見られる。直接対象の受身とは、能動態の文で直接対象となっている「ヲ格のひと名詞」を主体とする文である。相手の受身とは、能動態の文で相手を意味する「ニ格のひと名詞」を主体とする文である。持ち主の受身とは、能動態の文で「ヲ格のもの名詞」で示される持ち主を主体とする文である。第三者の受身とは、能動態の文で文中に現れていない迷惑を受ける第三者を主体とする文である。

久野暉（1983 :56-58）は日本語には意味上、「中立受身文」と「被害受身文」の二種類の受身文があるとし、後者の受身文は表されている行為によって、主語の指示対象が被害・迷惑を蒙ったという意味合いが強いが、前者には、そのような意味合いがないと述べている。構文的側面からみると、「中立受身文」は対応する能動文を持つ

ているのに対し、「被害受身文」は対応する能動文を持たず、その代わりに、主語を取り除いた部分に対応する能動文があるとしている。

益岡隆志（1987：178-186）は、受動文を統語的側面から「昇格受動文」と「降格受動文」に分け、昇格受動文をさらに意味的側面から「受影受動文」と「属性叙述受動文」に分類した。昇格受動文とは、対応する能動文のガ格以外の名詞句がガ格に昇格し、ガ格がそれに伴い降格し、格助詞「に」を持って表現する受動文のことである。一方、降格受動文は、対応する能動文のガ格（動作主を担う名詞句）が降格し、動作主を背景化することを動機とする受動文であり、動作主を表さないのがほとんどであるが、動作主を明示するには「ニヨッテ」が用いられることになる。

葉菁（2003：265-266）では、1994年に発行された日本語教材『新編日語』での日本語受身文の分類法を改善し、影響の受け方により、「直接受身文」と「間接受身文」に分けられる。「直接受身文」は、さらに主語の性質により、二種類に分けられる。主語が人である場合は、「主語が人である直接受身文」に当たり、主語が事や物である場合は、「主語が事あるいは物である直接受身文」に当たる。「間接受身文」は、述語動詞の種類により分けられる。述語動詞が自動詞であれば、「自動詞受身文」になる。述語動詞が他動詞である場合は、さらに動詞の目的語が主語の身体の一部（「頭」、「足」など）や主語に属するもの（「作品」など）であるかにより分けられる。目的語が主語の身体の一部や主語に属するものであれば、「持ち主の受身文」になり、でなければ「目的語がつく間接受身文」になる。

魯宝元（2005：155-157）では、日本語の受身について以下のように説明している。

“被动”指甲方（人或事物）受乙方（人或事物）发出的动作所支配，从而产生某种结果、变化等现象。日语和汉语都有关于被动的表达。日语称之为「受身表现」。……日语有标志被动表达是指主要动词后使用助动词「れる/られる」的「受身表现」，例如：「主人は飼い犬に噛まれた。」（主人被自己养的狗咬了。）日语里也有不使用助动词「れる/られる」的「受身表现」，例如：「動物園から逃げたライオンが捕まった。」（从动物园逃出的狮子被抓住了。）

要するに、受け手（人間や物事）は仕手（人間や物事）の動作に支配され、ある結果や状態変化を表すのは「受身表現」である。さらに、日本語には助動詞「レル・ラレル」を用いなくても受身義を表わせる場合もある。以下の例文を見よう。

(43) 動物プロダクションでアルバイトをしている飼育員はトラに襲わる。

(Yahoo! JAPAN)

在动物节目制作单位打工的饲养员被老虎袭击了。（筆者訳）

(44) そこで遺品の手帳を預かるが、帰京の車中で奪われてしまった。（西村京太郎：小説推理）

受托保管的那本作为遗物的笔记本，在回京的电车上被人抢走了。（筆者訳）

(45) しかし、その真犯人が捕まると、堀江代議士に迷惑がかかる。(十西村京太郎：津川警部の挑戦)

但是、真凶被捕的话会给堀江代理惹麻烦的。(筆者訳)

上掲のような例文は従来の日本語の受身文の分類に入れられない。劉振泉(2003: 253)では、受身義を表わせる動詞を「受身動詞」と名付け、「授かる、おそわる、抱かる、助かる、言いつかる、かぶさる、ゆだる、みつかる、仰せ付かる、つかまる、もてる」などの動詞を挙げているだけで、日本語の語彙上の受身文について十分に分析を行っていないと思われる。

### 1.2.3 本稿における分類

現代日本語における受身文について、先行研究では構文的側面や意味的側面など、様々な観点から考察が行われてきた。そのなかで、「直接受身文」と「間接受身文」というような伝統的な受身文の二分法に賛成する学者は少なくない。例えば、山田孝雄(1908)、三上章(1972)、葉菁(2003)などである。

本稿はヴォイスの体系<sup>5)</sup>に注目し、鈴木康之(1977)・魯宝元(2005)・中島悦子(2007)・高橋弥守彦(2011)などを参考にし、まず日本語のヴォイスの範疇には自他の対応・受身・使役・自発などの諸形態を含めて考え、自他の対応は「語彙的ヴォイス」と、能動・受身・使役・自発などは「文法的ヴォイス」と分類する。さらに、ヴォイス的対応があるか否かによって、日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」という二種類に大きく分けることにした。

#### 1.2.3.1 文法上の受身文

日本語の文法上の受身文は、さらに対応する能動文の構文構造により、以下のよう  
に分類できる。<sup>6)</sup>

##### 1.2.3.1.1 直接対象の受身文

直接対象の受身文とは、能動文で直接対象となっている「ヲ格の有情物名詞」を主語とする文である。本稿では、「有情物」とは人間や動物のことを指し、それ以外のものは「無情物」と呼ぶ。構文構造は「～が/は～に～される」であり、対応する能動文の構文構造は「～が/は～を～する」である。

(46) そして二、三日たって、敗戦論者達は残りの連中に**ぶん殴られた**。(小松

5) 本稿で論じる「ヴォイス」とは、中島悦子(2007)の説にしたがい、「形態的・構文的には、動詞の形態的变化に伴って起こる格形式の規則的な交替現象であるとし、意味的には同一の事象内容を2つの異なった視点から述べる文法機能である」と定義する。そして、日本語のヴォイスの範疇には、自他の対応・受身・使役・自発などの諸形態を含めて考える。

6) 対応する能動文の構文構造によって受身文を分類する理由というのは、能動・受身・使役・自発などの諸形態は形態的・構文的・意味的に相関関係にあり、各々を別々に論じることは不可能だと言われるからである。

左京：時の顔)

后来过了两三天，战败论者们被剩下的那帮人狠狠打了一顿。（筆者訳）

(46) 'そして二、三日たって、残りの連中は敗戦論者達をぶん殴った。

后来过了两三天，剩下的那帮人狠狠打了战败论者们一顿。（筆者訳）

(47) 加東さんは、火牙陰鬼に殺されたのかもしれませんが。（斎藤栄：丹沢-尾道殺人迷路）

加东可能是被火牙阴鬼给杀死的哦。（筆者訳）

(47) '火牙陰鬼は加東さんを殺したかもしれませんが。

可能是火牙阴鬼杀死了加东哦。（筆者訳）

(48) 母親とボーイフレンドの暴力から逃げだした少女は警察に保護され施設に送られました。（斎藤栄：丹沢-尾道殺人迷路）

从母亲和男朋友的暴力下逃走的少女被警察保护起来，然后送到收容所去了。（筆者訳）

(48) '警察は母親とボーイフレンドの暴力から逃げだした少女を保護し施設に送った。

警察把从母亲和男朋友的暴力下逃走的少女保护起来，然后把她送到收容所去了。（筆者訳）

#### 1.2.3.1.2 相手の受身文

相手の受身文とは、能動文で相手を意味する「ニ格の有情物名詞」を主語とする文であり、構文構造は一般に言われる補語を含むか否かにより、以下の「式1」と「式2」の二式にまとめられる。

式1：ダレカはダレカに/から～を～される。対応する能動文の構文構造は「ダレカがダレカに～を～する」である。

(49) 利家は秀吉から羽柴筑前守の称号を与えられ、左近衛権少将に任ずる旨を告げられた。（津本陽：風流武辺）

利家被秀吉授予了羽柴筑前守的称号，并被告知，他将被任命为左近卫权少将。（筆者訳）

(49) '秀吉は利家に羽柴筑前守の称号を与え、左近衛権少将に任ずる旨を告げた。

秀吉将羽柴筑前守的称号授予利家，并告诉他将任命他为左近卫权少将。（筆者訳）

(50) 一三二八年には、モスクワ公イヴァン一世が、オズベク・ハーンから大公の位を授けられた。（宮脇淳子：最後の遊牧帝国）

一三二八年，莫斯科公国的伊万一世受到乌兹别克大汗赐封大公之位。（筆者訳）

(50) ' 一三二八年には、オズベク・ハーンがモスクワ公イヴァン一世に大公の位を授けた。

一三二八年，乌兹别克大汗将大公之位赐封于莫斯科公国的伊万一世。（筆者訳）

式2：ダレカはダレカに～される。対応する能動文の構文構造は「ダレカがダレカに～する」である。

(51) 店に入ってすぐに、若林は見覚えのある主婦らしき女性に話しかけられた。  
（日明恩：鎮火報）

一进店里，若林就被一个有些眼熟看似主妇的女性搭讪了。（筆者訳）

(51) ' 店に入ってすぐに、見覚えのある主婦らしき女性が若林に話しかけた。  
一进店里，一个有些眼熟看似主妇的女性就向若林搭讪了。（筆者訳）

(52) 背後から誰かに呼びかけられたのかと思ったのだ。（梅原克文：カムナビ）  
感觉背后有人叫我。（筆者訳）

(52) ' 誰かが背後から（私を）呼びかけたのかと思ったのだ。  
感觉背后有人叫我。（筆者訳）

#### 1.2.3.1.3 持ち主の受身文

持ち主の受身文とは、能動文で「ヲ格の名詞」か「ニ格の名詞」の持ち主を主語とする文であり、構文構造は以下の二式にまとめられる。

式1：ダレカ は ダレカに～を～される。対応する能動文の構文構造は「ダレカがダレカの～を～する」である。

(53) 先日、刑事さんがいらっしゃった後におもいだしたことですけれど、私、  
（誰かに）下着を盗まれたんです。（森村誠一：小説宝石）

前几天，刑警先生来过之后我想起一件事，那就是我的内衣被偷了。（筆者訳）

(53') 先日、刑事さんがいらっしゃった後におもいだしたことですけど、誰かが  
私の下着を盗んだんです。

前几天，刑警先生来过之后我想起一件事，那就是有人偷了我的内衣。（筆者訳）

(54) イアン・マクレガーに香水を褒められたぐらいで、ばかみたいにうろたえるなんて。  
（ノーラ・ロバーツ著/平江まゆみ訳：マクレガーの花婿たち）  
不就是被伊万・麦格雷戈夸奖了香水么，至于这么慌乱吗。（筆者訳）

(54') イアン・マクレガーが（あなたの）香水を褒めたぐらいで、ばかみたい  
にうろたえるなんて。

伊万・麦格雷戈不就是夸奖了（你的）香水么，至于这么慌乱吗。（筆者訳）

式2：ダレカはダレカに/から～に～される。対応する能動文の構文構造は「ダレカ



がダレカの～に～する」である。

(55) 正直、ここ数ヶ月、(私は)夫から体に触れられたことは一度もなかった。

(村咲数馬：若妻めぐり)

说实话，这几个月老公一次都没有碰过我。(筆者訳)

(55) ’ 正直、ここ数カ月、夫が(私の)体に触れたことは一度もなかった。

说实话，这几个月老公一次都没有碰过我。(筆者訳)

(56) (私は)髪に触れられたような気がしましたが、錯覚だろうか？(エマ・

ダーシー著/橋由美訳：復讐は甘美すぎて)

感觉谁摸了我的头发，是错觉吗？(筆者訳)

(56) ’ (誰かが) (私の)髪に触れたような気がしましたが、錯覚だろうか？

感觉谁摸了我的头发，是错觉吗？(筆者訳)

#### 1.2.3.1.4 第三者の受身文

第三者の受身文とは、能動文に現れていない迷惑を受ける第三者を主語とする文であり、「迷惑の受身文」とも言われている。第三者の受身文は上述した三種類の文法的受身文と異なって、能動文と完全に対応できない場合が多い。

(57) 七年前、娘に死なれたら、私からことばが消えてしまった。(津島佑子：私)

七年前死了女儿之后，我就不再说话了。(筆者訳)

(57) ’ 七年前、娘が死んだら、(ショックを受けて)私からことばが消えてしまった。

七年前女儿死了之后，我就不再说话了。(筆者訳)

(58) 勝手に建物を建てられたんじゃ困りますね。(小澤英明：都市の記憶)

附近要是随随便便盖起了房子，我们会很为难吧。(筆者訳)

(58) ’ (誰かが)勝手に建物を建てて、(近くに住んでいる私たちが)困りますね。

附近要是随随便便盖起了房子，我们会很为难吧。(筆者訳)

(59) この家庭は、お父さんが朝早い仕事なので、夜半に赤ちゃんに泣かれては困るという実情があり、激しく揺すってあやしたということです。(榊原洋一：ベビーエイジ)

这个家庭的父亲每天要早起上班，如果半夜被婴儿的哭声吵得睡不着的话确实会很困扰，所以才会拼命摇篮哄孩子睡觉的。(筆者訳)

(59) ’ この家庭は、お父さんが朝早い仕事なので、夜半に赤ちゃんが泣いては困るという実情があり、激しく揺すってあやしたということです。

这个家庭的父亲每天要早起上班，如果半夜婴儿哭的话确实会很困扰，所以才会拼命摇篮哄孩子睡觉的。(筆者訳)

### 1.2.3.2 語彙上の受身文

現代日本語において受身を表す形式は、文法的ヴォイスの範疇に含まれる能動態と受動態の対立のほかに、単に語彙的な対立を示しているにすぎないものがある。つまり、助動詞「レル・ラレル」を用いなくても受身義を表わせる場合がある。本稿ではそのような文を「語彙上の受身文」と名付け、日本語の受身文に入れることにした。

(60) 私は先生からお目玉を頂戴した。(中島悦子 2007 : 102)

我受到了老师的训斥。(筆者訳)

(61) 私は先生からお叱りを受けた。(中島悦子 2007 : 102)

我遭到了老师的批评。(筆者訳)

(62) 太郎が先生からいい評価をもらった。(中島悦子 2007 : 102)

太郎获得了老师的好评。(筆者訳)

(63) 政治家の不正行為は国民から非難を招いた。(中島悦子 2007 : 103)

政治家的不法行为遭到了国民的指责。(筆者訳)

(64) 犯人は警官につかまる。(中島悦子 2007 : 103)

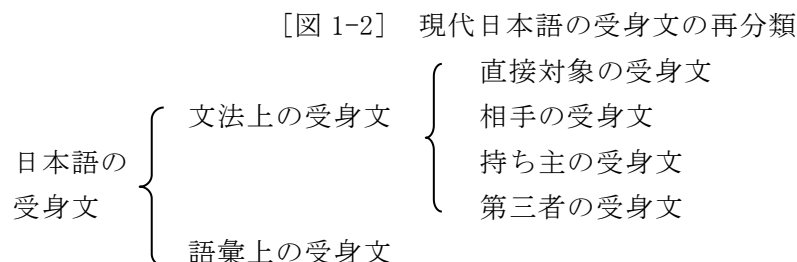
犯人被警官抓住。(筆者訳)

(65) 赤ちゃんが母親におぶさる。(中島悦子 2007 : 103)

婴儿被母亲背着。(筆者訳)

例(60) (61) (62)の「頂戴する」「受ける」「もらう」という授受動詞は、動詞に「レル・ラレル」を付けるという形態的特徴がないにも関わらず、「お目玉を」「お叱りを」「いい評価を」という補足成分を取ると、「叱られる」か「褒められる」と同様な意味を表す。そして、例(63)における動詞「招く」は、補足成分「非難を」を取って「非難される」という受身の意味合いを表現する。このような動詞は、視点が帰着点の動作主である受け手にあることを表すので、動作の逆方向性を表せる動詞であると中島悦子(2007 : 103)で述べている。さらに、例(64)と例(65)の「つかまる」「おぶさる」などの動詞もまた動作の受け手に視点を当て、それを主語とする受動的動詞である。このような動詞を用いて受身の意味を表す形式を、語彙上の受身文に含めることにする。

ここで再び日本語の受身文の分類をまとめると、次の[図 1-2]になる。



### 1.2.3.2.1 語彙上の受身文に用いられる動詞

語彙上の受身文に用いられる動詞は、野村剛史（1982：143）と杉本武（1991：277）では「受動詞」と呼ぶ。ほかには、劉振泉（2003：253）では「受身動詞」と名付け、「授かる、おそわる、抱かる、助かる、言いつかる、かぶさる、ゆだる、みつかる、仰せ付かる、つかまる、もてる」などの動詞を挙げている。本稿は劉振泉（2003）に従い、これらの動詞を「受身動詞」と呼ぶこととする。

楊海茹（2007：92）では、受身義を表す動詞を「自動受動詞」と「他動受動詞」とに分けている。そして、張曉帆（2008：25-30）は、「レル・ラレル」を用いずに受身義を表す受身文を「心理状態を表す自動詞文」および「有対自動詞文」と「無対自動詞文」の3種類に分類している。さらに、孟熙（2012：80）によると、他動化されても項の増減は生ぜず、二格名詞句を取る動詞（本稿では受身動詞と呼ぶ）を「自受動詞」、「心理動詞」<sup>7)</sup>「他受動詞」に分類できるという。

本稿はこれらの研究を参考とし、以下のような語彙的ヴォイスの対応関係の有無によって、日本語の受身動詞を「有対受身動詞」と「無対受身動詞」に大きく分ける。

#### I 有対受身動詞

ヲ格を取れるか否かにより、「有対受身動詞」はさらに次の二種類に分けられる。

- i 有対受身自動詞：捕まる（捕まえる）、見つかる（見つける）、破れる（破る）……
- ii 有対受身他動詞：預かる（預ける）、言いつかる（言いつける）、教わる（教える）……

各研究者の挙げる例文は以下のとおりである。

(66) a 警官が泥棒を捕まえた。（張曉帆 2008：27）

警官抓住了小偷。（筆者訳）

b 泥棒が警官に捕まった。（張曉帆 2008：27）

小偷被警官抓住了。（筆者訳）

c 泥棒が警官に捕まえられた。（張曉帆 2008：27）

小偷被警官抓住了。（筆者訳）

(67) a 太郎が次郎を見つけた。（張曉帆 2008：27）

太郎找到次郎了。（筆者訳）

b 次郎が太郎に見つかった。（張曉帆 2008：27）

次郎被太郎找到了。（筆者訳）

7) 孟熙（2012）では、感情に関する受動詞の具体例として「苦しむ、傷つく、驚く、喜ぶ、悲しむ、悩む、狂う、脅える」などを挙げている。

- c 次郎が太郎に見つけられた。(张晓帆 2008 : 27)  
 次郎被太郎找到了。(筆者訳)
- (68) a 母親は花子に買い物を言いつけた。(杨海茹 2007 : 93)  
 母亲吩咐花子去买东西。(筆者訳)
- b 花子は母親に買い物を言いつかった。(杨海茹 2007 : 93)  
 花子被母亲吩咐去买东西。(筆者訳)
- c 花子は母親に買い物を言いつけられた。(杨海茹 2007 : 93)  
 花子被母亲吩咐去买东西。(筆者訳)
- (69) a 山田さんが母親に荷物を預けた。(杨海茹の例文をもとにした作例)  
 山田把行李交给母亲保管。(筆者訳)
- b 母親が山田さんから荷物を預かった。(杨海茹の例文をもとにした作例)  
 母亲受山田之托保管行李。(筆者訳)
- c 母親が山田さんに荷物を預けられた。(杨海茹の例文をもとにした作例)  
 母亲受山田之托保管行李。(筆者訳)

例(66b)の主語である「泥棒」は、「捕まる」と対応する他動詞「捕まえる」の直接目的語である。例(67b)の主語「次郎」も「見つかる」と対応する他動詞「見つかる」の直接目的語である。それに対し、例(68b)の主語である「花子」は、「言いつかる」と対応する「言いつける」という他動詞の間接目的語であり、例(69b)の主語である「母親」も「預かる」と対応する他動詞「預ける」の間接目的語である。

## II 無対受身動詞

「無対受身動詞」自体は明確な受身義を持つとは限らない。しかし、それらの動詞を用いて構成した文は、受身義を表わす場合が多々見られる。無対受身動詞を用いた以下の例文を見てみよう。

- (70) 子供の頃の私は、祖父母の愛に溺れていたと言ってよい。(张晓帆 2007 : 30)  
 小时候的我，可以说是倍受祖父母的溺爱。(张晓帆訳)
- (71) 庭の植木が夜露で潤っている。(张晓帆 2007 : 30)  
 庭院的树木被夜间的露水打得湿漉漉的。(张晓帆訳)
- (72) 木の根につまずいて、転んだ。(张晓帆 2007 : 30)  
 我被树根绊倒了。(张晓帆訳)
- (73) 天井がくすぶって真っ黒だった。(张晓帆 2007 : 30)  
 天花板被熏得乌黑。(张晓帆訳)
- (74) こんなに寒いのに窓を開けっぱなしにしていたら、小鳥たちが凍えて死んでしまうよ。(张晓帆 2007 : 30)  
 这么大冷的天要是大开着窗户，小鸟会被冻死的。(张晓帆訳)

以上の例文を見れば分かるように、仕手の位置に立つ名詞は基本的に無情物で、動詞自体はほとんど非意識的な動作を表している。しかし、中国語に訳すと、“被字句”になる場合が多い。助動詞「レル・ラレル」を用いる受身文と比べると、このような受身文は客観的な事実だけを述べると言ってよいであろう。

#### 1.2.3.2.2 受身動詞の一考察

中島悦子（2007）では、語彙上の受身がある場合、形態変化により典型的な「レル・ラレル」を付加する受身に代わって優先される傾向があるようであると述べている。ここからはまず中島悦子（2007）のこの説を検証し、さらになぜ語彙上の受身文が優先される傾向にあるのかを説明する。

本稿は考察対象を絞り、日常生活で出現頻度がやや高い有対受身自動詞である「捕まる」だけに注目し、“被抓”を意味する「捕まる - 捕まえられる」<sup>8)</sup>が用いられる受身文を収集して分析する。ほかの有対受身動詞に対する考察は今後の課題として更なる研究を行なう予定である。例文は主として1億語を超える現代日本語書き言葉均衡コーパスを利用して収集した。結果として、自動詞「捕まる」が用いられる受身文は300例収集したが、他動詞「捕まえる」が用いられる受身文は12例しか集めることができなかった。これで中島悦子（2007）の説は成立すると言えるであろう。

[表 1-6] 「捕まる」と「捕まえられる」の出現頻度

|                                   | 出現回数 | 出現比率  |
|-----------------------------------|------|-------|
| 捕まる（捕まります・捕まった・捕まりましたなど）          | 300  | 96.2% |
| 捕まえられる（捕まえられます・捕まえられた・捕まえられましたなど） | 12   | 3.8%  |

中国人の日本語学習者にとって、「捕まる」であっても「捕まえられる」であっても、どちらも“被抓”という意味で受け止める。そのため、「捕まる」と「捕まえられる」のあいだに意味的な相違はほとんど存在しないと言われている。しかし、[表 1-6]から分かるように、実例に用いられる回数は「レル・ラレル」が使われる文法上の受身表現より、「捕まる」を用いる語彙上の受身表現のほうが圧倒的に多いのである。

なぜ上記のような言語現象が起きるかという点、言語の経済原理<sup>9)</sup>が働いているか

8) 『大辞林』によると、「捕まる」には基本的な意味が三つある。①逃げた者などが捉えられる。例えば、犯人が捕まる。②手でしっかりと取りすがる。（「掴まる・捉まる」とも書ける。）例えば、吊革に捕まる。③引き止められる。例えば、タクシーが捕まらない。本稿で研究対象とするのは「捉えられる」を意味する「捕まる」である。

9) 生成文法の提唱者として知られる言語学者チョムスキーは言語の経済性という概念を指摘した。

らと思われる。つまり、言語では効率化を求めるため、人間は言いやすい語句を使う傾向がある。七音節の「捕まえられる」より四音節の「捕まる」のほうが遥かに発音しやすいのである。

つぎは、「捕まる」と「捕まえられる」との使い分けについて検討する。「捕まる - 捕まえられる」を用いる受身文の意味構造をまとめると、「受け手は仕手に捕まる/捕まえられる」となる。そして、受け手と仕手は必ず同時に現れる「受け手は仕手に捕まる/捕まえられる」における受け手と仕手の出現頻度について考察すると、次の[表 1-7]のようにまとめられる。

[表 1-7] 仕手と受け手の出現頻度

|   | 受け手が現れる文         | 仕手が現れる文         | 受け手と仕手が同時に現れる文 |
|---|------------------|-----------------|----------------|
| 受け手は仕手に捕まる (捕まります・捕まりました・捕まりました)        | 142 例<br>(47.3%) | 73 例<br>(24.3%) | 25 例<br>(8.3%) |
| 受け手は仕手に捕まえられる (捕まえられます・捕まえられた・捕まえられました) | 5 例<br>(41.7%)   | 3 例<br>(25.0%)  | 0<br>(0%)      |

[表 1-7]から分かるように、「捕まる - 捕まえられる」が用いられる受身文において、受け手が明記される文は収集した実例の半分しかない。それに対し、仕手が明記される文は四分の一弱である。つまり、「捕まる」を用いても「捕まえられる」を用いても、話し手が「捕まえられる側」に焦点を当てるのは一般的で、「捕まえる側」に触れることは結構少ないと言えるであろう。そして話し手の焦点は受け手に置かれるので、文中に受け手が現れなくても、それは具体的に誰なのか必ず文脈あるいは会話の流れから判断できる。

(75) 医師は、「自分は妻を殺し、すでに犯罪者となった。いずれは警察に捕まる。二人の子供を残すのは不憫だ。母親のもとに行かせたほうが幸福」と、犯行時にいった。(大石さち子：たった一度のありがとう)

在解释为何会犯罪的时候，医师说：“我杀了妻子，已经成为罪犯。迟早会

端的に説明すると、言語はなるべく単純な形になろうとする原理があるということである。逆に言えば、複雑なものを嫌い、「言いやすい」「書きやすい」文が好まれるという性質を言語は持っているということになる。

被警察逮捕的。留下两个孩子孤苦伶仃，还不如让他们去母亲身边生活来的幸福。”（筆者訳）

- (76) - 犯人は分からないらしいじゃないですか。  
- いや、そんなことはない。じきに捕まりますよ。警察が捕まえなければ、僕が捕まえてみせます。（内田康夫：札幌殺人事件）  
- 听说还不知道犯人是谁吧？  
- 哎呀，没有那回事。（犯人）很快就会被抓住的。如果警察抓不到，我也会抓住他的。（筆者訳）

(77) もうちょっとで憲兵に捕まえられるところだったんです。それはやっぱり彼は反戦の思想を持っている。（堤堯：私だけが知っている昭和秘史）

（他）差点就被宪兵给抓住了。还是因为他持有反战思想的缘故。（筆者訳）

(78) 一度警察に捕まえられたら、もうこの石田というおっさんに何ができるというのだ。（宮部みゆき：理由）

一旦被警察抓住的话，这个叫石田的大叔还能干什么呀。（筆者訳）

例（75）において、会話の流れから推測すれば、警察に捕まるのは医師である「自分」である。そして例（76）では、その流れから見れば、じきに捕まるのが犯人を指しているのは明確である。それに、「捕まえられる」を用いる例（77）（78）も同じである。例（77）においては憲兵に捕まえられるのは「彼」で、例（78）では警察に捕まえられるのは「石田」であることがすべて文脈から判断できる。

そして、受け手と仕手が同時に現れる文はすべて「捕まる」を用いていることも[表1-7]のデータから分かる。これが言語の効率化である。要するに、もし、話し手が客観的に「捕まえる側」と「捕まえられる側」の両方に言及するのであれば、「捕まえられる」より「捕まる」のほうが用いやすいと言ってもよいであろう。さらに、つぎの例文を見ていただきたい。

(79) —あんまり相手を過大評価しないほうがいいんじゃないでしょうか。要するにたかがノビなんですから。班長がいる間に解決がつかなくても捕まるのは時間の問題ですよ。

—捕まるのではなくて、捕まえないんです。

—ほうらムキになっている。班長、肩の力を抜いて。（なかにし礼：夜盗）

—不要把对方想得过分强大比较好吧。总而言之只是区区一个诺比而已。班长你在的这段时间就算不能解决，他被捕只是迟早的事情。

—不是等他落网，是我要将他捉拿归案。

—看你又较真了。班长，放轻松啦。（筆者訳）

例（79）から、「捕まる」と「捕まえられる」とのニュアンスの違いが見えてくるであろう。話し手の意志を強く表現する「捕まえない」に対し、「捕まる」は自ら起

きるようなことを言っている。つまり、「捕まる」は「捕まえられる」より客観性が強いということであろう。

#### 1.2.4 おわりに

本稿は現代日本語の受身文に関する先行研究、特に鈴木康之（1977）の学説を踏まえ、ヴォイスの体系を中心に日本語の受身文を再分類した。結果として、日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」という二種類に分けることとなった。

文法上の受身文とは鈴木康之（1977）の分ける四種類の受身文であり、語彙上の受身文とは、助動詞「レル・ラレル」を用いずに、受身動詞を用いて受身義を表す受身文である。語彙上の受身文を分析するにあたっては、日本語の受身動詞を「有対受身動詞」と「無対受身動詞」に大きく分けた。さらに「有対受身動詞」を「有対受身自動詞」と「有対受身他動詞」という二種類に下位分類している。

そして、本稿では具体的な受身動詞「捕まる - 捕まえられる」が用いられている受身文を具体例として取り上げて分析し、文法上の受身文より語彙上の受身文が優先される傾向があることを検証した。さらに、「捕まる」を用いても「捕まえられる」を用いても、「捕まえられる側」に焦点を当てるのが一般的であり、「捕まえる側」に触れることは少ないことが分かった。最後に、「捕まる」を用いる語彙上の受身文は、「捕まえられる」を用いる文法上の受身文より客観性が強いことが判明した。



## 言語資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言 (2012)

『時の顔』『小説宝石』『若妻めぐり』『津川警部の挑戦』『風流武辺』『鎮火報』  
『私』『都市の記憶』『たった一度のありがとう』『札幌殺人事件』『私だけが知  
っている昭和秘史』『理由』『夜盗』

CCL 语料庫 北京大学中国语言学研究中心 (2009)

《十面埋伏》《记忆中的老舍先生》《正红旗下》《月色狰狞》《两个厨子》《猎杀  
天鹅》《四世同堂》《鲁提辖的刀》《灰呢绒鸭舌帽》《命中注定》《活着》《子夜》  
《专车轶事》《动物凶猛》《一地鸡毛》《林家铺子》《疯宴》《烟壶》《老张的哲  
学》《古道》《人民日报》1993 年至 2000 年

国家语委现代汉语平衡语料庫 教育部语言文字应用研究所计算语言学研究室 (2010)

## 参考文献

- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館  
松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館書店  
王力 (1943-1944) 《中国现代语法》商务印书馆  
吕叔湘 (1944) 《中国文法要略》商务印书馆  
吕叔湘、朱德熙 (1951) 《语法修辞讲话》商务印书馆  
萧斧 (1952) 〈被动式杂谈 (上)〉 《语文学习》第 3 期  
萧斧 (1952) 〈被动式杂谈 (下)〉 《语文学习》第 4 期  
张志公 (1953) 《汉语语法常识》 中国青年出版社  
刘世儒 (1956) 〈被动式的起源〉 《语文学习》8 月号  
梁东汉 (1960) 〈现代汉语的被动式〉 《内蒙古大学学报》第 2 期  
丁声树 (1961) 《现代汉语语法讲话》商务印书馆  
三上章 (1972) 『続・現代語法序説』くろしお出版  
鈴木康之 (1977) 『日本語文法の基礎』三省堂  
野村剛史 (1982) 「自動・他動・受身動詞 について」 『動詞の自他』ひつじ書房  
朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆  
久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店  
木村新次郎 (1983) 「迂言的うけみ表現」 『研究報告四』  
刘叔新 (1987) 〈现代汉语被动句的范围和类别问题〉 《句型和动词》语文出版社  
张敏 (1988) 《认知语言学与汉语名词短语》中欧社会科学出版社  
王还 (1990) 《“把”句子和“被”句子》上海教育出版社  
杉本武 (1991) 「ニ格を取る自動詞—準他動詞と受動詞—」 『日本語のヴォイス

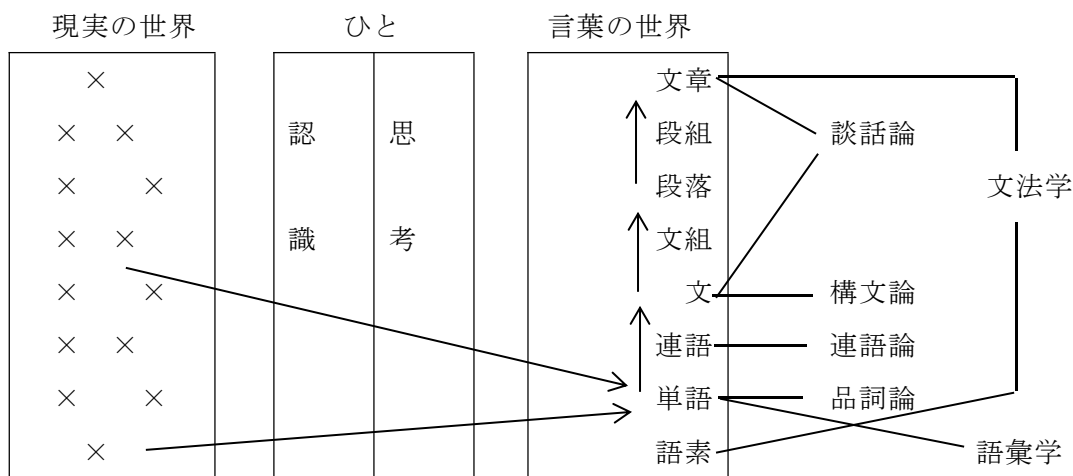
と他動性』くろしお出版

- 赵清永（1993）〈对被动句的再认识〉《北京师范大学学报(社会科学版)》第6期
- 吕叔湘（1996）《现代汉语八百词》商务印书馆
- 王灿龙（1998）〈无标记被动句和动词的类〉《汉语学习》第5期
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 陈昌来（2000）《现代汉语句子》华东师范大学出版社
- 刘月华（2001）《实用现代汉语语法》商务印书馆
- 葉菁（2003）「日中受動文の対照研究—『新編日語』における文法説明への提案」  
『早稲田大学日本語教育研究』第2巻 早稲田大学日本語教育
- 刘振泉（2003）《日语语法新编》北京大学出版社
- 邵敬敏（2003）《现代汉语通论》上海教育出版社
- 张兴旺（2003）《现代汉语标志型被动句研究》 内蒙古师范大学硕士论文
- 陆俭明（2004）〈有关被动句的几个问题〉《汉语学报》第2期
- 郑媛（2005）《汉语被动式的界定及其语法化》 山东大学硕士学位论文
- 鲁宝元（2005）〈日汉被动表达的对比与汉语“被动句”的教学〉《日汉语言对比研究  
与对日汉语教学》华语教学出版社
- 杨海茹（2007）〈关于日语动词中部分含有被动意义动词的研究〉《嘉兴学院学报》  
第19卷第4期
- 张晓帆（2008）〈日语中的自动词意义被动句〉《日语学习与研究》2008年第6期
- 张兴旺（2008）〈现代汉语被动式的界定及其分类〉《阴山学刊》第21卷第1期
- 林青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの所相—事象のあり方と関わりから  
—』くろしお出版
- 李临定（2011）《现代汉语句型》商务印书馆
- 高橋弥守彦（2011）「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語について」中  
日対照言語学会 ヴォイス特集号
- 孟熙（2012）「受動詞の意味的特徴に関する一考察」言語学論叢オンライン版第  
5号
- 高橋弥守彦（2013）「日中両言語における受身のむすびつき」国際連語論学会設  
立大会での研究発表 2013.2.9
- 乔莎莎（2015）《有标记被动句的分析》 黑龙江大学硕士学位论文

## 第二章 中国語の“被字句”の構文的特徴

高橋弥守彦（2011）では、単語は自然言語の最小の文法単位であり、単語を分解すると語音と語義からなる最小の文法単位として語素となり、単語を組み合わせると連語となり、連語より大きい単位が文であり、さらに文より大きい単位は文組、段落、段組、文章であると述べている。そして、単語の分解と組み立てを中心にして語素から文章までという文法学で扱う範疇を[表 2-1]に示している。

[表 2-1] 現実の世界と言葉の世界との関係



ここで「連語論」に注目していただきたい。鈴木康之（2011）によれば、連語論は名付的な意味を示す単語と単語との関係付けを研究する方法であり、連語論が対象とする連語は基本的に「名詞を核とする連語」と「動詞と核とする連語」であると指摘している。さらに、連語は具体的な出来事を「名付ける」ための、二つ以上の具体的な意味を含む単語のくみあわせであり、単語より具体的な意味を表す単位と看做される。連語論では、単語と単語とのくみあわせを「連語論的な意味」と「構造的なタイプ」とにより単語と単語との意味関係を表す「むすびつき」にまで分析できる。

一般的に、中国語の構文成分は主語、述語、客語、限定語、状況語、補語の6種類であり、主語・述語・客語が文の主幹と言われている。本章では、中国語の最も典型的な「受身のむすびつき」である“被字句”の構文的特徴を検討し、主に“被字句”における受け手主語と仕手に関して考察を行う。

## 第1節 “被字句”の受け手主語について

### 2.1.1 はじめに

本稿では王力（1943、1985）、呂叔湘（1944、1996）、呂叔湘・朱德熙（1951）、张志公（1953）、梁东汉（1960）、刘叔新（1987）、王灿龙（1998）、邵敬敏（2003）、张兴旺（2003）、郑媛（2005）、李临定（2011）、高橋弥守彦（2012、2013）、乔莎莎（2015）などを参考にして、深層意味から考察し、「受け手主体+仕手客体の影響を受ける出来事」という受動的意味を含む文を“被动表现”（「受動表現」）と呼ぶことにする。そして、受動マーカ―の有無によって中国語の受動表現を「有標の受動表現」と「無標の受動表現」という二種類に大別する。さらに、受動マーカ―の品詞により、「有標の受動表現」を「介詞標記の受動表現」と「動詞標記の受動表現」に分けている。さらに、介詞標記の受動表現（いわゆる“被字句”）の構文構造は全部で4種類<sup>1)</sup>に分けると述べている。本稿は、“被字句”の中で最もよく使われる基本構造「名詞1+“被”+(名詞2+)動詞+その他」を分析の対象とし、受け手主語の位置に立つ名詞1について検討する。

高橋弥守彦（2012A: 3-6）では、「受け手」を「ヒト、モノ、コト、カラダ、空間」の5種類に分けている。本稿ではまず、実例を考察することにより、この分類を検証する。次に、“被字句”の受け手主語の特徴を再考する。ここでは以下の例文を見てみよう。

- (1) a 那个花瓶被孩子打碎了。(对) (梁鸿雁 2004: 217)  
あの花瓶は子供が壊してしまった。(高橋弥守彦訳)  
b\* 一个花瓶被孩子打碎了。(错) (梁鸿雁 2004: 217)
- (2) a 那个苹果被我吃了。(对) (白晓红・赵卫 2007: 149)  
あのリンゴは私が食べた。(高橋弥守彦訳)  
b\* 一个苹果被我吃了。(错) (白晓红・赵卫 2007: 149)
- (3) a 那封信被李明取走了。(对) (卢福波 2011: 396)  
あの手紙は李明さんに持って行かれてしまった。(高橋弥守彦訳)  
b\* 一封信被李明取走了。(错) (卢福波 2011: 396)

例(1)から例(3)までにおけるa組はいずれも自然な“被字句”である。それに対し、数量詞を修飾語とする名詞連語が主語の位置に立つb組は、いずれも不成立の

1) 本稿では、介詞標記の受動表現の構文構造を以下のようにまとめている。

①-1 単一標記の受動表現の構文構造:

名詞1+“被”+(名詞2+)動詞+その他

①-2 複数標記の受動表現の構文構造:

a 名詞1+“被”+名詞2+ (“所”+) 動詞

b 名詞1+“被”+(名詞2+)動詞+“为/做/作/成”+名詞性語句

c 名詞1+“被”+名詞2+“给/把”+(名詞3+)動詞+その他

“被字句”と看做される。その理由は、“被字句”の受け手は特定（旧情報）でなければならないからと、梁鴻雁（2004）、耿二岭（2010）、白晓红・赵卫（2007）、卢福波（2011）、高橋弥守彦（2012A）によって指摘されている。「特定でなければならない」とは、どういうことを指しているであろうか。そして、数量詞を修飾語にする名詞連語は、“被字句”の受け手主語になれるのであろうか。本節では、この二つの問題についても検討する。

### 2.1.2 “被字句”における受け手主語の分類の再考

高橋弥守彦（2012A）では、数多くの受動表現に関する文献や文法書<sup>2)</sup>を参考とし、現在よく使われる“被字句”の構文構造は上掲の①であることと、“被字句”の「受け手」は一般的に「ヒト、モノ、コト、カラダ、空間」という5種類に分けられると主張している。受け手主語の分類に関する具体的な説明は以下のようなものである。

#### 2.1.2.1 ヒト類（有情物類）

主述文を中心とする受動表現を含む一つの体系は、誰に焦点を当てるかにより、どの構文構造にするかが決定されると言われている。そのため、主語は人に関係する表現がよく当たる。“被字句”の主語も同様である。“被字句”の受け手はいずれも受身義を表す「受身のむすびつき」（仕手客体の影響を受ける出来事）の対象なので、ヒトである場合が多い。

(4) 小王被他们选为组长。（房玉清 2008:216）

王君は彼らによって班長に選ばれた。/王君は彼らが班長に選んだ。（高橋弥守彦訳）

(5) 车队被洪水所阻。（房玉清 2008:219）

自動車部隊は洪水によって行く手を阻まれた。（高橋弥守彦訳）

(6) “嘎——”传来一声，水禽被惊动的鸣叫。（『講読』④p.8）

「カァ——」びっくりしたような水鳥の鳴き声が聞こえた。（『講読』④p.14）

高橋弥守彦（2012A:4）で挙げられている例（8）の“小王”は人物、例（9）の“车队”は団体を指しているので、ヒト類に分類するのは分かりやすいが、例（10）における“水禽”は動物なので、ヒト類に属しているかどうかには議論が生じる恐れがあると思われる。したがって、筆者は分類の名称を「有情物類」に名付け直すことにする。本稿で言う「有情物」は人間、動物、昆虫などの生物を指し、「無情物」はそれ

2) 高橋弥守彦（2012A）で取り上げられた参考文献は、李臨定（1993）、刘月华 潘文娛等（1996）、梁鴻雁（2004）、徐昌火（2005）、李宝贵（2005）、陆庆和（2006）、张宝林（2006）、白晓红 赵卫（2007）、徐晶凝（2008）、房玉清（2008）、方绪军（2008）、陆庆和 黄兴（2009）、李德津 金德厚（2009）、輿水優 島田亜美（2009）、丸尾誠（2010）、耿二岭（2010）、李禄兴・张玲・张娟（2011）、卢福波（2011）などである。

以外のものを指す。以下ではこれに従う。

### 2.1.2.2 モノ類

例 (11) から例 (13) までは、受け手がモノ類になっている例文である。

(7) 门被他关上了。(梁鸿雁 2004: 216)

ドアは彼によって閉められた。/ ドアは彼が閉めた。(高橋弥守彦訳)

(8) 小羊被老虎吃掉了。(房玉清 2008:216)

子羊は虎に食べられた。(高橋弥守彦訳)

(9) 那个漂亮的花瓶被弟弟打破了。(陆庆和 黄兴 2009 : 91)

あのきれいな花瓶は弟に壊された。(高橋弥守彦訳)

高橋弥守彦 (2012A : 4) では、例 (12) における“小羊”は動物であり、モノではないが、文レベルでは虎に食べられる対象となっているので、モノ並みに扱われているというように説明し、“小羊”をモノ類に入れている。しかし、もし例 (12) の主語は“小羊”ではなく、“小孩 (子供)”に書き換えれば、同じ分析をするのは難しくなるのではないだろうか。したがって、筆者は例 (12) の主語である“小羊”と、例 (10) の主語である“水禽”と同じ分類に入れるべきではないかと考えている。

### 2.1.2.3 コト類

受け手がコト類になっている例文は以下である。受け手はいずれも「受身のむすびつき」の対象となっている。例えば、以下に挙げる例 (14) の受け手“那个问题”は、文意から見れば受身のむすびつき“已经被他解决了”<sup>3)</sup>の対象である。

(10) 那个问题已经被他解决了。(陆庆和 2006: 445)

その問題はもう彼によって解決された。(高橋弥守彦訳)

(11) 你的秘密被他发现了。(梁鸿雁 2004: 217)

君の秘密は彼に見つけられた。(高橋弥守彦訳)

(12) 他的名字居然会被一个素昧平生的姑娘知晓, 他诚惶诚恐地点点头。(『講読』③p.118)

なんと、彼の名は一人の見知らぬ娘に知られていたのである。彼はおずおずしながらこっくりうなずいた。(『講読』③p.123)

(13) 你这样做会被他发现的。(梁鸿雁 2004: 217)

3) 徐昌火 (2005: 245) では、“被动句”はマイナスの意味のある文に用いられるがプラスの意味を表す文中には用いられないと説明。“有‘被’‘叫’‘让’这些标志词的被动句, 一般用于不希望发生的那些不愉快、不如意、受损害的事情。”して、例文“(对) 同学们都被老师说糊涂了。(错) 同学们都被老师说清楚了。”を挙げ、“‘同学们糊涂了’这是不好的结果, 可以用被字句来表达。‘同学们清楚了’这是好的结果, 不能用被字句来表达。”説明をしている。これまでプラスの意味と言われてきた“被动句”に対しては、実現しにくいことが実現した場合に使うとして、説明“用‘被’的被字句还可以表示实现了一般难以做到的事情。”と例文“他被政府授予‘全国十佳’称号。”[彼は政府から「全国十傑」の称号をもらった。]、“他被选为新一任的学生会主席。”[彼は新しく任じられた学生会主席に選ばれた。]を挙げている。しかし、例 (24) の文意はプラスの意味であり、特に実現しにくいことでもないが、“被动句”が使われている。

君がこうすると彼に見つけられるだろう。（高橋弥守彦訳）

- (14) 其中他的两句发胖经验：“多吃多睡。动不如静。”被全城人当做口头禅与座右铭。（『講読』①p. 48）

そのうち、彼の肥満についての二つの秘訣「より多く食べ、より多く寝る。動は静にしかず」は、全市の人々の口ぐせとなり、座右の銘にまでなった。（『講読』①p. 55）

受け手がコト類である場合、上掲の例文中のようなコト“那个问题、你的秘密、他的名字、你这样做”が挙げられ、いずれも構文構造の中で特定化されている。例えば、例（14）の“那个问题”、例（15）の“你的秘密”、例（16）の“他的名字”はいずれも連語レベルで具体的なコトを指しているの、特定である。例（17）の“你这样做”は説明性の連語、例（18）の“其中他的两句发胖经验：‘多吃多睡。动不如静。’”は小文形式の連語であり、いずれも意味的に特定化されている。

上記の分析によれば、“被字句”の「コト類の受け手」は、いずれも連語レベルで特定化されている場合である。受身文は文レベルの問題であるが、上掲の「受け手」は連語レベルですでに特定化されているので、文レベルでももちろん特定化されていると言える。

#### 2.1.2.4 カラダ類

受け手がカラダ類になっている例文を見てみよう。以下に挙げる例文は、受け手がいずれも「受身のむすびつき」の対象となっている。例えば、以下に挙げる例（19）の受け手“全身”は、文意から見れば、受身のむすびつき“都被淋湿了”の対象である。

- (15) 今天我出门没带伞，全身都被淋湿了。（白晓红・赵卫 2007：148）

今日出かけるとき傘を持っていかなかったの、全身びしょ濡れになってしまった。（高橋弥守彦訳）

- (16) 汽车门刚合上，脸一下被前面那个大高个儿压着，仅仅地贴在车门玻璃上，丝毫动弹不得。（『講読』⑤p. 95）

バスのドアがしまったとたん、前に立っている大男に、顔をおさえられ、バスのガラスにぴったり押さえつけられた。（『講読』⑤p. 107）

- (17) 顿时，绍华的心好像被压上了一块大石头，凉森森，沉甸甸的。（『人民』88-7-99）

そう思うと、大きな石に押さえつけられたように、心は冷え、胸が苦しい。（同上）

受け手がカラダ類である場合、上掲の例文中のようなカラダが挙げられ、いずれも構文構造の中で特定化されている。例えば、例（19）の“全身”、例（20）の“脸”はいずれも単語レベルでは特定ではないが、文レベルでは具体的なカラダを指してい

るので特定である。例(21)の“绍华的心”は連語レベルで具体的なヒトのカラダを指している所以特定である。

上記の分析によれば、“被字句”の「カラダ類の受け手」は、単語レベルでは汎称を表しているが、文レベルでは特定を表す場合と連語レベルで特定化されている場合とがある。いずれにしろ、受身文は文レベルの問題なので、「受け手」は特定化されていると言える。

#### 2.1.2.5 空間類

受け手が空間類になっている例文を見てみよう。受け手はいずれも「受身のむすびつき」の対象となっている。例えば、以下に挙げる例(22)の受け手“森林”は、文意から見れば受身のむすびつき“被人破坏了”の対象である。空間であっても出来事を実行する人が、それに手を加えることができるので、空間であっても受身のむすびつきの対象となれる。

(18) 森林被人破坏了。(陆庆和 2006: 447)

森林は人間によって破壊された。(高橋弥守彦訳)

(19) 她睁开眼睛，周围仍被夜色笼罩着。她本能地感到时间不早了，……(『講読』④p. 109)

彼女は目を大きくあけた。周囲はまだ夜のとばりに包まれてはいるが、本能的に時間が遅いことを感じた。……(『講読』④p. 117)

(20) 这是车厢中被人们认为最差的一个位置：窗户小，离厕所近，气味难闻。(『人民』89-10 -98)

ここはいちばん条件が悪いとされる位置だ。窓は小さいし、トイレが近くて、イヤな臭いがする。(『人民』89-10-99)

受け手が空間類である場合、上掲の例文中のような空間が挙げられ、いずれも構文構造の中では特定である。例えば、例(22)の“森林”、例(23)の“周围”はいずれも単語レベルでは汎称だが、文レベルでは具体的な空間を指している所以特定である。例(24)の“这”は単語レベルで指示代名詞を用い具体的な空間を指している所以特定である。

上記の分析によれば、“被字句”の「空間類の受け手」は、単語レベルでは汎称を表しているが、文レベルでは特定を表す場合と特定化されている場合とがある。汎称を表す場合であっても、文レベルでは特定化されている。いずれにしろ、受身文は文レベルの問題なので、「受け手」は特定化されていると言える。

#### 2.1.2.6 まとめ

本稿では、上掲の高橋弥守彦(2012A)の分析に基づき、“被字句”の受け手主語の分類を再考した。北京大学中国語学センターと北京日本学センターによってそれぞれ開発されたコーパスを利用し、収集した500例以上を分析し、“被字句”



の基本構造である「名詞1+“被”+(名詞2+)動詞+その他」における名詞1を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞（さらに心理名詞、属性名詞、行為名詞に下位分類したので、第五章第1節をご参照ください）と空間名詞の5種類に当てはまっているので、高橋弥守彦（2012A）で挙げられている受け手主語の分類が合理的であることが検証できた。

### 2.1.3 受け手の省略

“被字句”の受け手は、「受身のむすびつき」で表す出来事の結果や結論などを表す対象なので特定でなければならず、一般的には省略されない。しかし、“被字句”を用いている言語環境の中では省略されることもある。例えば、以下に挙げる例(25)の受け手は“她”であり、その後に来る“使她工作得更加起劲”という文における“她”と同一人物を指しているため、省略されても文の理解に支障が起こらない。そして、例(27)の受け手は“我的身躯”であるが、その前に“我的被压瘪的身躯弹回到原形。”（私の押しつけられてへこんだ体は、はじめたように原形をとりもどした。）の文があるので、各言語に共通する重複を嫌う経済化の原則により、受け手が省略されている。

- (21) 事实上，经常被需要反而使她工作得更加起劲。（乔安娜：不可能的婚礼）  
実は、常に誰かに必要とされているのは、彼女に仕事のやりがいを感じさせるのだ。（筆者訳）
- (22) 倒霉，今天又被训了一顿。（徐晶凝 2008:153）  
ついてないなあ。今日もまたお説教されてしまった。（高橋弥守彦訳）
- (23) 血畅流了，被加温了，心像个温泉的泉眼，喷射着热流，涌到全身。（『講読』⑤p.125~126）  
血のめぐりがよくなり、体温もあがり、心は温泉の穴のように、熱い流れをふき出し、全身にあふれた。（『講読』⑤p.131）

例(25)から例(27)まではいずれも受け手が省略されている。“被字句”の中では、受け手が省略されている場合は、そう多くあるわけではないが、受け手が省略されている場合、上掲の例文中のような受け手の省略が挙げられる。いずれも構文構造の中では特定化されているが、前述する例(27)のように、その前に類義や同義を表す語句があり、重複する必要のない言語環境により省略されると言えるであろう。

### 2.1.4 受け手主語の特徴の再考

#### 2.1.4.1 先行研究

高橋弥守彦（2013）によれば、中国語の受身表現は“被字句”、意味上の受身表現、語彙上の受身表現の3種類に大別できる。そして、“被字句”の特徴について以下の

ように述べている。

“被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象である。この意味構造の有無が受身表現であるか否かを決める。つまり、「受身のむすびつき」をとるかどうかは、受身表現を含む主述文を中心とする一つの体系において誰に焦点を当てるかによって決定される。そのため、主語は特定のヒトである場合が多い。対象が特定であってこそ、受身のむすびつきの中の仕手が受身を意味する出来事を行えるのである。

次に、魯宝元（2005）<sup>4)</sup>では、中国語の“被字句”における受け手主語について、以下のように述べている。

主語受動者不局限于“我”或“我方”，也不局限于是不是有生命的事物，可以是任何人或任何事物；整体或部分，直接或间接；受害或受益；受害多于受益。汉语的直接部分受动往往把整体作为受动部分的定语来表达，这样更自然明确。受动的主体必须是有定的。

要するに、中国語の“被字句”において、「私」や「当方」だけではなく、全体的なものや部分的なもの、ほとんどの人物や無情物が主語の位置に立つことができる。つまり、“被字句”の受け手主語についての制限はかなりゆるいと言ってもよいであろう。次に、意味構造から見れば受身表現をとるときは、被害・受益・中性があるが、被害が一番多いと言われている。そして、受け手主語は特定でなければならないのである。

さらに、成倩（2011）では、“被字句”の主語に関して以下のように述べている。

被字句的主语具有确定性，是交际双方共知的或说话者假定双方共知的事物，有的有指示代词修饰，有的有其他修饰语，有的是专有名称，有的是周遍性事物。即使没有有定标志，在具体交际中也是确知的某一事物或某些事物，如“书被拿走了”的“书”一定是确定的“书”，而不是泛指。含无定标志的词语做被字句的主语是有条件的。

つまり、“被字句”の主語は話し手と聞き手とのあいだにすでに共有している、あるいは共有していると認識される特定の情報である。指示代名詞のような修飾語が付けられる場合もあり、固有名詞である場合もある。普遍的な事柄を指す名詞が“被字句”の主語になるのも少なくない。修飾語が付けられなくても、具体的な会話におい

4) 魯宝元（2005）では、“被字句”を“直接整体受动”“直接部分受动”“间接影响受动”という3種類に分けた。まず、“直接整体受动”の基本構文構造は“名词（受动者）+被/让/叫+名词（施动者）+（给）+动词（施动者所发出的动作）+其他成分”であり、例えば、“孩子被爸爸打了一顿。”。次に、“直接部分受动”は、構造①“名词（受动者）+的+名词（受损害或受益的局部）+被+名词（施动者）+动词（施动者所发出的动作）”と構造②“名词（受动者）+被+名词（施动者）+（把）名词（受损害或受益的局部）+动词（施动者发出的动作）”という二つの構文構造があり、例えば、“我在电车上被旁边的人把脚踩了。”“他的衣服划船时被水打湿了。”。最後に、“间接影响受动”の基本構文構造は“名字（受动者）+被+名词（施动者）+动词（施动者所发出的动作）+其他成分”であり、例えば、“他被女朋友哭得心烦意乱。”。

て、主語の位置に立つ名詞は必ず確定している事柄を指す。例えば、“书被拿走了”（「本は持って行かれた。」）における“书”は特定の本を指し、その本は話し手と聞き手との双方が知っている本でなければならないので、汎称の“书”ではない。

筆者は上掲の意見を参考とし、“被字句”における受け手主語の特徴について以下のようにまとめている。

① “被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象である。

② 「受け手」は一般に有情物、モノ、コト、カラダ、空間に分けられ、受け手主語についての制限がかなりゆるい。

③ 受け手主語は「受身のむすびつき」の対象なので、特定でなければならない。

本稿では、特徴③における「特定でなければならない」について詳しく分析する。そして、数量詞を修飾語とする名詞連語は、上記例（1）から（3）までのb組では非文とされているが、“被字句”の受け手主語になれる否かを再検討する。

#### 2.1.4.2 「特定」とは

“被字句”の特徴の一つとして、先行研究では、“被”の受け手は特定でなければならないと指摘している。ここでは前に挙げた例文を再び見てみよう。

(24) 小王被他们选为组长。（房玉清 2008:216）

王君は彼らによって班長に選ばれた。/王君は彼らが班長に選んだ。（高橋弥守彦訳）

(25) 那个问题已经被他解决了。（陆庆和 2006: 445）

その問題はもう彼によって解決された。（高橋弥守彦訳）

(26) 他被老师批评了一顿。（梁鸿雁 2004: 217）

彼は先生から怒られた。（高橋弥守彦訳）

(27) 摩托车被人们拦住了。（刘咏：两根奇特的手杖）

そのバイクはみんなに引き止められた。（筆者訳）

例（28）の受け手である“小王”は固有名詞なので、特定と判定できる。例（29）の受け手“那个问题”は指示代名詞があることにより特定であることが分かる。例（30）の“他”は人称代名詞なので、これも特定であることが分かる。例（31）の受け手“摩托车”は単語レベルでは汎称だが、文脈から見れば具体性があるので特定されていることが分かる。<sup>5)</sup>

以上の分析から見れば、「特定」を意味する受け手主語は、話し手と聞き手との間

5) “摩托车被人们拦住了。”の前文は“忽然前面传来一阵惊恐的喊叫声，只见一位七、八十岁的老大爷从人行横道上穿过马路，一个戴头盔穿黑夹克衫的人骑着摩托车飞驰而来，眼看撞到老大爷身上，幸好背后一人把老大爷拉了一把，老大爷跌倒在地。”という文である。文脈から見れば、“摩托车被人们拦住了。”における“摩托车”は、七、八十歳ごろのお年寄りにぶつかって倒させたという事故を引き起こした“摩托车”を指していることが明白である。したがって、この“摩托车”に指示代名詞などが付けられなくても、特定であることが判断できる。

にすでに共有している、あるいは共有していると認識される旧情報である。そして、受け手主語を特定させる手段は、指示代名詞のような修飾語を付けることや、固有名詞を主語として用いること、さらに修飾語が付けられなくても、具体的な文脈において、主語の位置に立つ名詞が確定している事柄を指すことなどが挙げられる。

#### 2.1.4.3 数量詞を修飾語とする名詞連語は受け手主語になれるか

邱林燕(2013 :75-80)の中国語受身文の成立に関する研究では、Hopper and Thompson (1980) が取り上げた「他動性」という概念を導入し、さらに「他動性」が中国語の受身の成立要因であると主張している。筆者は邱林燕(2013)の説に基本的に賛成している。邱林燕(2013 : 75)では、ある主体がある対象に働きかける度合いを「他動性」と定義し、文の命題レベルにおける各要素から考察を行った。「他動性」に関する意味特徴が以下の[表 2-2]のように規定されている。

[表 2-2] 他動性の意味特徴

|    |                             | HIGH                           | LOW                |
|----|-----------------------------|--------------------------------|--------------------|
| 1  | PARTICIPANTS (参加者)          | 2 or more participants A and 0 | 1 participants     |
| 2  | KINESIS (動作性)               | action                         | non-action         |
| 3  | ASPECT (相)                  | telic                          | atelic             |
| 4  | PUNCTUALITY (時間性)           | punctual                       | non-punctual       |
| 5  | VOLITIONALITY (意志性)         | volitional                     | non-volitional     |
| 6  | AFFIRMATION (肯定)            | affirmative                    | negative           |
| 7  | MODE (モード)                  | realis                         | irrealis           |
| 8  | AGENCY (動作主性)               | a high in potency              | a low in potency   |
| 9  | AFFECTEDNESS of 0 (客語の影響性)  | 0 totally affected             | 0 not affected     |
| 10 | INDIVIDUATION of 0 (客語の個別化) | 0 highly individuated          | 0 non-individuated |

[表 2-3]で示される「HIGH」というコラムの意味特徴が多ければ多いほど、その構文に伴う他動性が強いという。そして、中国語の“被字句”の成立は、他動性項目 10 番の「客語の個別化」とは深く関わると言われている。「客語の個別化」と他動性との関係としては、客語が個別的であれば、事態の他動性が高いとされている。さらに、「客語の個別化」について、H&T (1980) は以下の[表 2-3]のように記述している。

[表 2-3] 客語の個別化と非個別化

| INDIVIDUATED (個別的)          | NON-INDIVIDUATED (非個別的) |
|-----------------------------|-------------------------|
| proper (固有的)                | common (一般的)            |
| human, animate (有情物)        | inanimate (無情物)         |
| concrete (具体的)              | abstract (抽象的)          |
| singular (単一)               | plural (複数)             |
| count (少数)                  | mass (大量)               |
| referential, definite (特定の) | non-referential (非特定の)  |

以上の「個別的」と「非個別的」の区別記述に基づき、以下の例文を見てみよう。

(28) a 他吃了那个苹果。(邱林燕 2013:80)

彼はそのりんごを食べた。(筆者訳)

b 那个苹果被他吃了。(邱林燕 2013:80)

そのりんごは彼に食べられた。(筆者訳)

(29) a 他吃了一个苹果。(邱林燕 2013:80)

彼は一つりんごを食べた。(筆者訳)

b? 一个苹果被他吃了。(邱林燕 2013:80)

一つりんごは彼に食べられた。(筆者訳)

例(32)と例(33)はいずれも「りんごを食べる」という行為と関連する出来事である。しかし、受身にすると、それぞれ文法の容認性が異なる。例(32)は指示代名詞“那个”があることにより特定と判断できる。例(33)の客語“苹果”(りんご)を数量的に限定し、“一个苹果”(一つりんご)にすると、量的には限界を持った行為となるが、単文から見れば“一个苹果”は「非特定の」と看做される。“他吃了一个苹果。”という事象は特定しにくく、個別的な事象とは言えない。そのため、例(33b)は“被字句”として成立するか否かには、ゆれが出てくる。しかし、数量詞を修飾語とする名詞連語が“被字句”の受け手主語になった実例はいくつか見られた。以下の例文を見てみよう。

(30) 静静地放着八筐苹果, 肯定是乡亲们送来, 而部队不肯收, 被硬搁在这儿的。

(李心田: 快读反应实录)

静かに置かれてある八かごのりんごは、きっと村の皆さんに送られてきたのだ。部隊の人に受け取られなくて、そのまま置かれたんだろう。(筆者訳)

(31) 一条小街, 被古老、破旧、高高低低的矮草房挤得曲曲弯弯。(『人民』91-6-96)

その小さな通りは、古びていたみのはげしい背の低い草ぶきの家が、軒の高さを異にしてぎっしりと立ち並び、うねうねとくねっている。(同上)

(32) 她一推开门, 发现一个人已被警察按倒在地。(成倩 2011:162)

彼女がドアを開けると、警察に押し倒された人を見かけた。(筆者訳)

(33) 星期天他收拾厨房时, 一只茶杯被他打碎了。(成倩 2011:162)

日曜日、彼がキッチンを片づけていた時、茶碗が一つ割られた。(筆者訳)

例(34)における“八筐苹果”は、“肯定是乡亲们送来, 而部队不肯收”という文脈で特定されているので、“被字句”として成立と思われる。例(35)は短編小説の書き出しの文である。著者は通りの名前を知らないで、“一条小街”と書いたが、対象となる通り(空間受け手)は受身のむすびつき“被古老、破旧、高高低低的矮草房挤得曲曲弯弯”により具体的に描写され、特定化されている。受身のむすびつきの対象である受け手は特定化<sup>5)</sup>されていると言ってよいであろう。そのため、日本語訳では指示代名詞を用いて特定化「その小さな通り」している。例(36)と例(37)では、“一个人”と“一只茶杯”は形式上それぞれ例(33b)と同様に非特定のであるが、文レベルでは受身のむすびつき“被警察按倒在地”と“被打碎了”により具体化され、特定と看做してもよいと思われる。

以上の分析から、“被字句”の受け手主語は特定されているが、具体的な文脈において意味上特定と判断されれば、数量詞を修飾語とする名詞連語が“被字句”の受け手主語になることが許されると言える。

### 2.1.5 おわりに

本稿は現代中国語の受動表現に関する先行研究に基づき、“被字句”の受け手主語の分類について再考した。主に高橋弥守彦(2012A)の説を参考とし、“被字句”の受け手主語を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞(心理名詞、属性名詞、行為名詞)と空間名詞という5種類に分けている。

次に、“被字句”の受け手主語の特徴について再検討した。本稿では、受け手主語の特徴を、①“被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象である。②“被字句”の「受け手」は一般に有情物、モノ、コト、カラダ、空間に分けられ、日本語と異なり、受け手主語についての制限がかなりゆるい。③受け手主語は「受身のむすびつき」の対象なので、特定でなければならない、という3点にまとめている。

最後に、本稿では特徴③における「特定でなければならない」について詳しく分析した。受け手主語が特定でなければならないというのは、主語の位置に立つ名詞が表す事柄は、話し手と聞き手とのあいだにすでに共有している、あるいは共有していると認識される旧情報であることが分かった。そして、具体的な文脈において特定と判

5) 高橋弥守彦(2012B)では、連関性問答法により、“被字句”の受け手が特定であることを明らかにしている。

断できれば、数量詞を修飾語とする名詞連語が“被字句”の受け手主語になることは許されることも解明できた。

## 第2節 “被字句”における仕手について

### 2.2.1 はじめに

本稿では、中国語の受動表現として最もよく使われている「介詞標記の受動表現」、いわゆる“被字句”の構文構造を全部で4種類に分けている。そして、“被字句”の基本構造「名詞1+“被”+(名詞2)+動詞+その他」を研究対象とし、仕手の役割を果たす名詞2について考察する。高橋弥守彦(2012A: 3-6)では、「仕手」を「ヒト、モノ、コト、カラダ、組織」の5種類に分けている。本稿はまず、実例を考察することに基づき、この分類を検証する。さらに、“被字句”の仕手がいつ省略できるか、いつ省略できないかについて検討する。以下の例文を見てみよう。

- (34) 小家伙特别调皮，那么高的窗户玻璃都被她打碎了，也不知她是怎么弄的。  
(2000年人民日报)

ちびちゃんはとてもやんちゃだ。あんなに高いところにある窓ガラスを割ったなんて、どうやって割ったのかしら。(筆者訳)

- (35) 那个安放在收音机上端的小酒盅，最后还是让我给打碎了。(余华：在细雨中呼喊)

ラジオレコーダーの上においてあった小さい盃は、私が落として壊して(私に割られて)しまった。(筆者訳)

- (36) 队长的丈母娘都叫他撵跑了。(戴厚英：流泪的淮河)

隊長のお義母さんまで彼に追い出された。(筆者訳)

- (37) 哼，人都给他杀了，凭你轻描淡写的几句话，使能令死人复生么？(金庸：倚天屠龙记)

ばかやろう、彼に殺された人は、あんたの軽い一言で、生き返えるの？(筆者訳)

- (38) 特鲁西耶于4月9日返回位于日本东京的家，结果发现公寓的窗户被打碎了，屋内丢失了现金。(新华社2002年4月份新闻报道)

トルシエは4月9日に日本東京の家に戻ると、マンションの窓が割れて、部屋の中に置いてあるお金がなくなったことに気付いた。(筆者訳)

- (39) 后来，长安攻下来了，王莽也给杀了。(北京大学中国语言学中心语料库)  
のちほど、長安は攻められて、王莽も殺された。(筆者訳)

例(38)から例(43)までは受動マーカー“被/让/叫/给”を用いる“被字句”である。受動マーカーは、受け手主語に働きかける動作や影響の仕手を導き出す役割を担うが、必ずしも仕手が受動マーカーの後に現れるわけではない。言語資料を調べると、例(42)と例(43)のような“被”“给”の後に付く仕手を省略する文は多々見られるが、“让”“叫”の後に仕手が付かない文は一つも見つからない。なぜ“被”“给”



を用いる受動表現では仕手の省略は許されるが、それに対して“叫”“让”を使う受動表現において仕手の省略は許されないのであろうか。本稿ではその理由についても検討する。

## 2.2.2 “被字句”における仕手の分類

高橋弥守彦（2012A：2）では、“被字句”の中の「仕手」は「受身のむすびつき」の中の動作・行為を行うので、ヒト類の仕手をプロトタイプとし、それ以外をバリエーションとしている。そして、仕手は受身のむすびつきの中の動作・行為を行うので、特定化されている場合が多いが、すべてが特定化されているわけではないと述べている。さらに、高橋弥守彦（2012A）は数多くの受動表現に関する文献や文法書<sup>6)</sup>を参考とし、現在よく使われる“被字句”の構文構造を「名詞1+“被”+(名詞2+)動詞+その他」にまとめ、“被字句”の「仕手」は一般的に「ヒト、モノ、コト、カラダ、組織」という5種類に分けられると主張している。仕手の分類について以下のように具体的に説明している。

### 2.2.2.1 ヒト類（有情物類）

仕手がヒト類になっている例文を見てみよう。

- (40) 黄河被中国人叫做“母亲河”。（梁鸿雁 2004:220）

黄河は中国人から「母なる大河」と言われている。（高橋弥守彦訳）

- (41) 他的情况已经被警察所掌握。（陆庆和 2006：447）

彼の状況はすでに警察に掌握されている。（高橋弥守彦訳）

- (42) 小王被他们选为组长。（房玉清 2008:216）

王君は彼らによって班長に選ばれた。/王君は彼らが班長に選んだ。（高橋弥守彦訳）

- (43) 汽车门刚合上，脸一下被前面那个大高个儿压着，紧紧地贴在车门玻璃上，丝毫动弹不得。（『講読』⑤p.95）

バスのドアがしまったとたん、前に立っている大男に、顔をおさえられ、バスのガラスにぴったり押さえつけられた。（『講読』⑤p.107）

- (44) 病人被护士搀了起来。（陆庆和 2006：445）

病人は看護師に助け起こされた。（高橋弥守彦訳）

- (45) 他被老师批评了一顿。（梁鸿雁 2004：217）

彼は先生に一度怒られた。（高橋弥守彦訳）

6) 高橋弥守彦（2012A）で取り上げられた参考文献は、李臨定（1993）、刘月华 潘文娛等（1996）、梁鸿雁（2004）、徐昌火（2005）、李宝贵（2005）、陆庆和（2006）、张宝林（2006）、白晓红 赵卫（2007）、徐晶凝（2008）、房玉清（2008）、方绪军（2008）、陆庆和 黄兴（2009）、李德津 金德厚（2009）、輿水優 島田亜美（2009）、丸尾誠（2010）、耿二岭（2010）、李禄兴 张玲 张娟（2011）、卢福波（2011）などである。

- (46) 他的名字居然会被一个素昧平生的姑娘知晓，他诚惶诚恐地点点头。（『講読』③p.118）

なんと、彼の名は一人の見知らぬ娘に知られていたのである。彼はおずおずしながらこっくりうなずいた。（『講読』③p.123）

- (47) 康君怎么也想不到，在黄昏时分，他在城西的L形小街溜达，有人招呼他：“老张！”他只是应了一声，就被三五个素不相识的年轻人软施硬拉地请进街口的“回忆餐馆”。（『人民』95-3-99）

夕方、康君が町の西のL字型になった横町を散歩していると、思いがけず「老張！」と呼びかけられた。はい、と一言答えただけで彼は、見知らぬ三、四人の若者にむりやり横町の角の「思い出レストラン」に連れていかれた。（『人民』95-3-98）

- (48) 小羊被老虎吃掉了。（房玉清 2008:216）

子羊は虎に食べられた。（高橋弥守彦訳）

仕手は受身のむすびつき「“被”＋仕手＋動詞＋その他」を作る「動詞＋その他」の動作主なので、ヒトの場合が圧倒的に多い。例えば、例（44）の“黄河被中国人叫做‘母亲河’。”の仕手“中国人”は、文意から見れば受身のむすびつき“黄河被中国人叫做‘母亲河’”の動作主であり、汎称である。例（45）の“警察”も受身のむすびつき“他的情况被警察所掌握”の動作主であり、汎称である。例（46）の“他们”や例（47）の“前面那个大高个儿”は、人称代名詞や指示代名詞を用い、具体性があるので特定である。例（48）の“护士”や例（49）の“老师”は単語レベルでは汎称であるが、受身のむすびつき“被护士搀了起来”“被老师批评了一顿”の中では具体性があるので特定化されている。例（50）の“一个素昧平生的姑娘”は特定化されていないが、やはり受身のむすびつき“被一个素昧平生的姑娘知晓”の中では特定である。例（51）も仕手“三五个素不相识的年轻人”と受身のむすびつき“被三五个素不相识的年轻人软施硬拉地请进街口的‘回忆餐馆’”の関係は、例（50）と同じである。

ここで例（52）に注目しよう。高橋弥守彦（2012A）では、“老虎”は動物であるが、受身のむすびつき“被老虎吃掉了”の中ではヒト並みの出来事（行為）をしているのでヒト類として扱うと述べている。文学作品において虎を擬人化して人間のように描写する場合であれば、虎をヒトとして扱うことができると思われるが、この例文ではそういう文学的な表現ではないので、ヒト類と称することは難しいのではないだろうか。本稿ではヒト類という分類を「有情物類」と呼び直すことにする。

上記の分析によれば、“被字句”の「有情物類の仕手」は単語レベルで特定化されている場合と、連語レベルで特定化されている場合とがある。また、例（44）の仕手“中国人”のように汎称である場合もあると言える。仕手は受身文の中では、文レベルでは特定化されている場合が多いが、汎称を用いる例文もあるので、特定でも汎称

でも文が成立すると言える。

#### 2.2.2.2 モノ類

仕手がモノ類になっている例文を見てみよう。

- (49) 他被这本人物传记所吸引。(梁鸿雁 2004:219)

彼はこの伝記物語にひどく夢中になった。(高橋弥守彦訳)

- (50) 孩子们被大雨淋湿了。(梁鸿雁 p. 219)

子どもたちは大雨で濡れてしまった。(高橋弥守彦訳)

- (51) 车队被洪水所阻。(房玉清 2008:219)

自動車部隊は洪水によって行く手を阻まれた。(高橋弥守彦訳)

- (52) 从此我承包了家里所有累活。尽量让妻子过得轻松一点儿。当妻子用惊异的多情的目光注视我的时候,我便挺挺累酸了的腰板,显示出男人特有的气魄和魅力。单位里评选本年度模范丈夫,我以全票荣登榜首。这事被一家妇女刊物获悉,派人来给我照相,还介绍了我从一个普通男人成长为模范丈夫的光辉事迹。(『人民』90-6-98~99)

それからは、家じゅうの力仕事は引き受け、できるだけ妻を楽にしてやった。妻の視線が、おどろきと愛情をこめて、オレに注がれるときには、オレは疲れた腰をしゃっきりのぼして、男の気っぷと魅力というやつを誇示する。勤め先で、ことしの模範亭主選びがあり、オレが全部の票をさらって一位になった。これを知った婦人雑誌が、人をよこしてオレの写真を撮るやらふつうの男から模範的な夫になるまでの、輝かしい成長の軌跡を紹介するやら。(『人民』90-6-99)

モノ類の仕手はいずれも「受身のむすびつき」のなかでは動作主なので、ヒト類ほどたくさんあるわけではないと思われる。モノ類の多くは特定であるが、不定の場合もある。例えば、例(53)の仕手“这本人物传记”は連語の中に指示代名詞を用いているので特定である。しかし、例(54)のように単語レベル“大雨”でも受身のむすびつき“被淋湿了”の中でも仕手は不定の場合もある。例(55)の仕手“洪水”は単語レベルでは汎称であるが、文意から見れば受身のむすびつき“被洪水所阻”の動作者であり特定化されている。例(56)に関して、高橋(2012A)では“一家妇女刊物”を特定化されているモノ類の仕手として認識しているが、ここの“妇女刊物”はただの雑誌を指しているのではなく、雑誌を作る組織を表しているので、モノ類に分類できないのではないだろうか。

- (53) “啪!”他的前额被什么击了一下,老板站在跟前,用手指点着他说:“发什么疯?”(『講読』④p.100)

「パチン」馮春のおでこが誰かに叩かれた。見ると、女房が彼の前につつ立て、彼を指さして、「どっかおかしくなっちゃったんじゃないのかい?」

とどなっている。（『講読』④p.104）

- (54) 在大雨中，我看到萍在拉起那根黑线的时候被什么东西抛起来，而后又摔倒在在地上。（『人民』96-12-85）

が、雨でずぶ濡れになった萍が電線を掴んだと見たその時、彼女の体は宙を舞い、つづいて地面に激しく叩きつけられた。（同上）

例（57）の“什么”は疑問代名詞なので不定であるが、受身のむすびつき“被什么击了一下”の中では具体性な内容となっているのでやはり特定化されている。例（58）も仕手“什么东西”と受身のむすびつき“被什么东西抛起来”の関係は、連語レベルでは不定であるが、例（57）と同様、文レベルでは特定である。

上記の分析によれば、“被字句”の「モノ類の仕手」は単語レベルでも文レベルでも不定の場合もあるし、単語レベルでは汎称であるが、連語レベルでは具体性があるので特定化されている場合もある。仕手は受身文の中では、文レベルの中で特定でも不定でも文が成立すると言える。

#### 2.2.2.3 コト類

高橋弥守彦（2012A）で挙げられている実例は以下の5例である。

- (55) 两局下来，厂长就被他凌厉的攻势逼得只有招架之功，没有还手之力了。（『講読』①p.38）

二局指したが、工場長は、相手の猛烈な攻勢の前にたじたじとなり、手のかえしようもなかった。（『講読』①p.42）

- (56) 崔主任被这个意外情况搅得心神不宁，连文件也念不下去了。（『人民』88-10-93）

思いもかけずこんなことに気持ちを乱されて、落ち着かなくなった崔主任は、文書を読み続けることもできなくなった。（同上）

- (57) 可是最近一个月，他竟被一事情弄糊涂了。（『人民』90-10-96）

だがこの1カ月、あることで頭がおかしくなってしまった。（同上）

- (58) 被这悠扬的歌声所感染，我们不由自主放慢了脚步。（新华社2001年7月份新闻报道）

美しい歌声に感動させられて、私たちは思わずゆっくり歩き始めた。（筆者訳）

- (59) 丹尼尔·珀尔将继续激励着他的家人和数百万被他这一生和他的死所深深打动的朋友和陌生人。（新华社2002年8月份新闻报道）

これからもダンニエル・パールは彼の家族を支え続けていく。そして、彼の生涯と彼の死によって心を動かされた友人や見知らぬ人たちも励まされていくでしょう。（筆者訳）

仕手がコト類であれば、特定の場合が多いと言える。例えば、例（59）の“他凌厉

的攻势”は人称代名詞があるので特定であり、例(60)の“这个意外情况”は指示代名詞があるのでやはり特定である。例(61)の仕手“一件事情”は特定ではないが、受身のむすびつき“被一事情弄糊涂了”の中では、具体的なことを指しているのだからやはり特定である。例(62)の“这悠扬的歌声”も指示代名詞によって具体化されているので、特定と看做す。例(63)における“他的一生和他的死”も指示代名詞があるので特定化されている。

上記の分析によれば、“被字句”の「コト類の仕手」は、仕手である動作者は特定の場合と汎称の場合とがあるが、いずれにしる文レベルでは特定化されていると言える。

#### 2.2.2.4 カラダ類

仕手がカラダ類になっている例文を見てみよう。

(60) 我听到乘务员那尖细的声音：“慢慢慢慢。”我被一只手拉倒了车上，我把竹竿揽到怀中，伸手摸索到了头顶上的吊栏。（『人民』96-12-85）

バスが着いて、車掌が「気をつけて」と甲高い声で叫ぶと、誰かが僕をバスの中に引っ張りあげてくれた。そして中に入った僕が、杖を抱いてふらふらしながら釣り側を探していると、優しい女の子の音がした。（同上）

(61) 走到一条小巷子口上，他忽然被一只手抓住，扯进巷口。（老舍：火葬）

路地の出口についたとき、彼はふっと誰かに捕まれて、また路地に引き戻された。（筆者訳）

(62) 克隆抗体分子太大，不能钻进癌细胞，或者进入肿瘤不够深；有些会被身体的免疫系统当成外来的东西而遭到排斥。（人民日报 1993年3月份）

クローンの分子が大きすぎるので、がん細胞に潜り込むことができない、あるいは深くまで入れない。さらに体の免疫システムによって異物として排除される場合もあるようだ。（筆者訳）

(63) 最惨的要算进食时，是香是臭是酸是馊是腥是烂，都靠鼻子好歹先探个“安全系数”如何，而真正清享美酒佳肴的福份，却尽被嘴巴抢去。（《读者》2012年8月份）

一番損しているのは食べるときだ。香ばしいか臭いか、生臭いか腐っているか、全部鼻を使って先に嗅いで判断する。そして、おいしい酒や食べ物を楽しむのはほかでもなく、口だった。（筆者訳）

(64) 她想肯定是她捏得太紧了，她想松开手，但被他的手抓住，松不开。（艾米：山楂树之恋）

きつく握りすぎているかなと思っては彼女が手を放そうとしたが、彼に手をきつく掴まれているので放せない。（筆者訳）

調査によると、カラダ類を用いる文は有情物類とコト類に比べると少ない。例(64)

の“一只手”はカラダ名詞で汎称であるが、受身のむすびつき“被一只手拉倒了车上”の中では具体性があるのでやはり特定である。例(65)も同様である。例(66)における“身体的免疫系统”は汎称であるが、受身のむすびつき“被当成外来的东西而遭到排挤”の中では、特定化できるのでやはり特定である。例(67)も同じ分析ができる。例(68)における“他的手”は人称代名詞があるので、特定といえる。

上記の分析によれば、“被字句”の「カラダ類の仕手」は、仕手である動作者は特定の場合と汎称の場合とがあるが、いずれにしる文レベルでは特定化されていると言える。

#### 2.2.2.5 組織類

仕手が組織類になっている例文を見てみよう。

(65) 儿子真是争气，以全校高考总分第三名的好成绩被上海财经大学录取。(『人民』97-10-75)

県の高考(全国大学統一入試)で三番になって上海財経大学に合格するなんて、息子のやつ、やってくれたもんだ。(『人民』97-10-74)

(66) 临近毕业时，本想留在伦敦搞舞台剧的莫文蔚被香港星光公司发掘，并且很快出版了自己的第一张粤语唱片《KAREN 莫文蔚》。(鲁豫有约 红伶)

卒業寸前、ロンドンに残ってミュージカルをやろうと思うカレン・モクは香港星光会社にスカウトされ、まもなく初めてのアルバム『KAREN 莫文蔚』が出版された。(筆者訳)

(67) 父亲医科大学毕业，是西医，据说医术很高。后来因为“作风问题”被医院开除。(『人民』94-10-97)

父親は医大出の西洋医で、医術もりっぱと言われていたが、「女性問題」で病院を首になった。(『人民』94-10-96)

(68) 前一段日子，刘斌被一家文化公司请去做了美术总监。(卞庆奎：中国北漂艺人生存实录)

この間、劉斌はある会社に雇われて美術部門のディレクターとして働き始めた。(筆者訳)

例(69)の“上海财经大学”は固有名詞なので特定である。例(70)も同様である。例(71)の“医院”は単語レベルでは汎称であるが、受身のむすびつき“被医院开除”の中では具体性があるのでやはり特定である。例(72)の“一家文化公司”も単語レベルで不特定であるが、文レベルでは特定化されていると言える。そして、上掲の例(56)も組織類に入れるべきだと筆者は思う。

#### 2.2.2.6 まとめ

本稿では、上掲の分析に基づき、“被字句”の受け手主語の分類を再考した。北京大学中国語言学研究センターと北京日本学研究センターによってそれぞれ開発された

コーパスを利用し、収集した 300 例以上を分析し、“被字句”の基本構造である「名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+その他」における仕手(名詞 2 の位置に立つもの)を有情物名詞(高橋ではヒト類名詞と呼ばれる)、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞と組織名詞の 5 種類に当てはまったので、高橋弥守彦(2012A)で挙げられている受け手主語の分類に一部修正の必要があるが、基本的に合理的であることも検証できた。

### 2.2.3 仕手の省略

陆庆和(2006:445)では、“被字句”の仕手が省略できるか否かについて以下のような 4 項目に分け詳細に分析し、例文を挙げている。

- A. 話し手の強調したいことが、動作の結果であって動作の仕手でない場合は省略できる。この類の仕手は言語環境や常識により、仕手を補うことができる。

(69) 看到他写的这张纸条,我觉得像被刺了一刀。(省略了“他”)

彼の書いたメモを見ると、ナイフで刺されたようである。(高橋弥守彦訳)

(70) 病人很快被送进了手术室。(省略了“护士”等)

病人はすぐ手術室に運ばれた。(高橋弥守彦訳)

- B. “被字句”の仕手が、その後の分文の施事主語に近接していれば省略する。

(71) 课本被放在一边,他们俩热心地谈起足球来。

\*课本被他们放在一边,他们俩热心地谈起足球来。

テキストをわきに置き、彼ら二人は熱心にサッカーについて話している。

(高橋弥守彦訳)

(72) 书房门被推开了,妈妈走了进来。

\*书房门被妈妈推开了,妈妈走了进来。

勉強部屋のドアが開くと、母が入ってきた。(高橋弥守彦訳)

- C. “被”の後の仕手が新情報の場合、省略すると意味が分からなくなるので、省略できない。

(73) 我们爬上了山顶,从那儿可以一直看到山下,一瞬间,大家都被山下的景色所吸引住了。

私たちが山頂に登ると、そこから麓まで見ることができ、一瞬、みんなは麓の景色に見とれた。(高橋弥守彦訳)

(74) 夜半,他被枪声惊醒,坐起身来。

夜半に彼は銃声にはっと目が覚めて、ベッドに起き上がった。(高橋弥守彦訳)

- D. 主述文と受身表現が対比されている場合、受身表現の仕手は省略できない。

(75) 他的一些朋友们,都拥有一个幸福的家庭,而他,从一落地起就被命运判定

了要生活在一个没有父亲的单亲家庭中。

彼の友人はみな幸せな家庭を持っているが、彼は生まれるとすぐ母子家庭に生活しなければならない運命にあった。(高橋弥守彦訳)

(76) 这件事情与其说是他自己愿意做的, 不如说是被父母逼着做的。

このことは彼が望んだというより、両親に迫られ、やむなくやったと言うべきであろう。(高橋弥守彦訳)

一方、“被/让/叫”のうち、徐晶凝(2008:152)において、仕手は“被”の後であれば省略できるが、“让/叫”の後であれば省略できない、と説明している。しかし、一般的には仕手が誰か分からない場合などは“人”で代用でき、それがさらに進むと、仕手が省略されると考えたほうが一般的<sup>7)</sup>であろう。

(77) 自行车被人偷走了。<sup>8)</sup> (徐晶凝 2008:152)

自転車は盗まれてしまった。(筆者訳)

(78) 杯子被打碎了。<sup>9)</sup> (徐晶凝 2008:155)

コップは割られてしまった。(筆者訳)

(79) 车叫他弄坏了, 不能开了。(徐晶凝 2008:154)

車は彼に壊され、運転できなくなった。(筆者訳)

(80) 孩子让老师批评哭了。(徐晶凝 2008:154)

子供が先生にお説教されて泣いた。(筆者訳)

(81) 车被弄坏了, 不能开了。(徐晶凝 2008:154)

車は壊され、運転できなくなった。(筆者訳)

(82) 孩子被批评哭了。(徐晶凝 2008:154)

子供は叱られて泣いた。(筆者訳)

“被字句”の中の受身のむすびつき「“被/给”+仕手+動詞+その他」の中の仕手は、結果性や結論性を表す「動詞+その他」の動作主なので、一般には省略されないが、多くの研究者が述べているように仕手が誰であるのか分からない場合や言いたくない場合などは、汎称“人、人们、别人、什么、什么东西”などで代用する場合もありうる。それがさらに進むと省略される場合もありうる。しかし、例(83)における仕手“他”と例(84)における仕手“老师”のいずれも省略することができない。例(85)と例(86)を見れば、“让/叫”の代わりに“被”を用いると、それぞれの仕手を省略できるようになることが分かる。

7) 高橋弥守彦(2012)に段階別に省略されていく過程が描かれている。

8) 徐晶凝(2008:152)では、仕手が誰であるのか説明できない場合などは、“如果不确定S是谁, 或者没有必要说清楚, 可以用‘人’来代替S。”と説明している。

9) 徐晶凝(2008:153)では、仕手が誰であるのか説明できない場合などは、省略されることあるとして、“也可以直接把‘被’放在动词的前面。”と説明している。



“被/给”の多くは受身文に用いられ、“叫/让”は使役文によく用いられることが関係しているようである。ここで以下の例文を見てみよう。

(83) 我知道你的意思了，日后儿子的头发假如像你一样，（我）让他也戴上这项帽子。（苏童：灰呢绒鸭舌帽）

あなたの意味が分かったよ。この後、もし息子があなたのように髪の毛が薄くなったら、彼にこの帽子をかぶらせてやるわ。（筆者訳）

(87) ’ \*我知道你的意思了，日后儿子的头发假如像你一样，（我）让也戴上这项帽子。

あなたの意味が分かったよ。この後、もし息子があなたのように髪の毛が薄くなると、彼にこの帽子をかぶせてやるわ。（筆者訳）

(84) 有时候你叫他过来，结果他就跑开了，我进他们房间还要敲门。（鲁豫有约男角）

彼にここに来てもらおうと思うと、彼はどっかに行っちゃうんだ。それだけじゃなくて、私が彼の部屋に入るときは必ずノックしなくちゃいけないんだ。（筆者訳）

(88) ’ \*有时候你叫过来，结果他就跑开了，我进他们房间还要敲门。

彼にここに来てもらおうと思うとき、逆にどこかに行っちゃうんだ。それだけじゃなくて、私が彼の部屋に入るときは必ずノックしなくちゃいけないよ。（筆者訳）

使役文である例(87)における“让”の後に付く“他”は“我”の使役対象であり、“也带上这项帽子”という分文の主語でもある。そのため、“他”を省略することは許されない。よって例(87) ’ は成立できないと思われる。例(88)も同じ分析ができる。

つまり、受身の視点から見ると、“让/叫”の後につく名詞は動詞を表す動作を行う主体なので、省略されると文意が不明になる恐れがある。受身のむすびつきの中では受身を表す文法機能を持っているが、構文構造には“让/叫”の後に付く名詞を省略できないという使役文の構造特徴がまだ残っているのではないだろうか。

#### 2.2.4 おわりに

本稿は現代中国語の受動表現に関する先行研究に踏まえ、“被字句”の仕手の分類について再考した。主に高橋弥守彦(2012A)の説を参考とし、“被字句”における仕手を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞(心理名詞、属性名詞、行為名詞)と組織名詞という5種類に分けている。さらに、“被字句”の仕手の省略についても検討した。以下のとおりである。

一、話し手の強調したいことが、動作の結果であって動作の仕手でない場合は省略できる。

二、“被字句”の仕手が、その後の分文の施事主語に近接していれば省略するほうが普通である。

三、“被”の後の仕手が新しい情報の場合、省略すると意味が分からなくなるので、省略できない。

四、主述文と受動表現が対比されている場合、受動表現の仕手は省略できない。

## 言語資料

『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社（1988～1996）

『中国語学講読シリーズ』①～⑥ 北京外文出版社（1991）

CCL 语料庫 北京大学中国语言学研究中心（2009）

《绝对隐私》《两根奇特的手杖》《快读反应实录》《在细雨中呼喊》《流泪的淮河》  
《倚天屠龙记》《火葬》《中国北漂艺人生存实录》《灰呢绒鸭舌帽》《鲁豫有约》《新  
华社新闻报道》2001 年至 2004 年《人民日报》1993 年至 2000 年

## 参考文献

王力（1943-1944） 《中国现代语法》商务印书馆

吕叔湘（1944） 《中国文法要略》商务印书馆

吕叔湘、朱德熙（1951） 《语法修辞讲话》商务印书馆

张志公（1953） 《汉语语法常识》 中国青年出版社

梁东汉（1960） 〈现代汉语的被动式〉 《内蒙古大学学报》第 2 期

朱德熙（1982） 《语法讲义》商务印书馆

刘叔新（1987） 〈现代汉语被动句的范围和类别问题〉 《句型和动词》语文出版社

王灿龙（1998） 〈无标记被动句和动词的类〉 《汉语学习》第 5 期

杨国文（2002） 〈汉语“被”字式在不同种类的过程中的使用情况考察〉 《当代语言学 1》中国社会科学院研究所

张兴旺（2003） 《现代汉语标志型被动句研究》 内蒙古师范大学硕士论文

郑媛（2005） 《汉语被动式的界定及其语法化》 山东大学硕士学位论文

赵星（2005） 《“被”字句主语考察》 中国人民大学硕士学位论文

鲁宝元（2005） 〈日汉被动表达的对比与汉语“被动句”的教学〉 《日汉语言对比研究  
与对日汉语教学》华语教学出版社

陆庆和（2006） 《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社

王黎今（2008） 〈日语「受身文」和汉语“被”字句的语义对比研究〉 《日语学习与  
研究》2008 年第 6 期

李临定（2011） 《现代汉语句型》商务印书馆

成倩（2011） 〈现代汉语被字句浅析〉 《大众文艺：学术版》2011 年第 10 期

鈴木康之（2011） 『現代日本語の連語論』日本語文法研究会

高橋弥守彦（2011） 「文法体系から見る中国語教育」 『中日対照言語学会ヴォイ  
ス特集号』

高橋弥守彦（2012A） 「“被字句”の受け手と仕手について」 中日対照言語学会月  
例会 2012. 4. 21

- 高橋弥守彦（2012B） 「中国語受身表現の体系について」 大東文化大学中国言語文化専攻主催国際シンポジウムでの研究発表 2012. 7. 22
- 高橋弥守彦（2013） 「日中両言語における受身のむすびつき」 国際連語論学会設立大会での研究発表 2013. 2. 9
- 邱林燕（2013） 「中国語と日本語との受身の考察（1）-中国語の場合-」 国際広告メディア・観光学ジャーナル No. 16
- 路浩宇（2013） 〈关于使役兼表被动句的考察：兼论“让”字被动句与“被”字句的区别〉 『ことばの科学』 NO. 26
- 乔莎莎（2015） 《有标记被动句的分析》 黑龙江大学硕士学位论文

### 第三章 日本語の受身文の構文的特徴

村木新次郎（1991：89）によれば、ある行為や動作を表すとき、その文をめくり、どの関与者（主体か客体か）が文のどの成分として表されるかに関わる範疇がヴォイスと言われる。ヴォイスは、日本語学では「態」、国語学では「相」、言語学では「立場」などと呼ばれているが、テンス・アスペクト・ムードと並んで動詞述語に関する範疇の一つである。現代日本語においては、受身文・使役文・自他動詞文・可能文・自発文・授受文・「てある」文などはヴォイスのカテゴリーと関係を持っていると思われる。

ヴォイスの特徴は二つの側面に現れる。その二つの側面とは文のどの関与者を中心に出来事を表すかに関わる意味的な側面、それと何に視点を置いて表すに関わる統語的な側面である。動作を行う側（いわゆる仕手）を主語の位置に据えるか、動作を受ける側（いわゆる受け手）を主語の位置に据えるかによって、一つの出来事を能動文と受身文という二つの文に表現できる。能動文と受身文の対立関係はヴォイスの特徴を示す代表的な表現形式であると言われている。

高橋弥守彦（2011）によると、日本語の伝統的なヴォイスは、ひとつの出来事を異なる角度から述べる動詞の表現形式である。これは人間関係に基づいて焦点を誰に当てるかにより決まる。動作の仕手と受け手がいる場合、動作の仕手に焦点を当てるか、受け手に焦点を当てるかにより、動詞の形態が異なってくる。互換関係にある動詞の表現形式は一般にヴォイスと言われ、前者には能動態、後者には受動態を用いる。動作の仕手に働きかける第3者がある場合は、誰に焦点を当てるかにより、使役態と使役受動態とに分かれる。鈴木康之（2000）は「なぐる」を例にとって、ヴォイスには能動態、受動態、使役態、使役受動態<sup>1)</sup>があると述べ、以下のような文を挙げている。高橋はそれに括弧付きで注釈を加えている。

- (1) 次郎が三郎をなぐった。（能動態、有情物主体の意志性）
- (2) 三郎は次郎になぐられた。（受動態、有情物主体の非意志性）

1) 鈴木康之（2000）では、ヴォイスを能動態「太郎が次郎をなぐった」、受動態「次郎が太郎になぐられた」、使役態「三郎が太郎に次郎をなぐらせた」、使役受動態「太郎が三郎に次郎をなぐらせられた。」（p. 45）の4類に分けている。高橋太郎ほか（1997）では、ヴォイスを能動態「かぜが やねを ふきとばした」、受動態「やねが かぜに ふきとばされた」、使役態「花子が 太郎にもつを はこぼせる」、相互態「太郎と 次郎が なぐりあった」、再帰態「太郎が まどから くびを だした。」（p. 68～69）の5類に分けている。中島悦子（2007）では、ヴォイスについて「日本語のヴォイスの範疇には、自・他の対応・受身・使役・可能・自発等の諸形態を含めて考える。これらの諸形態は形態的・構文的・意味的に相関関係にあり、各々を別々に論じることは不可能だからである。」（p. 10）と述べている。他動詞と受動態と自動詞の3者の関係については、「a 他動詞能動文：太郎が計算の誤りを見つけた。b 受身文：計算の誤りが（太郎によって）見つけられた。c 自動詞能動文：計算の誤りが見つかった。」を対応する例文として挙げ、「受身文は一種の自動詞文ということになり、他動詞のみで、対応ある動詞を欠く場合は、受身文が自動詞文の代替をすることが多い。」（p. 10）と述べている。

(3) 太郎が次郎に三郎をなぐらせた。(使役態、第3者主体の意志性)

(4) 次郎は太郎に三郎をなぐらせられた。(使役受動態、有情物主体の非意志性)

例(1)の「なぐった」は運動の主体「次郎が」に焦点を当てた能動態であり、例(2)の「なぐられた」は能動文の客体「三郎を」に焦点を当てた「三郎は」を主体とした受動態である。能動態と受動態は「次郎」と「三郎」の二人の運動の関係であるが、例(3)の使役態「なぐらせた」になると、次郎に働きかける第3者「太郎が」を文中に主体として登場させる。これにより、三者の関係が明らかになる。例(4)の使役受動態「なぐらせられた」も三人の関係だが、この文は運動の主体「次郎は」に焦点が当てられ、太郎によって三郎をなぐらせられる次郎のやむを得ない気持ちが表現される。これが運動の主体を何にするかによって異なってくる一般的なヴォイスとしての動詞の表現形式である。鈴木康之(2000)によれば、能動態は「なぐる」「すてる」などは基本となる動詞だが、受動態・使役態・使役受動態は、いずれも基本動詞から作る派生動詞である。

本章では受身文の特徴について言語学の観点に基づいて考察を行う。本稿の目的である受身文の全貌を明らかにするには、受身文の構文的特徴について検討する必要がある。

## 第1節 日本語の受身文の受け手主語について

### 3.1.1 はじめに

本稿はヴォイスの体系に注目し、鈴木康之(1977)・魯宝元(2005)・中島悦子(2007)・高橋弥守彦(2011)などを参考にし、まず日本語のヴォイスの範疇には自他の対応・受身・使役・自発などの諸形態を含めて考え、自他の対応は「語彙的ヴォイス」と分類し、能動・受身・使役・自発などは「文法的ヴォイス」と分類する。さらに、文法上のヴォイス的対応があるか否かによって、以下の[表3-1]のように日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」という二種類に大きく分けている。

[表3-1] 文法上の受身文の分類

①直接対象の受身文の構文構造：

「～が/は～に～される」

(5) そして二、三日たって、敗戦論者達は残りの連中に**ぶん殴られた**。(小松左京：時の顔)

后来过了两三天，战败论者们被剩下的那帮人狠狠打了一顿。(筆者訳)

②相手の受身文の構文構造：

式1：「ダレカ は ダレカに/から～を～される」

(6) 利家は秀吉から羽柴筑前守の称号を**与えられ**、左近衛権少将に任ずる旨を告げられた。(津本陽：風流武辺)

利家被秀吉授予了羽柴筑前守的称号，并被告知，他将被任命为左近卫权少将。(筆者訳)

式2：「ダレカはダレカに～される」

(7) 店に入ってすぐに、若林は**見覚えのある主婦らしき女性に話しかけられた**。(日明恩：鎮火報)

一进店里，若林就被一个有些眼熟看似主妇的女性搭讪了。(筆者訳)

③持ち主の受身文の構文構造：

式1：「ダレカ は ダレカに～を～される」

(8) 先日、刑事さんがいらっしゃった後におもいだしたことですけれど、私、(誰かに)下着を**盗まれた**んです。(森村誠一：小説宝石)

前几天，刑警先生来过之后我想起一件事，那就是我的内衣被偷了。(筆者訳)

式2：「ダレカはダレカに/から～に～される」

(9) 正直、ここ数ヶ月、(私は)夫から**体に触れられた**ことは一度もなかった。(村咲数馬：若妻めぐり)

说实话，这几个月老公一次都没有碰过我。（筆者訳）

#### ④第三者の受身文

第三者の受身文とは、能動文に現れていない迷惑を受ける第三者を主語とする文であり、「迷惑の受身文」とも言われている。第三者の受身文は上述した三種類の文法的受身文と異なって、能動文と完全に対応できない場合が多い。

(10) 七年前、娘に死なれたら、私からことばが消えてしまった。（津島佑子：私）

七年前死了女儿之后，我就不再说话了。（筆者訳）

(11) 勝手に建物を建てられたんじゃ困りますね。（小澤英明：都市の記憶）

附近要是随随便便盖起了房子，我们会很为难吧。（筆者訳）

第二章で、中国語の“被字句”における受け手主語について考察した結果、有情物類・モノ類・コト類・カラダ類・空間類の五種類の名詞はすべて“被字句”の主語になれることを明らかにした。この節では、日本語の受身文の受け手主語についても検討する。中国語の“被字句”に対照するため、本稿では日本語の「文法上の受身文」を取り上げて考察する。

### 3.1.2 日本語の受身文における受け手主語

#### 3.1.2.1 有情物類

主述文を中心とする受身表現を含む一つの体系は、誰に焦点を当てるかにより、どの構文構造にするかが決定されると言われている。そのため、主語は人に関係する表現がよく当たる。日本語の受身文の主語も同様であろう。奥田靖雄（1983：248）では、「対象への働きかけを受けて変化する人間」について「生理的な状態変化、移動、心理的な状態変化、社会的な状態変化」の四つのタイプがあると述べている。要するに、受身文の主語は人間を中心とする有情物であり、その有情物主語は動作主が行った動作の影響を受け、何らかの状態変化が起った主体である。奥田靖雄（1983）による有情物の状態変化とは、空間的な状態変化、心理的な状態変化、社会的な状態変化などを意味する。

受身文の受け手は受身義を表す「受身のむすびつき」の対象なので、有情物である場合が多い。以下の例文を見てみよう。

(12) それを耳にして皆に言い回っていた星田は、綾乃に刺された。（高田崇史：六歌仙の暗号）

得知此事并公之于众的星田被綾乃捅了一刀。（筆者訳）

(13) これに対して、大学側には学問をする気のない復員兵士に押しかけられると、大学の程度が低くなるのではないかと恐れる声があり、ハーバードのコナント学長もこの案に反対したが、それは杞憂であったようである。（中



山茂：その歴史と現状)

对此，有一部分人担心如果学校招收了很多没有心思做学问的退役士兵的话，会不会拉低学校的整体水平呢？哈佛大学的科南特校长也极力反对此案，但是后来发现这不过是杞人忧天。（筆者訳）

- (14) 俺が拘置所に三週間もぶち込まれて、殺しの裏を何か知ってるんじゃないかって疑われたっていう、そのことだ。（ジョン・フランクリン・バーデイン：死を呼ぶペルシュロン）

我在拘留所被拘禁了三天，据说警方怀疑我知道凶杀案的內情。（筆者訳）

- (15) トロイアの男たちはギリシャ軍に殺された。（保坂和志：アウトブリード）  
特洛伊的男人们被希腊军队杀死了。（筆者訳）

- (16) 昆虫の寄生者は、その多くがアオムシコマユバチのように結果的に寄主を喰い殺してしまうので、捕食寄生者（擬寄生者ともいう）と呼ばれている。（石井実：昆虫ウォッチング）

昆虫的寄生者很多都像茧蜂一样，最终会将寄生的宿主吞噬殆尽，因此它们也被称为捕食寄生者（也有称作拟寄生者）的。（筆者訳）

- (17) 強制することがないうゑに、犬が自主的及び偶然にした行動を褒められるので、ゲーム感覚でトレーニングの時間が楽しいものになる。（古銭正彦・渡辺格：あきらめないで！必ず直せる愛犬のトラブル）

只要不是强制的，狗自发或者偶然的行为如果得到主人的奖励的话，会让其产生在玩游戏的感觉，它们会很享受训练的时间。（筆者訳）

例（12）の受け手主語である「星田」は人物、例（13）の「大学側」は団体を指し、例（14）の「俺」は人称代名詞、例（15）の「トロイアの男たち」は特定化されているヒト名詞なので、いずれも有情物名詞が仕手の位置に立つ受身文である。さらに、例（16）における「昆虫の寄生者」は昆虫であり、例（17）の「犬」は動物なので、同じく有情物類に属している。筆者が収集した300例の実例の中では、この種の受け手主語が最も多く見られる。

### 3.1.2.2 モノ類

例（18）から例（22）までは、受け手がモノ類になっている例文である。

- (18) 豆腐を買ってコウジ蓋に載せ、十文字に縄をかけて担いでいくと、「ホウ北山（桜井市北山）のトウフ買い、エッサラ コッサラ」と小学生が笑い声で囃し立てたというくらい大量の豆腐が小正月には食べられた。（富岡典子：日本の食のルーツをたずねて）

买来豆腐装进篮子，用绳子扎好挑着出门，小学生一边笑一边学小贩吆喝着：“哟！来买北山（桜井市北山）的豆腐咯！哎哟嘿哟！”就这样，小正月里豆腐的消费量是很大的。（高橋弥守彦訳）

- (19) はやく『古今和歌六帖』にみえ、浮島は屏風（障子）絵にしばしば描かれ、歌題として愛されていた。（滝川ちかこ：奥の細道とみちのく文学の旅）  
早一些的话可以在《古今和歌六帖》中看到，浮岛经常被画在屏风（拉门）上面，作为歌名备受喜爱。（筆者訳）
- (20) それから須古、諫早とともに一刻（二時間）あまり待ったところで、引き戸が叩かれた。（三宅登茂子：猫股秘聞密偵美作新九郎）  
然后，和须古、谏早在一起等了个两小时左右的时候有人敲了敲拉门。（筆者訳）
- (21) そういう蘭子の最も幸福な時期に『女紋』は書かれた。（足立巻一：立川文庫の英雄たち）  
在兰子最幸福的这段时光里《女纹》这本书写完了。（筆者訳）
- (22) 不要な資料が詰まっている書架は利用者に嫌われる。（山本昭和：図書館資料論）

堆满了没用资料的书架，使用者都很嫌弃。（筆者訳）

例（18）における「豆腐」、例（20）の「引き戸」、例（22）の「書架」はいずれも普通のモノ名詞であり、例（21）の「女紋」は本の名前なのでモノを指している。例（19）における「浮島」は場所であるが、「歌題として愛されていた」という受身のむすびつきの中では、モノ扱いされているので、モノ類に入れる。

### 3.1.2.3 コト類

受け手がコト類になっている例文は以下のとおりである。受け手はいずれも「受身のむすびつき」の対象となっている。

- (23) 日本の公共機関の発達・大衆運動の活発化・経済改革は、しばしば一括して“近代化”と呼ばれている。（マーシャル・アンガー（著）・奥村睦世訳：占領下日本の表記改革 忘れられたローマ字による教育実験）  
日本公共机关的发展、大众运动的活跃化、经济改革有时被统一称作“近代化”。（筆者訳）
- (24) しかし、古代では、「白色」は「赤」とともにもっとも敬愛されていた。（中江克己：色の名前で読み解く日本史）  
但是，在古代“白色”和“红色”一样都是最受人们喜爱的颜色。（筆者訳）
- (25) しかしその個性が嫌われたり、好かれたりすることがあります。（キャンシー天野：恋愛革命運命の人に出会う 25 日間）  
但是那样的性格有人讨厌也有人喜欢。（筆者訳）
- (26) したがって、その場の雰囲気を悪くするような発言は、たとえ内容が正しくとも嫌われる。（堺屋太一：日本とは何か）  
因此，破坏气氛的发言即使说得再正确都让大家讨厌。（筆者訳）

(27) この空位が埋められたのは十余年後の大正末年である。(寺内大吉：慟哭の明治仏教)

这个空缺一直到十多年后的大正末年时才被填上。(筆者訳)

受け手がコト類である場合、上掲の例文のようなコト、例えば「日本の公共機関の発達・大衆運動の活発化・経済改革」「白色」「その個性」「その場の雰囲気が悪くするような発言」「この空位」などが挙げられ、いずれも構文構造の中で特定化されている。例(23)の「日本の公共機関の発達・大衆運動の活発化・経済改革」は単語レベルで具体的な社会現象を指しているの、特定である。例(25)の「その個性」、例(26)の「その場の雰囲気を悪くするような発言」、例(27)の「この空位」はいずれも連語レベルで具体的なコトを指しているの、特定である。筆者の調査によれば、受け手主語がコト類名詞である受身文は、歴史記録や科学文章においてよく見かけるが、日常会話で使われることあはめったに見られない。

#### 3.1.2.4 カラダ類

受け手がカラダ類になっている例文を見てみよう。以下に挙げる例文は、受け手がいずれも「受身のむすびつき」の対象となっている。

(28) ただ殺されただけでなく、美しいヨーロッパ娘の遺体が犯されて食べられた。(五島勉：ノストラダムスの大予言)

不仅仅是遭到杀害，那个美丽的欧洲姑娘的遗体甚至被凶手侵犯并食用。(筆者訳)

(29) そのとき、いきなり強い力で肩を叩かれた。(松田美智子：秘密の地下室)  
就在那时，突然不知被谁用力拍了肩膀。(筆者訳)

(30) ぼくの指は魔法の指だって、人から褒められるんだ。(ヴァレリー・パーヴ：まぼろしのプリンス)

我的手指是魔法的手指，大家都这么夸。(筆者訳)

(31) 後ろの壁に黒い染みが広がっていた。老人の腰の下にも。背から肝を刺された。(時海結以：業多姫)

后面的墙壁上有一大片黑色的污渍，老人的腰下也有，他被人从背后刺穿了肝脏。(筆者訳)

(32) いきなり肩をポンと叩かれた。(睦月影郎：美尻先生愛のデュエット)

突然，肩膀被碰地拍了一下。(筆者訳)

受け手がカラダ類である場合、上掲の例文中のようなカラダ名詞が挙げられ、いずれも構文構造の中で特定化されている。例えば、例(28)の「遺体」、例(29)と例(32)の「肩」、例(31)の「肝」はいずれも単語レベルでは特定ではないが、文レベルでは具体的なカラダ部分を指しているの、特定である。例(30)の「ぼくの指」は連語レベルで具体的なヒトのカラダを指しているの、特定である。

そして、前述した「有情物類」「モノ類」「コト類」と比べれば分かるように、受け手主語がカラダ類名詞である場合、基本は持ち主受身文である。「有情物類」「モノ類」「コト類」が受け手主語になる場合、直接対象の受身文か相手の受身文のどちらかである文が多い。

### 3.1.2.5 空間類

受け手が空間類になっている例文を見てみよう。受け手はいずれも「受身のむすびつき」の対象となっている。空間であっても出来事を実行する人が、それに手を加えることができるので、空間であっても受身のむすびつきの対象となれる。

- (33) 一年生の教室は中央校舎の一教室と、西昇降口を入れて西側の三教室が当てられていた。(中原玲子：渾河のほとりで)

中央校舎的一教室和从西边电梯口进去西面的三教室被当作一年级的教室了。(筆者訳)

- (34) 外敵によって日本の国土を一度も汚されたことがないというのが日本の誇りであった。(入交雅道：日本の目覚め)

一次都没有被外敌侵占过日本的领土，是日本曾经的骄傲。(筆者訳)

- (35) 海は毒され、山は崩され、平地はコンクリートで固められた。(磯辺文雄：不良中年ノート)

海洋被污染，山丘被推平，平底被水泥所固定住。(筆者訳)

受け手が空間類である場合、上掲の例文中のような空間名詞が挙げられ、いずれも構文構造の中では特定である。例えば、例(35)の「海」「山」「平地」はいずれも単語レベルでは汎称であるが、文レベルでは具体的な空間を指しているので特定である。例(33)における「中央校舎の一教室と、西昇降口を入れて西側の三教室」と例(34)の「日本の国土」は修飾語で具体化され、特定の空間を指している所以で特定である。

筆者の調査によると、空間類の受け手主語はきわめて少なく、筆者の集めてきた実例の中にはこの3例だけである。そして、次の例文を見てみよう。

- (36) この山は春秋時代に泰山とあらためて呼ばれたが、それまでは、岱の文字をあてられた。(岡本好古：覇者への道)

这座山在春秋时代被正式命名为泰山，在那之前仅被称为岱。(筆者訳)

例(36)の「この山」は例(35)の「山」と比べると、異なる意味を示している。例(36)における「この山」は「泰山と呼ばれた」ものである。それに対し、例(35)における「山」は人類に「崩された」空間である。したがって、同じ空間名詞であっても同じ分類に入れられるとは限らない。

### 3.1.3 受け手の省略

受身文の受け手は、「受身のむすびつき」で表す出来事の結果や結論などを表す対象なので、特定でなければならず、一般的には省略されない。しかし、“被字句”を用いている言語環境の中では省略されることもある。以下の例文を検討しよう。

(37) ある男の子は学校の成績も優秀だった。早熟で作文などを巧みに書いて、担任の先生から褒められた。(桐生操：本当は恐ろしいグリム童話)

那个男孩在学校的成績很优秀。有些早熟，写作又很有技巧，经常被班主任夸奖。(筆者訳)

(38) 1680 円人形を妹として妄想するオタクの数馬はある日、12 歳の少女と出会う。その女王様のような性格に魅了されるが、彼女の友だちが殺害されて、数馬の日常が急変する。(浅野智哉：Weeklyぴあ)

把那个 1680 日元的手办幻想成是自己妹妹的宅男数马，某天遇到了一个 12 岁的女孩。数马被她的女王气质所吸引，但是在少女的朋友被杀之后，他的生活发生了翻天覆地的变化。(筆者訳)

(39) A はその日、ショッピングセンターに向かう途中、車の中で夫と口論になりました。生理前でイライラしていたのです。その後、ショッピングセンターで万引きをし、逮捕されました。(池下育子：PMS(月経前症候群)と女性のからだ)

那天，A 在前往购物中心的途中在车内和丈夫发生口角。因为她经前烦躁。后来她在购物中心内偷东西，被捕了。(筆者訳)

例(37)から例(39)まではいずれも受け手が省略されている。受身文の中では、受け手が省略されている場合は多々見られる。この点は中国語の“被字句”とかなり異なっている。例(37)で省略された受け手主語「ある男の子」、例(38)で省略された「数馬」、例(39)で省略された「A」のいずれも構文構造の中では特定化されているが、その前あるいはその後に類義や同義を表す語句があり、重複する必要のない言語環境により省略されると言えるであろう。

### 3.1.4 受け手主語の特徴の再考

#### 3.1.4.1 有情物類の場合

直接対象の受身文と相手の受身文において、有情物類の名詞が主語の位置に立つのは一般的である。受身文の主語が有情物である場合に利害とは関係のない主語の状態変化を表すこともあるが、主語の心理的な状態変化、つまり主語の利害関係を表す受身文のほうが多いのである。その際、動作を行った動作主も人間である場合が多い。例えば、例(40)から例(46)までである。

(40) その通り、おれはぶおとこで、だからみんなに嫌われる。(庄野潤三：サヴォイ・オペラ)

没错，因为我长得丑，所以被大家所嫌弃。（筆者訳）

- (41) 子供のころ、彼には、なんども叱られたことがある。（富野由悠季：オーラバトラー戦記）

他小时候经常被训斥。（筆者訳）

- (42) そのことで、公明党はずいぶんと嫌われた。（大下英治：郵政大乱！小泉魔術）

因为此事，公明党非常遭人厌恶。（筆者訳）

- (43) 私はこの二人にだけ愛されていた。（坂口安吾：ちくま日本文学全集）

我只被这两个人深爱着。（筆者訳）

- (44) 栗山も、アメリカのミュージカル映画に魅了され、ダンサーをめざした一人であった。（池田大作：新・人間革命）

栗山因为被美国的音乐剧电影所吸引，于是立志成为一名舞者。（筆者訳）

- (45) 日本人はクジラの大きさとその姿の美しさに魅了されてきたのではないかと思われる。（小松正之：クジラその歴史と科学）

日本人应该是被鲸鱼的巨大和美丽的身姿所吸引的吧。（筆者訳）

- (46) アメリカもフランスも、大統領は国民の投票によって直接選ばれる。（テッド・スタンガー（著）・藤野優哉（訳）：在仏アメリカ人が見た、不思議の国フ・ラ・ン・ス）

不管是美国还是法国，总统都是由民众投票直接选举出来的。（筆者訳）

上掲の例文において受身文の主語は動作主が行なった動作の影響を受けて、心理的な状態変化を起こしたことを表している。そして、中国語の訳文から見ると、例（42）は“被”を使わずに、受身動詞“遭”をもって受身義を表現している。例（46）は中性的な受身文なので、“由”を用いて受身義を表現している。ほかの例文はいずれも“被”を使って表現できる。これは、中国語の“被字句”は被害や恩恵の意味に用いる場合が多いためではないであろうか。例（40）と例（41）は典型的な日本語の受身文と見られ、ほぼ中国語の“被字句”に対応することができる。

許明子（2002：96-99）によると、受身文の主語が有情物である場合、述語動詞の語彙的な意味が受身文の意味に深く関わっている。特に、述語動詞が人間の心理活動を表す動詞である場合、主語は知覚活動の主題であったり、感情や判断を下す主体であったりする。その際、主語の心理的活動は主体にとって被害である場合もあるが、恩恵の意味を表す場合もある。日本語では人間同士の心理的な活動をめぐって感情的な変化を表現する際に、上掲の例文のような主語が有情物であり、被害の意味や恩恵の意味など主語の心理的活動を表す受身文が実際の日常生活では最も多く使われている。

一方、持ち主の受身文と第三者の受身文の主語も基本的に有情物類である。持ち主の受身文では、仕手の動作を直接に受けるのは持ち物のほうなので、持ち主である受

け手主語はその出来事によって間接的に影響を受ける。また、第三者の受身文の受け手主語は、文が表す出来事に直接に関与していないが、その出来事によって何らかの影響を間接的に受け、被害や迷惑などの感情を生み出す「第三者」である。したがって、主語は出来事に対して感情を持つことができる有情物でなければならない。

(47) 友子の母は、夫に早く死にわかれて、四、五軒の借家をたよりに友子を育ててきたのだが、戦争で家をみな焼かれた。(森鷗外：舞姫)

友子的妈妈年轻时守寡，靠着出租四、五间房子养活友子，结果战争一打，把她家房子全烧没了。(筆者訳)

(48) 康子だって小さいとき、おしりをたたかかれていたのよ。おしっこばかりして。(有吉佐和子：青い壺)

康子小时候也被打过屁股啊。净尿裤子了。(筆者訳)

(49) はずかしいわよ、大きな声で騒がれちゃ。火事と焚火といっしょくたにするなんて、迷惑だわよねえ。(幸田文：流れる)

多害臊啊，被你们这么大声地吓死了。把火灾和烤火搞混了真是让人头疼。(筆者訳)

(50) そりゃアそうだ。たが、むやみにやけをおこされると、さしずめ、迷惑をすることもある…。(林芙美子：めし)

说的也是。但是，随随便便自暴自弃的话，最终会倒霉的哦。(筆者訳)

(51) 洪ちゃん、夜と昼とをまちがえられては、婆ちゃんが閉口じゃ。(井上靖：しろばんば)

小洪，你早晚颠倒，婆婆我可吃不消啊。(筆者訳)

以上の例文では、例(47)と例(48)は持ち主の受身文であり、例(49)から例(51)までは第三者の受身文である。例(47)の「友子の母」は、「焼かれた」という動作を受けるわけではなく、「戦争で家をみな焼かれた」ことによって、経済収入を失い、貧困に落ち入り、困っているという意味合いが含まれている。例(48)の「康子」は全身ではなく、「おしり」という体の一部だけが「たたかかれていた」ので、被害を受ける意味合いが生じる。例(49)では、省略された主語である「私」は「(あなたたちが)大きな声で騒ぐ」ことによって、間接的に迷惑を受けている。例(50)も例(49)と同じく、省略された主語である「私」は、「(あなたが)やけをおこす」ことによって、迷惑を受ける。最後に、例(51)における「婆ちゃん」は、「洪ちゃんが夜と昼を間違える」ことによって、閉口するという意味合いが読み取れる。

#### 3.1.4.2 有情物類以外の場合

受け手主語が有情物類以外の名詞である場合を見てみよう。ここでは、主に主語がコト類名詞である受身文を取り上げる。

(52) 街角の電信柱に、初めて新聞が張り出された。久しぶりになつかしいたよ

りを聞くように、私も大勢の頭の後から新聞をのぞきこんだ。(林芙美子：放浪記)

街角的电线杆上第一次张贴了报纸。就像很久没有听到这么令人怀念的消息了一样，我也站在众人后面张望这张报纸。(筆者訳)

- (53) そこまで行くと田辺の家は近かった。表の竹がこいの垣が結い換えられ、下町風の入り口の門まですっかり新しく成ったのが先ず捨吉の心を引いた。(井上靖：おろしや国酔夢譚)

走到那边就离田边家很近了。门外的竹篱笆已经重新扎过了，崭新的篱笆一直延伸到平民化的入口，吸引了舍吉的心。(筆者訳)

- (54) この敷石の大理石も、赤、緑、黒の斑点のある白大理石で、一步一步足を運ぶのが危く感じられる程滑らかに磨き立てられてあった。(井上靖：おろしや国酔夢譚)

不管是铺路的大理石，还是带着红绿黑斑点的白大理石，都打磨得特别光滑，在上面一步一步走都感觉很危险。(筆者訳)

- (55) 郷里許りでなく、江戸回向院にも卵塔が立てられ、卵塔場の裏の墓地には船型の石を使って墓が作られていたのである。(井上靖：おろしや国酔夢譚)

不仅是乡里，江戸回向院里也有人搭了鸡蛋塔，鸡蛋塔后面的墓地里用船型石头做的墓碑。(筆者訳)

- (56) スペツィアの丘陵では“チンクェ・テッレ”という銘柄の魚介類向けの上品な白ワインも造られている。(村田悦子：家族で巡る北イタリア 2000 キロの旅)

斯培西亚的丘陵盛产一种名为“五渔村”的适合搭配海鲜一起享用的上等白葡萄酒。(筆者訳)

以上の例文から見ると、中国語の訳文と比較すれば、日本語ではすべて「レル・ラレル」で受身義を表現されるのに対し、中国語では“被字句”を用いた文は一つもない。モノ類主語の受身文は、中国語の「無標の受動表現」と対応しやすいことが分かるであろう。これは、このような日本語の受身文において、動作を行った仕手が背景化され、動作を受けた受け手が前に出て主題化される傾向にある。よって、例(52)から例(56)までのような受身文では仕手が背景化され、省略されることが多いと言える。

### 3.1.5 おわりに

本稿は実例調査に基づき、日本語の受身文の受け手主語の分類について検討した。主に中国語の“被字句”における受け手主語の分類方法を参考とし、受身文の受け手



主語を有情物類名詞、モノ類名詞、コト類名詞、カラダ類名詞と空間類名詞という 5 種類に分けている。

次に、受身文の受け手主語の特徴について再考した。本稿では、受け手主語の特徴を次の 3 点にまとめている。

①受け手主語が有情物類である受身文は、主語の利害関係、いわゆる被害や受益を表すのは一般的である。

②受け手主語がモノ類、コト類などである受身文では、動作を行った仕手が背景化され、動作を受けた受け手が前に出て主題化される傾向にある。

③持ち主の受身文と第三者の受身文の主語は基本的に有情物類であるという 3 点にまとめている。

## 第2節 日本語の受身文における仕手について

### 3.2.1 はじめに

本稿では、日本語の受身表現として最もよく用いられている「文法上の受身表現」、つまり助動詞「レル・ラレル」を用いて受身義を表す受身文の構文構造を4種類<sup>2)</sup>に分けている。そして、この4種類の受身文における動作主、いわゆる仕手について考察する。まずは以下の中国語の例文を見てみよう。

(57) 可是日子一天天过去，贞贞对我并不完全坦白的事，竟被我发觉了。（葉菁 2003：270）

しかし日がたつにつれて、私に対して貞貞が完全には正直でなかったことが分かってきた。（葉菁訳）

(58) 他的花招被我识破了。（葉菁 2003：270）

彼のペテンは私に見破られた。（葉菁訳）

(59) 敌人一个排被我们消灭了。（葉菁 2003：270）

敵の一連隊は我々によって殲滅させられた。（葉菁訳）

(60) 我前线炮兵、海军、空军狠狠打击了国民党军的补给行动，金门的补给已基本被我封锁，金门守军陷入困境，防御工事被我摧毁大半，粮食、弹药的供应也发生危机，其处境可说是“弹尽粮绝”。（1993年人民日报12月份）

我々の前線砲兵、海軍、空軍が国民党軍の補給行動に打撃を与えた。金門の補給はすでに我々に塞がれ、金門の守備軍は苦境に陥り、防衛工事はほとんど我々に破壊され、食糧も弾薬も供給不能になった「絶体絶命」の状態でもがいていると言えるだろう。（筆者訳）<sup>3)</sup>

(61) 这样，他这封长达四页的信便被我小心翼翼地珍藏起来。（1993年人民日报4月份）

こうして、彼の四ページの長い手紙は私によって大事に保管された。（筆者訳）

(62) 一次，他到我们学校来收钱，被我追到他学校门口把他打了。（2000年人民日报11月份）

2) 本稿では、文法上のヴォイス的対応の有無によって日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」に分けている。さらに、対応する能動文の構造によって「文法上の受身文」を下位分類している。①直接対象の受身文の構文構造は「～が～に～される」である。②相手の受身文の構文構造は式1：「ダレカはダレカに/から～を～される」であり、式2：「ダレカはダレカに～される」である。③持ち主の受身文の構文構造は式1：「ダレカはダレカに～を～される」であり、式2：「ダレカはダレカに/から～に～される」である。④第三者の受身文とは、能動文に現れていない迷惑を受ける第三者を主語とする文であり、「迷惑の受身文」とも言われている。第三者の受身文は上述した三種類の文法的受身文と異なって、能動文と完全に対応できない場合が多い。

3) 本節では一部不自然な日本語訳が見られるが、原文の意味を忠実するために、“被我”は「私によって」あるいは「私に」と訳した。

ある日、彼は我が校へ金を強請り取りにやってきた。彼は私に自分の学校の正門まで追い出された。そして、そこで彼を殴った。（筆者訳）

例（57）から例（62）までの文は、“我”か“我们”が仕手の位置に立つ“被字句”である。このような“被字句”は中国人の日常生活でかなり頻繁に使われているようである。筆者が北京大学が開発したコーパスを利用し調査した結果、仕手が“我”である“被字句”は2000例以上も収集した。それに対し、日本語において「私」や「我々」など当方を表す名詞が仕手として用いられる受身文は非常に少ないことが分かった。筆者の調べた結果、翻訳文ではなく、実際の言語資料では「私に気付かれた」「私に見破れた」「我々に殲滅させられた」という受身文は一つも出てこなかった。なぜ日本語では第一人称が仕手になるのは難しいのであろうか。本稿ではその理由についても検討する。

### 3.2.2 受身文における仕手の分類

受身文の仕手は文中に明示される場合と文中には仕手が現れずに背景化される場合がある。許明子（2003：36）によると、受身文の文中に仕手が明示される場合、その仕手は「に、から、によって、で、～のために、～のおかげで、～を通じて、の間に」などの仕手マーカー（本稿では受動マーカーと言う）によって標記されるのが普通である。この中で「に、から、によって」が代表的な仕手マーカーであると言われている。そして、主述文を中心とする受身表現を含む一つの体系は、誰に焦点を当てるかにより、どの構文構造にするかが決められると言われている。よって、日本語では人間同士の心理的な活動をめぐって感情的な変化を表現する場合、受け手と仕手がともに有情物である受身文が実際の日常生活の中で最もよく用いられている。

#### 3.2.2.1 有情物類

受身文の受け手は受身義を表す「受身のむすびつき」の対象なので、有情物である場合が多い。仕手が有情物類になっている例文を見てみよう。

(63) 祐太は三人の男に囲まれて殴られた。（嵐山光三郎：夕焼け学校）

祐太被三个男人围起来打了一顿。（筆者訳）

(64) ああ、わがいとし子は、お前に殺された。（中田祝夫：新編日本古典文学全集）

啊啊，我心爱的孩子就是被你给杀死的。（筆者訳）

(65) その挙げ句に新兵衛が何者かに寝込みを襲われて殺された。（岡本綺堂：半七捕物帳）

结果，新兵卫不知被什么人趁他睡觉的时候给杀死了。（高橋弥守彦訳）

(66) そもそもあなたの管理がずさんだったから、極秘の書類を誰かに読まれた

んじゃない。(マーガレット・ウェイ(著)・槇由子(訳):きみという名の魔法)

本来就是你的管理太马虎了,所以那份机密文件才会泄露。(筆者訳)

- (67) あのとときは、ロジャーに愛されていると信じていた。(バーバラ・ハネイ(著)/木内重子(訳):南十字星に抱かれて)

那时候,我坚信自己是被罗杰爱着的。(筆者訳)

- (68) 人一倍文章にきびしい永井君に褒められたのである。(丹羽文雄:友を偲ぶ)

我居然被那个对文章比一般人都要严厉的永井君给夸奖了啊。(筆者訳)

- (69) 平成十三年の夏、戦略企画本部長の泉谷直木は、社長の福地茂雄に呼ばれた。(大下英治:アサヒビール大逆転男たちの決断)

平成十三年的夏天,战略企划本部长泉谷直木被社长福地茂雄给叫了过去。

(筆者訳)

- (70) 夕ぐれの薄暗い時間に“カナカナカナ”と聞こえる甲高い声で鳴くこのセミは、多くの人に知られている。(大串龍一:日本の昆虫)

在傍晚那昏暗的时间里高亢地叫着“知了知了知了”的蝉,为许多人所熟知。

(筆者訳)

例(63)の仕手「三人の男」は数量詞によって特定化されている。例(64)の仕手「お前」は人称代名詞なので、特定と言える。例(65)の「何者か」と例(66)の「誰か」は単語レベルで不特定であるが、受身のむすびつきの中で具体化されて特定と看做せる。例(67)の「ロジャー」、例(68)の「人一倍文章にきびしい永井君」と例(69)の「社長の福地茂雄」はいずれも具体的な人物なので特定である。例(70)は例(69)と同様に、連語レベルで特定化されている。さらに、例(63)から例(66)までは仕手の行為によって受け手が被害を受けるという意味合いが含まれるが、例(67)と例(68)は受益の意味が表現されている。例(69)と例(70)は中性的な受身文であり、被害も受益も表していない。

以上の例文における仕手はいずれも人間であるが、動物や昆虫なども受身文の仕手となれる。例えば、例(71)から例(73)までである。

- (71) 「あなた、赤ちゃんのころ、一人で寝ていて、野良猫に噛まれたの。大きなライオンみたいな猫に。本当よ、私、ずーっと忘れていたけど」(阿刀田高:風の組曲)

“你还是小宝宝的时候,一个人睡觉,被一只野猫给咬了,那猫特别大,像狮子似的。真的我差点都忘光了。”(筆者訳)

- (72) 蛇に噛まれたときに、おじさんが護っていたのは、絶対に同じ扉だ。(J・K・ローリング(著)/松岡佑子(訳):ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団)

被蛇咬住的时候，叔叔一定是在保护同一扇门。（筆者訳）

- (73) スズメバチの巣があったために、クマに壊された家の壁軒先に仕掛けられた捕獲用の檻。（栗栖浩司：熊と向き合う）

因为有个马蜂窝，所以在被熊破坏了房子的墙壁上装了捕获用的栏子。（筆者訳）

上記の分析によれば、受身文の「有情物類の仕手」は単語レベルで特定化されている場合と、連語レベルで特定化されている場合とがある。また、例(71)の仕手「野良猫」のように汎称である場合もあると言える。仕手は受身文の中では、文レベルでは特定化されている場合が多いが、汎称を用いる例文もあるので、特定でも汎称でも文が成立すると言える。

### 3.2.2.2 モノ類

仕手がモノ類になっている例文を見てみよう。

- (74) 放射能によって地球の環境が汚染され破壊されたら一体どういうことになるのか。（田中館哲彦：核のない21世紀を）

如果地球的环境被放射能污染破坏了的话，会变成什么样子呢？（筆者訳）

- (75) これも珍しいことだと思うが、この会社は工場をジェーン台風で徹底的に破壊されたことがある。（堤康次郎：私の履歴書）

虽然这也是件新鲜事，但是这个公司的工厂曾经被名叫简的台风彻底地摧毁过。（筆者訳）

- (76) 件名を見た途端、まだ乾ききっていない髪が風に吹かれたような寒気が襲い、頭皮を凍えさせた。（吉村夜：マンイーター）

刚看了件名，就有一股寒意袭来，仿佛还没干的头发被风吹过一样，头皮都冻麻了。（筆者訳）

- (77) たまたま見た、アメリカのミュージカル映画に魅了されたのである。（池田大作：新・人間革命）

被偶然看到的美国音乐剧电影所吸引。（筆者訳）

- (78) おびただしい神々が続々と生まれて、変身し、ゆたかになり、崇められ、活気あふれる巨大な芸術作品によって讃美された。（岡田朝雄：地獄は克服できる）

大量的神明相继诞生、变身、丰富、被崇拜、被充满活力的巨大艺术作品所赞美。（筆者訳）

- (79) 秋風秋雨、人を愁殺す激情に生き無残に死ぬ紹興では毎日雨に降られた。

（加藤千洋：北京&東京）

秋风秋雨，在愁煞人的激情中诞生又在无情中死亡的绍兴，这里天天风雨不停。（高橋弥守彦訳）

モノ類の仕手はいずれも「受身のむすびつき」のなかでは動作主なので、ヒト類ほどたくさんあるわけではない。モノ類の多くは特定であるが、不定の場合もある。例えば、例(74)の仕手「放射能」と例(76)の「風」は単語レベルで不定であるが、受身のむすびつきの中では具体化されて特定できる。例(77)と例(78)は連語の中に修飾語を用いているので、特定である。例(75)における「ジェーン台風」は固有名詞なので、特定である。例(79)は例(76)と同様である。さらに、筆者の調査によると、仕手がモノ類である受身文において直接対象の受身文と相手の受身文はかなり多い。例(79)のような第三者の受身文はまれに見られる。

上記の分析によれば、日本語の受身文の「モノ類の仕手」は単語レベルでは汎称であるが、連語レベルでは具体性があるので特定化されている。

### 3.2.2.3 コト類

仕手がコト類になっている例文を見てみよう。

(80) 恐ろしく勇猛なカーレーヤたちは、あなたの威光によって殺された。(上村勝彦：マハーバーラタ)

恐怕勇猛的卡蕾亚他们就是被你的威势杀死的。(筆者訳)

(81) そして突然の悲鳴にその放心を破られた。(宮地裕：国語3)

然后，那份安心被突如其来的惨叫打破了。(筆者訳)

(82) 沖縄玉砕の報せを受けた校庭は涙に包まれた。(三上謙一郎：沖縄学童集団疎開)

得知冲绳沦陷的消息，整个校园被眼泪包裹了。(筆者訳)

(83) もっとも、この笑顔に男も惹かれたのだが。(山下勝利：いまさら、初恋) 男人最容易被这种笑容所吸引。(筆者訳)

(84) 宮津で「旅の宿大須田」を営む、漁師三代目大須田知行さんと女将のかず子さん夫妻の笑顔に元気づけられる。(川嶋康男：北の漁師宿)

在宫津经营着“旅之宿大须田”的第三代渔民大须田知行和他的妻子和子，看到这夫妻两人的笑容大家都会受到鼓舞。(筆者訳)

(85) キリスト教では、自力では不可能な罪のつぐないが、キリストのあがないの死によってはたされたと説く。(平木幸二郎：倫理)

在基督教中有这样的说法，凭借一己之力无法救赎的罪孽，可以借由耶稣的赎罪之死得到救赎。(筆者訳)

(86) だが、それ以上突っこんだ質問をする機会は、なんとなく見覚えのある女性の出現によって断たれた。(Richmond Emma.(著)/井上京子(訳)：仕組まれた再会)

但是，追问的机会被一名看起来有点眼熟的女性的出现给打断了。(筆者訳)

仕手がコト類であれば、特定の場合が多いと言える。例えば、例(80)の「あなた

の威光」は人称代名詞があるので特定と看做し、例(83)の「この笑顔」は指示代名詞があるのでやはり特定である。例(82)の仕手「涙」は特定ではないが、受身のむすびつき「庭は涙に包まれた」の中では、具体的なことを指しているなのでやはり特定と判断できる。例(81)の「突然の悲鳴」は修飾語によって具体化されているので、特定と看做す。例(85)における「キリストのあがないの死」と例(86)の「なんとなく見覚えのある女性の出現」も修飾語があるので特定化されている。

上記の分析によれば、受身文の「コト類の仕手」は、仕手である動作者が特定の場  
合と汎称の場合とがあるが、いずれにしる文レベルでは特定化されている。

#### 3.2.2.4 カラダ類

仕手がカラダ類になっている例文は非常に少ないので、筆者の調べた限りは以下の  
4例のみである。

- (87) 意味は、人間の手によってつくられた仏ではなく、法によっておすがたを  
あらわされた真実の仏、ということである。(桐山靖雄：家運をよくする  
正しい先祖のまつり方)

意思就是，这不是那种由人的手创造的佛，而是由法而显灵的真正的佛。(筆  
者訳)

- (88) 今回にかぎりこれは、このような肉体に支配された女性が精神の高貴さに  
慰めを求めようとする、あの滑稽なあこがれではなかった。(ローベルト・  
ムージル(著)・加藤二郎(訳)：ムージル著作集)

只有这次不是滑稽的盲目憧憬，被这样的肉体所支配的女性在追求精神高贵  
的安慰。(筆者訳)

- (89) 四郎の足の指は人並より長く、爪先が熊手のように曲がっていて、この足  
が相手のくるぶしや膝の横などに当たると、まるで蛸の足に吸いつかれた  
ように離れない。(加来耕三：日本格闘技おもしろ史話)

四郎的脚趾比一般人的长，指甲像熊掌一样弯曲着，这样的脚一旦勾上对方  
的脚踝或者膝盖边上的话，那个人就会像被章鱼的触角吸住一样无法离开。  
(筆者訳)

- (90) あれよと見る間に、徐々に、それからするすると、十一人の人間を乗せた  
自動車が、一掴みの髪の毛によって曳き出されたのである。(宇野千代：  
自伝的恋愛論)

正看着呢，慢慢地开始越来越快，乘坐着是一个人的汽车居然被一撮头发给  
拽出来了。(筆者訳)

カラダ類が仕手になることはめったにないので、カラダ類名詞を用いる文は有情物  
類とコト類に比べればかなり少ない。例(87)における「人間の手」は受身のむすび  
つき「人間の手によってつくられた」では特定化されている。例(88)の「このよう

な肉体」は指示代名詞があるので、特定である。例(89)の「足」は「蛸」の体であるが、特定されているカラダ部分としてカラダ類に入れられる。例(90)の「一掴みの髪の毛」は数量詞によって具体化されているので特定である。

上記の分析によれば、受身文の「カラダ類の仕手」は、仕手である動作者は特定の場合と汎称の場合とがあるが、いずれにしる文レベルでは特定化されていると言える。

### 3.2.2.5 組織類

仕手が組織類になっている例文を見てみよう。

- (91) 王国維はハードン夫人のためにその甲骨文のコレクションの「考釈」をおこない、その関係から倉聖明智大学に招かれたようである。(陳舜臣：中国の歴史)

王国维要为哈顿夫人进行甲骨文收集的“考释”，因此受到了仓圣明智大学的邀请。(筆者訳)

- (92) あなたは会社に裏切られたようなものなのよ。(亀山早苗：夫が職を失ったとき)

你就是被公司抛弃的人一样。(筆者訳)

- (93) その報告は一九七二年のIMF年次総会の一月前に発表され、アメリカを除くすべての国によって実際に役立つ協議事項として歓迎された。(スーザン・ストレンジ(著)・小林襄治(訳)：カジノ資本主義)

那份报告在一九七二年的IMF年次总会的一个月前发表，作为有实际效力的协议事项受到了除美国以外所有国家的欢迎。(筆者訳)

- (94) 私は、その旅で、決定的にこの国に魅了された。(上野みどり：家族留学顛末記)

我在那次旅行中被这个国家深深地吸引了。(筆者訳)

例(91)の「倉聖明智大学」は固有名詞なので特定である。例(92)における「会社」は単語レベルでは汎称であるが、受身のむすびつき「会社に裏切られた」の中では具体化されるので特定と看做す。例(93)の「アメリカを除くすべての国」は連語レベルで特定である。例(94)の「この国」は指示代名詞を用いているので特定化されている。

### 3.2.3 仕手の省略

文中に仕手が現れない例文を見てみよう。

- (95) 次に引用するのが清河八郎暗殺についての〔石坂周造・談話〕である。四月の十三日に清川(河)は赤羽橋で暗殺された。(平尾道雄：維新暗殺秘録)



接下来引用的是关于清河八郎暗杀事件的《石坂周造谈话》。四月十三日清河在赤羽桥遭遇暗杀。（筆者訳）

- (96) 「そうだ。このワトスンという男は殺された。そして、ボンフィグリアという名のイタリア人も。」（ディック・ロクティ(著)石田善彦(訳)：笑う犬)

“对了。这个叫瓦特孙的男人被杀了，然后一个叫彭菲格利亚的意大利人也被杀了。”（筆者訳）

- (97) 不意に美帆は肩を叩かれた。（六道慧：蝶々夫人の事件簿）  
不经意间美帆被人拍了一下肩膀。（筆者訳）

- (98) ところが、人口減少が進行すると、交通不便なところは嫌われる。（大野秀敏：建築学がわかる）

但是，伴随着人口减少，交通不方便的地区会受到人们的嫌弃。（筆者訳）

- (99) 冒頭の詩、文章のすべては敗戦後書かれた。（小田実：私と天皇・人びとのなかの天皇）

开头的诗和文章全都是在战败后写的。（筆者訳）

例（95）から例（99）まではいずれも仕手が省略されている。日本語の受身文において、仕手が省略されている場合は多々見られる。この点は中国語の“被字句”と類似している。例（95）と例（96）では、話し手が仕手である「犯人」の正体を知らないで、仕手を省略している。例（97）も同様に、受け手である「美帆」は「肩を叩かれた」とき、誰が叩いたのか分からないので、文中に仕手が現れない。例（98）では、一般的な現象を述べているので、わざわざ仕手を明記する必要がない。例（99）の仕手は、その前に類義や同義を表す語句があり、重複する必要のない言語環境により省略されている。

#### 3.2.4 受身文における仕手の特徴

杉村博文（1991：156）では、不如意な遭遇を言う受身文の動作主が発話者自身である場合、それは発話者が自らの行為によって不愉快・不利益を被ったことを積極的に伝えたものと理解できると述べている。さらに、杉村博文（1998：158-162）では第一人称が動作主になる“被字句”の意味的特徴に関して、次の三つのパターンを挙げている。

①说话人将自己客体化，即说话人用旁人的眼光叙述自己。つまり、話し手が自らを客体化する。話し手が第三者の立場にいて自分のことを客観的に陳述することである。例えば、“她的头发，当年是那么乌亮丰厚，被我戏称为‘漆黑的羽毛’……”（彼女

の髪は当時あんなにも黒くてつやがあり、ふざけて私に「真っ黒な羽」と呼ばれていた……) である。

②進行自我批評, 表达一种“自己种的苦果自己尝”的意思。つまり、自己批判を行い、「自業自得」のような意味が表される。例えば、“本来, 我有很多机会可以学些本事, 替他分忧, 可是, 多少时间, 被我白白糟蹋过去!” (もとも、私には何かを身に付け、彼の苦勞を軽くする機会がたくさんあった。しかし、どれほどの時間が私によってむざむざと無駄にされたことだろう!) である。

③進行“自我赞赏”, 表达很不容易做成的事情“居然”或“终于”由自己做成了的意思。つまり、「自己を称揚」し、難しい目的を「意外に」あるいは「やっと」自分によって達成する意味が表される。例えば、“这个秘密终于被我发现了。” (この秘密はつい私によって突き止められた。) である。

さらに、路浩宇 (2015 : 74) によれば、中国語の受身文では発話者は自分の感情を文頭に立つ受動者 (本稿では受け手と呼ぶ) 主語に託し、受動者の立場に立って発話するのに対して、自己批判の受身文においては発話者が出来事の動作主として作用し、客語の位置にあると同時に影響・被害を受ける存在でもある。このように発話者が動作主と同一であり動作主寄りの視点で発話することは日本語の受身文ではあまり見られない現象なので、対応する日本語訳の不自然さにもそのことが表れる。

以上の先行研究に基づき、本稿では中日対照の視点から、日本語の受身文における仕手の特徴について検討する。言語資料を調べた結果、受身文にも第一人称が仕手として用いられる場合があることが分かった。以下の例文を見てみよう。

(100) だが私には、お前の殺意が感じられた。(貫井徳郎：別冊文藝春秋)

但是你的杀意已被我察觉。/但是我已察觉到你的杀意。(筆者訳)

(101) のみならず、筆力も心なしか衰退に向かったように少なくとも私には感じられた。(佐々木力：エンゲルス論)

不仅如此, 他的笔力已力不从心, 至少被我发觉了。/不仅如此, 至少我发觉他的笔力已经力不从心了。(筆者訳)

例 (100) と例 (101) のような文では、助動詞「レル・ラレル」が用いられても、感覚動詞なので受身義を表すか自発義を表すか、実は非常に曖昧である。中国語に訳すと、“被字句”より主述文のほうがより自然であろう。続いて、以下の例文を見てみよう。

(102) この人間像は以下の章で私によって主張される人間像にきわめて近い。

(クラウス・マイヤー・アーピッヒ著・山内廣隆訳：自然との和解への道)

这个人物形象和下面一章中由我提出的人物形象非常接近。(筆者訳)

(103) 私は、私によって生かされています。(森博嗣：四季)

我是靠自己养活的。(筆者訳)

(104) 私から仕返しされそうなのね。(佐藤むつみ：弁護士む～みんの解決！  
女の一大事)

确实可能会被我报复吧。(筆者訳)

(105) アサコは私から手渡された航空会社の封筒のなかを、まずのぞいた。(津  
島佑子：かがやく水の時代)

朝子先看了一眼从我手中接过的航空公司的信封。(筆者訳)

(106) 太郎は、自分にやらせてもらえないうえに、私から、バカ呼ばわりされ  
ています。これでは、ますます、自信をなくしてしまうだろうなあと思い  
ました。(川上真理・森山由美：自分の気持ち子どもの気持ちがわかるセ  
ルフカウンセリング)

我不仅不让太郎自己做，还总是骂他是笨蛋。就这样，让他的自信越来越匮  
乏了。(筆者訳)

上掲の例文を見れば分かるように、日本語の受身文において、仕手が第一人称、つ  
まり「私」である場合、文中に用いられる受動マーカ―は「ニヨッテ」「カラ」であ  
る場合が圧倒的に多い。筆者の調査によると、「ニ」を使う例文は一例もなかった。  
また、日本語では第一人称が仕手である受身文には、中国語の第一人称仕手の“被字  
句”に見られる「自己批判」や「自己称揚」という複雑な意味合いが含まれる例文も  
ある。例えば、例(103)では「私」のおかげで自分が生かされているという「自己称  
揚」の気持ちと、例(106)における「私」のせいで「太郎」がますます自信をなくし  
てしまうという「自己批判」の気持ちは、文中に含まれている。しかし、ほかの例文  
を見れば、ほとんどは客観的な陳述に過ぎないことが分かるであろう。“飯终于被我  
煮好了。”(ご飯はやっと私によって炊き上げられた。)や“那个坏蛋被我打了。”  
(あの悪人は私に殴られた。)など、ごく普通の中国語の“被字句”は、日本語の受  
身文と完全に対応できないという現象がある。

その理由について、高見健一(2011)では日本語の発話者の視点規則が指摘されて  
いる。それは話し手や書き手は一般に、自分にとって親しみのある人や物寄りに自分  
の視点を置き、それを文の主語または主題にして該当事象を述べるというのである。  
さらに、魯宝元(2005)では、“汉语被动句的施动者不局限于有生命的事物，可以是  
任何人或事物，包括第一人称。而日语被动句的施动者是有生命的人或动物，无生命的  
事物一般不能作为施动者，第一人称一般不能作施动者。日语使用被动句的动因是：说  
话人的主观感受或与说话人心理距离接近者的感受，施事者为第一人称不能强调这方面  
的感受。”と述べている。

要するに、中国語の“被字句”において、ほとんどの有情物や無情物が主語の位置  
に立つことができる。「私」のような第一人称でも仕手になれる。それに対し、日本  
語の受身文における仕手は基本的に有情物であり、無情物は仕手になるのはめったに

ない。それ以外に、第一人称が仕手の位置に据えることが難しい。なぜかという、日本語の受身文の語用機能から見れば、話し手は自分と親しい人の立場に寄る傾向があるので、影響を受けた人の立場に立って出来事を陳述する際、能動文より受身文を選びやすいというわけである。言葉を切り替えると、受身文を取るほとんどの場合、話し手の中で受け手主語に対する心の距離が近い一方、仕手に対して心の距離が離れているというのである。そこで、第一人称が仕手になる場合、いわゆる話し手が動作の仕手になる場合、話し手の視点は自然に自分自身の立場に当ててのではないであろうか。よって、日本語において仕手が第一人称である受身文はなかなか見られない。

### 3.2.5 おわりに

本稿は実例調査に基づき、受身文の仕手の分類を試みた。結果として、日本語の受身文における仕手を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞と組織名詞の5種類に分けている。さらに、中日対照の角度から受身文の仕手が第一人称である場合についても検討した。日本語の仕手が第一人称である受身文は、中国語ほどたくさん存在していないうえ、中国語のように「自己批判」や「自己称揚」などの意味合いが含まれる場合が少ない。

## 言語資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言 (2012)

『時の顔』『小説宝石』『若妻めぐり』『津川警部の挑戦』『風流武辺』『鎮火報』  
『私』『都市の記憶』『たった一度のありがとう』『札幌殺人事件』『六歌仙の暗号』  
『死を呼ぶペルシュロン』『アウトブリード』『日本の食のルーツをたずねて』  
『奥の細道とみちのく文学の旅』『猫股秘聞密偵美作新九郎』『立川文庫の英雄たち』  
『日本とは何か』『慟哭の明治仏教』『色の名前で読み解く日本史』『ノストラダムスの大予言』  
『秘密の地下室』『まぼろしのプリンス』『業多姫』『渾河のほとりで』  
『覇者への道』『夕焼け学校』『半七捕物帳』『きみという名の魔法』  
『南十字星に抱かれて』『友を偲ぶ』

青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/> (1999)

『舞姫』『青い壺』『流れる』『めし』『しろばんば』『放浪記』『おろしや国酔夢譚』

## 参考文献

- 寺村秀夫 (1978) 『日本語の文法 (上)』 国立国語研究所
- 奥田靖雄 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- 杉村博文 (1991) 「遭遇と達成」 『日本語と中国語の対照研究論文集』 くろしお出版
- 杉村博文 (1998) <論現代汉语表“难事实现”的被动句> 《世界汉语教学》第四期
- 鈴木康之 (2000) 『日本語学の常識』 海山文化研究所
- 許明子 (2002) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』 ひつじ書房
- 魯宝元 (2005) <日汉被动表达的对比与汉语“被动句”的教学> 《日汉语言对比研究》 华语教学出版社
- 中島悦子 (2007) 『中日対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』 おうふう
- 林青樺 (2009) 『現代日本語におけるヴォイスの所相—事象のあり方と関わりから—』 くろしお出版
- 高見健一 (2011) 『受身と使役』 開拓社
- 高橋弥守彦 (2011) 「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語について」 『中日対照言語学会ヴォイス特集号』
- 高橋弥守彦 (2012) 「“被字句”の受け手と仕手について」 中日対照言語学会月例会 2012. 4. 21

- 路浩宇（2015） 「第一人称が動作主になる中国語の受身文：自己批判の意味を表す  
場合」『多元文化 15』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編
- 高橋弥守彦（2013） 「日中両言語における受身のむすびつき」 国際連語論学会設  
立大会での研究発表 2013. 2. 9

# 第四章 動詞から見る両言語の受身文の 成立条件に関して

## 第1節 中国語の“被字句”に用いられる動詞について

### 4.1.1 はじめに

王还（1983：47）では、中国語の“被字句”を使用できるか否かを定めるのは動詞であり、“被字句”に用いられる動詞は全て処置性を持たなければならないと述べている。要するに、“被字句”の動詞は必ずある人や物の意識的、あるいは無意識的な動作を表し、ほかの人や物に何らかの影響を与えるのである。そして、马真（1997：115）は中国語の“被字句”における動詞は及物動詞でなければならないうえに、その前後には常にほかの成分が必要となる（二音節動詞の場合を除く）と主張している。ここで以下の“被字句”を見てみよう。

(1) 被她这么一哭，我不知道怎么办才好了。（楊凱榮 1992：333）

彼女に泣かれてしまうと、どうしたらいいか分からなくなった。（筆者訳）

(2) 被他这么一坐，我什么都看不见了。（同上）

彼にこうして座られたら、何も見えなくなったんだ。（筆者訳）

(3) “对，可别叫他们跑了！”（茅盾：白门柳）

「そうだ！彼らに逃げられちゃいけないよ！」（筆者訳）

例(1)の“哭”、例(2)の“坐”、例(3)の“跑”はいずれも不及物動詞（日本語の自動詞と対応できる）であり、一般的な観点から“被字句”を作れない動詞と看做すべきであるが、上掲の例文はいずれも中国人の日常生活で使われている。どんな場合に不及物動詞が“被字句”の動詞として使われるのか。全ての及物動詞が“被字句”を作れるであろうか。本稿では“被字句”に用いられる動詞をめぐって“被字句”の成立条件を再考する。

### 4.1.2 中国語の動詞の分類

本稿では、まず現代中国語の動詞の分類について簡潔に検討する。筆者は主に刘月华・潘文娛（2004：152-156）の説を参考とし、考察を行う。

#### 4.1.2.1 動詞の後に客語が付けられるか否かによる分類

まず、文法上から見れば、動詞の後に客語が付けられるかどうかによって“及物动词”と“不及物动词”という二種類に分かれている。“及物动词”は主に受け手客語

(動作を受けるもの)・対象客語・結果客語という三類の客語を付ける動詞を指している。“不及物動詞”は客語と受け手客語を付けられない動詞を指している。客語を付けられない動詞としては、“着想”“相反”“斡旋”“问世”“通航”“休息”“指正”“毕业”“送行”などが挙げられる。多くの“不及物動詞”は受け手客語以外の客語を付けられる。

一つ、動作や行為の行き先を表す客語(例えば、“上(山)”“去上(海)”“出(国)”“下(乡)”“出(院)”など)。

二つ、動作や行為を実行するための道具を表す客語(例えば、“睡床”“过筛子”など)。

三つ、存在・出現・消失を表す客語(例えば、“来了两个人”“蹲着一个石狮子”“死了一头牛”など)。

さらに、“见面”“握手”“结婚”などのような緊密な動賓構造をとる離合動詞の後に、客語を付けることができない。例えば、“见面他”“握手你”“结婚她”などの表現は存在していない。

#### 4.1.2.2 意味上の分類

次に、意味上から見れば、中国語の動詞は動態動詞(動作や行為を表す動詞)・状態動詞(人間や動物の精神状態や生理状態などを表す動詞)・関係動詞(判断動詞である“是”や“姓”“叫”“等于”などの動詞)・能願動詞(助動詞)の四種類に分かれているのである。

動態動詞は最も典型的な動詞として、以下の文法特徴を示している。

i 一般的に重複できる。

ii 一般的に動態助詞“了”“着”“过”を付けられる。

iii “不”と“没”を使って否定を表せる。

iv 動量や時間を表す言葉を付けられる。

v 命令文になれる。(例えば、“来!”“走!”など)

vi 反復疑問文の形をとれる。

vii 程度副詞によって修飾されない。(例えば、“很吃”“非常跑”のような言い方は非文法的である。“很看了一阵子”“很解决问题”などのような文における“很”は動詞のみ修飾しているわけではなく、動詞連語全体を修飾しているのである。)

状態動詞は基本的に人間や動物の精神・心理・生理状態を表す。例えば、“爱”“恨”“喜欢”“讨厌”“想(念)”“希望”などのような心理状態を表現する動詞、それに“瞎”“瘸”“饿”“醉”“病”などの生理状態を示す動詞である。状態動詞は動態動詞とのあいだに最も異なる特徴は以下の三点である。

i ほとんどの状態動詞は程度副詞によって修飾される。例えば、“很饿”“特别喜欢”“十分讨厌”は言えるが、“病”“醒”などの状態動詞は程度副詞と一緒に用い



られない。

ii 状態動詞は使役文を作れない。

iii “喜欢” “讨厌” “想（念）” “希望” などのような心理状態を表す状態動詞は及物であるが、“聋” “瞎” “瘸” “饿” “醉” “病” “困” などの生理状態を表す状態動詞は不及物である。

関係動詞は語彙上かなり抽象的な意味を表している。例えば、“是” “叫” “姓” “当作” “成为” “像” “等于” などの動詞である。このような動詞の最も主要な役割は文の主語と客語をつなげることである。関係動詞によって、主語と客語とのあいだに存在する関係が明らかにできる。したがって、関係動詞の後に来る客語は一般的に省略できない。関係動詞の主な文法特徴は以下のとおりである。

i ほとんどの場合は“不”で否定するが、“没”を用いて否定することもある。

ii “像” 以外の関係動詞は程度副詞によって修飾されることができない。それに、客語を省略できない。

iii 重複の形をとれない。

iv 動態助詞“了” “着” を付けることはめったにない。

v “把字句” に用いられない。

vi 使役文を作れない。

#### 4.1.2.3 客語による分類

動詞の後に用いる客語によって、体言性の客語を用いる動詞・用言性の客語を用いる動詞・小文を用いる動詞・複数の客語を用いる動詞の四類に分けられる。

体言性の客語を用いる動詞は名詞・代名詞・数量詞である客語しか付けられない。例えば、“打（电话）” “买（东西）” “开（汽车）” “缝（衣服）” などである。この種の動詞は最もよく見られる。

用言性の客語を用いる動詞の後には動詞・形容詞である客語しか用いられない。例えば、“进行（动员）” “加以（指责）” “开始（研究）” “继续（讨论）” “喜欢（跳舞）” などである。この種の動詞は前述の動詞ほど多くないが、ほかには“希望” “从事” “给予” “装作” “声明” “值得” “受” “敢于” “企图” “受（到）” “觉得” などが挙げられる。

体言性の客語と用言性の客語を両方付けられる動詞も存在している。例えば、“记得（开会的时间/开会）” “通知（放假日期/放假）” “肯定（他的工作态度/工作）” “表示（心意/同意）” “研究（问题/如何开发）” “准备（会议资料/离开）” “同意（你的意见/结束会议）” “看（见）（她/她跑了过来）” “听（音乐/他唱歌）” “引起（不满/感冒）” などの動詞である。

小文を付ける動詞は“希望” “觉得” “怕” のような動詞である。例えば、“我希望你明天早一点来。”（「明日早く来てほしい。」）“刚才我看见有一个人从这儿出

去了。”（「さっきここを出た人を見かけた。」）“他认为事业是最重要的，家庭不那么重要。”（「家庭より仕事のほうがもっと大事だと彼が思っている。」）などである。

複数客語を付ける動詞はいわゆる「二価動詞」（生成文法では、「食べる」「殴る」など、名詞句を二つ要求する動詞は二価動詞と言う）や「三価動詞」（生成文法では、「与える」「贈る」など、名詞句を三つ要求する動詞は三価動詞と言う）であり、複数の客語を付けられる。例えば、“给”“教”“交”“送”などである。“张老师教我们中文”“他给了我一本新书”のような例文が挙げられる。

#### 4.1.2.4 持続できるか否かによる分類

持続性のある動作を表す動詞の後であれば、動態助詞“着”を付けられる。例えば、“看”“写”“听”“说”“跳”“拍”“敲”“坐”“批评”“挂”“放”“租”などである。また、持続性動作を表す動詞は一般的に重複することができる。例えば、“看看书”“写写字”“听听歌”“说说故事”“跳跳舞”“拍拍皮球”“敲敲小鼓”“坐坐沙发”“批评批评”“挂挂衣服”“放放玩具”“租租碟片”などである。

非持続性動作はいわゆる瞬間動詞であり、後に動態助詞“着”を付けられない。例えば、“死”“散”“懂”“完”“结婚”“成立”“出现”“消失”“来”などである。例えば、“死着”“懂着”“结婚着”“消失着”などの言い方はいずれも非文である。

#### 4.1.2.5 自主的か否かによる分類

動作主が自主的にコントロールできる動作を表す動詞は自主動態動詞と呼ばれる。このような動詞は動作主が意識的に行う行為や動作を表すので、使役文でも受身文でも用いられる。例えば、“说”“唱”“学”“买”“打”“骂”“教”“吃”“喝”“帮助”などの動詞が挙げられる。具体的な例は、“让老师说了我家孩子一顿。”（「先生に頼んでうちの子をお説教した。」）“孩子被老师说了一顿。”（子どもが先生にお説教された。）などが挙げられる。

動作主が自主的にコントロールできない動作を表す動詞は非自主動態動詞と呼ばれる。例えば、“病”“死”“完”“知道”“怕”“塌”“漏”などである。このような動詞は一般的に使役文や受身文を作れない。例えば、“我让小王病了。”（「私は王さんを病気にさせた。」）というような文は一般的に言えないであろう。

#### 4.1.3 “被字句”の動詞となれない動詞

“被字句”に用いられる動詞は全て処置性を持たなければならないという観点から、上掲の動詞分類に基づき、及物動詞は“被字句”の動詞となりやすく、不及物動詞は“被字句”の動詞となれないという马真（1997）のような結論が出てくるのであろう。

(4) 我打碎了那个杯子。 / 那个杯子被我打碎了。（耿二岭 2010: 147）

あのコップを割ってしまった。/あのコップは割ってしまった。(高橋弥守彦訳)

(5) 她当了班长。/ \*班长被她当了。(耿二岭 2010: 147)

彼女はクラス委員長になった。(高橋弥守彦訳)

しかし、例(4)と例(5)を見れば分かるように、すべての及物動詞は“被字句”を作れるわけではない。耿二岭(2010)では、述語動詞は動作性の及物動詞でなければならないと述べている。例(5)における“当”は動作性の動詞ではないので、“被字句”を作れないと指摘している。

梁鸿雁(2004)では、一般に“被字句”に用いられる動詞は、結果性を表せる“致果”（「結果を産む出す」）の意味を有する動詞であり、[表4-1]に挙げられる動詞は“被字句”の動詞となれないと主張している。括弧の中の「及物」と「不及物」は筆者が書いたものである。

[表4-1] “被字句”の動詞となれない動詞

| 類型                  | 具体例               |
|---------------------|-------------------|
| 判断・状態動詞（及物）         | 是、有、存在、等于……       |
| 再帰動詞（及物）            | 抬、举、伸出、睁开……       |
| 移動動詞（及物）            | 上、下、离开、到达……       |
| 心理活動動詞（及物と不及物）      | 喜欢、生气、讨厌、相信……     |
| 能願動詞（及物）            | 能、要、应该、愿意……       |
| 認知動詞（及物）            | 同意、觉得、希望、要求……     |
| 動結式・趨結式の可能形と否定形（及物） | 办得成、办不成、上得来、上不来…… |
| 不及物動詞               | 游泳、休息、梦见、碰见……     |
| 姿勢動詞（不及物）           | 站、躺、跪、趴……         |

本稿は言語資料の調査に基づき、表4-1に挙げられている動詞が確かに“被字句”を作れないのかを検証する。

まず、北京大学が開発したコーパスを利用して判断・状態動詞を用いる“被字句”を調べたが、一つも見当たらなかった。次に、普通の及物動詞である“抬”と“举”を用いる“被字句”はよく見られるが、再帰動詞としてとられる“抬”と“举”を使う“被字句”も全く見つからない。卢福波(2011)によれば、再帰動詞（再帰動詞も及物動詞である）の場合、“被字句”を用いず、“把字句”を用いるのである。

(6) 头被他抬了起来。(错)

他把头抬了起来。(对)(卢福波 2011: 398)

彼は顔を上げた。(筆者訳)

(7) 手被我高高地举了起来。(错)

我把手高高地举了起来。(对)(卢福波 2011: 398)

私は手を高く挙げた。(筆者訳)

さらに、移動動詞、能願動詞、動結式・趨結式の肯定形と否定形についても調べたが、これらの動詞を用いる“被字句”は1例もなかった。しかし、動結式・趨結式の肯定形と否定形は、“被字句”の動詞としては用いることができないが、動詞の形態を表す場合であれば用いることができることが分かった。

(8) 事情肯定办得成。(对)

事情肯定被办得成。(错)(白晓红・赵卫 2007: 149)

仕事はきつとやり遂げられる。(高橋弥守彦訳)

(9) 桌子被他搬走了。(对)

桌子被他搬得动。(错)(李德津・金德厚 2009: 142)

机は彼に運ばれてしまった。(高橋弥守彦訳)

(10) 这些话被她听见了。(对)

这些话被她听得见。(错)(方绪军 2008: 204)

この話は彼女に聞かれてしまった。(高橋弥守彦訳)

(11) 张大夫被人请去了。(对)

张大夫被人请得去。(错)(方绪军 2008: 204)

張先生は往診に行った。(高橋弥守彦訳)

(12) 我们被他骂得抬不起头来。(徐昌火 2005: 245)

私たちは彼に怒られて顔を挙げられなかった。(高橋弥守彦訳)

(13) 我被大风刮得走不动了。(李德津・金德厚 2009: 140)

強風に遭い前に進めなくなった。(高橋弥守彦訳)

最後に、[表 4-1]に挙げられている一部の心理活動動詞、認知動詞及び一部の及物動詞と姿勢動詞は、実際の言語資料の中で“被字句”に用いられる動詞として出てきた。

(14) 谢谢你喜欢我。被喜欢的感觉真好。(兰晓龙: 士兵突击)

好きになってくれてありがとう。愛されている感じはなんて素晴らしいのだろう。(筆者訳)

(15) 她微笑著说:“我不怪你,我只是讨厌我自己,讨厌我的被讨厌!”(琼瑶:

月朦胧鸟朦胧)

「あなたのせいじゃない。私、ただ自分が大嫌いだ。自分の嫌われているところが大嫌いだ。」と彼女は微笑みながら言った。(筆者訳)

(16) 你已经变成了他们的叛徒，叛徒是不会、也不可以被相信的。（龙枪：旅法师）

彼らにとって君はすでに裏切り者だ。裏切り者は誰にも信頼されない、信頼されるべきではないのだ。（筆者訳）

(17) 他曾经要求这次大会安排他作正式的震情介绍，但没有被同意。（胡培炯：与死神擦肩而过）

今度の大会で彼は正式的に震災の紹介を要求したが、許可されなかった。（筆者訳）

(18) 为什么有些大人会被觉得单调、乏味？（北京大学中国语言学研究中心语料库）

なぜつまらないと思われる大人がいるの？（筆者訳）

(19) 加拿大、英国、法国、德国和日本分别派出 500 名留学生，而美国则被希望接纳 5000 人。（吴晓波：激荡三十年）

カナダ、イギリス、フランス、ドイツそして日本はそれぞれ 500 名の留学生を出したが、アメリカは 5000 人を受け入れることを求められた。（筆者訳）

(20) 我们在同一时间要做多少事，却要看个人；动作快的人被要求慢慢来，反而会增加压力。（子柔：时光向左女人向右）

同じ時間内でどれだけの仕事ができるか、人によって違う。手が速い人がゆっくりとやれと要求されたら、逆にプレッシャーを感じる。（筆者訳）

(21) 那么这种梦，正如史特林姆贝尔所说的，应该是常常被梦见的，不然就得证明出在做这梦时梦者的呼吸特别加快。（北京大学中国语言学研究中心语料库）

ステリームベルの言った通り、このような夢はよく見られるはずだ。そうじゃなかったら、この夢を見ているとき、夢見る人の呼吸は非常に速いことを証明しなければならない。（筆者訳）

(22) 一个人走着，没碰见熟人，也没被碰见。（北京大学中国语言学研究中心语料库）

一人でぶらぶらして、知り合いにも会ってないし、会われてもない。（筆者訳）

実例調査によって、すべての不及物動詞は“被字句”を作れないわけではないことが分かった。それに、“被字句”における動詞は必ずしも及物動詞ではないことも証明できた。本稿は“被字句”を作れない動詞について以下の[表 4-2]のように改めて整理する。

[表 4-2] “被字句”の動詞となれない動詞（改定後）

| 動詞の類型 |                 | 具体例               |
|-------|-----------------|-------------------|
| 不及物動詞 |                 | 死、活、游泳、休息、旅行、結婚…… |
| 及物動詞  | 判断・状態動詞         | 是、有、存在、等于……       |
|       | 再帰動詞            | 抬、举、伸出、睁开……       |
|       | 移動動詞            | 上、下、离开、到达……       |
|       | 能願動詞            | 能、要、应该、愿意……       |
|       | 動結式・趨結式の可能形と否定形 | 办得成、办不成、上得来、上不来…… |

#### 4.1.4 “被字句”の成立条件

上掲の分析によれば、中国語における“被字句”の成立条件は、及物動詞でさえあれば、必ず“被字句”が成立するというわけではない。中国語の“被字句”の成立は「結果」と密接な関係を持っていると言われている。

##### 4.1.4.1 従来への考え

呂叔湘（1944：37-42）では“被字句”における動詞について以下のように述べている。まず、“被字句”に用いられる動詞の後に、完了や結果を意味する成分がなければならない。もしその動詞自体に完了や結果の意味合いが含意されれば、裸動詞でも用いられる。しかし、“被字句”に用いられる裸動詞はごく一部の二音節動詞に限られているうえに、“被”の前に必ず助動詞や時間副詞などの成分が要求される。<sup>1)</sup>次に、動詞の後に客語を付けることもできるが、①客語は受け手主語の一部分や所有物である場合<sup>2)</sup>、②客語は受け手主語に働きかけた動作による結果である場合<sup>3)</sup>、③主語は空間名詞である場合<sup>4)</sup>、④客語と動詞は慣用語の場合<sup>5)</sup>という四つの場合に限られている。最後に、“被…所…”式に用いられる動詞にはほかの成分を付けることができない。二音節の動詞を使うとき“所”は省略することもできるが、単音節の動詞を用いる場合、“所”は省略できない。<sup>6)</sup>

豊嶋裕子（1988：34）では、中国語受身文の成立条件の一つとして、述語が動作・行為を受けた受事側の結果状態にまで言及し得る表現となっていること（結果・状態補語や“了”“着”の付加、あるいは動詞自体がそのような意味を持つ）と述べてい

1) 例えば、“这句话可能被人误解。”“你的建议已经被领导采纳。”“这一点必将被历史证明。”のような文である。

2) 例えば、“小鸡被黄鼠狼叼去了一只。”のような文である。

3) 例えば、“他被大家选为小组长。”のような文である。

4) 例えば、“树梢被斜阳涂上一层金色。”のような文である。

5) 例えば、“这话被你打了折扣了吧？”のような文である。

6) 二音節の動詞の場合の例文は“被歌声[所]吸引。”であり、単音節の動詞の例文は“被风雪所阻。”である。

る。具体的に、楊凱榮（1992：167）では、中国語の能動文を受身文にする場合、“\*我被他打。”（私は彼に殴られる。）のように動詞だけでは不適格の表現となり、“我被他打了。”（私は彼に殴られた。）“我被他打过。”（私は彼に殴られたことがある。）のように“了”“过”をつけて初めて自然な文となると指摘している。“打”（殴る）のような結果含意動詞の場合は、完了を表す“了”や経験を表す“过”を付けるだけで成立する。また、“\*小陈被大家选了。”（陳さんはみんなによって選ばれた。）での“选”のような動詞は“了”をつけ加えても、「選ぶ」という働きかけは完了するが、「当選する」という結果の実現は含意しないため、成立しないとされている。この場合は、“小陈被大家选上了。”のように結果補語“上”を付け加えることによって自然な文となる。さらに、“玻璃被砸得粉碎”（ガラスはこなごなに割られてしまった。）のように、“了”がなくても程度補語“粉碎”（こなごなに）で文を成立させることができることも述べている。つまり、結果の実現を含意する動詞においては、完了を表すアスペクト“了”あるいは経験を表す“过”を付ければ、受身文は成立する。一方、結果の実現を含意しない動詞の場合は、動詞に結果補語あるいは程度補語の付くことが要求される。

木村英樹（1992：237）も、「中国語の受身文は、主語に立つ対象が単に動作・行為を受けることを述べるだけでは成立し難く、対象が動作・行為の結果を被る何らかの<影響>を明示的に表現するか、あるいは何らかの形でそれを強く含意する形のものでなければ成立しがたいという性格を持っている。」と述べている。前述した先行研究であげた“了”と結果補語のほかに、「量的な限定」も中国語の受身文の成立条件の一つであると言われている。例えば、“桌子叫小李拍了两下。”（机が李君に二度叩かれた）のように、量的な限定を加えることで、受動文は成立する。動詞“拍”（叩く）は結果含意から見ると中間的なもので、“两下”（二回）という量的な限定を加えることで、「より具体的、個別的な行為像を描出する効果が生み出され、そのことが動作本来の他動性と相まって、対象への即物的な影響を含意し得る結果につながる」と木村英樹（1992）で指摘している。

刘月华・潘文娣（2004：304）では“被字句”の述語動詞について以下のように論じている。受け手がある動作の作用や影響を受けたことを表すために“被字句”を使用するので、動詞の後に完了や結果を表す成分が必要となる。完了や結果を表す成分とは、一般的に動態助詞“了”、補語（結果補語、趨向補語、程度補語、動量補語、時間補語、介詞補語など）、動詞の後に用いられる客語（動作による変化や結果、主語のもらい手、主語の一部分や持ち物、動作の影響による行先、慣用語における客語など）、動詞の前に付ける副詞などが挙げられる。

#### 4.1.4.2 本稿の考え

中国語の“被字句”が成立するのは確かに文中の動詞と深く関係しているが、決定

的な要素は動詞ではない。及物動詞でも不及物動詞でも、動詞に含まれる結果性が強い場合、裸動詞だけで“被字句”が成立する。例えば、“他被敌人所杀。”（彼は敵に殺された。）のような場合である。それに対し、結果性が明確でない場合、「動詞＋ほかの成分」で“被字句”を成立させる。例えば、“我想要的书被人买走了。”（私がほしい本は誰かに先を買って行かれた。）のような場合である。つまり、中国語の“被字句”の成立条件は、受け手主語が受けた動作による影響や結果を文中に明確に描写することと言えるであろう。

#### 4.1.5 おわりに

本稿は先行研究を踏まえ、まず中国語における動詞の分類について再考した。動詞の後に客語を用いられるかどうかにより、中国語の動詞を及物動詞と不及物動詞の二種類に分けている。次に、中国語の“被字句”における動詞は及物動詞でなければならないという従来の観点を検討し、“被字句”を作れない動詞を整理した。一部の及物動詞（判断・状態動詞、再帰動詞、移動動詞、能願動詞など）は“被字句”の動詞となれない一方、“坐、哭、跑”など一部の不及物動詞は“被字句”を作れることを明らかにした。最後に、中国語の“被字句”の成立は「結果」と密接に関わり、動詞に含まれる結果性が強い場合、裸動詞だけで“被字句”が成立するが、結果性が明確でない場合、「動詞＋結果を表す成分（動態助詞、補語、客語など）」で“被字句”を成立させるのが一般的である。



## 第2節 日本語の受身文に用いられる動詞について

### 4.2.1 はじめに

日本語において全ての動詞が受身文を作れるわけではない。三上章（1972：187）では動詞のなかで受身文が作れない動詞を「所動詞」と名付け、受身文が作れる動詞を「能動詞」と命名し、受身文の成否によって日本語の動詞を分類している。許明子（2004：96）では、三上章（1972）の研究を踏まえ、動詞の分類に関する文献に基づき、所動詞の具体例をすべて挙げ、さらに下位分類を行っている。しかし、許明子（2004）で挙げられた所動詞には受身文が作れる動詞があると思われるので、所動詞に関する再考を行う必要がある。

そして、他動詞を用いる受身文はよく見られるが、同じ他動詞で作られる受身文であっても必ずしも適格な文になるとは限らない。次の文を比べてみよう。

- (23) (私は) こんなふうに家で待たれたら、早く家に帰ってこざるをえなくなってしまう。(増田修治：話を聞いてよ、お父さん！比べないでね、お母さん！)

如果被人这么等待的话，就不得不早点回家了。(筆者訳)

- (24) \*花子は太郎に駅前で5分待たれた。(高見健一 2011：21)<sup>7)</sup>

\*花子被太郎在车站前等了5分钟。(筆者訳)

- (25) ガンクタウンあたりのスラム街のなかで、きれいな白人の少女が黒人と連れ立っているところを見かけられたとか、そんな話をね。(ウィリアム・ベイヤー：秘密の顔を持つ女)

据说在岸驹城的平民窟街道上，被人看见一个漂亮的白人少女和黑人站在一起。(筆者訳)

- (26) \*山田先生は村山先生に会場で偶然見かけられた。(高見健一 2011：21)

\*山田先生在会场偶然被村山先生看见了。(筆者訳)

例(23)と例(24)のいずれも他動詞「待つ」を用い、話し手はその目的語に自分の視点を寄せ、それを主語にした受身文である。しかし、例(23)は日本語としてごく自然であるが、例(24)は日本語として容認されない不適格な文である。また、例(25)と例(26)も同じである。この違いはどこに原因があるのであろうか。

さらに、中国語と異なり、日本語において自動詞でも適格な受身文を作れる。しかし、不適格と考えられる自動詞の受身文もある。

- (27) そのうちに、八歳で父に死なれた私は、出先生を父のように思うようになった。(渡邊恒雄：わが人生記)

后来，八岁就死了父亲的我把出先生当成了自己的父亲。(筆者訳)

7) 「\*」は不適格な文を表す。以下はこれに従う。

(28) \*富士山は先週、山田君に登られた。(高見健一 2011 : 12)

\*上周富士山被山田爬了。(筆者訳)

(29) この山は、もう数百年も前に山頭火<sup>8)</sup>に登られている。(高見健一 2011 : 31)

这座山在几百多年以前被山头火登顶过。(筆者訳)

上記のように「死ぬ」などの自動詞を用いる日本語の受身文は少なくない。そして、同じ自動詞である「登る」を用いる例(28)と例(29)は、なぜ前者は不適格で後者は適格であるか。本稿では動詞を中心に日本語における受身文の成立条件についても検討する。

#### 4.2.2 受身文の分類

本稿は現代日本語の受身文に関する先行研究、特に鈴木康之(1977)の学説を踏まえ、ヴォイスの体系を中心に日本語の受身文を再分類した。結果として、日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」という二種類に分けることとなった。文法上の受身文とは、鈴木康之(1977)の分ける「直接対象の受身文」「相手の受身文」「持ち主の受身文」「第三者の受身文」という四種類の受身文であり、語彙上の受身文とは、助動詞「レル・ラレル」を用いずに、受身動詞を用いて受身義を表す受身文である。

##### I 文法上の受身文

###### ① 直接対象の受身文

直接対象の受身文とは、能動文で直接対象となっている「ヲ格の有情物名詞」を主語とする文である。文中に用いられる動詞は他動詞のほうが多い。

(30) そして二、三日たって、敗戦論者達は残りの連中にぶん殴られた。(小松左京：時の顔)

后来过了两三天，战败论者们被剩下的那帮人狠狠打了一顿。(筆者訳)

(31) 龍馬は千賀に褒められるたびに、はじめは腹を立てたり淋しがったりしていたのだが、後にはだんだん恥ずかしくなっていた。(山岡荘八：坂本竜馬)

每当龙马被千贺表扬时，刚开始他还会觉得生气觉得空虚，后来渐渐开始觉得不好意思了。(筆者訳)

###### ② 相手の受身文

相手の受身文とは能動文で相手を意味する「ニ格の有情物名詞」を主語とする文である。文中に用いられる動詞は自動詞のほうが多い。

8) 種田山頭火(1882年12月3日-1940年10月11日)は、戦前日本の俳人である。よく山頭火と呼ばれる。自由律俳句のもっとも著名な俳人の一人として知られている。

(32) 店に入ってすぐに、若林は見覚えのある主婦らしき女性に話しかけられた。

(日明恩：鎮火報)

一进店里，若林就被一个有些眼熟看似主妇的女性搭讪了。(筆者訳)

(33) あなたに触れられて喜んでいたのは昔の話よ。(Merritt Jackie 著/氏家

真智子訳：億万長者の策略)

喜欢被你碰触已经是过去的事情了。(筆者訳)

### ③ 持ち主の受身文

持ち主の受身文とは、能動文で「ヲ格の名詞」か「ニ格の名詞」の持ち主を主語とする文である。文中に用いられる動詞は他動詞と自動詞両方可能である。

(34) 先日、刑事さんがいらっしゃった後におもいだしたことですけれど、私、

(誰かに) 下着を盗まれたんです。(森村誠一：小説宝石)

前几天，刑警先生来过之后我想起来一件事，那就是我的内衣被偷了。(筆者訳)

(35) 思いきり手に噛みつかれて、アンプルティは顔面に朱の色をほとぼしらせた。

(五代ゆう：パラケルススの娘)

安普鲁迪的手被狠狠地咬住，他的脸变得通红。(筆者訳)

### ④ 第三者の受身文

第三者の受身文とは、能動文に現れていない迷惑を受ける第三者を主語とする文であり、「迷惑の受身文」とも言われている。第三者の受身文は上述した三種類の文法的受身文と異なって、能動文と完全に対応できない場合が非常に多い。そして、文中に用いられる動詞は自動詞のみならず、他動詞も第三者の受身文を作れる。

(36) 紹興では毎日雨に降られた。(加藤千洋：北京&東京)

在绍兴我每天都遭雨。(筆者訳)

(37) 勝手に建物を建てられたんじゃ困りますね。(小澤英明：都市の記憶)

附近要是随随便便盖起了房子，我们会很为难吧。(筆者訳)

## II 語彙上の受身文

現代日本語において受身を表す形式には、文法的ヴォイスの範疇に含まれる能動態と受動態の対立のほかに、単に語彙的な対立を示しているにすぎないものがある。つまり、語彙上の受身文は助動詞「レル・ラレル」を用いずに、受身動詞を用いて受身義を表す文である。受身動詞には自動詞と他動詞両方ある。

(38) 私は先生からお叱りを受けた。(中島悦子 2007：102)

我遭到了老师的批评。(筆者訳)

(39) 犯人は警官につかまる。(中島悦子 2007：103)

犯人被警官抓住。(筆者訳)

上記の説明と実例を見れば、日本語の受身文に用いられる動詞に自他の制限があま

り見られないことが分かった。文法上の受身文において、直接対象の受身文には他動詞、相手の受身文には自動詞、持ち主の受身文と第三者の受身文には他動詞と自動詞の両方が用いられる。そして、語彙上の受身文に用いられる受身動詞にも他動詞と自動詞の両方が存在している。さらに、前節で述べているように、中国語の“被字句”が成立するには動詞が決定的な要素ではなく、受け手主語が受けた動作による影響や結果を文中に明確に描写することが“被字句”成立の決め手であるという結論が出ている。それに対し、日本語の受身文の成立には動詞がどのように関わってくるのであろうか。

### 4.2.3 受身文における動詞

#### 4.2.3.1 「レル・ラレル」を用いずに受身文が作れる動詞

日本語において、受身文を作る際動詞の受動態に変換するため、助動詞「レル・ラレル」を用いるのは一般的である。この点から見れば、単語レベルのヴォイス変化がない中国語の“被字句”とはかなり異なっている。しかし、日本語では単語レベルのヴォイス変化がなくても、受身文を作ることが可能である。それは本稿では日本語の受身現象の一つとして取り上げた「語彙上の受身文」のことである。語彙上の受身文を作れるのは、助動詞「レル・ラレル」を用いずに単語自身に受身義を含まれる動詞である。

このような動詞に関して、野村剛史（1982：143）と杉本武（1991：277）では「受動詞」と呼び、劉振泉（2003：253）では「受身動詞」と称し、「授かる、おそわる、抱かる、助かる、言いつかる、かぶさる、ゆだる、みつかる、仰せ付かる、つかまる、もてる」などの動詞を挙げている。楊海茹（2007：92）では、受身義を表す動詞を「自動受動詞」と「他動受動詞」とに分けている。そして、張晓帆（2008：25-30）は、「レル・ラレル」を用いずに受身義を表す受身文を「心理状態を表す自動詞文」および「有対自動詞文」と「無対自動詞文」の3種類に分類している。さらに、孟熙（2012：80）によると、他動化されても項の増減は生ぜず、二格名詞句を取る動詞（本稿では受身動詞と呼ぶ）を「自受動詞」「心理動詞」「他受動詞」に分類できるという。

本稿では、劉振泉（2003）に従い、このような動詞を“被动动词”（「受身動詞」）と呼ぶ。先行研究を参考とし、以下のような語彙的ヴォイスの対応関係の有無によって、日本語の受身動詞を「有対受身動詞」と「無対受身動詞」に大きく分ける。

#### I 有対受身動詞

ヲ格を取れるか否かにより、「有対受身動詞」はさらに「有対受身自動詞」と「有対受身他動詞」の二種類に分けられる。実例は以下の[表 4-3]に示している。

[表 4-3] 有対受身動詞の実例

| 有対受身自動詞  | 有対受身他動詞   |
|--|---|
| 捕まる(捕まえる)、見つかる(見つける)、破れる(破る)、助かる(助ける)、被さる(被る)、ゆだる(ゆでる) … | 預かる(預ける)、授かる(授ける)、言いつかる(言いつける)、教わる(教える)、抱かる(抱える)、仰せ付かる(仰せつける) … |

上掲の受身動詞は単語自身に受身義が内包されているので、いずれを用いても受身文を作れるであろう。

## II 無対受身動詞

「無対受身動詞」自体は明確な受身義を持つとは限らない。しかし、それらの動詞を用いて構成した文は、受身義を表わす場合が多々見られる。例えば、「溺愛に溺れる」(被溺愛)「夜露で潤ている」(被夜晩的露水所湿润)「木の根につまづく」(被樹根絆倒)「異性にもてる」(受到异性欢迎)「小鳥が凍えて死ぬ」(小鸟被冻死)「天井が真っ黒にくすぶる」(天花板被熏得乌黑)などである。

### 4.2.3.2 受身文が作れない動詞

助動詞「レル・ラレル」を付けずにそのまま受身義を表せる受身動詞があれば、如何なる場合であっても受身文が作れない動詞も存在する。

三上章(1972: 187)では、「受身の成否」を動詞分類の基準にし、受身形にならない動詞を「所動詞」、受身形を作れる動詞を「能動詞」とし、「能動詞」には「まともな受身」を作る他動詞と、「泣く」「来る」など「はた迷惑の受身」しか作れない自動詞が含まれるという指摘が見られる。<sup>9)</sup>さらに所動詞について、三上章(1972)は以下のように述べている。

所動詞は自然・可能・価値などを表す動詞を含む名前になる。受身というのは能動詞を翻して所動詞の側へ持来すことと言えるので、所動詞がさらに受身を作ることがないのは当然である。(中略)受身の意味の名残と「所」に関係が深いこととを兼ねたつもりの命名である。

そして、許明子(2004: 96)によると、ここでいう「所」は「場所」の意味を含め、所動詞はある「動作」が行われた後、その動作の結果によって生じた状態が続いている「場所」の意味をも含む動詞であるという。つまり、所動詞は「動作」そのものを表すのではなく、動作による結果の「状態の残存」という意味合いを表している。この定義に基づいて所動詞の特徴を考えると、所動詞は動作が行われた結果の状態が残

9) 「はた迷惑の受身」は、「正面から被害を蒙るのではなく、はたにいる者が迷惑するという気持ち」を表すもので、いわゆる間接受身文である。それに対し、まともな受身は「動詞の意味次第で恩恵にも迷惑にもなり、真中で平気なことも起こるが、その迷惑にしても、はた迷惑ではなく、正面からの被害である」ということである。これはいわゆる直接受身文である。

存する場所を意味し、状態を表す動詞が多数含まれる。したがって、所動詞は無意識的静的状態を表す動詞であり、原則的に命令形、意識表現、勧誘表現、希望を表す表現が作れない、そのような所動詞の例として三上章（1972：188）は「ある、聞こえる、見える、（匂い・音が）する、要る、似合う、できる」などの動詞と、「読める、飲める」などの可能動詞があると述べている。しかし、日本語の動詞のなかでは、三上章（1972）が挙げた動詞以外にも受身文が作れない動詞があると考えられる。

許明子（2004：99）では、日本語教育のなかで基本動詞とされている動詞を中心に受身文の成否によって新たな分類を行っている。動詞の分類に関する文献『日本語教育のための基本語彙調査（国立国語研究所発行）』<sup>9)</sup>と『日本語基本動詞用法辞典』<sup>10)</sup>に提示されている動詞のなかで日本語教育における基本動詞 218 語の自動詞を間接受身の成否によって「直接受身文と間接受身文のどちらの受身文も成立しない自動詞」「直接受身文は作れず、間接受身文しか作らない自動詞」と「直接受身文と間接受身文の両方とも成立する動詞」という三種類に分けている。そして、受身文が作れない所動詞をさらに自発動詞・可能動詞・結果動詞などに下位分類し、以下のようにまとめている。

[表 4-4] 語彙的意味による所動詞の下位分類

| 所動詞               | 具体例  |
|-------------------|--|
| 関係を表す動詞<br>(6 個)  | 対する、似る、違う、異なる、合う、似合う                                       |
| 可能の意味を表す動詞 (6 個)  | 出来る、利く、見える、聞こえる、 <u>助かる</u> 、間に合う                          |
| 自発の意味を表す動詞 (13 個) | 知れる、 <u>見つかる</u> 、決まる、売れる、切れる、起こる、解ける、始まる、止む、済む、届く、覚める、におう |
| 自然現象を表す動詞 (8 個)   | 明ける、暮れる、光る、鳴る、冷える、茂る、渴く、晴れる                                |
| 状態の変化を表す動詞 (4 個)  | 凍る、焦げる、煮える、沸く  |
| 性質を表す動詞<br>(16 個) | 要る、空く、込む、緩む、及ぶ、浮かぶ、壊れる、裂ける、余る、縮む、沿う、足りる、まさる、劣る、痛む、病む       |

以上の 53 語は許明子（2004：99）で挙げられている所動詞である。このなかで注目

9) 『日本語教育のための基本語彙調査（国立国語研究所発行）』は 1984 年に秀英出版によって出版された研究報告である。

10) 『日本語基本動詞用法辞典』は小泉保等によって編集され、1989 年に大修館書店によって出版されたものである。

していただきたいのは下線を引いた「助かる」と「見つかる」という二つの動詞である。許明子（2004）では「助かる」と「見つかる」を所動詞に分類し、どちらでも受身文を作れないと考えているが、劉振泉（2003：253）では「助かる」と「見つかる」を「受身動詞」に分類し、どちらでも助動詞「レル・ラレル」を用いずに受身義を表現し、単語自身に受身を含意されている受動的動詞であると述べている。<sup>10)</sup>本稿では劉振泉（2003：253）と許明子（2004：99）の説を参考とし、「見つかる」を「語彙上の受身文」<sup>11)</sup>の作れる「受身動詞」に分類し、「助かる」を特殊な「所動詞」と主張する。

高橋弥守彦（2011）によれば、中国語の“被字句”の意味構造は「受事主体＋特定される他からの影響のある出来事」である。日本語の受身文の意味構造も同じようにまとめられるであろう。この意味構造を分析すると、特定される他からの影響は、受事（本稿では受け手と言う）主語がある状態に変化したということの原因であると言える。例（40）から例（43）までを見てみよう。

(40) (私は) 悪いことをして警察に捕まったこともない代わりに、良いことをしたとって、表彰されたこともありませんよ。（西村京太郎：秘めたる殺人）

我没有因为做坏事而被警察抓起来过，同时也没有因为做好事而被表彰过。

（筆者訳）

(41) やがて犯人は(警察に)捕まったが、その正体を知って全美は再び驚いた。（森孝一：アメリカ「超保守派」の世界観）

不久犯人被抓住了，当大家得知他的真实身份时全美又再度震惊了。（筆者訳）

(42) 俺が、あんとき俺が残ればよかったんすよ。そしたら田宮は助かったかもしれないのに。（梓河人・飯田譲治：アナザヘヴン）

如果我那个时候留下来就好了。那样的话田宫或许就能得救了吧。（筆者訳）

(43) 脚のために兵役を免れていた矢尾だけは奇跡的に助かったが、その後は行方不明となった。（三津田信三：ミステリ作家の読む本）

只有因腿脚不便而免除兵役的矢尾奇迹般地活了下来，但是之后他却失踪了。

（筆者訳）

例（40）では、省略された「私」が受け手であり、「警察」は仕手である。例（41）では、「犯人」が受け手であり、省略された「警察」は仕手である。どちらでも仕手

10) 劉振泉（2003）は「受身動詞」の具体例として「授かる、おそわる、抱かる、助かる、言いつかる、かぶさる、ゆだる、みつかる、仰せ付かる、つかまる、もてる」などの動詞を挙げている。

11) 現代日本語において受身を表す形式には、文法的ヴォイスの範疇に含まれる能動態と受動態の対立のほかに、単に語彙的な対立を示しているにすぎないものがある。つまり、助動詞「レル・ラレル」を用いなくても受身義を表わせる場合がある。筆者はそのような文を「語彙上の受身文」と名付け、日本語の受身文に入れることにした。

の「逮捕する」という動作の影響により、受け手に「牢屋に入る」という状態変化が生じるのである。さらに例(42)を見ると、もし「俺」が残れば、「田宮」を助けることができるかもしれないので、仕手である「俺」が残るという動作の影響で、受け手である「田宮」は危険な状態から抜け出す可能性があるということが分かった。それに対し、例(43)における「矢尾」は足が悪いから兵隊に入らなくてよいので、戦争に行かずに生き続けることができた。意味的に見れば、例(43)には仕手が存在しない。この「助かった」は、単に「生き続けられる」という可能の意味を表しているため、受身義を含意されないとと思われる。要するに、同じ「助かる」を用いる例(42)と例(43)とは、前者は語彙上の受身文と看做せる同時に、後者は可能を表す文である。したがって、「助かる」は特殊な所動詞、あるいは特殊な受身動詞と看做すべきではないかと思われる。

ここで簡単にまとめると、所動詞以外の動詞は、他動詞にせよ自動詞にせよ、原則として受身文を作ることが可能と言えるであろう。

#### 4.2.4 受身文の成立条件

##### 4.2.4.1 他動詞を用いる場合

ここで再び例(23)から例(26)までを見ていただきたい。例(23)と例(24)において他動詞「待つ」が用いられ、例(25)と例(26)には他動詞「見かける」が用いられる。

(23) (私は) こんなふうに家で待たれたら、早く家に帰ってこざるをえなくなってしまう。(増田修治：話を聞いてよ、お父さん！比べないでね、お母さん！)

如果被人这么等待的话，就不得不早点回家了。(筆者訳)

(24) \*花子は太郎に駅前で5分待たれた。(高見健一 2011：21)

\*花子被太郎在车站前等了5分钟。(筆者訳)

(25) ガンクタウンあたりのスラム街のなかで、きれいな白人の少女が黒人と連れ立っているところを見かけられたとか、そんな話をね。(ウィリアム・ベイヤー：秘密の顔を持つ女)

据说在岸驹城的平民窟街道上，被人看见一个漂亮的白人少女和黑人站在一起。(筆者訳)

(26) \*山田先生は村山先生に会場で偶然見かけられた。(高見健一 2011：21)

\*山田先生在会场偶然被村山先生看见了。(筆者訳)

例(23)と例(25)は直接対象の受身文として適格な日本語と認められる。それに対し、例(24)では太郎が花子を待つ行為は太郎一人が勝手に行う自律的行為であり、花子には何もなされていない。そのため、花子はそのことで何の変化も受けていない。



例(26)では、村山先生が山田先生を偶然見かけるという事象で、村山先生が自立的に遭遇する事象であり、山田先生に対しては何もせず、山田先生はどのことで何の変化も受けていない。つまり、適格な例(23)と例(25)では、不適格な例(24)と例(26)と異なり、受身文の仕手を直接対象として何かがされ、仕手はそのことにより、それ以前の状態から変化し、影響を受けていることが分かる。

そして、次のような心理動詞や知覚動詞の受身文では、仕手に物理的は何もされていまいと言われるであろうが、心理的に何かがされることにより、それ以前の状態から変化して影響<sup>11)</sup>を受けているので、適格な受身文と看做せる。

(44) 太郎は花子に愛されている。(高見健一 2011:22)

太郎为花子所爱。(筆者訳)

(45) 鈴木先生は多くの学生に尊敬され、慕われている。(高見健一 2011:22)

铃木老师为众多学生所尊敬、敬仰。(筆者訳)

(46) 私は電車の中で変な人にジロジロ見られたので、女性専用車両に移った。

(高見健一 2011:22)

我在电车上被奇怪的人一直盯着看，所以换到女性专用车厢去坐了。(筆者訳)

(47) 人はどんな時でも神様に見られているんですよ。(高見健一 2011:22)

人不论何时都被神明所注视着。(筆者訳)

例(44)から例(47)までのいずれも直接対象の受身文である。例(44)と例(45)では、太郎や鈴木先生は、花子や多くの学生の愛や尊敬の直接対象であり、愛されたり、尊敬されることにより、それまでのそうでない状態から変化していると言える。また例(46)では、話し手が変な人にジロジロ見られたことで、気持ち悪く思ったり、怖くなったりするという状態変化や影響を受けている。例(47)では、人がいつも神様に見られていることで、そうでない状態とは異なる変化や影響を受けることになる。要するに、このような心理動詞や知覚動詞の場合でも、受身文が適格となるのは、仕手を直接対象として心理的に何かなされ、それ以前の状態から変化し、何らかの影響を受けているためである。

さらに、上掲の例文を考察すれば、そのなかに主語が無情物であり、仕手が人間の受身文が1例もないことが分かった。そのような受身文を次のaの能動文に対応的に見てみよう。

(48) a 母はよくこの靴を履いていた。(高見健一 2011:28)

妈妈以前经常穿这双鞋子。(筆者訳)

11) ここで用いている「変化、影響」という言い方は、高見健一(2011)の説に基づき、物理的変化や目に見える直接的な影響という意味ではなく、仕手にある動作がなされたり、ある思いが向けられた場合に、それ以前の仕手の状態と比べ、変化や影響が生じているかどうかであることと定義する。

b\*この靴はよく母に履かれていた。(高見健一 2011:28)

这双鞋子以前经常被妈妈穿。(筆者訳)

(49) a 父がハワイでこの写真を撮った。(高見健一 2011:28)

爸爸在夏威夷照了这张照片。(筆者訳)

b\*この写真はハワイで父に撮られた。(高見健一 2011:28)

这张照片是爸爸在夏威夷照的。(筆者訳)

(50) a 山田君が教室の窓を開けた。(高見健一 2011:28)

山田打开了教室的窗户。(筆者訳)

b\*教室の窓が山田君に開けられた。(高見健一 2011:28)

教室的窗户被山田打开了。(筆者訳)

例(48)から例(50)までにおけるbは文法的に見れば間違いがなく、受身文の状態変化制約も満たしているにもかかわらず、これらの受身文がいずれも不適格と思われる。その理由は、話し手は自分の視点を自分により近い、親しみのある特定の人物に近づけずに、親しみのより薄いと思われる無情物に自分の視点を近づけることが一般に難しいからであると高見健一(2011:28)で指摘している。話し手がもし無情物に自分の視点を近づけて受身文を用いる場合は、客観的描写となり、動作主が二格ではなく、次のように「カラ」や「ニヨッテ」で標記されるのが普通である。

(51) 事故の様子が目撃者から報告された。(高見健一 2011:28)

事故的情况由目击者向大家汇报。(筆者訳)

(52) 患部が専門医によって入念に見られた。(高見健一 2011:28)

患处由专家医生仔细检查。(筆者訳)

(53) グリム兄弟のドイツ語辞書は、彼らの死後、執筆が後継者たちによって続けられた。(高見健一 2011:28)

古里兄弟的德语词典在他们去世后由继承者们继续撰写。(筆者訳)

したがって、無情物が主語であり、仕手が特定の人物である例(48)から例(50)までにおけるbのような受身文は、何か特別な理由がない限り、一般的には用いられないと考えられる。

最後に、以下の例文を見てみよう。

(54) 今日の新聞は、僕が一番先に読もうと思っていたのに、もうお父さんに読まれてしまった。(高見健一 2011:36)

我本来想第一个看今天的报纸的，但是却被爸爸抢先了。(筆者訳)

(55) 一郎の帽子は兄にかぶられて、ぶかぶかになった。(高見健一 2011:36)

一郎的帽子被哥哥戴得松松垮垮的。(筆者訳)

(56) ここに洗濯物を干されると、嫌なんだよなー。(高見健一 2011:48)

在这里晾衣服真讨厌。(筆者訳)

(57) この手紙、太郎に破られたんです。(高見健一 2011 : 37)

这封信被太郎撕破了。(筆者訳)

(58) あのおもちゃは、お父さんに捨てられてしまった。(高見健一 2011 : 38)

那个玩具被爸爸给扔了。(筆者訳)

(59) 玄関のドアが次郎に壊された。(高見健一 2011 : 38)

玄关的大门被次郎弄坏了。(筆者訳)

例(54)から例(56)まではいずれも高見健一(2011:23)で提出した視点規則に違反しているが、話し手が被害や迷惑を被っていることが文中に明記されているので、第三者の受身文として適格な受身文と看做される。例(57)から例(59)までも同じ分析ができるが、文中に用いられる動詞の相違に注目していただきたい。

例(54)の「読む」、例(55)の「かぶる」、例(56)の「干す」はすべて中立的・客観的な意味を伝える動詞であるが、例(57)の「破る」、例(58)の「捨てる」、例(59)の「壊す」はいずれも被害・迷惑の意味を伝達する動詞である。例(54)から例(56)までにおける動詞の語彙特性として、被害・迷惑の意味合いが含まれていないが、話し手が迷惑をしているという明確な表現が文中に現れるとしたら、適格と看做す。それに対し、例(57)から例(59)までにおける動詞の語彙特性として被害・迷惑の意味が内包され、これらの動詞を表す出来事を受身文で述べると、話し手が被害や迷惑を被っていると推測される。

#### 4.2.4.2 自動詞を用いる場合

例(27)から例(29)までを再びご覧ください。

(27) そのうちに、八歳で父に死なれた私は、出先生を父のように思うようになった。(渡邊恒雄：わが人生記)

后来，八岁就死了父亲的我把出先生当成了自己的父亲。(筆者訳)

(28) \*富士山は先週、山田君に登られた。(同上)

\*上周富士山被山田爬了。(筆者訳)

(29) この山は、もう数百年も前に山頭火に登られている。(高見 2011 : 31)

这座山在几百年以前被山头火登顶过。(筆者訳)

例(27)は自動詞「死ぬ」を用いる典型的な第三者の受身文である。中国語では“被死”などの表現は文法上に認められないが、日本語において「死ぬ」「泣く」「来る」のような自動詞を使う受身文が多々見られる。そして、例(28)と例(29)は同じ自動詞である「登る」を用いている。なぜ例(28)は非文であるが、例(29)は相手の受身文として成立しているのであろうか。

高見健一(2011:24-29)によると、受身文は利害の意味を伝達するときに適格となるという。例(27)では、幼い頃に父親が死んだことによって「私」が大変苦勞したということが推測できるので、適格な文と看做す。それに対し、例(28)では、被害

や迷惑の意味が伝達されるのに、山田君が富士山に登っても、無情物である富士山は何の被害も迷惑も受けないので、適格な文とは認められない。それに、例(28)は高見健一(2011:25)で取り上げられた「話し手は一般に、自分に近い、親しみのある人や物寄りに自分の視点を置き、それを文の主語または主題にして該当事象を述べる」という視点原則にも違反しているため、不適格な文と判断する。しかし、例(29)を見れば、主語が「この山」という無情物であり、仕手が「山頭火」という特定の間人であるため、話し手の視点原則に違反しているが、「山頭火」が数百年も前に「この山」に登ったという事実により、「この山」は由緒のある山であるというような特徴付け、性格付けがされている。

さらに、下記の自動詞を用いる第三者の受身文を検討しよう。

(60) あー、お父さんに先にトイレに入られちゃったよ。(高見健一 2011:60)

啊啊，爸爸居然抢在我前面进了厕所。(筆者訳)

(61) 妻に実家に帰られて、一人なんです。(高見健一 2011:60)

老婆回娘家了，丢我一个人。(筆者訳)

(62) 店長は、年末セールなのに、従業員に倒れた。(高見健一 2011:62)

在年末促销的时候店员病倒了。(筆者訳)

(63) 隣の猫に夜通し鳴かれ、よく寝られなかった。(高見健一 2011:60)

邻居家的猫叫了一整晚，所以没睡好。(筆者訳)

(64) 僕は帰り道、雨に降られて、びしょ濡れになった。(高見健一 2011:61)

我在回家路上被雨淋得湿透了。(筆者訳)

(65) エアコンに故障されて、暑くてかなわなかった。(高見健一 2011:61)

空调居然坏了，热死我了。(筆者訳)

(66) ? 卒論の大事な時期にパソコンに壊れられて、困ってしまった。(高見健一 2011:61)<sup>12)</sup>

在写毕业论文这么重要的时刻电脑居然坏了，愁死我了。(筆者訳)

(67) \*風呂場の電球に切れられて、昨夜は風呂に入れなかった。(高見健一 2011:51)

澡堂的电灯不亮了，昨晚没洗成澡。(筆者訳)

(68) \*うどんを食べようとしたら、メガネに曇られて、辺りが見えなかった。(高見健一 2011:51)

正要吃乌冬面，结果眼镜起雾了，看不见眼前了。(筆者訳)

(69) \*みかんに腐られて、食べられなかった。(高見健一 2011:51)

橘子坏了，不能吃了。(筆者訳)

例(60)から例(63)までにおける受け手主語はいずれも有情物であるが、例(60)

12) 「?」は不自然な文を表す。以下はこれに従う。

から例(62)までの受け手主語は人間であり、例(63)の受け手は動物である。それに対して、例(64)から例(69)までにおける受け手主語はいずれも無情物であるが、例(64)と例(65)は適格と見られ、例(66)はやや不自然ながら適格な受身文と思われる。それ以外はすべて不適格な受身文と看做される。

高見健一(2011:60-66)によると、日本人は何か迷惑を被った際、その迷惑を他人のせいにすると考える傾向があるが、無情物のせいであると考えことは少ない。なぜなら、ある人が行う行為がほかの人に様々な影響を及ぼし得るに対し、無情物とは感情的なつながりをあまり持たず、無情物が人間に何かを行うこともかなり少ないためである。人はある出来事で迷惑を被り、その迷惑がある人のせいであると思う場合、その人がその出来事を意図的に引き起こしたとすれば、その人に迷惑の責任を帰することができる。しかし、例(62)のように、「店員」が非意図的に「倒れた」としても、この出来事により「店長」が迷惑を被られたという場合もある。

また、人間の場合と異なり、無情物に責任を求めても、その責任を無情物がとってくれるわけではないので、そのようなことをしても無意味であるという。この観点から以上の例文を考えると、適格か否かの判断基準が明白に見えてくるであろう。ただし、無生物の場合でも、例(64)の「雨」などが自然の力を持ち、その力で人間に何かを行い、影響を与えるために、迷惑の責任をそれらに求めることは、自らの力を持たず、人間に何も行わない無情物に責任を求めるより合理的なためである。よって、同じ無情物であっても、自然の力を持つものと、自らの力を持たない無情物とは区別する必要がある。さらに、例(65)における「エアコン」のような機械類は、例(67)の「電球」と例(68)の「メガネ」のような純粋な無情物とは違い、人がスイッチを入れて作動させれば、その後は自分で動いて機能する。それゆえ、機械類も自然の力と同様に自らの力を持っているかのように考えることができると高見健一(2011)が指摘している。

以上の例文を考察することより、人が被った迷惑を何のせいにするかに関して、ある階層関係があり、その階層関係の左側の要素ほど仕手になりやすいと思われる。以下の[表4-5]に示している。

[表4-5]仕手になりやすさの階層

人間 > 動物 > 自然の力・機械類 > 無情物

さらに、以下の例文を見てみよう。

(70) a\*学生にしゃべられた。(高見健一 2011:67)

\*被学生讲话。(筆者訳)

b 学生に授業中ペチャクチャしゃべられ、授業がうまく進まなかった。(高

見健一 2011 : 67)

学生在课堂上噤里啪啦地讲话，课都上不下去了。（筆者訳）

(71) a\*学生に廊下を走られた。（高見健一 2011 : 66)

\*被学生在走廊上跑来跑去。（筆者訳）

b 学生に廊下を走られると、研究の邪魔になる。（高見健一 2011 : 66)

学生在走廊上跑来跑去，打扰了我的研究。（筆者訳）

例 (70a) と例 (71a) には迷惑の意味が示される文脈がないので、不適格な受身文と考えられる。それに対、例 (70b) と例 (71b) では迷惑の意味を表す文脈があるので、典型的な第三者の受身文と看做される。

#### 4.2.4.3 受身文の成立条件のまとめ

高見健一 (2011 : 21-32) では、受身文とは、話し手がある出来事とその動作主ではなく、動作の影響を受ける対象に自分の視点を寄せて述べる文であると指摘している。そして、対応する能動文がある受身文（本稿では直接対象の受身文、相手の受身文、持ち主の受身文という 3 種類の受身文を指す）は次の三つの制約のどれか（あるいは二つ以上）を満たす場合に、適格になると主張している。

(i) 受身文は利害の意味を伝達するときに適格となる。

(ii) 受身文は動詞が表す事象が、受け手を直接対象としてなされ、その状態に変化や影響を及ぼす場合にのみ適格な文であると認められる。ただし、無情物が受け手主語で、仕手が特定の人物の受身文は、この制約を満たしても話し手の視点規則に違反するので、不適格となる。

(iii) 受身文は話し手がその主語を特徴付け・性格出付けるときに適格となる。以上が受身文の成立制約である。

さらに、高見健一 (2011 : 60-72) では対応する能動文がない受身文（本稿では第三者の受身文と呼ぶ）の基本的機能についても検討している。まず、第三者の受身文における受け手主語がある出来事により被害・迷惑を被ること、つぎはその被害、迷惑が仕手のせいであること。本稿ではこの説に賛成し、第三者の受身文の適格性を左右する要素を以下のようにまとめる。

(i) 無情物より有情物のほうが仕手になりやすい。

(ii) 仕手が自ら出来事を引き起こせる。

(iii) 文中に被害や迷惑の意味合いを示す文脈がある。

以上の三つの要素を同時に満たす場合に、適格な第三者の受身文と認める。

#### 4.2.5 おわりに

本稿は現代日本語の受身文に関する先行研究を踏まえ、許明子 (2004 : 99) で挙げられている受身文の作れない「所動詞」について再考した。さらに、「所動詞」以外

の動詞を用いても受身文を作れない場合があるので、受身文の成立条件を解明するために考察を行った。まずはヴォイスの体系を中心に日本語の受身文を再分類し、文法上の受身文と語彙上の受身文という二種類に大きく分けるうえに、文法上の受身文をさらに対応する能動文がある受身文（直接対象の受身文・相手の受身文・持ち主の受身文）と対応する能動文がない受身文（第三者の受身文）という二種類に分けた。

そして、対応する能動詞がある受身文の成立条件を以下のようにまとめた。①利害の意味を伝達すること、②受身文は動詞が表す事象が受け手を直接対象としてなされ、その状態に変化や影響を及ぼすこと、③話し手が受け手主語を特徴付け・性格付けることである。

最後に、対応する能動詞がない受身文の成立条件についても検討した。その条件は、①無情物より有情物のほうが仕手になりやすいこと、②仕手が自ら出来事を引き起こせること、③文中に被害や迷惑の意味合いを示す文脈があること、という三点である。

## 言語資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言 (2012)

『時の顔』『小説宝石』『秘密の顔を持つ女』『わが人生記』『秘めたる殺人』『アナザヘヴン』『ミステリ作家の読む本』『北京&東京』『都市の記憶』『坂本竜馬』『億万長者の策略』『パラケルススの娘』

CCL 语料庫 北京大学中国语言学研究中心 (2009)

《士兵突击》《月朦胧鸟朦胧》《旅法师》《与死神擦肩而过》《激荡三十年》《时光向左女人向右》

## 参考文献

- 吕叔湘 (1944) 《中国文法要略》商务印书馆
- 三上章 (1972) 『続・現代語法序説』くろしお出版
- 鈴木康之 (1977) 『日本語文法の基礎』三省堂
- 吕叔湘 (1980) 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 野村剛史 (1982) 「自動・他動・受身動詞について」『動詞の自他』ひつじ書房
- 王还 (1983) 〈英语和汉语的被动句〉《中国语文》第6期
- 豊嶋裕子 (1988) 「“被”字句の成立条件にかんして」『中国語学』235期 日本中国語学会
- 杉本武 (1991) 「二格を取る自動詞—準他動詞と受動詞—」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 木村英樹 (1992) 「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』第389号 中国語友の会
- 楊凱榮 (1992) 「文法の対照的研究——中国語と日本語」『日本語と日本語教育』第5卷明治書院
- 马真 (1997) 《简明实用汉语语法教程》北京大学出版社
- 吕叔湘 (1999) 《现代汉语八百词（增订版）》商务印书馆
- 刘振泉 (2003) 《日语语法新编》北京大学出版社
- 許明子 (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 梁鴻雁 (2004) 《HSK 应试语法》北京大学出版社
- 刘月华・潘文娛 (2004) 《实用现代汉语语法》商务印书馆
- 徐昌火 (2005) 《政府 HSK 汉语语法》北京大学出版社
- 白晓红 赵卫 (2007) 《汉语虚词 15 讲》北京语言大学出版社
- 中島悦子 (2007) 『中日対照研究ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』おうふう出版
- 杨海茹 (2007) 〈关于日语动词中部分含有被动意义动词的研究〉《嘉兴学院学报》



第 19 卷第 4 期

- 方绪军 (2008) 《对外汉语词汇教与学》北京师范大学出版社
- 张晓帆 (2008) 〈日语中的自动词意义被动句〉 《日语学习与研究》2008 年第 6 期
- 林青樺 (2009) 『現代日本語におけるヴォイスの所相—事象のあり方と関わりから—』くろしお出版
- 李德津 金德厚 (2009) 《汉语语法教学》北京语言大学出版社
- 楊彩虹 (2009) 「中国語受身文の成立条件—日本語との対照研究を通して—」 NEAR conference proceedings working papers
- 耿二岭 (2010) 《图示汉语语法》北京语言大学出版社
- 卢福波 (2011) 《对外汉语教学实用语法》北京语言大学出版社
- 高見健一 (2011) 『受身と使役—その意味規則を探る—』 開拓社出版
- 高橋弥守彦 (2011) 「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語について」 中日対照言語学会 ヴォイス特集号
- 孟熙 (2012) 「受動詞の意味的特徴に関する一考察」 言語学論叢オンライン版第 5 号
- 路浩宇 (2015A) 「他動詞が用いられる中国語の受身文について」『多元文化』14 号 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編
- 路浩宇 (2015B) 「第一人称が動作主になる中国語の受身文：自己批判の意味を表す場合」『多元文化』15 号 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編

## 第五章 中日対照から見る中国語の“被字句”の学習難点

この章では日本人の中国語学習者のために、中日対照の視点から中国語の“被字句”における学習難点を分析する。まず、中国語の“被字句”において、「“我”＋“的”＋N」という構造をとる受け手主語がよく見られるが、日本語にはこのような表現はめったにないと思われる。日本語において主語が第一人称、つまり「私」である場合、主語を省略することが非常に多い。よって、日本人の中国語学習者にとって、このような“被字句”を作りにくいと言えるであろう。

そして、この構造におけるNはあまり制限されていない。モノ名詞・カラダ名詞・有情物名詞・コト名詞など、いずれも「“我”＋“的”＋N」という構造をとり受け手主語となる。例えば、“我的钱包在公共汽车上被小偷偷走了。”（私の財布はバスでスリにすられた。）“我的手被小猫抓了。”（私の手はネコに引っ搔かれた。）“我的父亲被强盗打伤了。”（私の父が強盗に殴られて怪我をした。）“我的计划被他打乱了。”（私の計画は彼によって破壊された。）“我的心都被他伤透了。”（彼のせいで私の心がボロボロになった。）などの文が挙げられる。しかし、日本語においてこのような構造をとる受け手主語はめったに見られない。このような“被字句”をより分かりやすく説明するために、第一節では、「“我”＋“的”＋N」という構造をとる受け手主語の“被字句”について検討する。

また、日本語における持ち主受身文を中国語に訳す際、二つの文式で表現できる。例えば、「私はバスで泥棒に財布を取られた。」という受身文を中国語に訳すと、“我在公共汽车上被小偷偷了钱包。”と“我的钱包在公共汽车上被小偷偷走了。”という二つの表現ができる。前者は持ち主主語の受身文であり、後者は所有物主語の受身文である。前者の構文構造は「NP<sub>2</sub>＋“被”＋NP<sub>1</sub>＋VP＋NP<sub>3</sub>」と、後者の構文構造は「NP<sub>2</sub>＋“的”＋NP<sub>3</sub>＋“被”＋NP<sub>1</sub>＋VP」とまとめられる。そのなかで、意味からみればNP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>は所有関係である。つまり、NP<sub>2</sub>は持ち主で、NP<sub>3</sub>はその所有物である。文法上から見ればいずれも問題ないが、中国人は一般的に後者を使う。第二節では、“被字句”における「所有物の受身文」と「持ち主の受身文」について分析する。

最後に、日本語の受身文は他動詞のほか、「赤ちゃんに泣かれた」「雨に降られた」のような自動詞によっても作られ、主語が迷惑を蒙ったという意味を表わせる。これらの受身について、先行研究では「利害の受身」「はた迷惑の受身」「第三者の受身」などと呼ばれている。このような自動詞による受身文は中国語、英語や韓国語などの他言語には見られない表現形式であるため、日本語特有の表現であると言われている。

しかし、中国語の“被字句”において「はた迷惑」が表せる表現は存在している。以下の例文を見てみよう。

a 门被张三锁上了。（ドアは張三によって鍵をかけられた。）

b 门被张三给锁上了。（ドアは張三によって鍵をかけられた。/私は張三にドアの鍵をかけられた。）

c 门被张三给它锁上了。（ドアは張三によって鍵をかけられた。）

d 门被张三给我锁上了。（私は張三にドアの鍵をかけられた。）

例 a と例 b は一見ほぼ同じ構造を取っているが、意味的に見れば例 a のほうがより複雑である。例文 a における“给”のあとに“它”か“我”という客語を入れることができる。“我”を入れる場合、単に「ドアは張三によって鍵をかけられた。」という客観事実を陳述しているだけでなく、「ドアは鍵をかけられた。」ということによって第三者の“我”が被害を蒙ったという意味合いが生じている。第三節では、このような“被字句”についても考察する。

## 第1節 “被字句”における構造助詞“的”を用いる受け手主語の再考

### 5.1.1 はじめに

中国語の受身表現は、一般に“被字句”、意味上の受身表現、語彙上の受身表現の3種類に大別できる。高橋弥守彦(2013)によれば、“被字句”の構文構造は全部で4種類<sup>1)</sup>に分けられる。本稿では、“被字句”における構造助詞“的”を用いる受け手主語について検討する。まず、以下の例文を見てみよう。

- (1) 随着声音，我的耳朵被两个指头钳住。(戴厚英：人啊，人)  
その声につづいて、耳たぶが二本の指につまみ上げられた。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)
- (2) 我的钱包被人给偷走了。(高橋弥守彦 2012B : 7)  
財布が盗まれた。(高橋弥守彦訳)
- (3) 同志们，我的爷爷就是被八国联军的老沙皇打死的呀，老沙皇一枪打在我爷爷脑门儿上。(陈建功：盖棺)  
同志諸君、わたしのじいさんは、八国連軍のとき「一九〇〇年の義和団事件」旧ツァーリに殺されました。脳天に一発ぶちこまれて死んだのです。  
(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)
- (4) 我的心被揪紧了，深感世界末日来临的惊恐。(卞庆奎：中国北漂艺人生存实录)  
心がぎゅっと掴まれているように、世界終末の日がやってくる恐怖をしみじみと覚えた。(筆者訳)
- (5) 我没有听见声音，我的歌声被泪水噎住了。(张海迪：轮椅上的梦)  
涙に飲まれて自分の声も聞き取れない。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)
- (6) 我明白了我的名声被他玷污，所以才把他告到法庭。(大江健三郎：生的定义)  
自分の名誉は彼によって汚されたことが分かったので、彼を裁判所に訴えた。(筆者訳)

例(1)から例(6)まではいずれも構造助詞“的”を用いる受け手主語で作る“被字句”である。筆者はそれらの文を「持ち主＋“的”＋持ち物(N)＋“被”＋仕手＋

1) 高橋弥守彦(2013)によれば、“被字句”の構文構造は、基本構造「名詞1＋“被”＋(名詞2＋)動詞＋その他」、派生構造1「名詞1＋“被”＋名詞2＋(“所”＋)動詞」、派生構造2「名詞1＋“为/做/作/成”＋名詞性語句」、派生構造3「名詞1＋“被”＋名詞2＋“给”＋(名詞3＋)動詞＋その他」という四種類に分けられる。

動詞（＋その他）」という構造にまとめた。そして、本稿で取り上げる構造助詞“的”を用いる受け手主語の“被字句”は、その「持ち主」を“我”に限定することとした。つまり、「“我”＋“的”＋N＋“被”＋仕手＋動詞（＋その他）」構造で作る“被字句”を研究対象とする。

収集してきた実例は全部で756例である。それらの例文におけるNP（名詞連語）の中心語Nについて、筆者は以下のように分けた。

- ① 身体名詞（153例）：例（1）のように、“耳朵”“腿”“脑袋”“双手”“眼睛”など、身体部分を表す名詞。
- ② 物品名詞（160例）：例（2）のように、“钱包”“房子”“画”“自行车”“书”など具体的な形がある所有物を表す名詞。
- ③ 人物名詞（103例）：例（3）のように、“爷爷”“丈夫”“朋友”“同胞”“妻子”など、人間を表す名詞。
- ④ 心理名詞（211例）：例（4）のように、“心”“感情”“希望”“疑惑”“注意”など、人間の感情、感覚や態度を表す名詞。
- ⑤ 属性名詞（82例）：例（5）のように、“名声”“成果”“地位”“名字”“仗义”など、人間性や人間の側面を表す名詞。
- ⑥ 行為名詞（47例）：例（6）のように、“歌声”“工作”“计划”“罪行”“睡眠”など、人間の行為や動作過程を表す名詞。

その中では、身体名詞、物品名詞と人物名詞は具体名詞に属し、心理名詞、属性名詞と行為名詞は抽象名詞に属していると思われる。そして、以上挙げたデータを分析すると、構造「“我”＋“的”＋N＋“被”＋仕手＋動詞（＋その他）」におけるNの分類結果として、Nは抽象名詞である場合がほぼ全体の半分ということが分かる。さらに、“我的”の後ろに最も来やすい名詞は心理名詞という傾向がはっきり見える。本稿では、その傾向について検討する。

### 5.1.2 “被字句”の受け手主語

本稿では、受動マーカ―の有無によって中国語の受動表現を「有標の受動表現」と「無標の受動表現」という二種類に大別している。そして、介詞標記の受動表現いわゆる“被字句”の構文構造をさらに4種類に下位分類し、以下の[表5-1]のように体系的にまとめる。

[表5-1] 介詞標記の受動表現の構文構造

- ① 単一標記の受動表現の構文構造：  
「名詞1＋“被”＋（名詞2＋）動詞＋その他」  
（7）他被人打死了，对不？（廉声：月色狰狞）

彼は殴り殺されたでしょ。(筆者訳)

② 複数標記の受動表現の構文構造：

②-1 「名詞 1 + “被” + 名詞 2 + (“所” +) 動詞」

(8) 小柯的母亲是个神经质的女人，她经常趁儿子熟睡之际偷偷捋顺他凌乱的头发，小柯有时被母亲所惊醒，他对母亲的这个习惯很反感。(苏童：灰呢绒鸭舌帽)

柯さんの母親は神経質な女で、自分の息子が熟睡しているうちに彼の髪の毛をわざと乱すことがある。柯さんはたまに母親に起こされて、母親のこういう癖をととても嫌がっている。(筆者訳)

②-2 「名詞 1 + “被” + (名詞 2 +) 動詞 + “为/做/作/成” + 名詞性語句」

(9) 不说话的人不仅没有权力，而且会被人看做不存在，因为人们不会知道你。(余华：命中注定)

声を出さない人には権力がないし、存在すら他人に認められない。だって、そんな人は知られるはずがないからだ。(筆者訳)

②-3 「名詞 1 + “被” + 名詞 2 + “给/把” + (名詞 3 +) 動詞 + その他」

(10) 同时，他又怕自己的村子也教敌人给屠了。(老舍：四世同堂)

同時に彼は自分の村も敵に殺されるのが心配になった。(筆者訳)

本節では、“被字句”の中で一番よく使われる構造①を研究対象とし、その受け手主語について分析する。「受け手」は、高橋弥守彦(2012A: 2)によればヒト、モノ、コト、カラダ、空間の5種類に分けられ、いずれも特定である。“被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象である。この意味構造の有無が受身表現であるか否かを決める。つまり、「受身のむすびつき」をとるかどうかは、受身表現を含む主述文を中心とする一つの体系において誰に焦点を当てるかによって決定される。そのため、主語はヒトである場合が多い。そして、なぜ受け手は特定でなければならないかという、対象が特定であってこそ、受身のむすびつきの中の仕手が受身を意味する出来事を行えるので、「受け手」は必ず特定でなければならないと言える。

次に、鲁宝元(2005: 157-159)<sup>2)</sup>では、中国語の“被字句”における受け手主語に

2) 鲁宝元(2005)では、“被字句”を“直接整体受动”“直接部分受动”“间接影响受动”という3種類に分けた。まず、“直接整体受动”の基本構文構造は“名词(受动者)+被/让/叫+名词(施动者)+(给)+动词(施动者所发出的动作)+其他成分”であり、例えば、“孩子被爸爸打了一顿。”。次に、“直接部分受动”は、構造①“名词(受动者)+的+名词(受损害或受益的局部)+被+名词(施动者)+动词(施动者所发出的动作)”と構造②“名词(受动者)+被+名词(施动者)+(把)名词(受损害或受益的局部)+动词(施动者发出的动作)”という二つの構文構造があり、例えば、“我在电车上被旁边的人把脚踩了。”“他的衣服划船时被水打湿了。”。最後に、“间接影响受动”の基本構文構造は“名字(受动者)+被+名词(施动者)+动词(施动者所发出的动作)+其他成分”であり、例えば、“他被女朋友哭得心烦意乱。”。

ついて、以下のように述べている。

主語受動者不局限于“我”或“我方”，也不局限于是不是有生命的事物，可以是任何人或任何事物；整体或部分，直接或间接；受害或受益；受害多于受益。汉语的直接部分受动往往把整体作为受动部分的定语来表达，这样更自然明确。受动的主语必须是有定的。

要するに、中国語の“被字句”において、「私」や「当方」だけではなく、全体的なものや部分的なもの、ほとんどの人物や無情物が主語の位置に立つことができる。つまり、“被字句”の受け手主語についての制限はかなりゆるいと言ってもよいであろう。次に、意味構造から見れば受身表現をとるときは、被害・受益・中性があるが、被害が一番多いと言われている。そして、“直接部分受動句”（日本語の持ち主受身文と対応する“被字句”であり、本稿で研究対象とする構文構造「“我”＋“的”＋N＋“被”＋仕手＋動詞（＋その他）」では、主語は「ダレ ノ ナニ」という構造をとるのが自然で明確な表現であると思われる。例えば、“我的手被小猫抓了。（私は手を猫に引っ掻かれた。）”“我的钱包在公共汽车上被小偷偷走了。（私はバスで泥棒に財布を取られた。）”などが挙げられる。

筆者は上掲の二人の意見を参考とし、“被字句”における受け手主語について以下のようにまとめる。

- ① “被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象である。
- ② 「受け手」は一般にヒト、モノ、コト、カラダ、空間に分けられ、受け手主語についての制限はかなりゆるい。
- ③ 受け手主語は「受身のむすびつき」の対象なので、特定でなければならない。

### 5.1.3 構造助詞“的”を用いる受け手主語

本節では、“被字句”における構造助詞“的”を用いる受け手主語について検討する。筆者は北京大学中国語学センターと北京日本学センターがそれぞれ開発したコーパスを利用し、「“我”＋“的”＋N＋“被”＋仕手＋動詞（＋その他）」構造をとる実例を756例収集してきた。次に本構造における名詞Nの分類基準について説明する。

#### 5.2.3.1 Nの分類について

筆者は集めてきた「“我”＋“的”＋N＋“被”＋仕手＋動詞（＋その他）」の構造をとる768個の例文を考察したうえ、そのNを身体名詞、物品名詞、人物名詞、心理名詞、属性名詞と行為名詞という6種類に分けることにした。その中、身体名詞、物品名詞と人物名詞は具体名詞に属し、心理名詞、属性名詞と過程行為名詞は抽象名詞に属していると思われる。

① 身体名詞：身体部分を表す名詞

- (11) 我的手腕被流弹打伤，扎着绷带。（赵忠范：50年前的救助，便有了50年后一个日本女人的——一份跨国寻人启事）  
流れ弾が腕にあたって、包帯を巻いている。（筆者訳）
- (12) 走在久违的学府路上，我的眼睛被白雪刺得眯成了一条缝。（人民日报1995年2月份）  
久々に学園通りを歩くと、白雪が眩しすぎ目を閉じた。（筆者訳）
- (13) 当时我的腿被钢筋水泥压住了，武警战士想了很多办法才把我弄出来。（北京大学中国語学研究中心 CCL コーパス）  
その時、鉄筋コンクリートに足を圧迫されたが、武装警察が知恵を絞って、何とか私のことを助け出してくれた。（筆者訳）

② 物品名詞：具体的な持ち物を表す名詞

- (14) 我的车肯定是被那辆白色丰田撞了！（张平：十面埋伏）  
私の車は、あの白いトヨタにぶつけられたに違いない！（筆者訳）
- (15) 在觅渡桥小学读书时，我的风景画被送到武进县学生画展展出，受到奖励。（北京大学中国語学研究中心 CCL コーパス）  
覓渡橋小学校を通っていたとき、私が描いた風景画は武進県学生絵画展で展示されて表彰された。（筆者訳）
- (16) 我的房子被征用了，没有得到补偿费，你们能帮我吗？（新华社2004年6月份）  
家は徴用されたが、補償金はもらえなかった。どうにかしてくれないか？  
（筆者訳）

③ 人物名詞：“我”とかかわる人間や動物などの人物を表す名詞

- (17) 她眼含泪水说：“4年前的一天早上，我的丈夫突然被一伙匪徒拖出去，开枪打死了。我在杜尚别的一处房子也被人抢去。”（人民日报1995年7月份）  
「四年前の朝、夫は突然強盗団に引きずり出され銃殺された。私はドゥシャンベで買った家も奪われた。」と彼女は涙ながらに話した。（筆者訳）
- (18) 自从1966年“文化大革命”爆发以来，我的父亲被当作“全国第二号最大的走资本主义道路的当权派”而被打倒。（人民日报1993年4月份）  
1966年の「文化大革命」が起きてから、父は「資本主義の道を進む全国二番目の実権派」とされ、ひどい仕打ちを受けた。（筆者訳）
- (19) 我的朋友终于被激怒了。（礼平：晚霞消失的时候）  
私の友達はついにひどく怒らせた。（筆者訳）

④ 心理名詞：人間の感情、感覚、心理活動や態度を表す名詞



- (20) 我的心就像被针扎了一样疼。(新华社 2004 年 9 月份)  
心に針で刺されたように痛いと感じている。(筆者訳)
- (21) 每当我的设计意图能被大家理解、接受时,我真感到高兴。(北京大学中国語学研究中心 CCL コーパス)  
自分の設計意図が皆さんに理解されて受け入れられるたびに、心から喜んで  
いる。(筆者訳)
- (22) 在这个世界里,我的幸福已被剥夺。(北京大学中国語学研究中心 CCL  
コーパス)  
この世では、私の幸せはすでに奪われてしまった。(筆者訳)

⑤ 属性名詞：人間性や人間の側面を表す名詞

- (23) 不过,我相信总有一天我的地位会被世界所认识。(北京大学中国語学研  
究センター CCL コーパス)  
しかし、私の地位はいつかこの世に認められると、私は信じている。(筆  
者訳)
- (24) 从此,我的姓名被束之高阁,再也无人喊叫了。(市场报 1994 年)  
それから、私の名前は誰にも呼ばれなくなった。(筆者訳)
- (25) 我的潜能被发掘出来了,我的口才和组织能力得到了锻炼。(人民日报 1996  
年 7 月份)  
潜在能力が引き出されたので、弁舌やリーダーシップは鍛えられることが  
できた。(筆者訳)

⑥ 行為名詞：人間の行為や行動過程を表す名詞

- (26) 在这些日子里,我的生活被黑暗和乌云笼罩着,我失去了继续生活下去的希  
望。(北京大学中国語学研究中心 CCL コーパス)  
この日々では、私の生活は暗闇と黒雲に覆われていて、これ以上生きてい  
く希望が無くなった。(筆者訳)
- (27) 我只想我的进言被采纳,我只想前线将士少流血,我只想我军打胜仗。(同  
上)  
ただ自分の進言を受け入れてほしい。ただ前線の兵士たちは無駄な犠牲を  
払わないでほしい。ただわが軍が勝利をしてほしい。
- (28) 我痛哭失声。我的哭本是被毛泽东所感动,是痛悔自己工作不慎。(权延赤:  
红墙内外)  
思わず泣き出した。それは、毛沢東に感動され、自分の仕事上のミスをひ  
どく後悔したのだ。(筆者訳)

ここでは心理名詞と属性名詞の区別について少し説明する。心理名詞は人間の感情、  
感覚、心理活動や態度を表すので、主に主観的なことを指している。それに対し、属

性名詞はある人間の客観的素質や社会的評価を表しているので、人間の意志によって変えない事を指している。次の節では、「“我”+“的”+N」という構造におけるNの分類結果を分析する。

### 5.2.3.2 Nの分類結果の検討

#### 5.2.3.2.1 Nの分類結果

筆者は北京大学中国語学センターと北京日本学センターがそれぞれ開発したコーパスを活用し、「“我”+“的”+N+“被”+仕手+動詞(+その他)」構造の用いられている実例を756例集めた。次に、構造「“我”+“的”+N+“被”+仕手+動詞(+その他)」におけるNについての分類結果をまとめてみると、次の[表5-2]のように整理できる。

[表 5-2] Nの分類結果

| 「“我的”+N」における N   |      | 例数(パーセンテージ)    | 具体例  |
|------------------|------|----------------|--|
| 具体名詞<br>(55.09%) | 身体名詞 | 153 例 (20.24%) | “头、脸、筋骨、脑袋、后颈、身体、手、腿、双臂、左膝、眼睛、喉头、无名指、身子、肩部、胸部、器官”など  |
|                  | 物品名詞 | 160 例 (21.16%) | “背包、车、画、房子、债券、著作、书、小说、自行车、工资、身份证、衣服、演讲稿、项链、信、飞机、马”など |
|                  | 人物名詞 | 103 例 (13.62%) | “朋友、同胞、妻子、丈夫、父亲、母亲、弟弟、堂兄、伯父、祖先、邻居、老师、同事、战友、客人”など     |
| 抽象名詞<br>(44.91%) | 心理名詞 | 211 例 (27.91%) | “心、疑虑、愿望、美梦、理解、想法、意见、演讲欲、决心、忧郁、激动、理智、意识、感觉、幸福、失望”など  |
|                  | 属性名詞 | 82 例 (10.85%)  | “名字、地位、成果、荣誉、事迹、仗义、潜能、病情、丑态、健康、人格、关系、存在、成绩、家庭、职务”など  |
|                  | 行為名詞 | 47 例 (6.22%)   | “举动、出生、进言、拥抱、逃                                       |

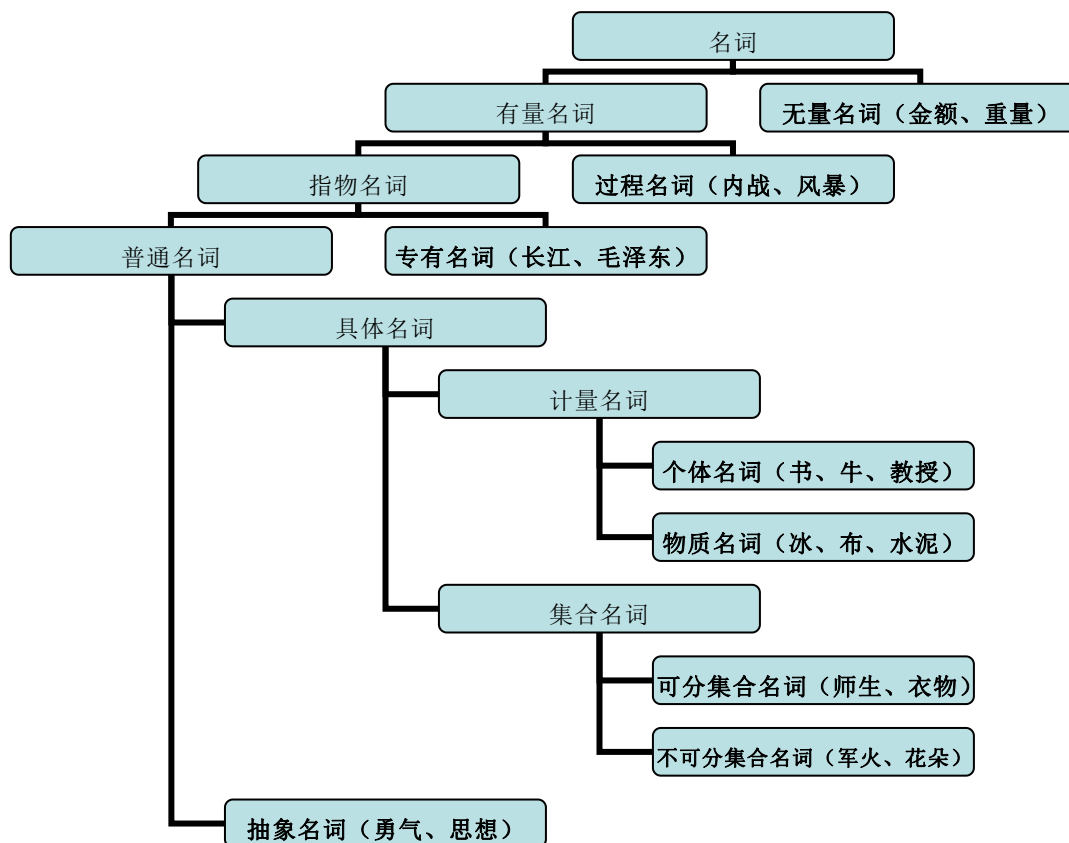
|    |              |                                     |
|----|--------------|-------------------------------------|
|    |              | 跑、请求、清唱、阅读、视线、工作、言行、警告、任职、哭、所作所为”など |
| 合計 | 756 例 (100%) |                                     |

[表 5-2]が示しているように、抽象名詞は全体の半分ぐらいを占めていることが分かる。さらに、“我的”の後ろに最も用いられやすい名詞は心理名詞という傾向がはっきり見えるので、構造助詞“的”を用いる受け手主語は人間の感情、感覚、心理活動や態度など抽象的なものを表す傾向がかなり強いとすることができる。

### 5.2.3.2.2 Nの傾向について

王惠（1998：3）では、北京大学計算言語学研究所が1991年開発した《现代汉语语法信息词典》に収録される名詞27397個を全部考察したうえ、量詞で修飾できるか否か、どんな量詞で修飾されるかによって、それらの名詞を下位分類している。王惠は、中国語における名詞を“个体名词”“物质名词”“可分集合名词”“不可分集合名词”“抽象名词”“专有名词”“过程名词”“无量名词”の8種類に分けている。ここで[表 5-3]を見てみよう。

[表 5-3]名詞の下位分類



[表 5-3]で示している“个体名词”というのは、専用の个体量詞があり、一つずつで数えられる名詞である。例えば、“一头牛、一位教授、一本书、两扇窗户”などである。“物质名词”とは、物質を表す名詞であり、个体量詞あるいは時量詞や動量詞で数えられなく、度量詞あるいは容器量詞そして団体量詞、種類量詞、成形量詞や不定量詞でしか数えられない名詞である。例えば、“一吨水泥、三桶水、一批豆油、几种布、一滴墨水、一点儿红糖”などである。“可分集合名词”とは、集合を表す名詞であり、群れを成す物事を描写するが、个体化されてもよい。「一」以外の数字プラス个体量詞だけではなく、容器量詞や種類量詞、団体量詞、不定量詞などでも数えられる。例えば、“三位兄妹、一箱衣物、几种钟表、一群师生”などである。“不可分集合名词”とは、集合を表して个体化することができない名詞である。団体量詞、容器量詞、種類量詞や不定量詞しか修飾できない。例えば、“一对夫妻、一箱书报、一些车辆”などである。“抽象名词”とは、種類量詞、成形量詞と不定量詞だけで数えられる抽象的な物事を表す名詞である。例えば、“一种精神、一线希望、一点儿勇气”などである。“专有名词”とは、この世で唯一の物事を表す名詞である。普通は量詞で修飾されない。例えば、“中国、长江、黄山、孙中山”などである。“过程名词”とは、動量詞あるいは時量詞しか修飾できなく、自然現象や人間の活動、行為を表す名詞である。例えば、“一场友谊赛、一阵暴雨、一顿晚餐、十年内战”などである。最後に、“无量名词”とは、あらゆる数量構造でも直接修飾できない名詞である。例えば、“长度、纯度、高度、厚度、大小、轻重、高低、长短、全局、全称、全文、全貌、本文、本土、本意、本色”などである。

王惠（1998：5）はさらに《现代汉语语法信息词典》に収録されている 27397 個の名詞をそれぞれ分類し、各種類の全体に占める割合を計算している。それが次の[表 5-4]に示されている。

[表 5-4] 《现代汉语语法信息词典》に収録される各分類の名詞の割合

| 名詞の下位分類   | 数     | パーセンテージ |
|-----------|-------|---------|
| “个体名词”    | 15568 | 56.82%  |
| “物质名词”    | 2914  | 10.64%  |
| “可分集合名词”  | 77    | 0.30%   |
| “不可分集合名词” | 61    | 0.20%   |
| “抽象名词”    | 2242  | 8.18%   |
| “专有名词”    | 911   | 3.33%   |
| “过程名词”    | 419   | 1.53%   |
| “无量名词”    | 5205  | 19.0%   |

王惠(1998: 3)が提出した名詞分類を参照すると、本稿で述べた「抽象名詞」は“抽象名詞”“过程名詞”“无量名詞”の集合と看做してよいであろう。[表 5-4]によると、《現代汉语语法信息词典》に収録される名詞においては、「抽象名詞」は28.71%しか占めないことが分かった。つまり、中国語の名詞において「抽象名詞」は三分の一にも達していないと言ってもよいであろう。それに対し、「“我”+“的”+N+“被”+仕手+動詞(+その他)」という構造をとる“被字句”におけるNでは、半分ぐらいは抽象名詞である。その原因はどこにあるのであろうか。

### 5.2.3.2.3 構造助詞“的”を用いる受け手主語

上述したように、「“我”+“的”+N+“被”+仕手+動詞(+その他)」構造をとる“被字句”におけるNは半分ぐらいが抽象名詞である。そして、筆者の調査によると、Nは心理名詞である場合が最も多い。つまり、「“我”+“的”+N」を主語とする“被字句”は、よく“我”の心理活動や感情状態を描写するとき使われると言ってもよいであろう。本節では、その言語事実の理由を解明しようとする。

ここで、前に挙げた“被字句”の例文をもう一度見てみよう。それらの文を対応する能動文と“把字句”に書き換えれば、以下のようになる。

(20) '我的心就像被针扎了一样疼。(“被字句”)

就像针扎了我的心一样疼。(能動文)(?)(?は不自然あるいは意味不明であることを表す。以下はそれにしたがう。)

就像针把我的心扎了一样疼。(“把字句”)(?)

(21) '每当我的设计意图能被大家理解、接受时,我真感到高兴。(“被字句”)

每当大家理解、接受我的设计意图时,我真感到高兴。(能動文)

対応する“把字句”なし。

(22) '在这个世界上,我的幸福已被剥夺。<sup>3)</sup>(“被字句”)

在这个世界上,(他的死)已剥夺我的幸福。(能動文)

在这个世界上,(他的死)已把我的幸福剥夺。(“把字句”)

さらに、次の例文も見てみよう。

(29) 我的心魂被引了去。<sup>4)</sup>(“被字句”)

3) 例(22)'の仕手は出ていないので、前後の文脈を参照することにした。“……嘴角刚刚向下一弯,只这么一弯呀,然而就在这一弯里他断了气,什么都已经完结,他的眼泪流下来了,我们企望了多日的眼泪流下来了。我想逃避,我想躲藏于无人之境。在这个世界上,我的幸福已被剥夺。求生的挣扎,惜别的眼泪,只有我看见这一个临终的苦脸。这一切都和欢乐的回忆揉在一起,成了我的心上的暗影了。对于死的无知,我也无异于他的哥哥——我的一个六岁的孩子。对于生,我又懂得一点什么呢?如果说这真是一个筵席,孩子,你为什么要先我而散去,你为什么要先我而散去呢?”(《心上的暗影》)つまり、例(22)'の仕手は、「自分」の子供の死であることが分かった。

4) 例(29)の仕手も出ていないので、前後の文脈を参照して、“祖父在街上也看见过人们所呼叫的东洋驴子,妈妈也没有奇怪。只是我,仍旧头皮顶撞在玻璃那儿,我眼看那个驴子从门口飘飘地下见了!我的心魂被引了去。”(《蹲在洋车上》)仕手は、“东洋驴子”であることが分かった。

(东洋驴子)引去了我的心魂。(能動文)

(东洋驴子)把我的心魂引去了。(“把字句”)

(30) 我的心像被这音乐洗过一样圣洁。(“被字句”)

像这音乐洗过我的心一样圣洁。(能動文)(?)

像这音乐把我的心洗过一样圣洁。(“把字句”)(?)

(31) 孩子刚聋，还能说话，唱歌，可将来还能唱歌吗？我的心被狠狠揪了一把。

(“被字句”)

孩子刚聋，还能说话，唱歌，可将来还能唱歌吗？(这件事)狠狠揪了一把我的心。(能動文)(?)

孩子刚聋，还能说话，唱歌，可将来还能唱歌吗？(这件事)狠狠把我的心揪了一把。(“把字句”)(?)

(32) 至于作者以亲子般的一往情深，细细说着农暇时节排演秦腔的种种情趣时，我的心里更会被牵引到对自己童年经验漫无边际的回溯中。(“被字句”)

対応する能動文なし。

至于作者以亲子般的一往情深，细细说着农暇时节排演秦腔的种种情趣时，(秦腔)更会把我的心里牵引到对自己童年经验漫无边际的回溯中。(“把字句”)

(33) 我的心被一种深刻的寂寞填满了。<sup>5)</sup>(“被字句”)

一种深刻的寂寞填满了我的心。(能動文)

一种深刻的寂寞把我的心填满了。(“把字句”)

以上の例文を見て分かるように、“被”の後に仕手が現れる場合と現れない場合がある。しかし、実例を考察すると仕手が出ない場合が多いことが分かる。もし仕手が現れない“被字句”を能動文と“把字句”に書き換えれば、前後の文脈を参照して仕手を補充しなければならない。例えば、例(22)’(29)(31)のようにである。さらに、例(21)’は能動文に互換できるが、“把字句”に書き換えることはできない。それに対し、例(32)は“把字句”と互換できるけれども、対応する能動文はない。しかし、書き換えた能動文と“把字句”をもとの文脈に入れたら多少違和感が感じられる。それは、話し手の視点がたびたび変わることは文章の流暢性や文脈の一貫性を損なうからである。一方、仕手が出る“被字句”を能動文と“把字句”に直接書き換えることは一応できるが、例(20)’(30)(31)のように不自然あるいは意味不明な文になる可能性がある。

5) 当我问起：“乔林，你为什么爱我？”的时候，他认真地思索了好一阵子。对他来说，那段时间实在够长了。凭着他那宽阔的额头上难得出现的皱纹，我知道，他那美丽的脑壳里面的组织细胞，一定在进行着紧张的思维活动。我不由地对他生出一种怜悯和一种歉意，好像我用这个问题刁难了他。然后，他抬起那双儿童般的、清澈的眸子对我说：“因为你好！”我的心被一种深刻的寂寞填满了。“谢谢你，乔林！”

つまり、外部の影響による“我”の心理活動や感情変化を描写するとき、「“我”＋“的”＋N」を主語とする“被字句”を使用すれば、不自然な表現が避けられる一方、文章の流暢性や文脈の一貫性もきっちり保障できるため、自然に「“我”＋“的”＋N」を主語とする“被字句”にしたのである。

#### 5.1.4 おわりに

本稿では、まず“被字句”における「受け手主語」について検討した。先行研究により“被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象と看做す。「受け手」は一般にヒト、モノ、コト、カラダなどに分けられ、「受け手」の制限はかなりゆるい。受け手主語は特定でなければならないということが分かる。

本稿では先行研究に基づいて構造助詞“的”を用いる受け手主語について検討した。受け手主語「“我”＋“的”＋N」構造に限定して調査を行った。北京大学中国語学センターと北京日本学センターで、それぞれ開発したコーパスを利用し、収集した756例を分析し、「“我”＋“的”＋N」におけるNを身体名詞、物品名詞、人物名詞、心理名詞、属性名詞と行為名詞という6種類に分けた。その中で、Nは心理名詞である場合が最も多く、約三分の一に達する言語事実が分かった。つまり、「“我”＋“的”＋N」を主語とする“被字句”は、よく外部の影響による“我”の心理活動や感情変化を描写するときに使われる。その理由は、「“我”＋“的”＋N」を主語とする“被字句”を使用すれば、不自然な表現が避けられる一方、文章の流暢性や文脈の一貫性も保障できるためである。

## 第2節 中国語の所有物受身文と持ち主受身文

### 5.2.1 はじめに

周知のとおり、中国語において単語レベルで動詞の形としてのヴォイスは存在しないが、文レベルで表せる主述文、“被字句”と“把字句”などがある。ここで、まず以下の例文を見てみよう。

(34) 小偷偷了他的钱包。(作例)

スリは彼の財布をすった。(筆者訳)

(35) 他的钱包被小偷偷了。(作例)

彼の財布はスリにすられた。(筆者訳)

(36) 他被小偷偷了钱包。(作例)

彼はスリに財布をすられた。(筆者訳)

例(34)は能動文で、例(35)と例(36)はそれと対応できる“被字句”である。例(34)から例(36)までは、同じ出来事を表しているが、視点の当て方によって、異なる構造で表すことができる。例(34)の構文構造をまとめると、「NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>」となり、例(35)は「NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP」で、例(36)は「NP<sub>2</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>3</sub>」とまとめられる。そのなかで、意味からみればNP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>は所有関係である。つまり、NP<sub>2</sub>は持ち主で、NP<sub>3</sub>はそれの所有物である。本稿では、例(35)のような“被字句”を「所有物受身文」と呼び、例(36)のような“被字句”を「持ち主受身文」と呼ぶこととする。所有物受身文と持ち主受身文は一般的に言い換えられるが、互換しにくい場合も少なくはない。

(37) 我没有听见声音，我的歌声被泪水噎住了。(张海迪：轮椅上的梦)

?我没有听见声音，我被泪水噎住了歌声。<sup>6)</sup>

涙に飲まれて自分の声も聞き取れない。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)

(38) 同志们，我的爷爷就是被八国联军的老沙皇打死的呀，老沙皇一枪打在我爷爷脑门儿上。(陈建功：盖棺)

?同志们，我的就是被八国联军的老沙皇打死的爷爷呀，老沙皇一枪打在我爷爷脑门儿上。

同志諸君、わたしのじいさんは、八国連軍のとき「一九〇〇年の義和団事件」旧ツァーリに殺されました。脳天に一発ぶちこまれて死んだのです。

(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)

(39) 刘溪的名字被错写到别的组去了。(史铁生：插队的故事)

6) 「?」は、不自然な文。以下、これに従う。



\*劉溪被错写名字到别的组去了。<sup>7)</sup>

劉溪の名はまちがって別のグループの所に書かれていた。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)

以上の例文を見れば分かるように、たとえ構造的に互換できるとしても、言い換えられたあとの文は不自然である。本稿では、その理由を解明すると同時に、所有物受身文と持ち主受身文の互換条件も検討する。

## 5.2.2 日中両言語のヴォイス表現

### 5.2.2.1 日本語のヴォイス表現

高橋弥守彦(2011:2)によると、日本語の伝統的なヴォイスは、ひとつの出来事を異なる角度から述べる動詞の表現形式である。これは人間関係に基づき焦点を誰に当てるかにより決まる。動作の仕手と受け手がいる場合、動作の仕手に焦点を当てるか、受け手に焦点を当てるかにより、動詞の形態が異なってくる。互換関係にある動詞の表現形式は一般にヴォイスと言われ、前者には能動態、後者には受動態を用いる。動作の仕手に働きかける第3者がいる場合は、誰に焦点を当てるかにより、使役態と使役受動態とに分かれる。鈴木康之(2000:76-80)は「なぐる」を例にとって、ヴォイスには能動態、受動態、使役態、使役受動態<sup>8)</sup>があると述べ、以下のような文を挙げている。高橋はそれに括弧付きで注釈を加えている。

(40) 次郎が三郎をなぐった。(能動態、有情物主体の意志性)

(41) 三郎は次郎になぐられた。(受動態、有情物主体の非意志性)

(42) 太郎が次郎に三郎をなぐらせた。(使役態、第3者主体の意志性)

(43) 次郎は太郎に三郎をなぐらせられた。(使役受動態、有情物主体の非意志性)

例(40)の「なぐった」は運動の主体「次郎が」に焦点を当てた能動態であり、例(41)の「なぐられた」は能動文の客体「三郎を」に焦点を当てた「三郎は」を主体とした受動態である。能動態と受動態は「次郎」と「三郎」の二人の運動の関係であ

7) 「\*」は、不適切な文。以下、これに従う。

8) 鈴木康之(2000)では、ヴォイスを能動態「太郎が次郎をなぐった。」、受動態「次郎が太郎になぐられた。」、使役態「三郎が太郎に次郎をなぐらせた。」、使役受動態「太郎が三郎に次郎をなぐらせられた。」(p.45)の4類に分けている。高橋太郎ほか(1997)では、ヴォイスを能動態「かぜが やねを ふきとばした。」、受動態「やねが かぜに ふきとばされた。」、使役態「花子が 太郎に にもつを はこぼせる。」、相互態「太郎と 次郎が なぐりあった。」、再帰態「太郎が まどから くびを だした。」(p.68~69)の5類に分けている。中島悦子(2007)では、ヴォイスについて「日本語のヴォイスの範疇には、自・他の対応・受身・使役・可能・自発等の諸形態を含めて考える。これらの諸形態は形態的・構文的・意味的に相関関係にあり、各々を別々に論じることは不可能だからである。」(p.10)と述べている。他動詞と受動態と自動詞の3者の関係については、「a 他動詞能動文：太郎が計算の誤りを見つけた。b 受身文：計算の誤りが(太郎によって)見つけられた。c 自動詞能動文：計算の誤りが見つかった。」を対応する例文として挙げ、「受身文は一種の自動詞文ということになり、他動詞のみで、対応ある動詞を欠く場合は、受身文が自動詞文の代替をすることが多い。」(p.10)と述べている。

るが、例(42)の使役態「なぐらせた」になると、次郎に働きかける第3者「太郎が」を文中に主体として登場させる。これにより、三者の関係が明らかになる。例(43)の使役受動態「なぐらせられた」も三人の関係だが、この文は運動の主体「次郎は」に焦点が当てられ、太郎によって三郎をなぐらせられる次郎のやむを得ない気持ちが表現される。これが運動の主体を何にするかによって異なってくる一般的なヴォイスとしての動詞の表現形式である。鈴木康之によれば、能動態は「なぐる」「すてる」などは基本となる動詞だが、受動態・使役態・使役受動態は、いずれも基本動詞から作る派生動詞である。

#### 5.2.2.2 中国語のヴォイス表現

高橋弥守彦(2011:6)によれば日本語の文レベルにおけるヴォイス表現は、誰に焦点を当てるかと、それにふさわしいヴォイスの表現形式をとる動詞が用いられていなければならない。換言すれば、日本語のヴォイス表現は、ヴォイスの表現形式としての動詞だけでなく、動作の仕手と受け手および動作を行わせる命令者などが文中に現れなくてはならない。このうちの誰を主体とするかによって、鈴木康之(2000)など言語学研究会の学説によれば、能動文、受身文、使役文、使役受動文に分かれる。一方、中国語は動詞の表現形式としてヴォイスが存在するわけではないので、文レベルで互換表現を研究するのが妥当であろう。文レベルになると、“被字句”・“主谓句”・“把字句”とがよく互換できる関係にあるので、この関係から中国語研究者はよく中国語の互換表現について言及している。

中国語の文法書では上記に指摘するように、“被字句”はよく“把字句”と一般文型の主述文(能動文)とに互換できると説明している。この関係が中国語における日本語のヴォイスと関連する互換表現と言ってよいであろう。ここで最初に挙げた例文を再び見てみよう。

(44) 小偷偷了他的钱包。(主谓句)

スリは彼の財布をすった。

(45) 他的钱包被小偷偷了。(所有物被字句)

彼の財布はスリにすられた。

(46) 他被小偷偷了钱包。(所有者被字句)

彼はスリに財布をすられた。

(47) 小偷把他的钱包偷了。(把字句)

彼の財布をスリはすった。

中国語の主述文(例44)は“陈述句”と言い、主述に重点があり、“把字句”(例文47)は処置性に重点があり、いずれも原則として施事主体である。しかし、“被字句”(例45、46)は特定される他からの影響のある出来事に重点があり、受事主体である。そして、もし主述文における客語に構造助詞“的”を用いれば、対応する“被

字句”は一つだけではない可能性が発生する。例(44)を“被字句”に書き換えれば、例(43)と(44)という二つの“被字句”と同時に対応できる。例(43)の主語である“钱包”は“他”の所有物なので、そのような“被字句”を「所有物受身文」と呼び、例(46)の主語である“他”は“钱包”の持ち主なので、「持ち主受身文」と呼ぶ。そのいずれも所有関係が含まれ、おなじ事実を描写している“被字句”である。以下の節ではその2種類の“被字句”について分析する。

### 5.2.3 中国語の受動表現において、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>が所有関係を表す場合

#### 5.2.3.1 中国語における所有関係を表す受動表現の構造分類

上述した例(44)から例(46)までの組み立て構造をまとめると、以下のようになる。

主述文：「NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>」

所有物受身文：「NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP」

持ち主受身文：「NP<sub>2</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>3</sub>」

そのなかで、NP<sub>2</sub>は持ち主で、NP<sub>3</sub>はそれの所有物である。つまり、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>のあいだに所有関係が存在している。そして、本稿で取り上げた「所有関係」というのは、広い意味での概念である。

今まで、数多くの学者たちは「持ち主受身文」についてある程度研究を行った。「持ち主受身文」という言い方のほかに、「ヲ格残存受身文(保留宾语被动句)」と呼んでいる学者もいる。「持ち主受身文」は、持ち主と所有物との関係に焦点を当て、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>の所有関係に基づいて名付けたのである。それに対し、「ヲ格残存受身文」は文法関係に注目して名付けた言い方である。于康(2009)では、丁声树(1961)、吕叔湘(1965)、李临定(1980)、朱德熙(1982)、徐杰(1999・2006)、陆俭明(2006)、邓思颖(2006)、潘海华・韩景泉(2008)などの研究成果を踏まえ、中国語の持ち主受身文に関して以下のように説明している。<sup>9)</sup>

- 1) 直接受事は主語ではなく、客語である。
- 2) 主述文に書き換えるとき、主語と客語のあいだに構造助詞“的”を用いることが要求される。
- 3) 客語の限定語である代詞は必ず主語のことを指す。

要するに、中国語の“所有者被动句”では、NP<sub>1</sub>は施事、NP<sub>2</sub>は間接受事、NP<sub>3</sub>は直接受事と看做される。そして、“所有者被动句”を“主谓句”に書き換えるとき、主述

9) 于康(2009)では、所有関係を表す“被字句”が成り立つ条件について、以下のように述べている。①直接受事は宾语而不是主语 ②改成主谓句时被动句中的主语跟宾语之间需要使用“的” ③宾语的代词定语一定复指主语 ④动词后NP性成分既可以出现在动词之后也可以用在动词之前 ⑤与“保留宾语”共现的被动句的宾语不能放到主语前。④と⑤は本稿で取り取り扱われている中国語の「持ち主受身文」に当てはまらないので、除いた。

文の客語は「NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>」という構造でなければならない。さらに、もしNP<sub>3</sub>の前に代詞を付けたら、その代名詞は必ずNP<sub>2</sub>のことを指す。例えば、“她又被张木匠抓住她的头发。（彼女はまた大工の張に髪の毛を掴まれた。）”その二つの“她”は同一人物のことを指している。

#### 5.2.3.2 中国語の持ち主受身文の意味分類

徐杰（1999：17）では、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>との意味関係に基づいて「持ち主受身文」における所有関係を以下の3種類に分けている。

##### ① 領有・従属関係

(48) 张三被偷了一个钱包。（徐杰 1999：18）

張三は財布を盗まれた。（筆者訳）

##### ② 全体・部分関係

(49) 李四被打伤了一条腿。（徐杰 1999：17）

李四は足に怪我を負った。（筆者訳）

##### ③ 親族関係

(50) 张三被杀了父亲。（徐杰 1999：17）

張三は父親を殺された。（筆者訳）

しかし、徐杰（1999：18）ではその3種類の関係に明確な定義を下していない。特に「領有・従属関係」について、徐杰（1999）が挙げた例文から見ると、領有されるものは具体的なモノを指しているようであるが、抽象的なモノはその関係に属することができるのであろうか。ここで、以下の“被字句”を見てみよう。

(51) 他终于被免去了最后一个职务。（徐杰 1999：17）

彼は結局最後の職務からはずされた。（筆者訳）

(52) 尤老二被酒劲催开了胆量。（同上）

尤老二是酒の力で度胸が据わってきた。（筆者訳）

(53) 我被花言巧语说动了心，于是想也没想就又交了几百块钱。（北京大学中国语言学研究センター CCL コーパス）

彼の甘い言葉に乗せられて、考えもしないでまた何百円も支払った。（筆者訳）

上掲の例文はいずれも徐杰（1999：18）であげられた3種類の分類に入れづらいと考えられる。そして、筆者は実例を考察したうえ、このような例文を相当数収集した。NP<sub>3</sub>は抽象名詞である場合、ほとんどは心理、感情や属性などヒトやモノの側面を表すので、このような所有関係について、筆者は「側面・属性関係」と名付ける。

#### 5.2.3.3 まとめ

まず、中国語における所有関係を表す“被字句”の構文構造は、だいたい以下の2種類に分けられる。

①所有物受身文：「NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP」

②持ち主受身文：「NP<sub>2</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>3</sub>」

次に、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>との意味関係によって、中国語の「持ち主受身文」を領有・従属関係を表す受身文、全体・部分関係を表す受身文、親族関係を表す受身文と側面・属性関係を表す受身文の4種類に分けることとする。

#### 5.2.4 所有物受身文と持ち主受身文の互換条件

上掲した例(48)から例(53)まではいずれも対応できる「所有物受身文」が存在する。ただし、例(48)から例(51)までにおけるNP<sub>1</sub>は省略されているゆえ、書き換えた「所有物受身文」にもNP<sub>1</sub>がないが、NP<sub>1</sub>を入れることができる。

(48) ' 张三的钱包被 (NP<sub>1</sub>) 偷了。(領有・従属関係)

张三の財布はすられた。(筆者訳)

(49) ' 李四的腿被 (NP<sub>1</sub>) 打伤了。(全体・部分関係)

李四は足に怪我を負った。(筆者訳)

(50) ' 张三的父亲被 (NP<sub>1</sub>) 杀了。(親族関係)

張さんの父親は殺された。(筆者訳)

(51) ' 他的最后一个职务终于被 (NP<sub>1</sub>) 免去了。(側面・属性関係)

彼は結局最後の職務からはずされた。(筆者訳)

(52) ' 尤老二的胆量被酒劲催开了。(側面・属性関係)

尤老二は酒の力で度胸が据わってきた。

(53) ' 我的心被花言巧语说动了，于是想也没想就又交了几百块钱。(側面・属性関係)

彼の甘い言葉に乗せられて、考えもしないでまた何百円も支払った。(筆者訳)

それに対し、例(37)から例(39)までのいずれも対応できる「持ち主受身文」が存在しない。強いて書き換えれば、以下のような文となる。

(37) ' ?我没有听见声音，我被泪水噎住了歌声。

音を聞こえなかった。涙に飲まれて自分の声も聞き取れない。(筆者訳)

(38) ' ?同志们，我的就是被八国联军的老沙皇打死的爷爷呀，老沙皇一枪打在我爷爷脑门儿上。

同志諸君、わたしのじいさんは、八国連軍のとき「一九〇〇年の義和団事件」旧ツアーりに殺されました。脳天に一発ぶちこまれて死んだのです。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)

(39) ' \*刘溪被 (NP<sub>1</sub>) 错写名字到别的组去了。

劉溪の名はまちがって別のグループの所に書かれていた。(北京日本学

ほかには互換できない例文は少なくない。

(54) 她的大胆的建议被 (NP<sub>1</sub>) 接受了。(王蒙: 活动变人形)

? 她被 (NP<sub>1</sub>) 接受了大胆的建议。

この思い切った献策は容れられた。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)

(55) 冷汗、热汗、尘土, 倪吾诚清楚地感觉到自己的周身的汗毛孔被一个又一个地覆盖了、堵塞了。(王蒙: 活动变人形)

? 冷汗、热汗、尘土, 倪吾诚清楚地感觉到自己被一个又一个地覆盖了、堵塞了周身的汗毛孔。

冷汗、熱い汗、ホコリによって、全身の毛穴が一つ一つ覆われ、塞がれていくのがはっきり感じられる。(北京日本学研究中心中日対訳語料庫)

(56) 张三的话被李四理解成别的意思。(严玉培 2006: 96)

\*张三被李四理解话成别的意思。

張三の話は李四に誤解された。(筆者訳)

例(48)から例(53)までおよびそれらと対応する例(48)'から例(53)'まではごく自然な“被字句”と見られるが、例(37)'から例(39)'までと例(54)から例(56)までは不自然の言い方である。しかし、構造的に見れば、例(37)'(38)'(54)(55)は文法的な問題がないのだが、なぜ言いづらいと思われるのであろうか。

もし例(37)'を“我被泪水噎住了我的歌声”、(54)を“她被接受了她大胆的建议”に書き換えれば、若干不自然と思う人はまだいるかもしれないが、例(37)'と例(54)ほど抵抗感が強くないと思われる。要するに、NP<sub>3</sub>は行為、動作など抽象的なものを表す場合、「NP<sub>2</sub>+“的”+NP<sub>3</sub>」構造と切り離しにくいのであろう。

そして、例(38)'と例(17)におけるNP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>の関係はどちらも親族関係であるが、例(38)'は不自然な表現だと見られている。中国語の持ち主受身文、つまり「NP<sub>2</sub>+“被”+NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>3</sub>」という構造の“被字句”が成立できる前提は、受事主語であるNP<sub>2</sub>はNP<sub>1</sub>の行為や動作によって何らかの影響を受けることである。NP<sub>1</sub>の行為や動作はNP<sub>2</sub>の所有物であるNP<sub>3</sub>に直接働きかけ、その結果NP<sub>2</sub>は何らかの影響を与えられるということである。領有・従属関係の例文を見れば分かるように、“他被小偷偷了钱包。”(彼はスリに財布をすられた。)という文では、“偷”という行為に直接働きかけられたのは“钱包”である。しかし、無情物である“钱包”は被害を感じるわけがない。実際に被害を受けるのは“钱包”の持ち主である“他”である。つまり、持ち主受身文において利害関係があるのはNP<sub>2</sub>とNP<sub>1</sub>だけである。それに対し、親族関係の場合は余剰の利害の意味合いが生じてしまい、もともとの文と違う意味合いを表す可能性がある。例(38)では、被害を受けるのは“我”ではなく、“爷爷”である。もし持ち主受身文に書き換えれば、被害を受けるのは“我”となる。それはもともと

の文意と異なるので、不自然と思われるであろう。しかし、例(50)は、話し手は「父親が殺された」ということによって“张三”が被害を受けたという意味を表したいので、わざわざ持ち主受身文の構造をとったのである。

最後に、例(39)と例(56)は文法的に間違っている。取り付けを表す動詞が用いられる所有物受身文は持ち主受身文に書き換えられない。

以上の分析に基づいて所有物受身文と持ち主受身文が互換できない場合をまとめると、主に以下の3点であろう。

- I NP<sub>3</sub>は行為、動作などの抽象的なモノである場合
- II 書き換えたあと、余剰の利害の意味合いが生じる場合
- III 取り付けを表す動詞が用いられる場合

しかし、中国語における所有物受身文と持ち主受身文の互換条件について、ほかにもあると思うが、更なる研究は別稿に譲ることとする。

#### 5.2.5 所有物受身文と持ち主受身文の使い分けについて

湯廷池(1985: 105-146)では、“从旧到新”“从轻到重”“从低到高”<sup>10)</sup>“从亲到疏”という四つの原則を提出し、現代中国語の構文と語用との関係を説明している。その中で、“从亲到疏”原則について湯廷池(1985: 105-146)は以下のように述べている。

国語句子从左到右的线列次序，除了可以表示传达信息的新旧之外，还可以表达说话者“叙述的观点”(viewpoint)或“关心”(empathy)的对象。日人久野暉曾经为英语提出了线面四个有关关心对象的功用原则。

- (一) 说话者在句子“表面结构上关心对象的优先次序”(surface Structure Empathy Hierarchy)，依次是：主语≥宾语≥…>“被”施事者。(符号“≥”表示“先于或同于”，符号“>”表示“先于”)
- (二) “关心对象矛盾的禁止”(Ban on Conflicting Empathy Foci)：在同一句子里不能有互相矛盾或冲突的关心对象。
- (三) “谈话当事人关心对象的原则”(Speech-act Participant Empathy Hierarchy)，依次是：说话者(或)听话者>第三者。
- (四) “谈话主题关心对象的原则”(Topic Empathy Hierarchy)：谈话的主题或前面已经提到的(discourse-anaphoric)名词组优先于非谈话的主题或第一次提到的(discourse-nonana-phoric)名词组。

10) 湯廷池(1985)によると、“从旧到新”“从轻到重”“从低到高”という四つの原則は以下のようにまとめられるであろう。“从旧到新”とは、文の最初に出る成分は古い情報を表し、文の最後に出る成分は新しい情報を表す原則である。“从轻到重”とは、文成分のウェイト(weight)が重ければ重いほど、その成分は文の最後に置かれるという原則である。“从低到高”とは、成分のランク(rank)が高ければ高いほど文後に来るという原則である。

我们把这些功用原则统称为“从亲到疏”的原则。这里所谓的“亲”，是指在谈话当事人的关心对象上占优势地位的主语、说话者、听话者等；而所谓的“疏”，是指间接宾语、“被”施事者、第三者等优先地位比较低的关心对象。

汤廷池（1985：105-146）は久野暉の理論にひかれ、それは中国語にも当てはまると主張している。汤廷池（1985）の説によれば、中国語の受動表現には情報の焦点を変える機能がある。そして、主述文と受動文は新旧情報の伝達方面において相違点があるだけではなく、関心対象の優先順位方面でもだいぶ違う。

(57) 阿明打了阿华。（汤廷池 1985：140）

明は華を殴った。（筆者訳）

(58) 阿明打了他的太太。（汤廷池 1985：140）

明は奥さんを殴った。（筆者訳）

(59) 阿华的丈夫打了她。（汤廷池 1985：140）

華のご主人は華を殴った。（筆者訳）

(60) 阿华被阿明打了。（汤廷池 1985：140）

華は明に殴られた。（筆者訳）

(61) 阿华被她的丈夫打了。（汤廷池 1985：141）

華はご主人に殴られた。（筆者訳）

(62) ? 阿明的太太被他打了。（汤廷池 1985：141）

明の奥さんは明に殴られた。（筆者訳）

(63) ? 阿花的丈夫打了他的太太。（汤廷池 1985：141）

華のご主人は彼の奥さんを殴った。（筆者訳）

例（57）から例（63）までは全部同じ事実を述べているが、話し手の観点と関心対象が違うことは明確である。例（24）では、話し手は第三者の立場から客観的に一般事実を述べるだけである。例（58）では話し手は“阿明”に関心を寄せ、例（59）では話し手は“阿华”の立場から物事を述べている。例（60）は例（57）と対応する受動文で、話し手は焦点を“阿华”に当て“阿华”を主題として述べている。そこで、話し手の関心は“阿华”にあることが推測できるであろう。例（61）では、話し手の“阿华”に対する関心は一層明らかになっている。例（62）と例（63）は文法的に問題ないが、話し手の焦点と関心の対象は矛盾して混乱しているので大変不自然な文だと思われる。

(64) 我打了阿华。（汤廷池 1985：142）

私は華を殴った。（筆者訳）

(65) ? 阿华被我打了。（汤廷池 1985：142）

華は私に殴られた。（筆者訳）

(66) 你打了阿华。（汤廷池 1985：142）



あなたは華を殴った。(筆者訳)

(67) ? 阿华被你打了。(汤廷池 1985: 142)

華はあなたに殴られた。(筆者訳)

例(64)と例(65)、そして例(66)と例(67)はそれぞれ同じ事実を述べているが、例(64)と(65)は例(66)と(67)のほうより受け入れ程度(acceptability)がずいぶん高いと思われる。その理由は、話し手の焦点や関心は第三者に当てるより、話し手自分自身あるいは聞き手に当てるのは最も合理的である。

湯廷池(1985: 144)の説によれば、所有物受身文と持ち主受身文の使い分けも話し手の焦点や関心対象によって決められるであろう。

(68) 他的父亲被土匪打死了。(汤廷池 1985:144)

彼の父親は匪賊に殺された。(筆者訳)

(69) 他被土匪打死了父亲。(汤廷池 1985:144)

彼は匪賊に父親を殺された。(筆者訳)

(70) 我的钱包被小偷给偷走了。(汤廷池 1985:145)

財布はスリにすられた。(筆者訳)

(71) 我被小偷偷走了钱包了。(汤廷池 1985:145)

すりに財布をすられた。(筆者訳)

“从亲到疏”原則によると、例(68)において話し手の注目点は“他”と“他”の“父亲”に当て、例(69)では“他”に焦点を当てることが分かった。しかし、例(69)では“他的父亲”は語尾に置かれるので、“他的父亲”に対して話し手の関心が最も薄いことも推測できるであろう。そこで、矛盾が生じたのである。“他”に対する関心が最も高いが、“他”の“父亲”に対して最も無関心であることはやや不自然ではないであろうか。実際の場面でも例(69)より例(70)のほうがよく使われる。

それに対し、例(71)には例(69)ほど矛盾がないが、話し手の注目点は例(70)と違うことが分かるはずである。湯廷池(1985: 145)では、話し手の注目度について以下のように述べている: 例(68) 我的钱包>小偷 例(69): 我>小偷>钱包。つまり、話し手の注目順位は“主題>主語>‘被’施事者>动前宾语>动后宾语……”である。

## 5.2.6 おわりに

本稿では、まず日中両言語におけるヴォイス表現について検討した。先行研究により、日本語のヴォイスには能動態、受動態、使役態、使役受動態がある。それに対し、中国語は動詞の表現形式としてのヴォイスが存在しないが、“被字句”・主述文・“把字句”という文レベルの互換表現があることが分かる。

次に、中国語における所有関係を表す受身文の構文構造を①所有物受身文: 「NP<sub>2</sub> + “的” + NP<sub>3</sub> + “被” + NP<sub>1</sub> + VP」、②持ち主受身文: 「NP<sub>2</sub> + “被” + NP<sub>1</sub> + VP + NP<sub>3</sub>」

の2種類に分け、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>との意味関係によって、中国語の「持ち主受身文」を領有・従属関係を表す受身文、全体・部分関係を表す受身文、親族関係を表す受身文と側面・属性関係を表す受身文の4種類に分ける。

最後に、実例の分析に基づき、中国語における所有物受身文と持ち主受身文は一般には互換できるが、互換できない場合があることを3点指摘した。この3点のうち一つでもあれば互換できない。

### 第3節 “被…给…”式における“给”の再考

#### 5.3.1 はじめに

中国語における主要な受身表現は“被字句”である。高橋弥守彦（2013：2）によれば、“被字句”の構文構造は全部で四種類<sup>11)</sup>に分けられる。その中の派生構造3「名詞1+“被”+名詞2+“给”+(名詞3+)動詞+その他」について、筆者は“被…给…”式と呼ぶこととする。今まで“给”に関する先行研究によると、“被…给…”式における“给”は「文法的にあってもなくてもよい」という説が最も有力である。要するに、“给”は“被…给…”式構文の成立に対して何らの影響を及ぼすものではないと認識してきた。それに対し、「意味的に語気を強める働きがある」という説を支持している学者も少なくはない。いわゆる「強調」の“给”と呼ばれている。つまり、“被…给…”式における“给”は受動の意味を強めること以外に、その他の役割はほとんど認められていないということである。

しかし、佐々木勲人（1996：42）では動詞句直前という位置的な共通点に加え、文の成立を必ずしも左右しない要素であることから、問題の“给”は動作者の積極性を表す“来・去”と類似すると同時に、“给”のもつ抽象的な方向性を視点とし、“被字句”における“给”について再考している。佐々木勲人（1996：42）は、動詞句直前<sup>12)</sup>の“给”には、動作・行為に積極的に臨む動作者の存在を示すと同時に、その影響を蒙る対象の存在を強く意識させるという点において、二重の方向性が存在する、そしてこのことが受動文の成立を支える要因であると述べている。筆者は佐々木勲人（1996：42）の方向性説に対し、基本的に賛成するが、さらに分析する必要があると考えている。ここで以下の例文を見てほしい。

(72) 门被张三给它锁上了。（顔力涛 2008：536）

ドアは張三によって鍵をかけられた。（筆者訳）

(73) 门被张三给我锁上了。（顔力涛 2008：536）

私は張三にドアの鍵をかけられた。（筆者訳）

(74) 门被张三给锁上了。（顔力涛 2008：536）

ドアは張三によって鍵をかけられた。（筆者訳）

例（72）と例（73）の“给”のように“给”が動詞句直前の“给”でない場合、佐々木の二重方向性理論は適用できるのであろうか。また、二重方向性の条件についても

11) 高橋弥守彦（2013）によれば、“被字句”の構文構造は、基本構造「名詞1+“被”+名詞2+（“所”+）動詞」、派生構造1「名詞1+“为/做/作/成”+名詞性語句」、派生構造2「名詞1+“被”+（名詞2+）動詞+その他」、派生構造3「名詞1+“被”+名詞2+“给”+（名詞3+）動詞+その他」という四種類に体系的に分けられる。

12) 「動詞句直前」というのは、“来・去”のような介詞は動詞の直前につけて動作者の積極性を表す言語現象である。例えば、“我们用这个办法来帮助他”“你去研究研究，看该怎么解决”“衣服被他给晾干了”など。

言及する必要がある。本稿では、筆者はそれらの問題を明らかにする。

### 5.3.2 “被字句”における“给”の有無

#### 5.3.2.1 虚詞“给”について

中国語の“给”はその用法の多彩さゆえに、研究者の注目を集めてきた。太田辰夫(1956:137)において、初めて語学的に取り上げられ、これまでも数多くの論考がなされてきた。《現代汉语八百词》によると、“给”は「与える」という意味の動詞のほか、使役マーカ(=“让”)、受動マーカ(=“被”)、前置詞(=“为、向”)、助詞として用いられる。とある。そのほかにやや方言的色彩を帯びる処置式マーカ(=“把”)としての用法も報告されている。そして、連語論の観点から介詞“给”を分析すれば、連語のむすびつきの違いによって、“给”の意味に変化が生じると思われる。

筆者は様々な先行研究を参考にしているが、ここでは顔力涛(2008:536)の説に基づいて連語レベルで現代中国語における虚詞“给”を含む連語で作る受身のむすびつきを以下の3種類に分ける。

“给<sub>1</sub>”：与事<sup>13)</sup>を標記する受身のむすびつき。

(75) 门被张三给我锁上了。(顔力涛 2008:536)

私は張三にドアの鍵をかけられた。(筆者訳)

“给<sub>2</sub>”：施事<sup>14)</sup>を標記する受身のむすびつき。

(76) 门给张三锁上了。(作例)

ドアは張三によって鍵をかけられた。(筆者訳)

“给<sub>3</sub>”：受事<sup>15)</sup>を標記する受身のむすびつき。

(77) 门被张三给它锁上了。(顔力涛 2008:536)

ドアは張三によって鍵をかけられた。(筆者訳)

“给<sub>1</sub>” “给<sub>2</sub>” “给<sub>3</sub>”を用いる3種のむすびつきは、それぞれ異なる文法的意味を表している。語義上は、「“给<sub>1</sub>” = “给予”」「“给<sub>2</sub>” = “被”」「“给<sub>3</sub>” = “把”」と看做せる。“被…给…”式における“给”は、“给”の客体によって、“给<sub>1</sub>”または“给<sub>3</sub>”に分けられる。

#### 5.3.2.2 “被…给…”式における“给”の有無について

本稿では、受動マーカの有無によって中国語の受動表現を「有標の受動表現」と「無標の受動表現」という二種類に大別している。そして、介詞標記の受動表現いわ

13) 与事とは、仕手の行為や動作によって間接的な影響を与えられた対象である。例えば、例(75)では“我”を言う。

14) 施事とは、行為や動作の仕手である。例えば、例(76)では“张三”を言う。

15) 受事とは、仕手の行為や動作によって直接的な影響を与えられた対象である。例えば、例(77)では“它”を言う。

ゆる“被字句”の構文構造をさらに4種類に下位分類し、以下の[表 5-5]のように体系的にまとめると述べている。

[表 5-5] “被字句”（介詞標記の受動表現）の構文構造

① 単一標記の受動表現の構文構造：

「名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+その他」

(78) 他被人打死了, 对不? (廉声: 月色狰狞)

彼は殴り殺されたでしょ。(筆者訳)

② 複数標記の受動表現の構文構造：

②-1 「名詞 1+ “被” + 名詞 2+ (“所” +) 動詞」

(79) 小柯的母亲是个神经质的女人, 她经常趁儿子熟睡之际偷偷捋顺他凌乱的头发, 小柯有时被母亲所惊醒, 他对母亲的这个习惯很反感。(苏童: 灰呢绒鸭舌帽)

柯さんの母親は神経質な女で、自分の息子が熟睡しているうちに彼の髪の毛をわざと乱すことがある。柯さんはたまに母親に起こされて、母親のこういう癖をととても嫌がっている。(筆者訳)

②-2 「名詞 1+ “被” + (名詞 2+) 動詞+ “为/做/作/成” + 名詞性語句」

(80) 不说话的人不仅没有权力, 而且会被人看做不存在, 因为人们不会知道你。

(余华: 命中注定)

声を出さない人には権力がないし、存在すら他人に認められない。だって、そんな人は知られるはずがないからだ。(筆者訳)

②-3 「名詞 1+ “被” + 名詞 2+ “给/把” + (名詞 3+) 動詞+その他」

(81) 同时, 他又怕自己的村子也教敌人给屠了。(老舍: 四世同堂)

同時に彼は自分の村も敵に殺されるのが心配になった。(筆者訳)

筆者は“被字句”の基本構造は現在使われている構文の中で最も古い構造と言われている「①」とし、ほかの3類は派生構造と看做す。今までの各研究者は現在最もよく使われている派生構造「②-3」について、以下のように分析している。

i 主語+被/让/叫+賓語+(給)+動詞+其他成分(梁鴻雁 2004: 222)

ii 動作対象+被+動作者+給+動詞+補語(徐昌火 2005: 248)

iii 名詞 1+ “被” + 名詞 2+ “给” + (名詞 3+) 動詞+その他(高橋弥守彦 2013: 2)

本稿で取り上げる“被…给…”式は、高橋弥守彦が提出した受身義を表す「名詞 1+ “被” + 名詞 2+ “给” + (名詞 3+) 動詞+その他」という「受身のむすびつき」、つまり“被字句”の派生構造「②-3」とほぼ同じである。

(82) 那个花瓶被/让孩子(给)打碎了。(高橋弥守彦 2012 : 7)

あの花瓶は子供に割られてしまった。(高橋弥守彦訳)

(83) 我的钱包被人给偷走了。(高橋弥守彦 2012 : 7)

財布が盗まれた。(高橋弥守彦訳)

(84) 送上门的财神爷让你们给他放跑了。(顔力涛 2008 : 535)

君たちのせいで、向こうからやってきた福の神に逃げられてしまった。(筆者訳)

以上の例文は、各研究者が挙げた典型的な“被…给…”式の構文構造から成り立つ文である。朱德熙(1982 : 179-181)では、“‘被、让、叫’还可以跟‘给’字配合起来用, 例如: 杯子被/让/叫他给打破了。此类格式里动词前边的‘给’的作用在于引出与事。在上边的例子里, 与事未出现。……‘给’的作用是引出与事, ‘把’的作用是引出受事。有的时候我们可以把受事当作与事来看待。”<sup>16)</sup>と説明している。要するに、“被…给…”式における“给”の役割は与事を導くことである。そして、その与事とはときどき受事と看做してもよいことを朱德熙(1982)は指摘している。朱德熙のこの説明を分析すると、朱德熙は同じように見える“被字句”の連語の中に与事と受事の違いがあることを理論的に説明するまでには至っていないと言えるであろう。

王还(1984 : 132)は、“‘被’字句中的动词前面可以加助词‘给’, ‘把’字句中的动词前面也可以加, 这个‘给’字都只是加重语气, 并没有什么意义”と主張している。李炜(2004 : 21)では、“给”には処置・受動の語勢を強める役割があると指摘している。李宝贵(2005 : 39)では“‘被’字可以与‘给’字连用, 构成‘被…给…’式, 这里的‘给’字是结构助词, 没有什么意义, 可有可无, 不过加上‘给’字, 更加口语化。”と述べている。つまり、“被…给…”式は話し言葉に用いられ、“给”の有無は文の成立には影響しないと説明している。そして、白晓红・赵卫(2007 : 211)では“这个句型是‘被’和‘给’同时出现, 也是更强调被动关系, 但多用于口语。‘给’也可以单独表示被动”と言い、李禄兴・张玲・张娟(2011 : 195)では“口语中经常在动词前加上‘给’, 意思不变, 但是可以加强语气。”と述べている。要するに、“给”を加えても文意は変わらないが、語気を強めることができる、というのである。さらに、石毓智(2004 : 73)では“被动式中谓语之前的‘给’实际上是一个介词, 其后省

16) 朱德熙(1982 : 181)では、以下のように説明している。(a) 我给他把电视机修好了。(b) 我给电视机修好了。(c) 我给电视机弄坏了。例(a)では本当の与事は“他”である。それに対し、例(b)(c)では“电视机”はもともと受事と看做すべきであったが、その前に“给”をつけているので、与事として扱ったほうが良いと主張している。つまり、“电视机”は形式上の与事、語意上の受事と言ってもいい。このような“给”の客体はほとんどものを指す。もし人を指せば、代名詞しか使えない。名詞はダメである。例えば、“他给警察抓走了”“他给小偷儿捆起来了”“警察给他抓走了”“小偷儿给他捆起来了”。以上の例文を比べると、前の二つの文における“给”の客体は人を指しているため、その“给”は“被”として認識すべきである。それに対し、後の二つの文における“给”の客体は“他”を指しているため、その“给”は“被”と“把”、どちらに変えてもよいと朱德熙が説明した。

略了一个代词, 该代词与受事主语形成回指。”と指摘している。高橋弥守彦(2012:6)は「“給”は受身関係を強調している」と主張している。

上掲の研究者たちの意見をまとめると、だいたい近年最も主流となっている意見は二説に大別できる。一つは、“給”は受身関係を強調していること、いわゆる「強調の“給”」である。もう一つは、強調の“給”の有無は文の成立には影響しないことである。言うまでもなく、ある文法成分の有無が文の成立を大きく左右しないからと言って、その成分を文法的に無意味であると判断することはできない。強調の“給”は本当にあってもなくてもよいのであろうか。

### 5.3.3 “被…給…”における“給”の方向性について

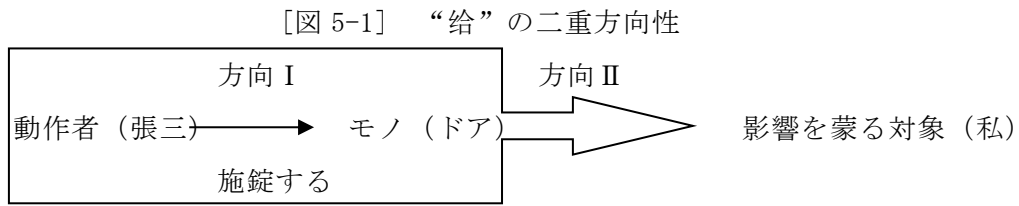
#### 5.3.3.1 “給”の二重方向性とは

前節の問題について、佐々木勲人(1996:42-44)は以下のように述べている。

従来、動詞句直前の“給”には、受動の意味を強める働きがあると言われてきた。そのこと自体に特に異論はないが、これまでその理由が説明されたことはない。受動文とは、動作・行為によってもたらされる結果的な影響を、その受け手である対象の立場から表現する形式である。したがって、いわゆる受動の意味の強さも、対象が蒙る影響性の強弱によって決定されていると言ってよい。……モノの移動を表す“給”は、動作者との関係に加え、モノの受け取り手やモノそれ自身といった、動作・行為の対象との関係をも問題としていると考えられる。動詞句直前の“給”には、動作・行為に積極的に臨む動作者の存在を示すと同時に、その影響を蒙る対象の存在を強く意識させるという点において、二重の方向性が存在する。そして、このことが受動文の成立を支え得る要因であると考えられる。……つまり、動詞句直前の“給”が方向性をもたらす形式では、動作者や対象の存在が明確に示されることによって、動作・行為とそれら関与者との間に強い働きかけがもたらされ、結果的に対象への影響性が強く表現される。そのため、受動の意味は“給”を伴わない形式に比べ、より強く認識されることになるのである。

筆者は佐々木勲人(1996)の「二重方向性」説に賛成している。ここで例(74)をもう一度見てみよう。「二重方向性」説によると、“门被张三给锁上了”は二重の方向と関係がある。一つは「張三」と「ドア」の関係——動作者「張三」が「ドアの鍵をかけた」(例73)という動作・行為に積極的に臨む点である。もう一つは、「張三がドアに鍵をかけた」(例72)という行為と話し手との関係——「張三がドアに鍵をかけた」という行為によって「私」は何らかの影響を蒙った。例えば、「私」が鍵を持っていないのに、張三が勝手にドアを施錠し、「私」は部屋に入れないことになってしまった。

その二重方向性をさらに直観的に表現すれば、以下の[図 5-1]となる。



もし例 (74) 中の“給”を取り除けば、以下の例 (74) ’になる：

(74) ’ 门被张三锁上了。

ドアは張三によって鍵をかけられた。(筆者訳)

談話レベルでは、“給”がない例 (14) は受身義が確かに弱くなると思われる。それだけではなく、“门被张三给锁上了”という文に比べると、“门被张三锁上了”は影響を蒙る人の存在感がいつそうなくなっている。つまり、方向 I 義は弱まり、方向 II 義はほぼなくなると言える。むしろその文は中国語の“被字句”として何の文法的な問題もないが、“门被张三给锁上了”と“门被张三锁上了”の二つの文は、談話レベルから見ると話し手が表したい意味がやはり違っている。

しかし、すべての“被…给…”式は二重方向性を持つわけではない。その方向性は、ある特定の条件のもとに生じるものである。つぎの小節では、筆者は実例を分析し、“給”の二重方向性の条件について検討する。

### 5.3.3.2 二重方向性をもたない“被…给…”式

本稿ではコーパスを利用し、現代文学作品や小説などに出てくる“被…给…”式の例文を集めてみた。408 個の例文を考察したうえ、二重方向性をもたない例文を相当数収集した。以下の例文を見てみよう。

(85) 他被人给打了。(给<sub>3</sub>) (『語法論集第二集』: 139)

彼はある人に殴られた。(筆者訳)

(86) 可是, 事后一想, 我就想到她是叫人给卖了。(给<sub>3</sub>) (老舍: 全家福)

しかし、後で少し考えてみると、私は彼女が売られたことに気付いた。(筆者訳)

(87) 妇女小孩招惹过谁? 也都教美国鬼子给杀了! (给<sub>3</sub>) (老舍: 无名高地有了名)

女性や子供に罪があるの? 彼らも全員がアメリカ兵に殺されたのよ! (筆者訳)

(88) 那么, 你一下车就教侦探给堵住, 怪谁呢? (给<sub>3</sub>) (老舍: 骆驼祥子)

じゃあ、君は車を降りた途端に探偵にさえぎられたわけだ。誰のせいなの?



(筆者訳)

(89) 吵死了，客人都让你给闹得不得安生。(给<sub>3</sub>) (老舍：鼓书艺人)

うるさい！あんたのせいで、お客がゆったりとできないんだ。(筆者訳)

以上の例文における“给”はすべて受事を標記する受身のむすびつきである。例(85)の“给”の後の客体を補充すれば、“他被人给他打了。”、例(86)は“吵死了，客人都让你给他们闹得不得安生。”、例(87)は“可是，事后一想，我就想到她是叫人家给她卖了。”、例(88)は“妇女小孩招惹过谁？也都教美国鬼子给他们杀了！”、例(89)は“那么，你一下车就教侦探给你堵住，怪谁呢？”と表現されるであろう。補充した客体はすべて受け手(人)のことを指しているので、“给”の後の客体と主体である受け手は「受事再出」<sup>17)</sup>という関係を形成すると考えられる。それらの文においてモノがなくて動作者と影響を蒙る対象しかないので、方向性Ⅱだけが存在し、方向性Ⅰはないのである。

### 5.3.3.3 二重方向性をもつ“被…给…”式

本節では、二重方向性をもつ“被…给…”式を考察し、その言語環境、つまり条件について検討する。まず、つぎの例文を見てみよう。

(90) 我得意洋洋塑造出来的形象，却被王立强用训斥给葬送了。(给<sub>1</sub>/给<sub>3</sub>) (余华：在细雨中呼喊)

私が誇りを持って作ったイメージは、王立強の訓戒によって葬り去られた。

(筆者訳)

(91) 瑞丰的病已经被时间给医治好。(给<sub>1</sub>/给<sub>3</sub>) (老舍：四世同堂)

時間の経過によって、瑞豊さんの病気はもうすっかりよくなった。(筆者訳)

(92) 想想也是自己过分，我儿子的心叫我给伤透了。(给<sub>1</sub>/给<sub>3</sub>) (余华：活着)

自分でも度が過ぎたと思った。私のせいで、息子は傷ついてしまった。(筆者訳)

(93) 他妈的，那些钱又教他们给吃了，丫头养的！(给<sub>1</sub>/给<sub>3</sub>) (老舍：龙须沟)

チクショウ！あのお金は、またあいつらに取られてしまった。ばかやろう！

(筆者訳)

17) 李炜(2004:58)によると、“给”の後の客体は前の受け手のこと指しているのので、語義的に分析すると同じく受事であることが分かる。しかし、実際に会話をするとき、“给”の後の客体はアクセントが必ず変わって、ほぼ軽声となる。もしその客体を普通に読むとすると、不自然な文に聞こえるかもしれない、と指摘している。その原因を追究すると、受事再出という役割を果たす“给”は、文意から見れば、文の受身義をより強めることができる一方、情報伝達の方法から見れば“被…给…”文式における“给”は無くてもよい言語情報なので、話すときは軽く読み、書くときは現れないほうが普通である。“被…给…”文式における“给”の後の客体がほとんど現れない現象の要因はここにある、と筆者は分析する。

(94) 那个安放在收音机上端的小酒盅，最后还是让我给打碎了。(给<sub>1</sub>/给<sub>3</sub>) (余华：在细雨中呼喊)

ラジオレコーダーの上においてあった小盃は、私が落として壊して(私に割られて)しまった。(筆者訳)

以上の例文では、“給”の後の客体を補充すれば、与事と受事を標記する二つの可能性が出てくる。例えば、例(90)の“給”の後の客体を補充すると、“我得意洋洋塑造出来的形象，却被王立强用训斥给我葬送了。”あるいは“我得意洋洋塑造出来的形象，却被王立强用训斥给它葬送了。”という二つの文になる。“给我”の場合、“给”は“给<sub>1</sub>”と看做され与事を標記する。一方、“给它”の場合は“给<sub>3</sub>”と看做され受事を標記する。すでに上述したように、“给<sub>3</sub>”の場合は二重方向性をもたないと分析してあるので、ここでは与事を標記する“给<sub>1</sub>”に注目する。

(90)' 我得意洋洋塑造出来的形象，却被王立强用训斥给我葬送了。(给<sub>1</sub>)

(91)' 那个安放在收音机上端的小酒盅，最后还是让我给他打碎了。(给<sub>1</sub>)

(92)' 想想也是自己过分，我儿子的心叫我给他伤透了。(给<sub>1</sub>)

(93)' 他妈的，那些钱又教他们给我们吃了，丫头养的！(给<sub>1</sub>)

(94)' 瑞丰的病已经被时间给他医治好。(给<sub>1</sub>)

以上の例文を見ると、補充された客体(人以外)は、仕手の行為によって被害を与えられた対象がより目立つようになることが分かる。つまり、佐々木勲人(1996)で述べている「“给”は動作・行為に積極的に臨む動作者の存在を示すと同時に、その影響を蒙る対象の存在を強く意識させる」ということであろう。例文(90)'では、王立強の訓戒によって「私」が作ったイメージが台無しになって、他人ではなく「私」にとって大きな迷惑であることを強調している。例文(91)'で補充された“他”は、“小酒盅”の持ち主であることが推測できる。私とその盃を割ったことによって、持ち主である“他”に被害を与えたことが分かるであろう。例文(92)'の意味は、自分のやりすぎた行為によって自分の息子が悲しんでいることを強調している。例文(93)'で補充された“我们”は、金をとられた被害者であることが推測できる。例文(93)'は、そいつらのせいで、他人ではなく“我们”が大きな損害を被ったことを強調している。例文(94)'で補充された“他”は、“瑞丰”のことを指している。時間の経過は、“他”にとって病気を治してくれるお医者さんのように感じられることが分かった。つまり、補充された“他”は受益者ということを強調している。

さらに、“给”の後に客体が現れる事例を以下に若干挙げ、考察してみよう。

(95) 你听听这话，多有水平，咱们还想开导人家呢，倒让人给咱上了一课。(给<sub>1</sub>) (王朔：编辑部的故事·谁比谁傻多少)

この話をちょっと聞いてみなよ。なんてレベルが高いんだ。俺たちはひとさまに教えようと思っていたのに、逆に教えられたじゃないか。(筆者訳)

(96) 不久，他这种不关心无产阶级政治，光看“反动书”的行为就被人给班主任揭发了。（给<sub>1</sub>）（路遥：平凡的世界）

間もなく、労働者階級の政治に感心を持たず反動的な本ばかり読んでいる彼の行為は、誰かに暴かれて、クラスの担任の知るところとなった。（筆者訳）

(97) 黑于说要一百多块钱，你说值吗？别让他们给咱们坑了。（给<sub>1</sub>）（张贤亮：男人的一半是女人）

百元以上かかると黒于さんが言っていた。その金額に見合うと思うの？彼らに騙されるなよ。（筆者訳）

“給”の後に客体が現れる例文は極めて少ないが、一種の言語現象として確かに存在している。以上の例文は、下線部で示す“給”の後の客体が省略されても“被字句”として成立する。しかし、ここの“給”はあってもなくてもよいものではない。なぜかと言うと、“給”の後に客体がないければ、仕手の行為は誰に影響を与えるかがはっきりとしなくなるからである。“給”の方向性はそれらの客体を自然に導き出した。与事を標記する“給<sub>1</sub>”の後に客体が現れると、仕手の行為によって影響を受ける対象が明らかになる。これが高橋弥守彦（2011）の言う強調であり、“給”のあとの名詞は佐々木のいう方向性とかかわってくる。こういう場面は決して多くないが、話し手が自分の意志を積極的に聞き手に伝達したいからこそ、わざわざ“給”の後に客体を明記するのであろう。

#### 5.3.3.4 “給”の二重方向性の条件

上述した分析をまとめると、もし“給<sub>1</sub>”の後に客体を明記すれば、話し手がその影響を受ける人、いわゆる被害者あるいは受益者に注目し、彼らを強調したいことが推測できる。与事を表している“給<sub>1</sub>”の後の客体が実際に現れなくても、その存在を強く意識させるのである。“給<sub>1</sub>”の後の現れない客体は、文における仕手の動作・行為によって影響を蒙る対象である。それらの文には、動作者、モノと影響を蒙る対象が全部揃っているのも、二重方向性は自然にもたらされる。“被…給…”式における“給”は与事を標記することによる、二重方向性の必要条件である。

#### 5.3.4 おわりに

本稿では“被字句”の派生構造である“被…給…”式を取り上げて、“被字句”における“給”の有無、“給”の二重方向性とその条件について検討した。今まで“給”に関する先行研究を見れば分かるように、有力な意見として扱われている説はだいたい二つある。一つは、“給”の有無は文の成立に影響しないので、あってもなくてもよい文法成分と看做していることである。もう一つは、“給”は受身関係を強調できる、いわゆる「強調」の“給”ということである。筆者は実例を分析し、“給”の有

無は“被字句”の成立に影響しないが、動作者、モノと影響を蒙る対象が全部揃っているという特定な条件のもとに、つまり“被…給…”式における“給”は与事を標記すれば、“給”は二重方向性をもたらせることを解明した。要するに、“給”は動作・行為に積極的に臨む動作者の存在を示すと同時に、その影響を蒙る対象の存在を強く意識させることができる。さらに、“給”が方向性をもたらす形式では、動作者や対象の存在が明確に示されることによって、動作・行為とそれらの関与者との間に強い働きかけがもたらされ、結果的に対象への影響が強く表現される。そのため、受動の意味は“給”を伴わない形式に比べ、より強く認識されることになるのである。そしてそのことが受動文の成立を支え得る要因と看做すべきである。

## 言語資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言 (2012)

『時の顔』『小説宝石』『秘密の顔を持つ女』『わが人生記』『秘めたる殺人』『ア  
ナザヘヴン』『ミステリ作家の読む本』『北京&東京』『都市の記憶』

中日対訳語料庫 北京日本学研究中心 (2003)

《人啊，人》《盖棺》《轮椅上的梦》《生的定义》《插队的故事》《活动变人形》  
《全家福》《无名高地有了名》《骆驼祥子》《鼓书艺人》

CCL 语料庫 北京大学中国语言学研究中心 (2009)

《士兵突击》《月朦胧鸟朦胧》《旅法师》《与死神擦肩而过》《激荡三十年》《时  
光向左女人向右》

## 参考文献

太田辰夫 (1956) 『「給」について』 神戸外大論集第7号

太田辰夫 (1957) <说“给”> 《语法论集》第二集 中华书局

上野恵司 (1969) 「“给”について」 『中国語学』第188号

李临定 (1980) <“被”字句> 《中国语文》第6期

吕叔湘 (1980) 《现代汉语八百词》商务印书馆

朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆

汤廷池 (1985) <国语语法与功用解释> 《汉语词法句法论集》台湾学生书局

佐々木勲人 (1996) 「“被……给”と“把……给”-強調“给”の再考」 『中国語学』  
第243号

高橋太郎ほか (1997) 『日本語の文法』正文社

王惠 (1998) <现代汉语名词的子类划分及定量研究> 《1998 国际现代汉语语法研究  
国际会议论文集》 山东教育出版社

徐杰 (1999) <两种保留宾语句式及相关句法理论问题> 《当代语言学》1999年第1  
期

沈家煊 (1999) <“在”字句和“给”字句> 《中国语文》第2期

鈴木康之 (2000) 『日本語学の常識』海山文化研究所

杨国文 (2002) <汉语“被”字式在不同种类的过程中的使用情况考察> 《当代语言  
学1》 中国社会科学院研究所

陆俭明 (2004) <有关被动句的几个问题> 《汉语学报》2004年第2期

梁鸿雁 (2004) 《HSK 应试语法》北京大学出版社

李炜 (2004) <加强处置/被动语势的助词“给”> 《语言教学与研究》第1期

石毓智 (2004) 《兼表被动和处置的“给”的语法化》 《世界汉语教学》第3期

刘永耕 (2005) <动词“给”语法化过程中的义素传承及相关问题> 《中国语文》第2

期

- 赵星 (2005) 《“被”字句主语考察》 中国人民大学硕士学位论文
- 鲁宝元 (2005) 〈日汉被动表达的对比与汉语“被动句”的教学〉 《日汉语言对比研究与中日汉语教学》 华语教学出版社
- 陆俭明 (2006) 〈有关被动句的几个问题〉 《汉语被动表述问题研究新拓展》 华中师范大学出版社
- 邓思颖 (2006) 〈汉语被动句的三个句法问题〉 《汉语被动表述问题研究新拓展》 华中师范大学出版社
- 中島悦子 (2007) 『中日対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』 おうふう
- 颜力涛 (2008) 〈符合把字句与复合被动句中“给”后宾语的省略问题及其诱因〉 《中国语文》第 327 期
- 王黎今 (2008) 〈日语「受身文」和汉语“被”字句的语义对比研究〉 《日语学习与研究》2008 年第 6 期
- 潘海华 (2008) 〈汉语保留宾语结构的句法生成机制〉 《中国语文》第 327 期
- 于康 (2009) 〈日汉所有关系被动句与所有物共现的语义条件〉 《日语语言研究》2009 年第 4 期
- 李禄兴、张玲、张娟 (2011) 《汉语语法百项讲练》 北京语言大学出版社
- 高橋弥守彦 (2011) 「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語」 『中日対照言語学概論—文法編—』
- 高橋弥守彦 (2011) 「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語について」 中日対照言語学会 ヴォイス特集号
- 高橋弥守彦 (2012A) 「“被字句”の受け手と仕手について」 中日対照言語学会月例会 2012. 4. 21
- 高橋弥守彦 (2012B) 「中国語受身表現の体系について」 大東文化大学中国言語文化専攻主催国際シンポジウムでの研究発表 2012. 7. 22
- 高橋弥守彦 (2013) 「日中両言語における受身のむすびつき」 国際連語論学会設立大会での研究発表 2013. 2. 9

# 終章

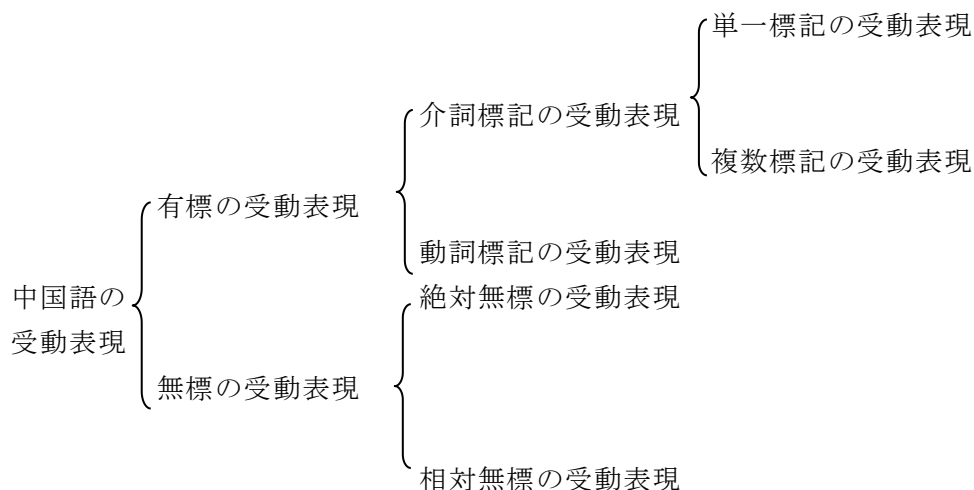
## 6.1 結論

本稿は先行研究と言語資料とによる受身表現に関する研究である。中日両言語の受身表現の全貌を明らかにするために、両言語の受身表現をそれぞれ再分類し、中国語における最も典型的な受動表現である“被字句”と日本語の最も典型的な受身表現である「レル・ラレル」を用いる受身文について考察と分析を行った。主に言語事実の調査に基づき、両言語の受身表現における受け手主語、仕手そして動詞について考察し、両言語の受身表現の成立条件にも解明した。最後に、日本人の中国語学習者のために、“被字句”の使用上の問題について分析した。

本論文の部分は全部で5章から構成されている。

第一章の「両言語の受身表現の分類」では、中日両言語における受動表現の従来の分類方法を検討し、より合理的な分類を提出した。本稿では、受動マーカ―の有無により、中国語の受身表現を“有标记被动句”（「有標の受動表現」）と“无标记被动句”（「無標の受動表現」）という二種類に大きく分け、さらに受動マーカ―の品詞によって下位分類をする。受動表現の構文構造をまとめると、以下の[図 6-1]のように整理できる。

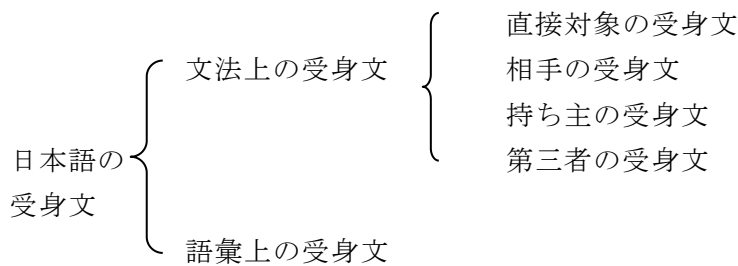
[図 6-1]現代中国語の受動表現の分類



さらに、本稿では日本語のヴォイスの範疇には自他の対応・受身・使役・自発などの諸形態を含めて考え、自他の対応は「語彙的ヴォイス」と、能動・受身・使役・自発などは「文法的ヴォイス」と分類するうえに、ヴォイス的対応があるか否かによって、[図 6-2]のように日本語の受身文を「文法上の受身文」と「語彙上の受身文」の

二種類に大きく分けている。

[図 6-2] 現代日本語の受身文の再分類



第二章では、中国語の“被字句”における受け手主語と仕手をめぐって事例調査を行い、“被字句”の構文的特徴について考察した。本稿では、まず中国語の“被字句”の受け手主語を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞と空間名詞の5種類に分け、仕手を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞と組織名詞の5種類に分けている。

次に、“被字句”の受け手主語の特徴について再検討した。本稿では、受け手主語の特徴を、①“被字句”は一般に主体「受け手」と受身義を表す「受身のむすびつき」に分かれ、「受け手」は「受身のむすびつき」の対象である。②“被字句”の「受け手」は一般に有情物、モノ、コト、カラダ、空間に分けられ、日本語と異なり、受け手主語についての制限がかなりゆるい。③受け手主語は「受身のむすびつき」の対象なので、特定でなければならないという3点にまとめている。さらに、本稿では特徴③における「特定でなければならない」について詳しく分析した。受け手主語が特定でなければならないというのは、主語の位置に立つ名詞が表す事柄は、話し手と聞き手との間にすでに共有している、あるいは共有していると認識される旧情報であることが分かった。そして、具体的な文脈において特定と判断できれば、数量詞を修飾語とする名詞連語が“被字句”の受け手主語になることは許されることも解明できた。

また、“被字句”の仕手の省略についても検討した。一つ、話し手の強調したいことが、動作の結果であって動作の仕手でない場合は省略できる。二つ、“被字句”の仕手が、その後の分文の施事主語に近接していれば省略するほうが普通である。三つ、“被”の後の仕手が新しい情報の場合、省略すると意味が分からなくなるので、省略できない。四つ、主述文と受動表現が対比されている場合、受動表現の仕手は省略できない。

第三章では、日本語における受け手主語と仕手をめぐって事例調査を行い、受身文の構文的特徴について考察した。まず、受身文の受け手主語を有情物類名詞、モノ類名詞、コト類名詞、カラダ類名詞と空間類名詞の5種類に分け、仕手を有情物名詞、カラダ名詞、モノ名詞、コト名詞と組織名詞という5種類に分けている。



次に、受身文の受け手主語の特徴について再考した。本稿では、受け手主語の特徴を、①受け手主語が有情物類である受身文は、主語の利害関係、いわゆる被害や受益を表すのは一般的である②受け手主語がモノ類、コト類などである受身文では、動作を行った仕手が背景化され、動作を受けた受け手が前に出て主題化される傾向がある③持ち主の受身文と第三者の受身文の主語は基本的に有情物類であるという3点にまとめている。

さらに、中日対照の角度から受身文の仕手だ第一人称である場合についても検討した。日本語の第一人称が仕手である受身文は中国語ほどたくさん存在していない。中国語のように「自己批判」や「自己称揚」などの意味合いが含まれる場合が少ない。

第四章では、動詞を中心に中日両言語の受動表現の成立条件について分析した。第一節では、中国語の“被字句”における動詞について考察し、一部の及物動詞（判断・状態動詞、再帰動詞、移動動詞、能願動詞などは“被字句”の動詞となれないが、“坐、哭、跑”など一部の不及物動詞は“被字句”が作れることが明らかにした。その理由は、中国語の“被字句”の成立は「結果」と密接に関わり、動詞に含まれる結果性の強さこそ成立を左右する要因なのである。

第二節では、まず日本語における「受身動詞」と「所動詞」について考察した。そして、受身文の成立条件を解明するために考察を行った。対応する能動詞がある受身文の成立条件を以下のようにまとめた。①利害の意味を伝達すること、②受身文は動詞が表す事象が受け手を直接対象としてなされ、その状態に変化や影響を及ぼすこと、③話し手が受け手主語を特徴付け・性格づけることである。一方、対応する能動詞がない受身文の成立条件について以下のようにまとめている。①無情物より有情物のほうが仕手になりやすいこと、②仕手が自ら出来事を引き起こせること、③文中に被害や迷惑の意味合いを示す文脈があること、という三点である。

第五章では、日本人の中国語学習者のために、“被字句”におけるいくつかの難点について検討した。第一節では「“我”＋“的”＋N」という構造をとる受け手主語に絞って調査を行った。そして、「“我”＋“的”＋N」におけるNを身体名詞、物品名詞、人物名詞、心理名詞、属性名詞と行為名詞の6種類に分けた。その中で、Nは心理名詞である場合が最も多く、約三分の一に達する言語事実が分かった。つまり、「“我”＋“的”＋N」を主語とする“被字句”は、よく外部の影響による“我”の心理活動や感情変化を描写するとき使われる。その理由は、「“我”＋“的”＋N」を主語とする“被字句”を使用すれば、不自然な表現が避けられる一方、文章の流暢性や文脈の一貫性も保障できるからである。

第二節では中国語における所有関係を表す受身文の構文構造を①所有物受身文：「NP<sub>2</sub>＋“的”＋NP<sub>3</sub>＋“被”＋NP<sub>1</sub>＋VP」、②持ち主受身文：「NP<sub>2</sub>＋“被”＋NP<sub>1</sub>＋VP＋NP<sub>3</sub>」という2種類に分け、NP<sub>2</sub>とNP<sub>3</sub>との意味関係によって、中国語の「持ち主受身

文」を領有・従属関係を表す受身文、全体・部分関係を表す受身文、親族関係を表す受身文と側面・属性関係を表す受身文の4種類に分けることとした。さらに、所有物受身文と持ち主受身文が互換できない場合をまとめると、主に以下の3点であろう。

- I NP<sub>3</sub>は行為、動作などの抽象的なモノである場合
- II 書き換えたあと、余剰の利害の意味合いが生じる場合
- III 取り付けを表す動詞が用いられる場合

第三節では“被字句”の派生構造である“被…給…”式を取り上げて、“被字句”における“給”の有無、“給”の二重方向性とその条件について検討した。“給”の有無は“被字句”の成立に影響しないが、動作者、モノと影響を蒙る対象が全部揃っているという特定な条件のもとに、つまり“被…給…”式における“給”は与事を標記すれば、“給”は二重方向性をもたらせることを解明した。さらに、“給”が方向性をもたらす形式では、動作者や対象の存在が明確に示されることによって、動作・行為とそれらの関与者との間に強い働きかけがもたらされ、結果的に対象への影響性が強く表現される。そのため、受動の意味は“給”を伴わない形式に比べ、より強く認識されることになるのである。そしてそのことが受動文の成立を支え得る要因と看做すべきである。

## 6.2 今後の課題

拙論を作成する途中で発生した未解決な問題が多々ある。それらの問題は、主に関連する各章、各節の「おわりに」のところに記録し、今後の学習、研究を進めるなかで、解決しようと考えている。

## 参考文献

· 中国語の部

- 王力（1943-1944） 《中国现代语法》商务印书馆
- 吕叔湘（1944） 《中国文法要略》商务印书馆
- 吕叔湘、朱德熙（1951） 《语法修辞讲话》商务印书馆
- 萧斧（1952） 〈被动式杂谈（上）〉 《语文学习》第3期
- 萧斧（1952） 〈被动式杂谈（下）〉 《语文学习》第4期
- 张志公（1953） 《汉语语法常识》 中国青年出版社
- 刘世儒（1956） 〈被动式的起源〉 《语文学习》8月号
- 太田辰夫（1957） 〈说“给”〉 《语法论集》第二集 中华书局
- 梁东汉（1960） 〈现代汉语的被动式〉 《内蒙古大学学报》第2期
- 丁声树（1961） 《现代汉语语法讲话》商务印书馆
- 吕叔湘（1980） 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 朱德熙（1982） 《语法讲义》商务印书馆
- 汤廷池（1985） 〈国语语法与功用解释〉 《汉语词法句法论集》台湾学生书局
- 李临定（1980） 〈“被”字句〉 《中国语文》第6期
- 吕叔湘（1980） 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 朱德熙（1982） 《语法讲义》商务印书馆
- 王还（1983） 〈英语和汉语的被动句〉 《中国语文》第6期
- 汤廷池（1985） 〈国语语法与功用解释〉 《汉语词法句法论集》台湾学生书局
- 刘叔新（1987） 〈现代汉语被动句的范围和类别问题〉 《句型和动词》语文出版社
- 张敏（1988） 《认知语言学与汉语名词短语》中欧社会科学出版社
- 王还（1990） 《“把”句子和“被”句子》上海教育出版社
- 邢福义（1993） 《现代汉语》高等教育出版社
- 赵清永（1993） 〈对被动句的再认识〉 《北京师范大学学报(社会科学版)》第6期
- 吕叔湘（1996） 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 马真（1997） 《简明实用汉语语法教程》北京大学出版社
- 王灿龙（1998） 〈无标记被动句和动词的类〉 《汉语学习》第5期
- 王惠（1998） 〈现代汉语名词的子类划分及定量研究〉 《1998 国际现代汉语语法研究国际会议论文集》 山东教育出版社
- 杉村博文（1998） 〈论现代汉语表“难事实现”的被动句〉 《世界汉语教学》第四期
- 徐杰（1999） 〈两种保留宾语句式及相关句法理论问题〉 《当代语言学》1999年第1期
- 沈家煊（1999） 〈“在”字句和“给”字句〉 《中国语文》第2期

- 陈昌来 (2000) 《现代汉语句子》华东师范大学出版社
- 杨国文 (2002) 〈汉语“被”字式在不同种类的过程中的使用情况考察〉 《当代语言学 1》 中国社会科学院研究所
- 刘振泉 (2003) 《日语语法新编》北京大学出版社
- 邵敬敏 (2003) 《现代汉语通论》上海教育出版社
- 张兴旺 (2003) 《现代汉语标志型被动句研究》 内蒙古师范大学硕士论文
- 陆俭明 (2004) 〈有关被动句的几个问题〉 《汉语学报》2004 年第 2 期
- 梁鸿雁 (2004) 《HSK 应试语法》北京大学出版社
- 李炜 (2004) 〈加强处置/被动语势的助词“给”〉 《语言教学与研究》第 1 期
- 石毓智 (2004) 〈兼表被动和处置的“给”的语法化〉 《世界汉语教学》第 3 期
- 刘月华·潘文娉 (2004) 《实用现代汉语语法》商务印书馆
- 刘永耕 (2005) 〈动词“给”语法化过程中的义素传承及相关问题〉 《中国语文》第 2 期
- 赵星 (2005) 《“被”字句主语考察》 中国人民大学硕士学位论文
- 郑媛 (2005) 《汉语被动式的界定及其语法化》 山东大学硕士学位论文
- 鲁宝元 (2005) 〈日汉被动表达的对比与汉语“被动句”的教学〉 《日汉语言对比研究与对日汉语教学》华语教学出版社
- 陆庆和 (2006) 《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
- 陆俭明 (2006) 〈有关被动句的几个问题〉 《汉语被动表述问题研究新拓展》华中师范大学出版社
- 邓思颖 (2006) 〈汉语被动句的三个句法问题〉 《汉语被动表述问题研究新拓展》华中师范大学出版社
- 杨海茹 (2007) 〈关于日语动词中部分含有被动意义动词的研究〉 《嘉兴学院学报》第 19 卷第 4 期
- 潘海华 (2008) 〈汉语保留宾语结构的句法生成机制〉 《中国语文》第 327 期
- 张晓帆 (2008) 〈日语中的自动词意义被动句〉 《日语学习与研究》2008 年第 6 期
- 张兴旺 (2008) 〈现代汉语被动式的界定及其分类〉 《阴山学刊》第 21 卷第 1 期
- 王黎今 (2008) 〈日语「受身文」和汉语“被”字句的语义对比研究〉 《日语学习与研究》2008 年第 6 期
- 张晓帆 (2008) 〈日语中的自动词意义被动句〉 《日语学习与研究》2008 年第 6 期
- 颜力涛 (2008) 〈符合把字句与复合被动句中“给”后宾语的省略问题及其诱因〉 《中国语文》第 327 期
- 于康 (2009) 〈日汉所有关系被动句与所有物共现的语义条件〉 《日语语言研究》2009 年第 4 期
- 耿二岭 (2010) 《图示汉语语法》北京语言大学出版社

- 李禄兴、张玲、张娟（2011）《汉语语法百项讲练》北京语言大学出版社  
 李临定（2011）《现代汉语句型》商务印书馆  
 成倩（2011）〈现代汉语被字句浅析〉《大众文艺：学术版》2011年第10期  
 路浩宇（2013）〈关于使役兼表被动句的考察：兼论“让”字被动句与“被”字句的区别〉  
 『ことばの科学』NO.26  
 乔莎莎（2015）《有标记被动句的分析》黑龙江大学硕士学位论文

・日本語の部

- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館  
 松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店  
 太田辰夫（1956）『「給」について』神戸外大論集第7号  
 上野恵司（1969）「“給”について」『中国語学』第188号  
 三上章（1972）『続・現代語法序説』くろしお出版  
 鈴木康之（1977）『日本語文法の基礎』三省堂  
 寺村秀夫（1978）『日本語の文法（上）』国立国語研究所  
 野村剛史（1982）「自動・他動・受身動詞について」『動詞の自他』ひつじ書房  
 久野暉（1983）『新日本文法研究』大修館書店  
 奥田靖雄（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房  
 木村新次郎（1983）「迂言的うけみ表現」『研究報告四』  
 豊嶋裕子（1988）「“被”字句の成立条件にかんして」『中国語学』235期 日本中国語学会  
 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房  
 杉村博文（1991）「遭遇と達成」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版  
 杉本武（1991）「二格を取る自動詞—準他動詞と受動詞—」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版  
 刘月华・潘文娒等著 相原茂監訳、片山博美・守屋宏則・平井和之訳（1991）『現代中国語文法総覧』くろしお出版  
 木村英樹（1992）「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』第389号 中国語友の会  
 楊凱榮（1992）「文法の対照的研究——中国語と日本語」『日本語と日本語教育』第5巻明治書院  
 佐々木勲人（1996）「“被……給”と“把……給”-強調“給”の再考」『中国語学』第243号

- 高橋太郎ほか（1997）『日本語の文法』正文社
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 鈴木康之（2000）『日本語学の常識』海山文化研究所
- 葉菁（2003）「日中受動文の対照研究—『新編日語』における文法説明への提案」  
『早稲田大学日本語教育研究』第2巻 早稲田大学日本語教育
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004）『現代中国語総説』三省堂
- 許明子（2004）『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 中島悦子（2007）『中日対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・  
自発—』おうふう
- 林青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの所相—事象のあり方と関わりから  
—』くろしお出版
- 楊彩虹（2009）「中国語受身文の成立条件—日本語との対照研究を通して—」 NEAR  
conference proceedings working papers
- 鈴木康之（2011）『現代日本語の連語論』日本語文法研究会
- 高見健一（2011）『受身と使役—その意味規則を探る—』 開拓社出版
- 高橋弥守彦（2011A）「中国語の受身表現“被字句”と対応する日本語について」  
『中日対照言語学会ヴォイス特集号』
- 高橋弥守彦（2011B）「文法体系から見る中国語教育」 『中日対照言語学会ヴォイ  
ス特集号』
- 高橋弥守彦（2012A）「“被字句”の受け手と仕手について」 中日対照言語学会月  
例会 2012. 4. 21
- 高橋弥守彦（2012B）「中国語受身表現の体系について」 大東文化大学中国言語文  
化学専攻主催国際シンポジウムでの研究発表 2012. 7. 22
- 孟熙（2012）「受動詞の意味的特徴に関する一考察」 言語学論叢オンライン版第  
5号
- 高橋弥守彦（2013）「日中両言語における受身のむすびつき」 国際連語論学会設  
立大会での研究発表 2013. 2. 9
- 邱林燕（2013）「中国語と日本語との受身の考察（1）-中国語の場合-」 国際広告  
メディア・観光学ジャーナル No. 16
- 路浩宇（2015A）「他動詞が用いられる中国語の受身文について」 『多元文化』14  
号 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編
- 路浩宇（2015B）「第一人称が動作主になる中国語の受身文：自己批判の意味を表す  
場合」 『多元文化』15号 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編